

なかむらなかだいらいせき

中村中平遺跡

土地改良総合整備事業に先立つ
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1994年3月

長野県飯田市教育委員会

なかむら なか だいら いせき
中村中平遺跡

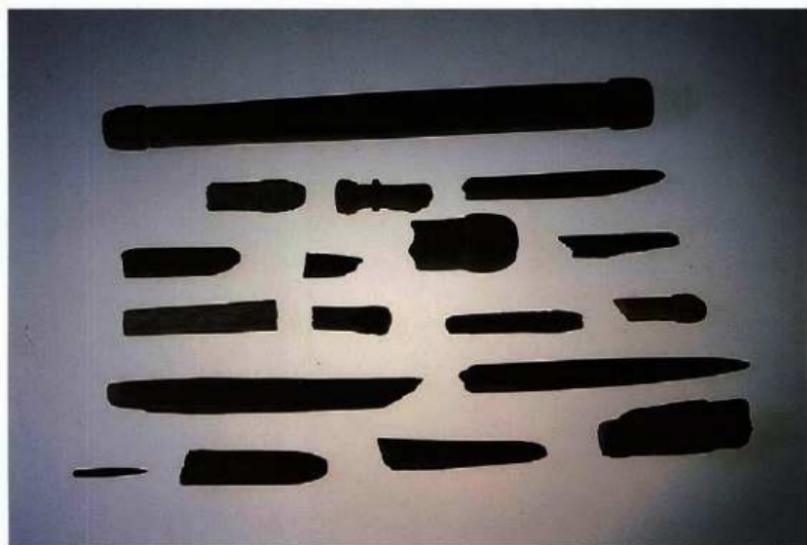
土地改良総合整備事業に先立つ
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1994年3月

長野県飯田市教育委員会







序

飯田市は、自然的条件に恵まれ、また、古来交通の要衝に位置しており、埋蔵文化財をはじめ多くの文化財を遺しています。これらは私たちの地域社会や文化を形作ってきたさまざまな証しであり、できるかぎり現状の姿のまま後世に残し伝えることが私たちの責務でありましょう。けれども、同時に、私たちはより良い社会や生活を求めていく権利を持っています。ですから、日常生活のさまざまな場面で、文化財の保護と開発という相容れぬ事態に直面することが多くなっています。こうした場合、発掘調査をして記録としてとどめることも止むを得ないものといえましょう。

平成4年度から、飯田市では伊賀良中村地籍で土地改良総合整備事業を実施することになりました。圃場整備を行ない、農業生産の高度化・機械化を図り、これによって生産性の向上を目指すもので、昨今の農業を取り巻く情勢を考慮するとき、地区の農業振興のため是非とも必要な事業といえましょう。けれども、事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地中村中平遺跡がかかり、圃場整備事業によって壊されてしまうことになりました。そこで、次善の策ではありますが、事業実施に先立って緊急発掘調査を実施して、記録保存を図ることになりました。

調査結果は本書のとおりでありまして、調査で得られましたさまざまな知見はこれからの地域史研究の上で貴重なものばかりであると確信いたします。特に、縄文時代後期から晩期にかけてのおびただしい遺物の中には、他地域との交流を示すものも含まれ、また、ムラや埋葬の習俗を研究する上で貴重な資料が提供され、内外の研究者から注目されていると聞き及んでいます。

最後になりましたが、現地および遺構・遺物についてご指導をいただきました諸機関・個人各位、調査にあたり多大なご理解とご協力をいただいた地権者ならびに隣接地の方々、現地作業および整理作業に従事された作業員の方々ほか関係各位に、深甚なる謝意を申し述べつつ刊行の辞とする次第であります。

平成6年3月

飯田市教育委員会
教育長 小林恭之助

例 言

1. 本書は土地改良総合整備事業（中平地区）小規模排水に伴い実施された、飯田市伊賀良中村所在の埋蔵文化財包蔵地中村中平遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、飯田市農林部からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。なお、事業のうち農家負担分については、重要遺跡の記録保存を図るため、市内遺跡緊急調査事業として国・県の補助を受けて飯田市教育委員会が直営実施した。
3. 調査は、平成4年度現地作業を、5年度整理作業および報告書作成作業を行なった。
4. 調査実施にあたり、基準点測量・航空測量・航空写真撮影を株式会社ジャステックに委託した。
5. 発掘作業・整理作業にあたり、遺跡略号としてNNDを一貫して用いた。なお、調査範囲が広範囲におよぶため調査区を5つの調査地点に分け、それぞれの中心地番を略号に続けて付した。
6. 本報告書の記載順は住居址を優先した。遺構図は本文と併せ挿図とし、遺物および写真図版は本文末に一括した。
7. 本書は佐合英治・吉川 豊・吉川金利・渋谷恵美子・福沢好晃・下平博行・馬場保之が分担執筆し、それぞれの分担は文末に記した。なお、本文の一部について小林正春が加筆・訂正を行なった。
8. 本書に掲載された図面類は、馬場が、遺物実測のうち土偶は小島孝修、他は馬場があたった。また、写真撮影は福沢が担当した。なお、作業実施にあたり、佐々木嘉和・山下誠一・佐合・吉川（豊）・吉川（金）・下平が補佐した。
9. 本書の編集は、調査員全体で協議の上、馬場が行ない、小林が総括した。
10. 本書に掲載した遺構図の中に記した数字は、検出面からそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。
11. 本書に掲載した石器実測図の表現として、捺痕は図内に実線で、敲打痕は図外に破線で、火を受けた部分はスクリーントーンで示した。土製耳飾りに塗布された朱は、スクリーントーンで示した。また、土偶の接合面で剥離した部分は斜線で、破損部分はスクリーントーンで示した。
12. 本書に関連する出土遺物および記録された図面・写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館で保管している。

本文目次

序

例言

目次

I 経過	1
1. 調査に至るまでの経過	1
2. 調査の経過	1
3. 調査組織	2
II 遺跡の環境	4
1. 自然環境	4
2. 歴史環境	5
III 調査結果	9
1. 調査位置・調査区の設定	9
2. 第1地点	13
(1) 竪穴住居址	13
1) 縄文時代中期	13
① 1号住居址	
3. 第2地点	13
(1) 基本層序および堆積環境	13
(2) 竪穴住居址	21
1) 縄文時代後期	21
① 24号住居址	
② 28号住居址	
2) 縄文時代晩期	23
① 26号住居址	
② 27号住居址	
3) 弥生時代後期	27
① 25号住居址	
(3) 配石址	27
① 配石址1 ② 配石址2 ③ 配石址3 ④ 配石址4	
⑤ 配石址5 ⑥ 配石址6 ⑦ 配石址7 ⑧ 配石址8	
⑨ 配石址9 ⑩ 配石址10	

(4) 方形柱穴列	36
① 方形柱穴列 1	
(5) 掘立柱建物址	37
① 掘立柱建物址 6	
② 掘立柱建物址 14	
(6) 配石墓	38
① 配石墓 1 ② 配石墓 2 ③ 配石墓 3 ④ 配石墓 4	
⑤ 配石墓 5 ⑥ 配石墓 6 ⑦ 配石墓 7 ⑧ 配石墓 9	
⑨ 配石墓 10 ⑩ 配石墓 11 ⑪ 配石墓 12	
(7) 土墳墓	53
① 土墳墓 1 ② 土墳墓 2 ③ 土墳墓 3 ④ 土墳墓 4	
⑤ 土墳墓 5 ⑥ 土墳墓 6 ⑦ 土墳墓 7 ⑧ 土墳墓 8	
⑨ 土墳墓 9 ⑩ 土墳墓 10 ⑪ 土墳墓 11 ⑫ 土墳墓 12	
⑬ 土墳墓 13 ⑭ 土墳墓 14 ⑮ 土墳墓 15	
(8) 土坑	59
① 土坑 63 ② 土坑 101 ③ 土坑 102 ④ 土坑 103	
⑤ 土坑 104 ⑥ 土坑 105 ⑦ 土坑 106 ⑧ 土坑 107	
⑨ 土坑 108 ⑩ 土坑 138 ⑪ 土坑 141 ⑫ 土坑 146	
⑬ 土坑 152 ⑭ 土坑 160	
(9) 竪穴	63
① 竪穴 4 ② 竪穴 5	
(10) 溝址	64
① 溝址 5	
(11) 溝状址	64
① 溝状址 11 ② 溝状址 12	
(12) 埋設土器	69
① 埋設土器 2	
(13) その他	69
① 焼土	
② 柱穴	
(14) 遺構外出土遺物	70
1) 土器	70
① 縄文時代後期後半 ② 縄文時代晩期前葉 ③ 縄文時代晩期中葉	

2) 石器	90
① 打製石斧 ② 打製石器・横刃型石器 ③ 磨製石斧 ④ 石錐	
⑤ 石鏃 ⑥ 石錐 ⑦ 敲石 ⑧ 磨石・凹み石 ⑨ 石皿	
⑩ 砥石 ⑪ 丸石 ⑫ 石核	
3) 石棒・石剣・石刀	92
4) 石冠	92
5) 土偶	92
6) 土製耳飾り	92
7) 有孔球状土製品	93
8) 不明土製品	93
9) 玉類	93
10) その他	93
4. 第3地点	115
(1) 竪穴住居址	115
1) 縄文時代中期	115
① 33号住居址 ② 35号住居址 ③ 37号住居址 ④ 38号住居址	
⑤ 39号住居址 ⑥ 41号住居址 ⑦ 42号住居址 ⑧ 43号住居址	
⑨ 44号住居址 ⑩ 45号住居址 ⑪ 46号住居址 ⑫ 47号住居址	
⑬ 48号住居址 ⑭ 49号住居址 ⑮ 50号住居址 ⑯ 51号住居址	
⑰ 52号住居址 ⑱ 53号住居址 ⑲ 54号住居址	
2) 弥生時代後期	138
① 30号住居址 ② 34号住居址 ③ 40号住居址	
3) 古墳時代後期	141
① 29号住居址 ② 31号住居址 ③ 36号住居址	
4) 時期不明	145
① 32号住居址	
(2) 方形柱穴列	145
① 方形柱穴列2 ② 方形柱穴列3	
(3) 掘立柱建物址	146
① 掘立柱建物址7 ② 掘立柱建物址8 ③ 掘立柱建物址9	
④ 掘立柱建物址10 ⑤ 掘立柱建物址11 ⑥ 掘立柱建物址12	
⑦ 掘立柱建物址13	
(4) 柱列址	151
① 柱列址1	

(5) 方形周溝墓	153
① 方形周溝墓 1 ② 方形周溝墓 2 ③ 方形周溝墓 3	
(6) 竪穴	155
① 竪穴 2 ② 竪穴 3	
(7) 竪穴状遺構	157
① 竪穴状遺構 1	
(8) 溝址	157
① 溝址 6	
(9) 溝状址	158
① 溝状址10	
(10) 火葬墓	159
① 火葬墓 1	
(11) 埋設土器	161
① 埋設土器 1 ② 埋設土器 3 ③ 埋設土器 4 ④ 埋設土器 5	
⑤ 埋設土器 6	
(12) その他	163
① 柱穴	
5. 第 4 地点	184
(1) 竪穴住居址	184
1) 縄文時代中期	184
① 21号住居址	
2) 弥生時代後期	185
① 8号住居址 ② 9号住居址 ③ 12号住居址	
3) 古墳時代後期	188
① 2号住居址 ② 3号住居址 ③ 5号住居址 ④ 7号住居址	
⑤ 10号住居址 ⑥ 11号住居址 ⑦ 14号住居址 ⑧ 18号住居址	
⑨ 19号住居址 ⑩ 20号住居址	
4) 中世	200
① 4号住居址 ② 6号住居址 ③ 13号住居址 ④ 15号住居址	
⑤ 16号住居址	
(2) 掘立柱建物址	203
① 掘立柱建物址 1 ② 掘立柱建物址 2 ③ 掘立柱建物址 3	
④ 掘立柱建物址 4 ⑤ 掘立柱建物址 5	

(3) 竪穴	207
① 竪穴 1	
(4) 溝址	207
① 溝址 1 ② 溝址 2 ③ 溝址 3 ④ 溝址 4	
(5) 溝状址	215
① 溝状址 1 ② 溝状址 2 ③ 溝状址 3 ④ 溝状址 5	
⑤ 溝状址 6 ⑥ 溝状址 7 ⑦ 溝状址 8 ⑧ 溝状址 9	
(6) その他	218
① 柱穴 ② その他	
6. 第 5 地点	239
(1) その他	239
① 柱穴	
② タタキ状部分	
IV まとめ	261
1. 第 2 地点の調査成果	261
① 配石址について ② 配石墓群について ③ 出土遺物について	
2. 時代毎の概要	265
引用参考文献	

付編 中村中平遺跡の自然科学的分析

挿 図 目 次

挿図 1	調査遺跡および周辺遺跡位置図	6
挿図 2	調査位置および周辺地図	8
挿図 3	基準メッシュ図区画方法 1	10
挿図 4	基準メッシュ図区画方法 2	11
挿図 5	基準メッシュ図区画方法 3	11
挿図 6	基準メッシュ図区画方法 4	11
挿図 7	基準メッシュ図区画方法 5	11
挿図 8	基準メッシュ図区画調査位置	12
挿図 9	1号住居址	14
挿図 10	基本層序	15・16
挿図 11	黒色土上面等高線図	17
挿図 12	土層分布状況	18

挿図 13	土石流跡エレベーション図	19・20
挿図 14	24号住居址	22
挿図 15	28号住居址	23
挿図 16	26号住居址	24
挿図 17	27号住居址	25
挿図 18	25号住居址	26
挿図 19	配石址 1	28
挿図 20	配石址 1 下検出炭化物包含土坑	29
挿図 21	配石址 1 下検出土坑	30
挿図 22	配石址 2・3	31
挿図 23	配石址 4～6	32
挿図 24	配石址 7・8・10	33
挿図 25	配石址 9	34
挿図 26	方形柱穴列 1	36
挿図 27	掘立柱建物址 6	37
挿図 28	掘立柱建物址 14	38
挿図 29	配石墓・土墳墓・竪穴分布図	39・40
挿図 30	配石墓・土墳墓軸方向分布図	41
挿図 31	配石墓 1	42
挿図 32	配石墓 2・5・7	43
挿図 33	配石墓 3・4	44
挿図 34	配石墓 6	46
挿図 35	配石墓 9	48
挿図 36	配石墓 9 遺物分布状況	49
挿図 37	配石墓 10・12	50
挿図 38	配石墓 11	52
挿図 39	土墳墓 1～5	54
挿図 40	土墳墓 6～12	56
挿図 41	土墳墓 13～15	58
挿図 42	竪穴 4・5	63
挿図 43	溝址 5	65・66
挿図 44	溝址 5	67・68
挿図 45	溝状址 11	69
挿図 46	埋設土器 2	69

挿図 47	焼土	71
挿図 48	周辺土坑・柱穴平面図 (1)	72
挿図 49	周辺土坑・柱穴平面図 (2)	73
挿図 50	周辺土坑・柱穴平面図 (3)	74
挿図 51	周辺土坑・柱穴平面図 (4)	75
挿図 52	周辺土坑・柱穴平面図 (5)	76
挿図 53	周辺土坑・柱穴平面図 (6)	77
挿図 54	周辺土坑・柱穴平面図 (7)	78
挿図 55	周辺土坑・柱穴平面図 (8)	79
挿図 56	周辺土坑・柱穴平面図 (9)	80
挿図 57	周辺土坑・柱穴平面図 (10)	81
挿図 58	周辺土坑・柱穴平面図 (11)	82
挿図 59	周辺土坑・柱穴平面図 (12)	83
挿図 60	周辺土坑・柱穴平面図 (13)	84
挿図 61	周辺土坑・柱穴平面図 (14)	85
挿図 62	周辺土坑・柱穴平面図 (15)	86
挿図 63	周辺土坑・柱穴平面図 (16)	87
挿図 64	周辺土坑・柱穴平面図 (17)	88
挿図 65	遺構外出土遺物分布図 (1)	94
挿図 66	遺構外出土遺物分布図 (2)	95
挿図 67	遺構外出土遺物分布図 (3)	96
挿図 68	遺構外出土遺物分布図 (4)	97
挿図 69	遺構外出土遺物分布図 (5)	98
挿図 70	遺構外出土遺物分布図 (6)	99
挿図 71	遺構外出土遺物分布図 (7)	100
挿図 72	遺構外出土遺物分布図 (8)	101
挿図 73	遺構外出土遺物分布図 (9)	102
挿図 74	遺構外出土遺物分布図 (10)	103
挿図 75	遺構外出土遺物分布図 (11)	104
挿図 76	遺構外出土遺物分布図 (12)	105
挿図 77	遺構外出土遺物分布図 (13)	106
挿図 78	遺構外出土遺物分布図 (14)	107
挿図 79	遺構外出土遺物分布図 (15)	108
挿図 80	遺構外出土遺物分布図 (16)	109

挿図 81	遺構外出土遺物分布図 (17)	110
挿図 82	遺構外出土遺物分布図 (18)	111
挿図 83	遺構外出土遺物分布図 (19)	112
挿図 84	遺構外出土遺物分布図 (20)	113
挿図 85	遺構外出土遺物分布図 (21)	114
挿図 86	33号住居址	116
挿図 87	35号住居址	117
挿図 88	37号住居址	118
挿図 89	38号住居址	119
挿図 90	39号住居址	120
挿図 91	41号住居址	121
挿図 92	42号住居址	122
挿図 93	43号住居址	123
挿図 94	44号住居址	124
挿図 95	45号住居址	126
挿図 96	46号住居址	127
挿図 97	47号住居址	128
挿図 98	48号住居址	129
挿図 99	49号住居址	131
挿図100	50号住居址	132
挿図101	51号住居址	133
挿図102	52号住居址	134
挿図103	53号住居址	136
挿図104	54号住居址	137
挿図105	30号住居址	138
挿図106	34号住居址	139
挿図107	40号住居址	140
挿図108	29号住居址	142
挿図109	31号住居址	143
挿図110	36号住居址	144
挿図111	32号住居址	145
挿図112	方形柱穴列 2	146
挿図113	方形柱穴列 3	147
挿図114	掘立柱建物址 7	148

插图115	掘立柱建物址 8	149
插图116	掘立柱建物址 9	150
插图117	掘立柱建物址10	151
插图118	掘立柱建物址11	152
插图119	掘立柱建物址12	153
插图120	掘立柱建物址13	154
插图121	柱列址 1	155
插图122	土坑66~75	156
插图123	土坑76~78	157
插图124	方形周溝墓 1 · 2	158
插图125	方形周溝墓 3	159
插图126	竖穴 2 · 3	160
插图127	竖穴状遗構 1	160
插图128	溝状址10	160
插图129	火葬墓 1	161
插图130	埋設土器 1 · 3 ~ 6	162
插图131	周边柱穴平面图 (1)	163
插图132	周边柱穴平面图 (2)	164
插图133	周边柱穴平面图 (3)	165
插图134	周边柱穴平面图 (4)	166
插图135	周边柱穴平面图 (5)	167
插图136	周边柱穴平面图 (6)	168
插图137	周边柱穴平面图 (7)	169
插图138	周边柱穴平面图 (8)	170
插图139	周边柱穴平面图 (9)	171
插图140	周边柱穴平面图 (10)	172
插图141	周边柱穴平面图 (11)	173
插图142	周边柱穴平面图 (12)	174
插图143	周边柱穴平面图 (13)	175
插图144	周边柱穴平面图 (14)	176
插图145	周边柱穴平面图 (15)	177
插图146	周边柱穴平面图 (16)	178
插图147	周边柱穴平面图 (17)	179
插图148	周边柱穴平面图 (18)	180

插图149	周边柱穴平面图 (19)	181
插图150	周边柱穴平面图 (20)	182
插图151	周边柱穴平面图 (21)	183
插图152	21号住居址	184
插图153	8号住居址	185
插图154	9号住居址	186
插图155	12号住居址	187
插图156	2号住居址	188
插图157	3号住居址	189
插图158	5号住居址	191
插图159	7号住居址	192
插图160	10号住居址	193
插图161	11号住居址	194
插图162	14号住居址	195
插图163	18号住居址	196
插图164	19号住居址	198
插图165	20号住居址	199
插图166	4号住居址	200
插图167	6号住居址	201
插图168	13·15·16号住居址	201
插图169	掘立柱建物址 1	202
插图170	掘立柱建物址 2	204
插图171	掘立柱建物址 3	205
插图172	掘立柱建物址 4	206
插图173	掘立柱建物址 5	207
插图174	土坑 1~9	208
插图175	土坑 10~18	209
插图176	土坑 19~27	210
插图177	土坑 28~36	211
插图178	竖穴 1	212
插图179	溝址 1·2	213·214
插图180	溝址 3·4	215
插图181	溝状址 1~3·5~9	216
插图182	周边柱穴平面图 (22)	219

挿図183	周辺柱穴平面図 (23)	220
挿図184	周辺柱穴平面図 (24)	221
挿図185	周辺柱穴平面図 (25)	222
挿図186	周辺柱穴平面図 (26)	223
挿図187	周辺柱穴平面図 (27)	224
挿図188	周辺柱穴平面図 (28)	225
挿図189	周辺柱穴平面図 (29)	226
挿図190	周辺柱穴平面図 (30)	227
挿図191	周辺柱穴平面図 (31)	228
挿図192	周辺柱穴平面図 (32)	229
挿図193	周辺柱穴平面図 (33)	230
挿図194	周辺柱穴平面図 (34)	231
挿図195	周辺柱穴平面図 (35)	232
挿図196	周辺柱穴平面図 (36)	233
挿図197	周辺柱穴平面図 (37)	234
挿図198	周辺柱穴平面図 (38)	235
挿図199	周辺柱穴平面図 (39)	236
挿図200	周辺柱穴平面図 (40)	237
挿図201	周辺柱穴平面図 (41)	238
挿図202	土坑37~40	239
挿図203	周辺柱穴平面図 (42)	241
挿図204	周辺柱穴平面図 (43)	242
挿図205	周辺柱穴平面図 (44)	243
挿図206	周辺柱穴平面図 (45)	244

付 図 目 次

付図 1	第1・5地点遺構全体図
付図 2	第2地点遺構全体図
付図 3	第3地点遺構全体図
付図 4	第4地点遺構全体図

表 目 次

表 1	第 2 地点 土坑觀察表 (1)	245・246
表 2	第 2 地点 土坑觀察表 (2)	247・248
表 3	第 2 地点 土坑觀察表 (3)	249・250
表 4	第 2 地点 土坑觀察表 (4)	251・252
表 5	第 2 地点 土坑觀察表 (5)	253・254
表 6	第 5 地点 土坑觀察表	253・254
表 7	第 3 地点 土坑觀察表	255・256
表 8	第 4 地点 土坑觀察表 (1)	257・258
表 9	第 4 地点 土坑觀察表 (2)	259・260

図 版 目 次

第 1 図	配石墓 9 出土遺物	268
第 2 図	配石墓 9 ほか出土遺物	269
第 3 図	石棒・石劍・石刀 (1)	270
第 4 図	石棒・石劍・石刀 (2)	271
第 5 図	石棒・石劍・石刀 (3)	272
第 6 図	石棒・石劍・石刀 (4)	273
第 7 図	土製耳飾り (1)	274
第 8 図	土製耳飾り (2)	275
第 9 図	土製耳飾り (3)	276
第 10 図	土偶 (1)	277
第 11 図	土偶 (2)	278
第 12 図	土偶 (3)	279
第 13 図	土偶 (4)	280
第 14 図	土偶 (5)	281
第 15 図	土偶 (6)	282
第 16 図	土偶 (7)	283
第 17 図	土偶 (8)	284
第 18 図	土偶 (9)	285
第 19 図	土偶 (10)	286

写真図版目次

- 写真図版 1 巻頭写真
写真図版 2 巻頭写真
写真図版 3 巻頭写真
写真図版 4 遺跡全景 第1地点全景
写真図版 5 第1地点全景 1号住居址 同炉址
写真図版 6 第2地点全景
写真図版 7 土石流巨大礫検出状況 28号住居址
写真図版 8 27号住居址 同炉址
写真図版 9 25号住居址 配石址1
写真図版 10 配石址1
写真図版 11 配石址1下炭化物包含土坑 配石址2
写真図版 12 掘立柱建物址6 掘立柱建物址14
写真図版 13 配石墓全景
写真図版 14 配石墓1 配石墓3・4
写真図版 15 配石墓6
写真図版 16 配石墓9 同掘り方
写真図版 17 配石墓9 遺物出土状況
写真図版 18 配石墓10 配石墓12
写真図版 19 溝址5 埋設土器2
写真図版 20 両頭石棒 土石流下の遺物出土状況
写真図版 21 第3地点全景
写真図版 22 47号住居址 33号住居址
写真図版 23 33号住居址遺物出土状況
写真図版 24 35号住居址 37号住居址 同炉址
写真図版 25 38号住居址 41号住居址埋塞
写真図版 26 42号住居址 43号住居址 同埋塞
写真図版 27 44号住居址 45号住居址
写真図版 28 46号住居址 48号住居址
写真図版 29 49号住居址 50・51号住居址
写真図版 30 53号住居址 34号住居址
写真図版 31 40号住居址 29号住居址 同カマド

- 写真図版 32 31号住居址 方形柱穴列 2
- 写真図版 33 方形柱穴列 3 掘立柱建物址 7 掘立柱建物址 8
- 写真図版 34 掘立柱建物址 9 同掘り方断面 同掘り方
- 写真図版 35 掘立柱建物址11~13 方形周溝墓 2
- 写真図版 36 方形周溝墓 3 埋設土器 3
- 写真図版 37 第 4 地点全景
- 写真図版 38 21号住居址 8号住居址
- 写真図版 39 9号住居址 3号住居址
- 写真図版 40 5号住居址 10号住居址
- 写真図版 41 11号住居址 14号住居址
- 写真図版 42 18号住居址 19号住居址
- 写真図版 43 20号住居址 4号住居址
- 写真図版 44 13・15・16号住居址 掘立柱建物址 1
- 写真図版 45 溝址 1 第 5 地点全景
- 写真図版 46 重機作業風景
- 写真図版 47 重機作業風景 試掘調査風景
- 写真図版 48 発掘調査風景
- 写真図版 49 発掘調査風景
- 写真図版 50 委託測量調査 現地指導風景
- 写真図版 51 28・25号住居址出土遺物
- 写真図版 52 配石址 1 出土遺物 配石址 1 埋設土器
- 写真図版 53 配石址 1 出土遺物
- 写真図版 54 配石址 1 出土遺物
- 写真図版 55 配石址 1 出土遺物
- 写真図版 56 配石址 1 出土遺物
- 写真図版 57 配石址 1 出土遺物
- 写真図版 58 配石址 1・配石址 6 出土遺物
- 写真図版 59 配石墓 9 出土遺物
- 写真図版 60 配石墓 9 出土遺物
- 写真図版 61 配石墓 9 出土遺物
- 写真図版 62 配石墓 9 出土遺物
- 写真図版 63 土壇墓 3・4 出土遺物
- 写真図版 64 土壇墓 5・6 出土遺物
- 写真図版 65 土壇墓 8・11 出土遺物

- 写真図版 66 土墳墓12・13出土遺物
- 写真図版 67 土墳墓14・15出土遺物
- 写真図版 68 配石址1下土坑 101、102・154出土遺物
- 写真図版 69 配石址1下土坑 103・104、106出土遺物
- 写真図版 70 配石址1下土坑 107、141出土遺物
- 写真図版 71 配石址1下土坑 146、152出土遺物
- 写真図版 72 配石址1下土坑 160、土坑 109出土遺物
- 写真図版 73 竖穴4出土遺物 埋設土器2
- 写真図版 74 土石流下出土遺物
- 写真図版 75 土石流下出土遺物
- 写真図版 76 土石流下出土遺物
- 写真図版 77 土石流下出土遺物
- 写真図版 78 土石流下出土遺物
- 写真図版 79 土石流下出土遺物
- 写真図版 80 土石流下出土遺物
- 写真図版 81 土石流下出土遺物
- 写真図版 82 土石流下出土遺物
- 写真図版 83 土石流下出土遺物
- 写真図版 84 土石流下出土遺物
- 写真図版 85 土石流下出土遺物
- 写真図版 86 遺構外出土遺物
- 写真図版 87 遺構外出土遺物
- 写真図版 88 遺構外出土遺物
- 写真図版 89 遺構外出土遺物
- 写真図版 90 遺構外出土遺物
- 写真図版 91 遺構外出土遺物
- 写真図版 92 遺構外出土遺物
- 写真図版 93 遺構外出土遺物
- 写真図版 94 遺構外出土遺物
- 写真図版 95 遺構外出土遺物
- 写真図版 96 遺構外出土遺物
- 写真図版 97 遺構外出土遺物
- 写真図版 98 遺構外出土遺物
- 写真図版 99 遺構外出土遺物

写真図版100	遺構外出土遺物
写真図版101	遺構外出土遺物
写真図版102	遺構外出土遺物
写真図版103	遺構外出土遺物
写真図版104	遺構外出土遺物
写真図版105	遺構外出土遺物
写真図版106	遺構外出土遺物
写真図版107	遺構外出土遺物
写真図版108	遺構外出土遺物
写真図版109	遺構外出土遺物
写真図版110	遺構外出土遺物
写真図版111	遺構外出土遺物
写真図版112	遺構外出土遺物
写真図版113	遺構外出土遺物
写真図版114	遺構外出土遺物
写真図版115	遺構外出土遺物
写真図版116	遺構外出土遺物
写真図版117	遺構外出土遺物
写真図版118	遺構外出土遺物
写真図版119	遺構外出土遺物
写真図版120	遺構外出土遺物
写真図版121	遺構外出土遺物
写真図版122	遺構外出土遺物
写真図版123	遺構外出土遺物
写真図版124	遺構外出土遺物
写真図版125	遺構外出土遺物
写真図版126	遺構外出土遺物
写真図版127	遺構外出土遺物
写真図版128	遺構外出土遺物
写真図版129	遺構外出土遺物
写真図版130	遺構外出土遺物
写真図版131	遺構外出土遺物
写真図版132	遺構および遺構外出土遺物
写真図版133	遺構および遺構外出土遺物

写真図版134	遺構および遺構外出土遺物
写真図版135	遺構および遺構外出土遺物
写真図版136	遺構外出土遺物
写真図版137	遺構外出土遺物
写真図版138	遺構外出土遺物
写真図版139	遺構外出土遺物
写真図版140	遺構外出土遺物
写真図版141	遺構外出土遺物
写真図版142	配石址 8・焼土・遺構外出土遺物
写真図版143	33号住居址出土遺物
写真図版144	35・39号住居址出土遺物
写真図版145	41・42号住居址出土遺物
写真図版146	42号住居址出土遺物
写真図版147	43・44号住居址出土遺物
写真図版148	44・49号住居址出土遺物
写真図版149	49号住居址出土遺物
写真図版150	49号住居址出土遺物
写真図版151	50号住居址出土遺物
写真図版152	50・51・54号住居址出土遺物
写真図版153	29号住居址出土遺物
写真図版154	埋設土器 1・3・5
写真図版155	埋設土器 6 第3地点遺構外出土遺物
写真図版156	21・3号住居址出土遺物
写真図版157	3・5号住居址出土遺物
写真図版158	7・10号住居址出土遺物
写真図版159	10・11号住居址出土遺物
写真図版160	11号住居址出土遺物
写真図版161	11号住居址出土遺物
写真図版162	14号住居址出土遺物
写真図版163	14・18号住居址出土遺物
写真図版164	19・20号住居址出土遺物
写真図版165	20号住居址出土遺物
写真図版166	20号住居址、溝址 1 出土遺物
写真図版167	第4地点遺構外出土遺物

I. 経 過

1. 調査に至るまでの経過

平成3年度において、飯田市長 田中秀典より飯田市伊賀良中村中平地区における土地改良総合整備事業の計画が提示され、平成3年9月9日、事業にかかる埋蔵文化財包蔵地中村中平遺跡について、事業主体である飯田市農林部耕地課と長野県教育委員会・飯田市教育委員会の三者が保護協議を実施した。その結果、試掘調査を実施し、試掘結果に基づいて改めて協議することとなった。

事業計画が具体化されたのを受けて、平成4年4月23日、試掘調査に着手した。まず、土地の利用状況・地形等を勘察し、重機により12本の試掘トレンチと4個の試掘グリッドを掘削した。同27日作業員を入れて、各トレンチ・グリッドを精査した。その結果、縄文時代中期・弥生時代後期・中世の多数の遺物が出土し、縄文時代中期の竪穴住居址・土坑、中世の竪立柱建物址等が確認された。

そこで、平成4年5月18日、飯田市農林部耕地課・長野県教育委員会・飯田市教育委員会の三者が改めて現地で保護協議を実施した。その結果、中村中平遺跡については、事業実施に先立ち次善の策として造成により地下に大きく影響を与える部分について発掘調査を行ない、記録保存を図ることとなった。発掘調査は飯田市教育委員会に委託し、平成4年度現地調査、5年度整理作業および報告書刊行を行なうこととなった。

なお、土地改良総合整備事業は国・県の補助を受けて実施されるものであり、発掘調査費用のうち農家負担分については、国・県の補助を受けて飯田市教育委員会が実施する直営事業市内遺跡緊急調査で行なうこととなった。

2. 調査の経過

諸協議に基づいて、平成4年12月8日、現地調査に着手した。まず、重機を入れて表土剥ぎを行ない、12月14日、作業員を入れて作業を開始した。重機の荒れ土を除去し、竪穴住居址続いて竪立柱建物址その他の遺構を検出し、掘り下げて精査した。それらについて写真撮影を行ない、航空写真撮影・航空測量調査を(株)ジャステックに委託した。最後に、炉址・カマド等の断ち割り調査や補充の測量調査をして、平成5年2月12日現地での作業を終了した。その後、飯田市考古資料館において現地で記録された図面・写真等について基本的な整理作業を行ない、概要報

告書の作成にあたった。

平成5年度は、4年度に引き続いて、飯田市考古資料館において出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業、実測・写真撮影作業、遺構図の作成・トレース、版組み等行ない、報告書作成作業にあたった。

3. 調査組織

(1) 調査団

調査担当者 小林正春・馬場保之
調査員 佐々木嘉和・佐合英治・山下誠一・吉川 豊・吉川金利・渡谷恵美子
福沢好晃・下平博行
作業員 池田幸子・市瀬長年・井上恵實・今村治子・大原久和・小川悦子・加藤時友
金井照子・金子正子・金子裕子・唐沢古千代・唐沢さかえ・唐沢やち子
北原 裕・木下賢一・木下早苗・木下 傳・木下経子・木下義人・木下玲子
吉良忠男・榊原亜紀子・榊原勝子・久保田まさえ・熊谷義章・小池千津子
小島孝修・小平不二子・小平峯子・小平隆二・後藤好市・小林千枝・斉藤千里
斉藤徳子・坂下やすゑ・榊原政夫・佐々木文茂・佐々木光江・塩沢澄子
清水三郎・代田和登・菅沼和加子・高橋収二郎・滝上正一・田口久美子
田中恵子・田中百子・田畑恵子・塚原次郎・中平隆雄・仲田昭平・丹羽啓子
丹羽由美・萩原弘枝・服部光男・林 新子・林勢紀子・林 年雄・肥後みち
平栗陽子・広井王子・広井 保・福沢育子・福沢 勲・福沢五男・福沢幸子
古根素子・細田七郎・牧内 修・牧内喜久子・牧内とし子・牧内八代
松井明治・松下成司・松下直市・松下真幸・松下光利・松本恭子・松本幸子
三浦厚子・溝上清見・南井規子・宮内真理子・森 章・森津多恵・森 信子
森藤美知子・矢沢房子・柳沢謙二・山田康夫・吉川悦子・吉川和夫・吉川和宏
吉川紀美子・吉川小夜子・吉川正実・吉沢まつ美・依田時子

(2) 指導

機関 奈良国立文化財研究所・国立歴史民俗博物館・京都大学埋蔵文化財センター
明治大学・奈良大学・長野県教育委員会文化課・(財)東京都埋蔵文化財センター
(財)長野県埋蔵文化財センター・安中市教育委員会・小諸市教育委員会
個人 安孫子昭二・石川日出志・泉 拓良・市沢英利・設楽博巳・大工原豊・千葉 豊
花岡 弘・平林 彰・松井 章・松島信幸・百瀬長秀(敬称略)

(3) 事務局

飯田市教育委員会社会教育課

安野 節 (社会教育課長)

原田吉樹 (" 文化係長)

岡田茂子 (" 社会教育係、平成5年度)

小林正春 (" 文化係)

山下誠一 (" " 、平成5年度)

吉川 豊 (" ")

馬場保之 (" ")

吉川金利 (" " 、平成5年度)

澁谷恵美子 (" ")

福沢好晃 (" ")

下平博行 (" " 、平成5年度)

篠田 恵 (" 社会教育係、平成4年度)

II. 遺跡の環境

1. 自然環境

伊賀良地区は飯田市西部にあり、飯田市街地の南西に位置する。北側は鼎地区、東側は松尾・竜丘地区、南側は山本・三種地区に接する。

飯田市は南アルプスと中央アルプスにはさまれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天竜川が南流する。みかけ上は天竜川による河岸段丘地形を成すが、山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴ない盆地・大きな段丘崖が形成されており、複雑な段丘地形を呈している。伊賀良地区の場合、西側と東側で大きく地形が変化している。西半は中央アルプスの前山である笠松山(1271m)・高鳥屋山(1397m)東山麓にあたり、飯田松川・茂都計川をはじめ、笠松山・高鳥屋山から流れ出す入野沢川・南沢川・滝沢川・新川等の河川によって形成された広大な扇状地が広がる。扇端はおおむね北方地籍では新井付近、大瀬木で伊賀良小学校付近、中村の長清寺付近であり、これより西側は傾斜の比較的急な斜面となっている。扇端の一部は前述の線を大きく越えて東側に伸びており、下段岡地帯まで達するものもある。扇端付近では通例の如く湧水が豊かであるが、この扇状地が小河川により幾重にも複合して形成されているため、扇央付近でも比較的湧水に恵まれ、今日でも横井戸を利用している住宅がみられる。扇状地の形成に大きな役割を果たした小河川は現在は堆積作用より下谷作用に転じているが、浸蝕力は弱く、解析谷の規模は比較的小さい。これに対し、地区の東側は基本的には高位の段丘面を占めており、扇端から離れるほど地下水位が低くなる。古代末以来、この高燥な地帯への井水の開削が繰り返し行なわれ、大井をはじめ多くの井水が開けられているほか、地区内の大小河川には人為的な改変が加えられてきた。

中村中平遺跡が位置している中村地籍は、笠松山系から発達した扇状地の末端付近に位置し、遺跡のすぐ南側は茂都計川が東流している。第2地点付近では、茂都計川はかつては現在位置よりも北側を流れていたと考えられ、ローム層を大きく削り込んでいる。これより南東側の第3・4地点は砂質ロームが堆積しており、調査地点のほぼ全体が茂都計川の氾濫・堆積を受けていたと考えられる。第2地点では土石流・氾濫を幾度かにわたって受けており、検討の結果、この付近が土石流の末端に位置していることが明らかになった。一番時期の古いものは、第2地点北側のローム層中に看取され、低地を埋める氾濫があり、さらに縄文時代後期後半の時期にこの上部を土石流が被って、晩期中葉以降に厚く砂層が被っている。また、第3地点北側から第4・5地点の間にかけては、漆黒の湿地状を呈しており、弥生時代以降にあっては、こうした部分を生産基盤としていたと考えられる。

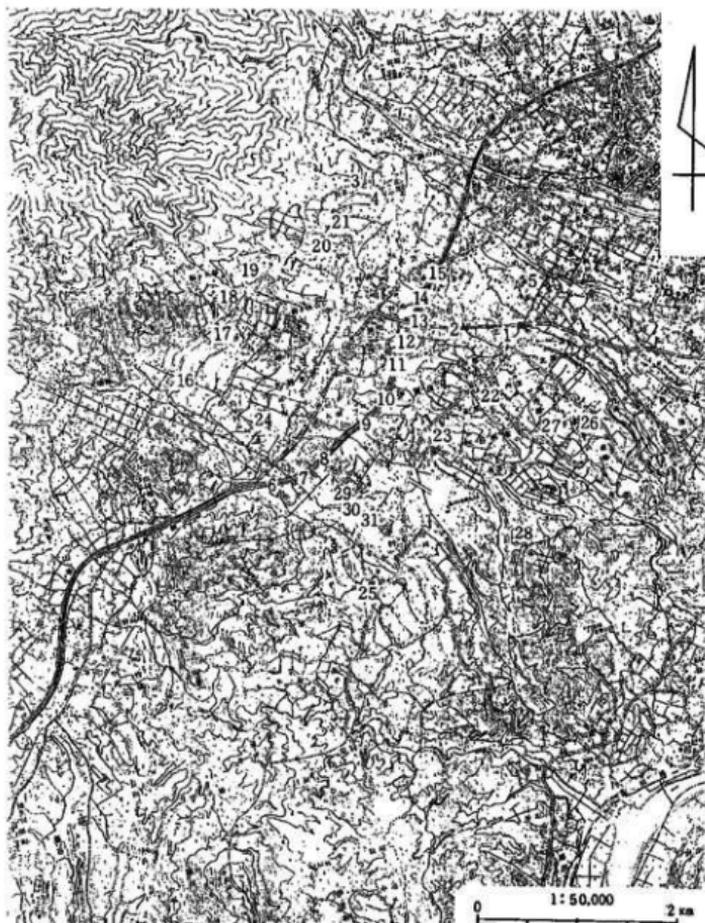
2. 歴史環境

伊賀良地区は埋蔵文化財包蔵地が濃密に分布しており、これまで発掘調査がなされた遺跡は、学術調査による立野・山口・西の原各遺跡、中央自動車道建設にかかる与志原・上の平東部・寺山・六反田・大東・酒屋前・滝沢井尻・小垣外（辻垣外）・三壺測・上の金谷各遺跡、一般国道153号飯田バイパス建設にかかる殿原・八幡面・小垣外各遺跡、広域農道西部山麓線建設にかかる飯田垣外・火振原・梅ヶ久保・細田北・大原・直刀原各遺跡、諸開発に伴う中島平・宮ノ先・酒屋前・鳥屋平・下原・高野・公文所前等の各遺跡がある。こうした文化財に表われた先人達の足跡は縄文時代早期までさかのぼる。立野遺跡や山口遺跡といった縄文時代早・前期の遺跡は主に笠松山麓の比較的高い所に立地している。前期終末では辻垣外・殿原遺跡等扇状地の扇端付近の遺跡で竪穴住居址が調査されている。中期の遺跡は伊賀良地区の広範に分布しており、中央自動車道・西部山麓線路線にかかる扇状地上の諸遺跡や下原・公文所前といった段丘上の遺跡がある。殊に下原遺跡では該期の中心的役割を果たしたと考えられる大集落の一面が調査されている。後期になると断片的な資料ではあるが、酒屋前・辻垣外・殿原遺跡で遺構・遺物が確認されている。

弥生時代においても集落立地は基本的に前時代と変わらないと考えられるが、前期・中期についてはなお不明である。後期になると、遺跡数が増加するとともに調査例も増す。これまで調査された遺跡としては大東・上の金谷・酒屋前・滝沢井尻・宮ノ先・中島平遺跡等がある。該期の集落展開としては、扇状地末端の湧水線および西方前山から東流する大小河川を利用した水田経営と高位段丘上での陸耕を基盤とするものが考えられる。殿原遺跡ではこれまで90軒にのぼる竪穴住居址が調査される等、大規模な集落が営まれていたことが判明している。また、細田北遺跡では標高700mを超える高所から3軒の竪穴住居址が発見されており、人口の爆発的な増加とこうした高所にまで生産基盤を拡大するまでに至る生産力の向上を看取できる。

古墳は伊賀良地区では52基が確認されているが、現存するものは9基にすぎない。隣接する竜丘・松尾地区に比べ数も少なく、いずれも規模の小さい円墳である。本遺跡の北側には、大名塚古墳が現存し、他に消滅したものと見られる中村塚古墳・寺畑古墳・宮原2号古墳がある。また、同時代の集落址の調査例は少なく、前期後半の上の金谷遺跡、後期の三壺測・中島平遺跡が調査されているのみである。遺跡数も前時代と比べると著しく減少しており、湧水・湿地を控えた集落の展開が考えられるが、なお詳細は不明といわざるを得ず、今次調査結果は重要な知見を追加したと確信する。また、地区内北方地籍には条里が敷かれたとも指摘されており、水田経営の定着した姿を想定することができよう。

奈良時代については、具体的な遺構・遺物の調査例は本遺跡が初めてであるが、掘立柱建物址が単独で調査されたのみで、詳細は不明である。地区内には、古代東山道の経路および「育良駅」の推定地や、荘園を構成する村落の起源等に関連すると思われる箇所があり、重要な役割を果た



- | | | | |
|--------------|--------------|------------|------------|
| 1. 殿原遺跡 | 2. 小垣外・八幡面遺跡 | 3. 立野遺跡 | 4. 山口遺跡 |
| 5. 西の原遺跡 | 6. 与志原遺跡 | 7. 上の平東部遺跡 | 8. 寺山遺跡 |
| 9. 六反田遺跡 | 10. 大東遺跡 | 11. 酒屋前遺跡 | 12. 滝沢井尻遺跡 |
| 13. 小垣外(辻垣外) | 14. 三壺淵遺跡 | 15. 上の金谷遺跡 | 16. 飯田垣外遺跡 |
| 17. 火振原遺跡 | 18. 梅ヶ久保遺跡 | 19. 細田北遺跡 | 20. 直刀原遺跡 |
| 21. 大原遺跡 | 22. 中島平遺跡 | 23. 宮ノ先遺跡 | 24. 鳥屋平遺跡 |
| 25. 高野遺跡 | 26. 下原遺跡 | 27. 公文所前遺跡 | 28. 土橋岡窯跡 |
| 29. 中村狐塚古墳 | 30. 寺畑古墳 | 31. 宮原2号古墳 | |

挿図1 調査遺跡および周辺遺跡位置図

した地区ということが出来る。

平安時代については、その末期には伊賀良庄の名が文書に登場する。そのなかには中村・久米・川路・扇岡が含まれることが文献等により明らかにされており、当地区がその中心的な位置を占めたことが考えられる。当地区における大規模な井水開発の歴史は、この時代にはじまるともいわれている。鞍原遺跡の調査結果はこうした説をある程度裏付けるものといえる。一方、これまで実施された発掘調査の結果、六反田・滝沢井尻・小垣外・三壺測・上の金谷・宮ノ先・公文所前遺跡等地区内のほぼ全域にわたり、集落址の一部が調査されている。伊賀良庄の成立がどこまで遡るかは不明であるが、この時代の集落が前時代よりも増加することは、この地区の開発が一段と進んだ証左であろう。本遺跡の場合、平安時代の遺構・遺物は検出されていないが、隣接する山本久米地区には真言宗の古刹光明寺がある。胎内に「保延六年」（1140年）の銘を持つ薬師如来坐像があることから、寺の創建はこれより遡ると考えられ、伊那谷の中ではいちやく中央の文化を取り入れた先進地域の一つであったと思われる。また、この時代には三日市場地籍に須恵器を生産した土器（かわらけ）洞窯跡があり、ここで生産された須恵器が下伊那全域に分布するなど、手工業生産の発達が見られる。

中世においては鎌倉時代には北条時政が伊賀良庄地頭であり、以後一族の江馬氏がこれを継いだ。その地頭代が地区内に居を構えたことは疑いなく、鎌倉末期には荘園を自領化していたことが三浦和田文書に窺える。この時代の文化財としては、藤原様式の流れを汲む鎌倉初期の光明寺の阿弥陀如来坐像（国指定重要文化財）がある。

北条氏の滅亡後、信濃守護職小笠原氏は伊賀良庄を与えられ、その下で伊賀良地区の開発は急速に進んだとされる。地区内の井水の大半はこの時代の開発と考えられ、小笠原氏の勢力伸長の基盤として当地区が大きな役割を果たしたといえる。室町時代中期以降、小笠原氏内訌に伴い松尾城・鈴岡城の支城が各地に築かれ、地区内には下の城跡・桜山城跡がある。

以上、各時代について概観したが、こうした歴史の脈絡の中で、今次発掘調査の成果がどのよう位置づけられるかは、本書の内容により明らかにされるといえる。



挿図2 調査位置および周辺地図

Ⅲ. 調査結果

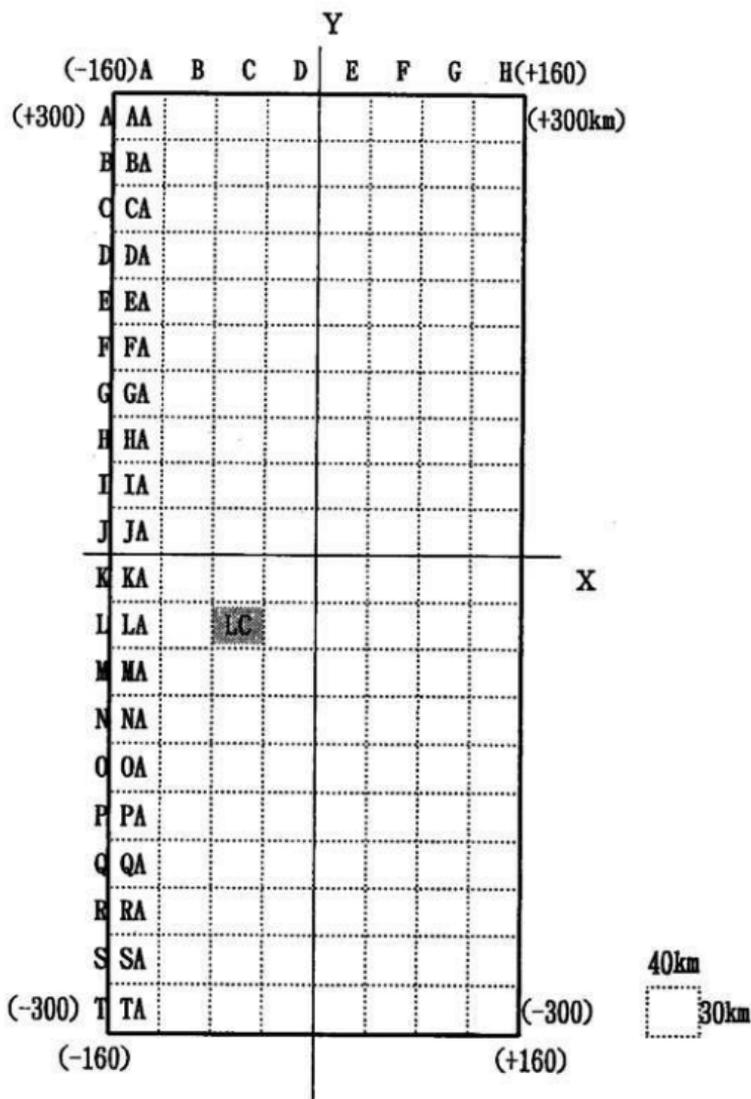
1. 調査位置・調査区の設定

調査区の設定は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図（以下、基準メッシュ図と略す。）に基づいて、株式会社ジャステックに委託実施した。

基準メッシュ図の区画については、1:5,000大縮尺地形図（国土基本図）の区画に準じる（社団法人日本測量協会 1969「国土基本図図式 同適用規程」参照）。

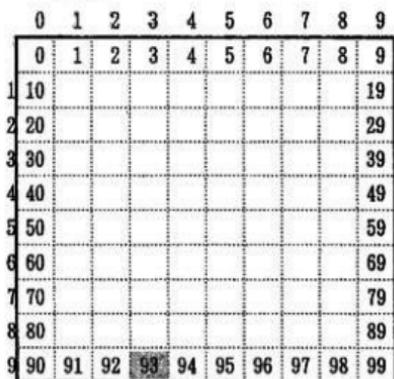
- ① 投影は、昭和43年建設省告示第3,059号に示す平面直角座標系による「横メルカトル図法」とする。
- ② 基準メッシュ図の1図葉は、座標系（飯田市は第Ⅶ座標系に属するので、座標系番号は省略する。）のY軸およびX軸を基準として、南北300km東西160kmを含む区域を、30km×40kmの長方形に分割して区画を定め、たとえばLCのようにアルファベット大文字の組合せによって区画名を表示する（挿図3）。
- ③ 30km×40kmの長方形区画を100等分して、3km×4kmの1:5,000図葉に相当する区画に分割する。1:5,000図はアラビア数字で区画番号を定め、座標系の区画を横線に結んだ後に続けて、たとえばLC-93のように表示する（挿図4）。
- ④ 1:5,000図葉を25等分して0.6km×0.8kmの長方形小区画に分割する。区画番号は挿図5のごとく定め、たとえばLC-93 5のように表示する。
- ⑤ 0.6km×0.8kmの長方形小区画を48分して100m×100mの正方形区画に分割する。区画番号は挿図6のごとく定め、たとえばLC-93 5-31のように表示する。今次調査では、LC-94 1-41をⅠ区、LC-93 5-48をⅡ区、同 5-40をⅢ区、同 5-39をⅣ区、同 5-31をⅤ区、同 5-30をⅥ区と略す。
- ⑥ 100m×100mの正方形区画を2,500等分して2m×2mの正方形小区画（グリッド）に分割する。区画の名称は、正方形区画の南から北に向かってAA～AY・BA～BY、西から東に向かって0～49とし、たとえばA115のように表示する（挿図7）。

第1地点（中村864番地他）はⅥ区、第2地点（同884番地他）はⅣ～Ⅵ区、第3地点（同907番地他）はⅢ・Ⅳ区、第4地点（同980-1番地他）はⅠ・Ⅱ区、第5地点（同996番地他）はⅠ区に相当する（挿図8）。



挿図3 基準メッシュ図区画方法1

LC-93



挿図 4 基準メッシュ図区画方法 2

LC-93 5



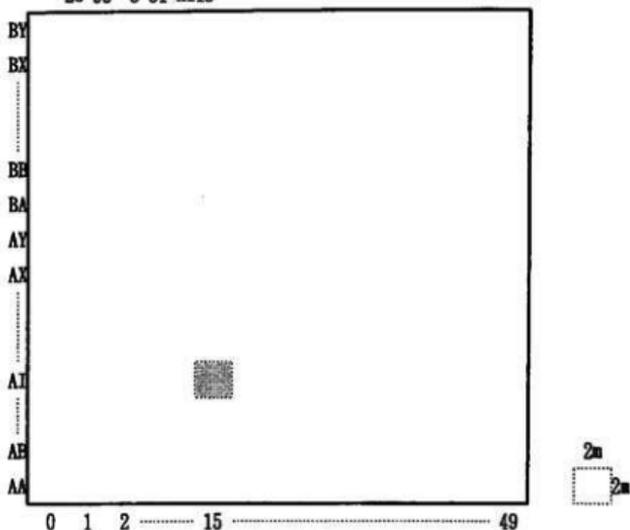
挿図 5 基準メッシュ図区画方法 3

LC-93 5-31



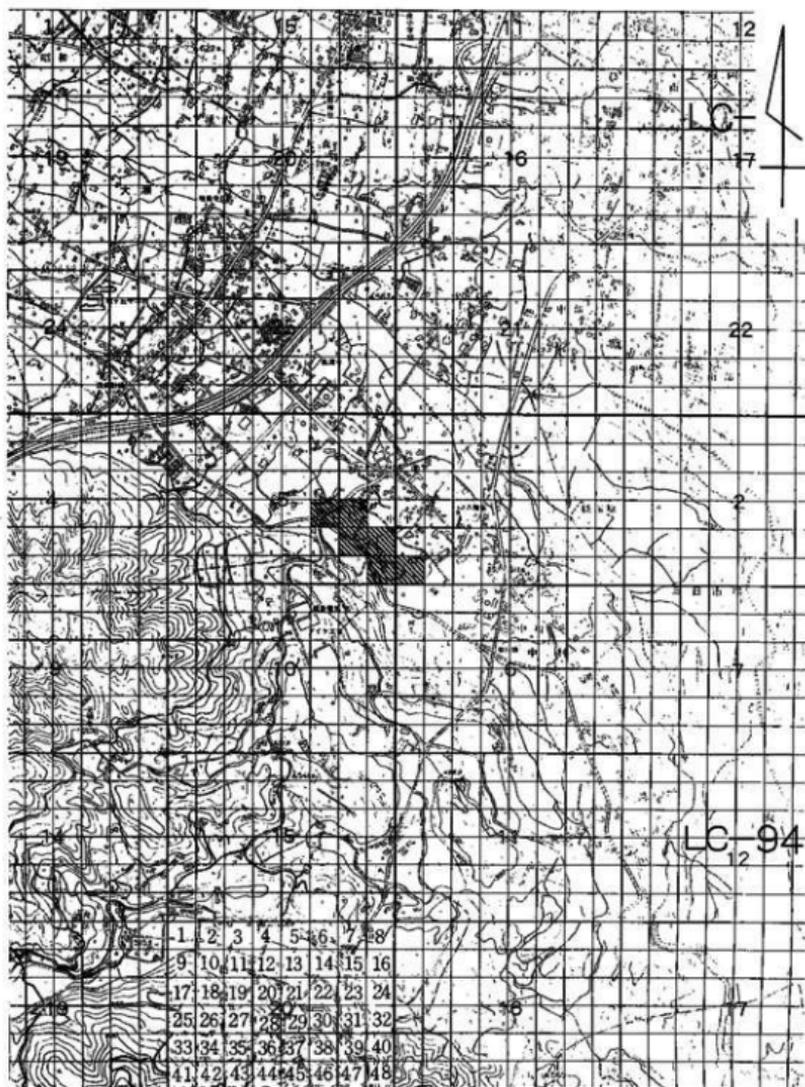
挿図 6 基準メッシュ図区画方法 4

LC-93 5-31 A115



挿図 7 基準メッシュ図区画方法 5

挿図 4~7 基準メッシュ図区画方法 2~5



1 : 20,000



挿図8 基準メッシュ図区画調査位置

2. 第1地点（調査面積約400㎡、付図1）

(1) 竪穴住居址

1) 縄文時代中期

① 1号住居址（挿図9）

調査区中央西側で、砂礫層中に掘り込まれて検出された。開田時・試掘時に削平を受け、壁は遺存していない。また、本址の南東側は、畦畔の石垣を積む際に削平されてしまっている。周溝の確認された部分から、規模4.6m程度の不整形を呈する竪穴住居址と考えられる。主軸方向はN2°Eを示す。埋土は漆黒土の層である。床面は炉址の南側、住居址中央部分がやや硬く締まっており、ほぼ平坦である。周溝は東側・北西側で確認され、幅15～20cm、深さ6cm程度である。柱穴は、径約40cmの円形を呈し、深さは24～36cmとばらつきがみられる。遺存部分の配置から、6本柱柱と考えられる。本址中央北側には石組炉があり、その底部には、外面を上にして深鉢形土器が一面に敷設されていた。焼土は確認されておらず、また、土器器面にも火を受けた痕跡はほとんど認められない。また、本址の南側には台石4個が弧状に置かれていた。

出土遺物は炉に埋設された深鉢形土器1個体等があり、出土量は少ない。

出土遺物から本址の所属時期は縄文時代中期後半と考えられる。

3. 第2地点（調査面積約3,250㎡、付図2）

(1) 基本層序および堆積環境（挿図10～13）

「II 遺跡の環境」の中で概要を記したが、第2地点の堆積環境については、縄文時代後期から晩期にかけての、集落の構造や性格等に関わる部分が大きいと考えられるので、1項を割いて記述する。

調査区の北側一段高い部分はローム層が分布しており、層中に中央アルプス前山の山系起源の花崗岩・変成岩の大きな礫を多量に含んでいる。礫の風化の程度は南側低地の礫に比べてそれほど顕著ではないが、ローム層中に含まれていたためと考えられる。この部分の北側半分では、開田時に造成を受けて削平されており、遺構の遺存は認められない。また、南半部でも耕土直下にローム層が検出され、土層の堆積が顕著でないのは、斜面の上部にあたることに起因するのかもしれない。

斜面部分は、茂都計川の浸食により形成されたと考えられ、同じ位置に構築された石垣の攪乱も一部に認められる。その下位に黒褐色土が堆積し、層下から配石墓が検出されている。

調査区の南側での土層堆積状態は、中央付近11列のトレンチで、挿図10のとおり観察された。漆黒土下に黄白色砂・黄褐色砂があり、分布を異にするが、層序から同一層と考えるとよいと思わ

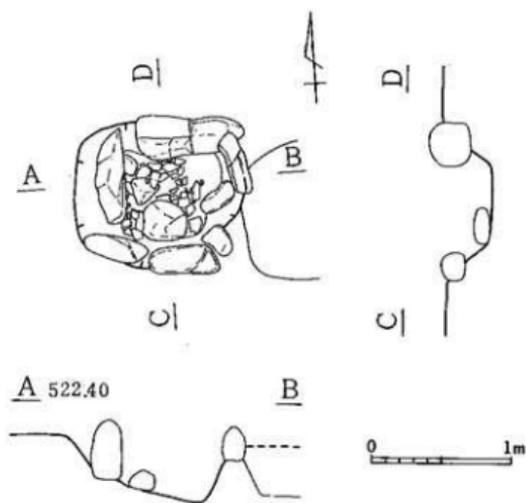
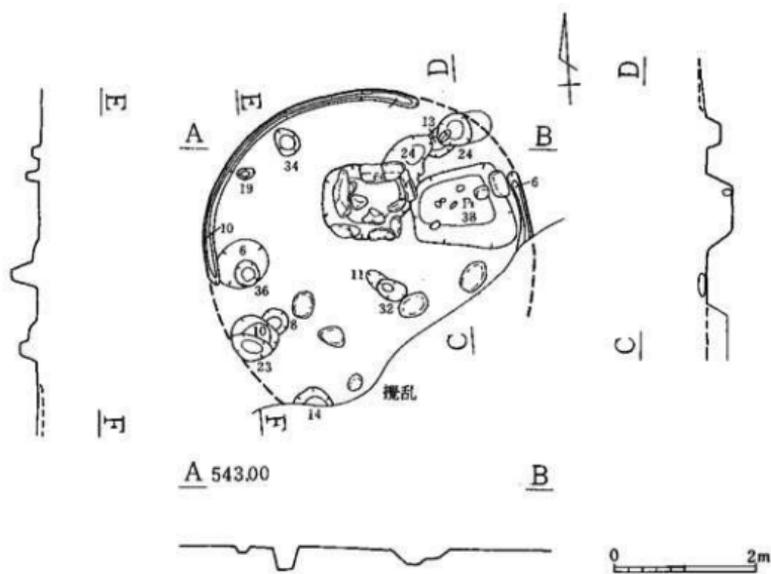
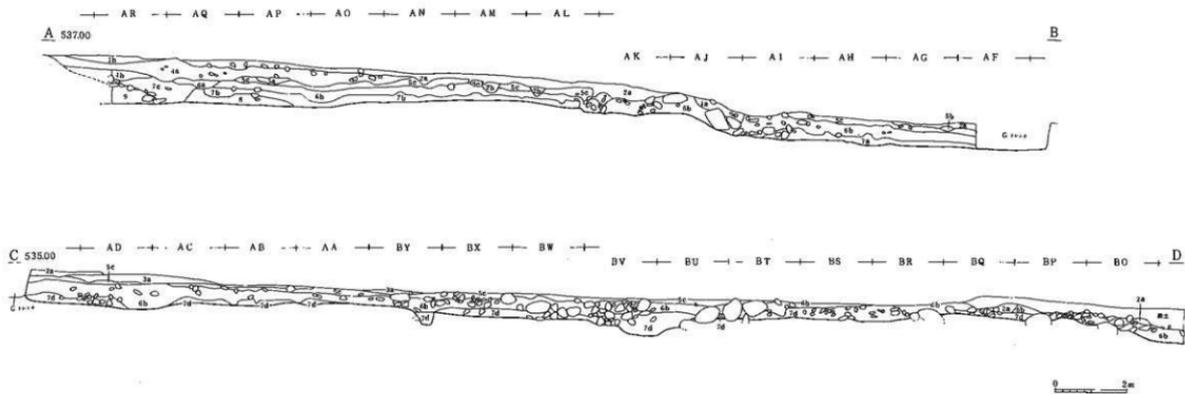


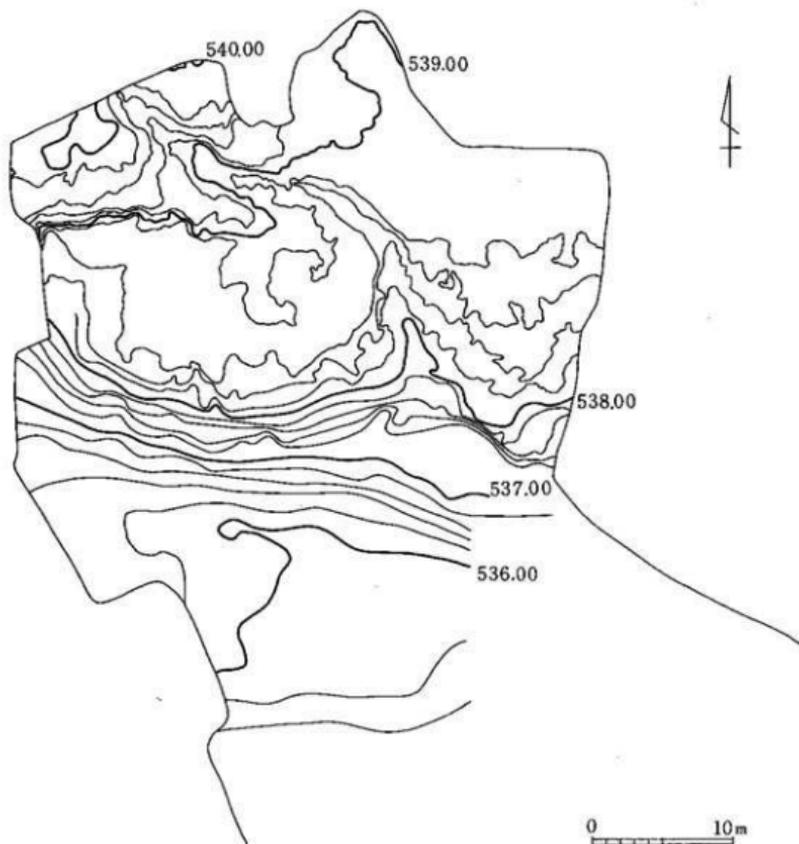
插图9 1号住居址



- | | | | |
|--------------|----------------|--------------|------------|
| 1 a 灰褐色土 | 3 b 黄白色砂 | 5 c 褐色土 | 7 c 暗黄褐色砂质 |
| 1 b 砂质混暗灰色砂质 | 4 a 明褐色土 | 6 a 明褐色土混黑色土 | 7 d 暗黄色砂质 |
| 2 a 漆黑土 | 4 b 暗黄褐色土混明褐色土 | 6 b 黑色土 | 8 黑色砂质 |
| 2 b 褐色土混漆黑土 | 5 a 烧土 | 7 a 暗黄色砂质 | 9 砂质ローム |
| 3 a 黄褐色砂 | 5 b 黄味を帯びた褐色土 | 7 b 暗黄色砂 | |

挿図10 基本層序

れる。わずかに礫が混ざるが、粒径は割に揃う。黄白色砂が縄文時代晩期前半の遺構に被ることから、晩期前半頃の茂都計川の洪水に起因する層と考えられる。V区A I 4とA O 14を結んだ線から北西側では、この黄白色砂層下に明褐色土が分布している。V区A I 4からA C 20方向に、帯状に延びた礫が顔を出す。明褐色土を中心に礫が含まれているが、径50cmを超える大型の礫も



挿図11 黒色土上面等高線図

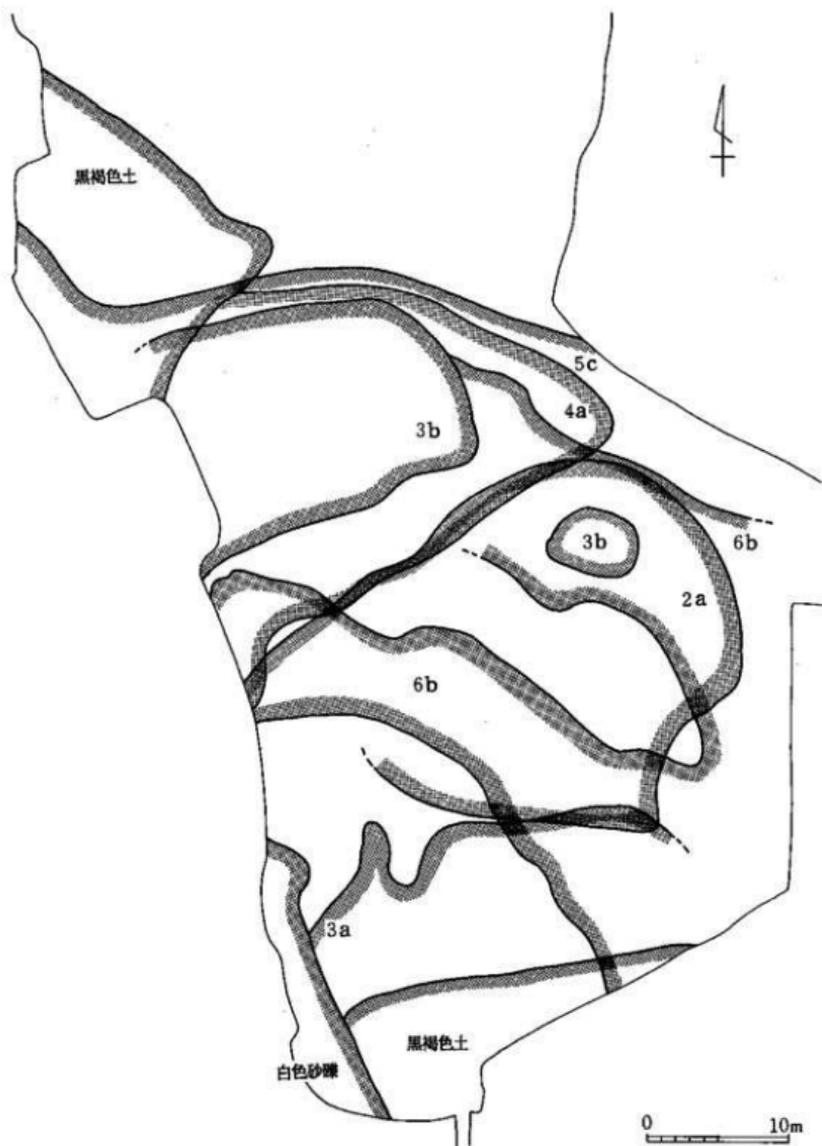
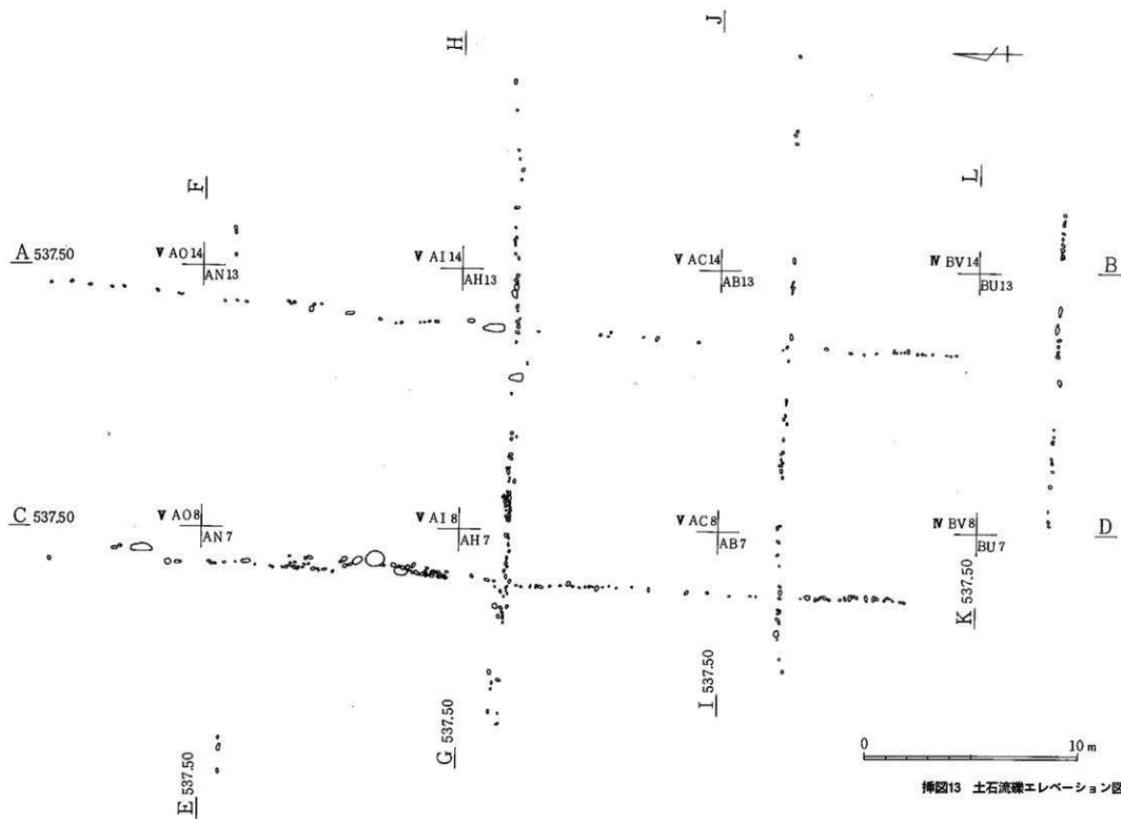


插图12 土层分布状况



挿図13 土石流壁エレベーション図

10個前後含まれており、こうした大型礫の分布はV区AF10付近より西側に馬蹄形に広がる。大部分の礫は20~40cm程度の中型礫で、やはり花崗岩・変成岩が相拮抗している。大型礫が馬蹄形に分布する等、土石流の特徴が観察された。大型礫の下面レベルはほぼ傾斜に沿っており、V区A18付近以西では土石流の下位に褐色土が20~40cmの層厚で分布する。色調は焼土が多量に含まれることによることも考えられたが、炭はほとんどない。多量の後期後半に属する土器・石器類のほか、焼けた骨が出土している。明褐色土下にはほぼ全面に褐色土があり、今次調査では、とりえず褐色土と褐色土2とに分層した。V区A14~8付近では、褐色土層中から数個体分の、ほぼ完形に近い深鉢形土器・注口土器が出土している。やはり後期後半に比定される。褐色土の下位には黒色土が広く分布しているが、この層中よりの遺物出土はほとんど無い。V区AF列以南、14列以西では褐色土・黒色土が分布せず、褐色土の直下に暗黄色砂礫層が分布している。花崗岩・変成岩が主体を占めているが、礫径は10~20cm程度で、土石流より風化の程度が著しく、相当の年代差が想定される。層上面で縄文時代早期の細久保式・野島式の土器片が出土した。黒色土・暗黄色砂礫層の下部は、全面に黄褐色砂礫層が分布していると考えられる。なお、V区AC4~IV区BQ8の南西側に分布する白色砂礫層は茂都計川の氾濫に起因すると考えられ、時期の新しい、それもおそらく36災害によるものと考えられる。

以上のような土層の堆積状態から、本地点の微地形形成・遺跡形成の過程の復元を試みる。

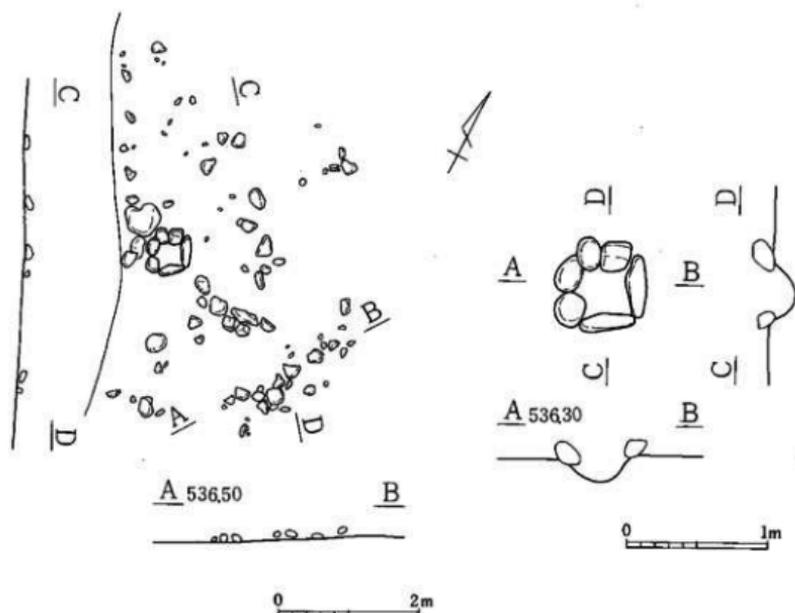
前述したように、本地点の特徴は数度にわたり、土石流・洪水を被っていることにある。その歴史はローム層中に確認された土石流の痕跡から更新世まで遡る。更新世（完新世でも比較的早期）には茂都計川は現在より北側を流れており、南側低地部分は縄文時代早期まで氾濫原であったと考えられる。その後、流路が南側に移動し、次第に黒色土が堆積していくが、その成因はおそらく自然堤防が形成され、後背湿地化したことによると思われる。具体的に遺構は確認されなかったものの、褐色土層中の完形に近い土器群の出土から、縄文時代後期後半にはこの部分にも生活の場が求められたと考えられる。そして、この時期に再び土石流を被る。その後、縄文時代晩期前葉を中心に集落が形成され、さらに茂都計川の洪水に浸る。晩期後半には漆黒土が形成され、建物址等の遺構が確認され、以後は安定した集落の姿が周辺地点の調査結果から読み取れる。

(2) 竪穴住居址

1) 縄文時代後期

①24号住居址（挿図14）

調査区中央西端で検出された。明褐色土掘り下げ中に炉址が検出され、住居址であることが判明したが、調査区端断面でも掘り込みは確認できず、平面形・規模、炉址以外の施設等の詳細は一切不明である。調査区際線に炉址が検出されたことから、調査区外に延びることは確実である。床面は硬くない。床面直上付近で検出された礫を図示したが、中に焼けたものがある。炉址は方



挿図14 24号住居址

形の石囲炉で、平たい面を内側に向けて据えられていた。花崗岩を用いており、非常に良く焼けていた。炉址内には、厚い焼土が確認された。

炉址中から粗製深鉢等の土器片が出土している。

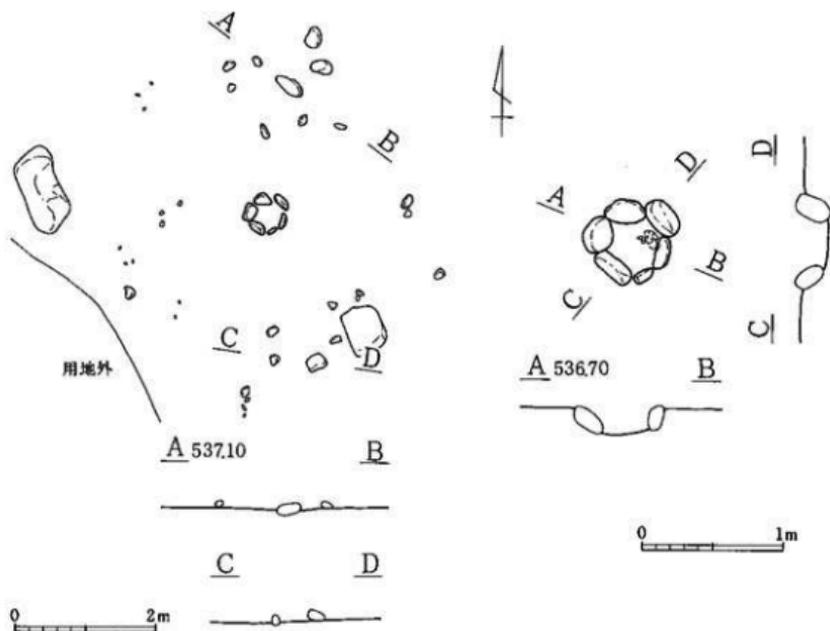
検出状況から、縄文時代後期後半の住居址と考えられる。

②28号住居址（挿図15）

調査区中央西端で検出された。24号住居址と同様、明褐色土を掘り下げ、褐色土上面で炉址が確認され、住居址であることが判明した。壁が確認できず、平面形は不明であるが、床面直上付近で検出された礫の分布から、方形を呈する住居址とも考えられる。規模、炉址以外の施設等の詳細は一切不明である。床面は硬くない。

炉址中からの土器小片の出土がある。

検出状況から、縄文時代後期後半の住居址と考えられる。



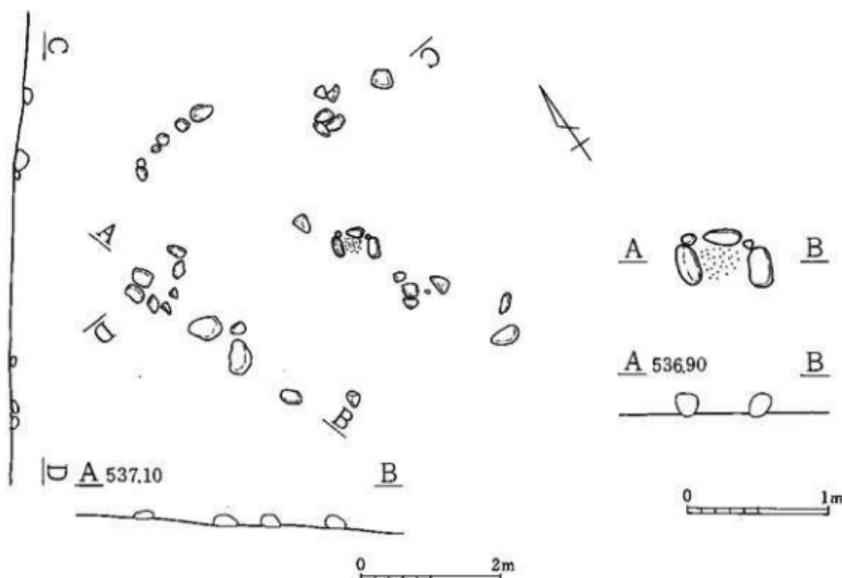
挿図15 28号住居址

2) 縄文時代晩期

①26号住居址 (挿図16)

調査区中央西側で、黄白色砂を掘り下げたところで検出された。わずかに凹んでおり、壁の立上がりはほとんどない。凹んだ部分は円形を呈するが、床面上部の礫の分布は方形とも思われ、平面形・規模等の詳細は不明である。炉址は方形と考えられる石囲炉で、三方が確認されたが、欠損する南西側に向かって持ち上がっている。黄白色砂上面でいわゆるルームマウンドが確認されており、この下位の床面レベルでは黄白色砂があり床が確認されないことから、ルームマウンドにより壊されていると考えられる。炉址の東側では硬く焼け締まった床面が広がり、そのほぼ全面で焼土が検出された。床面は傾斜している。本址の南東側に検出された配石址1との間で、完形の両頭石棒・磨石が出土している。

検出状況および出土遺物から、縄文時代晩期前葉の住居址と考えられる。(馬場保之)



挿図16 26号住居址

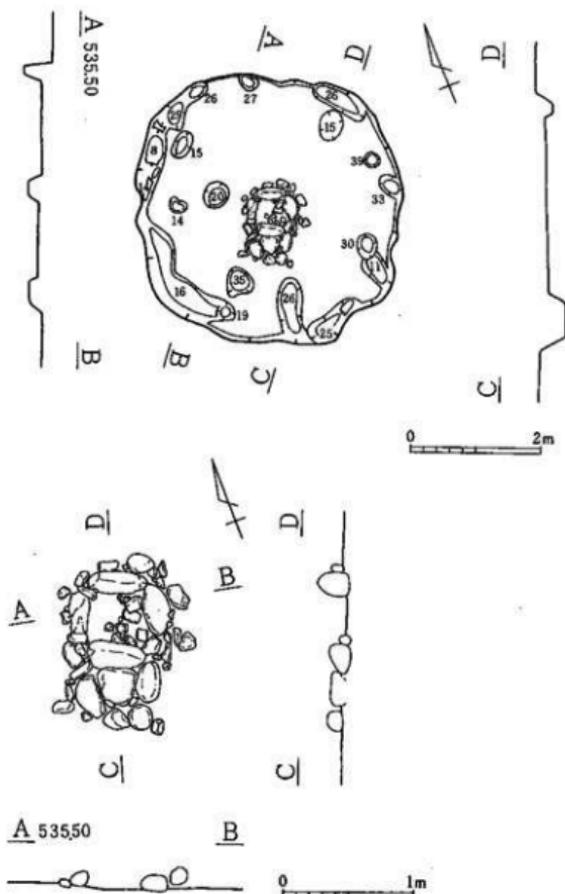
②27号住居址（挿図17）

北の調査用地の中央部やや南東、V区A J16グリットを中心に検出した。数回認められる土石流の先端部に位置していたため、下部の隠層部まで掘り下げた時点で、石が取り除かれていたことが把握された。精査したところ中央部に炉址が検出され、竪穴住居址である事が確認された。全体が調査できたが、床面はこの時点ですでにほとんど壊れてしまっていた。そのため形態は掘り方によって把握した。歪む部分もあるが、隅丸方形の竪穴住居址と判断される。規模は4×4mを測る。主軸方向はN25° Eを示す。壁高、覆土とも不明であるが、床面下の掘り方は、5～15cmを測る。また、グリットでの掘り下げ作業中の観察では、土器が多量に出土する部分と周囲の堆積土との変化は認められなかったが、土器が集中して出土しはじめたのは25cm程上部からである。周溝は断続的に把握されたが、全周していた可能性が高い。深さは確認面から8～26cmである。支柱穴は確認できなかったが、小穴を数本検出した。本址に伴うものかは不明である。炉址は中央部にある。自然石を使った石囲炉で、南側に石敷の施設が付属している。焼土は認められなかった。

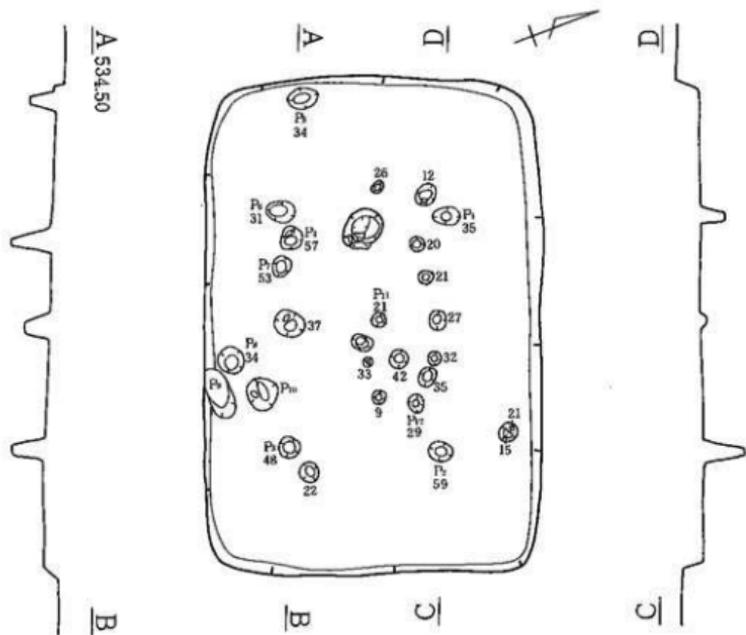
出土遺物は、比較的多い。土器には深鉢、浅鉢、台付きの鉢などがある。深鉢には口縁下部に孔の空けられたものや、内面朱塗りのものがあり、口縁部側面に貼り付けの装飾を持つ浅鉢、網代痕のある底部なども見られるが、ほとんどの土器は無文である。石器には分銅形石器、剥片石器、黒曜石石鏃、剥片、チャート剥片などのほか敲打器、磨石がある。

時期は、縄文時代晩期前葉に位置付けられる。

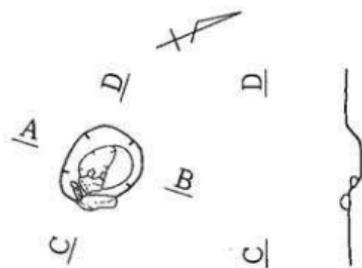
(佐合英治)



挿図17 27号住居址



0 2m



A 534.50

B



0 1m

插图18 25号住居址

3) 弥生時代後期

①25号住居址(挿図18)

調査区南東側で検出された。6.8×4.7mの隅丸方形を呈する竪穴住居址で、辺のほぼ中央がやや外側に張り出している。主軸方向はN69°Wを示す。埋土は上層漆黒土、下層黒褐色土である。床面は、底面で砂礫層が露呈しており、貼り床されたとも考えられる。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は遺存状態の良い北壁側で32cmを測る。主柱穴はP1~P4の4本が確認され、それぞれ平面楕円形を呈する。半截材を使用したと考えられる。主柱穴の大きさは30~40cm程度で、深さは35~59cmを測り、P1・P3がやや浅い。埋土黒褐色土である。入り口施設等は確認されなかった。炉址は主柱穴P1・P4中間内側に検出され、炉縁石をもつ土器埋設炉と考えられる。

出土物は大半が縄文時代晩期の粗製無文の深鉢形土器等であるが、炉址内から弥生土器甕が出土した。

形態・出土遺物等から弥生時代後期前半の竪穴住居址である。

(馬場保之)

(3) 配石址

挿図中、焼土および焼けた礫はスクリーントーンを貼付した。

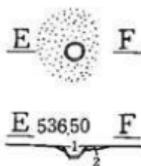
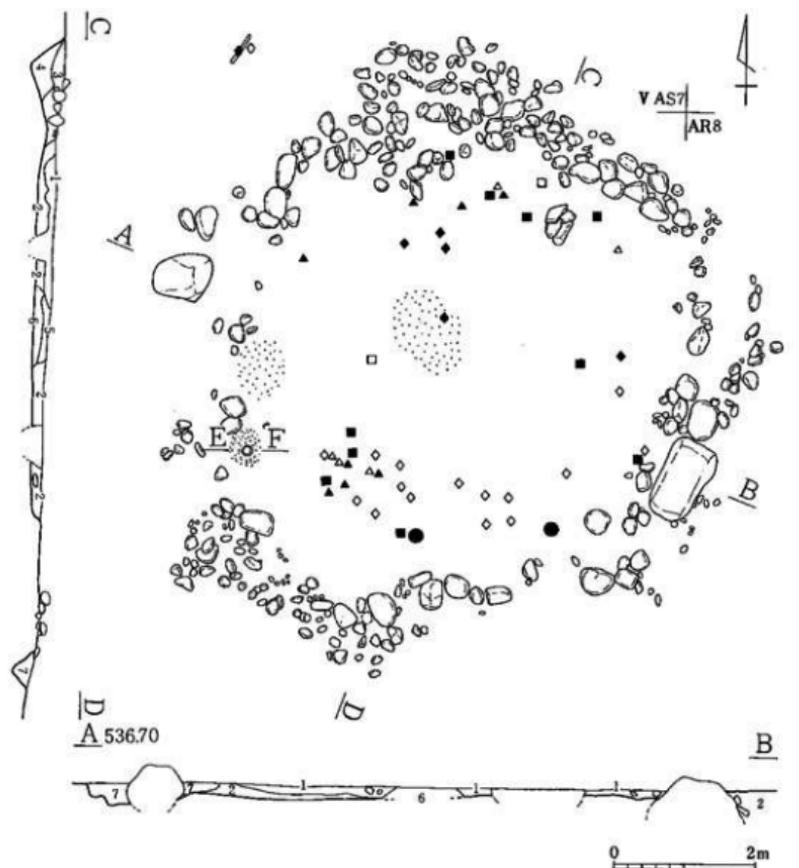
①配石址1(挿図19~21、第5図5・6・9・10・13、第6図4、第10図1~4)

明褐色土中から検出した。遺構東側に配石址2があり、北西に26・28号住居、南側に焼土を伴う配石址6、南東側に配石址4・5がそれぞれ近接する。平面形は9×8mの不整長方形を呈し、最大120×60cmの大型の礫を含め、人頭大から拳大の約350個程の礫を用い、幅約1m程の帯状に配されている。礫は積み上げられておらず、平面的に配置される。配石に使用される礫は、後期後半の土石流の構成礫に類似する。配石内部には礫が見られず、約6×5.5m程の空間になる。内部の掘り下げを行ったところ遺構ほぼ中央に1×0.8m範囲で焼土が分布し、また西側にも4箇所焼土が認められた。また、焼土の検出面がやや堅くなることから、この面を床面と考えた。床面は配石付近で不明瞭になり、壁は配石付近で緩やかに立ち上がる。床面を精査したところ北西部に径50cmの穴が2個検出された。堅果類の見られる土坑はすべてこの床面を掘り下げた段階で検出されたものである。遺物は1・2層から主に出土し、遺構南側に土偶・打製石斧・敲石・磨石等が集中してみられ、北側には石棒・石剣・石刀の破片が比較的多く出土した。また、土製耳飾り・土偶・棒状土製品・石鏃等も遺構全体から出土している。配石内南西隅には焼土中から底部穿孔された埋設土器が出土している。

遺構の時期は出土土器から縄文後期終末から晩期前葉までの幅がみられる。

遺構の性格は、配石が周囲に回り、土偶・石棒等の特殊遺物が見られる点などから特殊な位置にある遺構とも考えられるが、住居址としての可能性もあろう。

(下平博行)



- | | |
|---------------|-----------------|
| 1. 黑褐色土 (砂質) | ◆ 石棒・石劍・石刃 |
| 2. 暗茶褐色土 (砂質) | ◇ 磨石・砥石・丸石 |
| 3. 黑色土混褐色土 | ▲ 打製石器・打製石斧・丸太石 |
| 4. 黑色土 | △ 磨製石斧・玉斧 |
| 5. 灰色土 | ■ 耳飾 |
| 6. 焼土 | □ 棒状土製器・土板 |
| 7. 暗茶褐色土 | ● 土偶 |

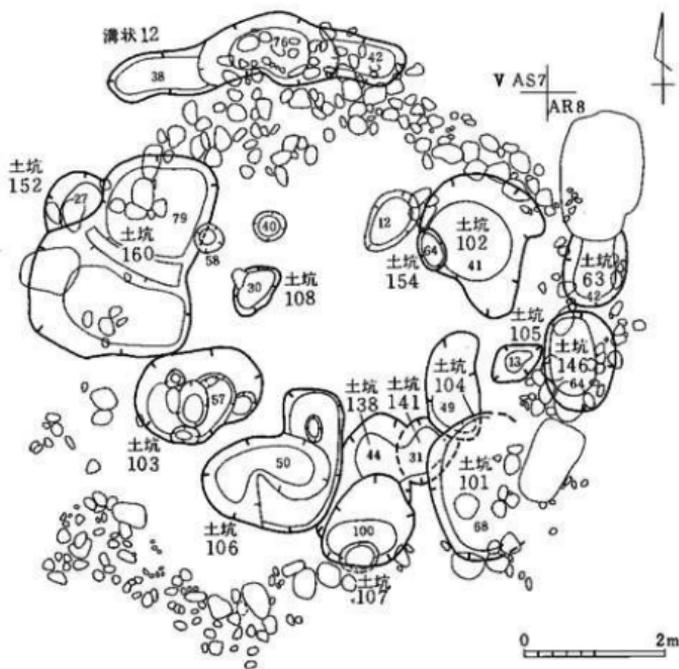
1. 焼土 (褐色)
2. 暗茶褐色土

挿図19 配石址1

②配石址2 (挿図22)

配石址1の東側、褐色土中で検出された。8×5.2mの範囲で、標高536.30m前後に一面的に分布している。径30cm前後の、不整形ないし円形を主とする扁平礫で構成される。礫の形状・組成は土石流の礫と差がない。配石址1と接するが、検出層位は異なっており、時期が異なると判断された。方位に沿った方形を意識した配列を読み取ることが可能である。本址の範囲下を中心に、褐色土2層中で鹿角が比較的多く出土しており、遺構・遺物の差はあるものの、ともに祭祀に関連するとも言われていることから、継続した「場」の機能が読み取れる。

検出層位から、縄文時代後期後半に比定される。



挿図20 配石址1下検出炭化物包含土坑

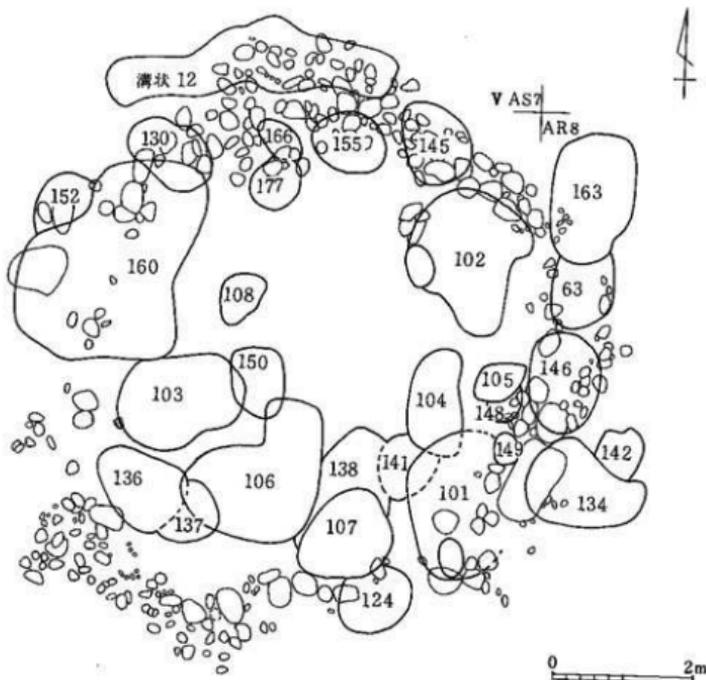
③配石址 3 (挿図23)

調査区の中央、配石址 2 の東側で分布域が重なって検出された。配石址 2 と同様、褐色土中で確認されているが、標高は536.50m前後に位置しており、配石址 2 より新しい。7.5×6.5mの範囲に広がっており、配石址 2 が塊状を呈する部分があるのに対し、本址は直線的な配置をとる。径30cm前後の礫で構成されるが、配石址 2 が扁平礫で構成されるのに対し、礫の形状に選択性はない。礫の形状・組成は土石流の礫と類似する。

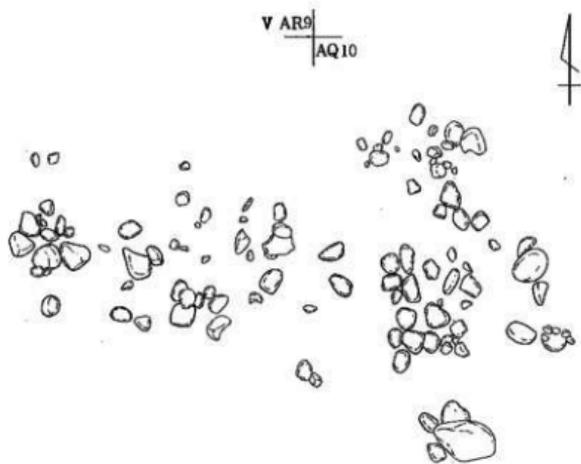
検出層位から、配石址 2 と同様、縄文時代後期後半に比定される。

④配石址 4 (挿図23)

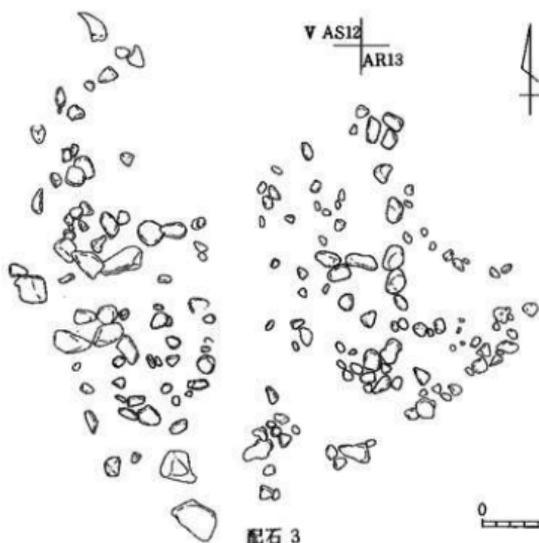
配石址 1 の西側、明褐色土中で検出された。配石址 1 の礫の北西辺と方向がほぼ同一であり、直線状を呈することから、配石址とした。長さ1.7mを測り、長軸方向N46° Eを示す。礫 5 個



挿図21 配石址 1 下検出土坑



配石 2



配石 3

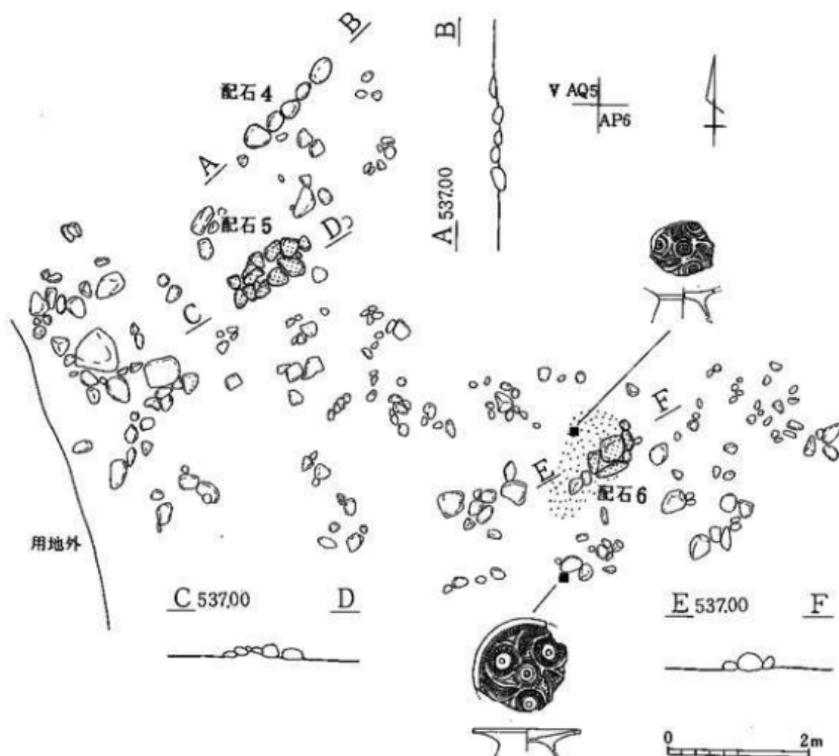
挿図22 配石址 2・3

で構成される。20～35cm程度の円礫を使用しており、礫の形状・組成は土石流の礫と類似する。一列構成をとることから、区画を目的とした施設とも考えられる。

検出層位・位置・レベルから、配石址1と関連すると考えられ、詳細時期は不明であるが、縄文時代後期末から晩期前葉のものであろう。

⑤配石址5 (挿図23)

配石址4の南側、明褐色土中で検出された。二列構成ないし不整長方形を呈し、いずれの礫も焼けていることから、配石址とした。1.4×0.55mの範囲に分布し、長軸方向N55°Eを示す。20～35cm程度の円礫を使用しており、やはり、礫の形状・組成は土石流の礫と類似する。検出層



挿図23 配石址4～6

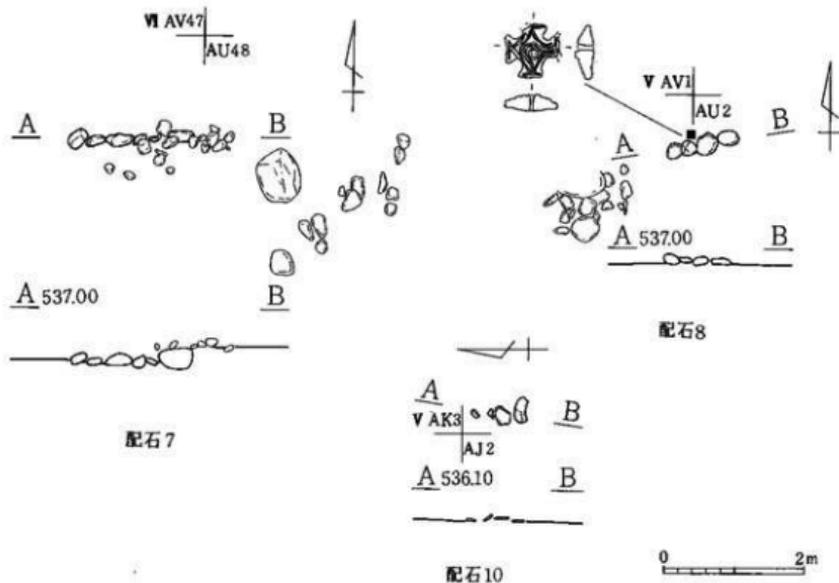
位・位置・レベル等配石址1となんらかの関係有していたと考えられ、配石址1の果たした機能にもよるが、やはり焼けていた配石址6とともに、配石址1を取り巻く祭祀施設とも考えられる。配石址1周囲に焼骨が分布することも、これに関連するかもしれない。

共伴遺物もなく、配石址4と同様、詳細時期は不明であるが、縄文時代後期末から晩期前葉のものとしたい。

⑥配石址6（挿図23、第7図1・2）

配石址1の南側、明褐色土中で検出された。石組炉の中央に扁平な礫を置いた、いわば石壇状を呈することから、配石址とした。いずれも焼けており、周囲に大量の分厚い焼土が検出された。規模70×70cmを測る。40cm前後の大きな礫が主体である。本址の南・北側の対置される位置に漏斗状の土製耳飾りがそれぞれ1点出土しており、祭祀施設的な色彩が濃厚である。検出位置等から、配石址1と関連した施設と考えられる。

漏斗状の土製耳飾りが共伴することから、詳細時期は不明であるが、縄文時代晩期前葉に比定される。



挿図24 配石址7・8・10



挿図25 配石址 9

⑦配石址7 (挿図24)

配石墓9の南側で検出された。検出層は褐色土中であり、この付近では堆積状態が基本層序と若干異なり、十分に把握しきれていない。直線状を呈することから、配石址とした。長さ2.25mを測り、長軸方向N88°Eを示す。礫5個で構成される。20~40cm程度のやや細長い礫を使用しており、礫の形状・組成は土石流の礫と類似する。一列構成をとり、配石墓9のすぐ南側で検出されたことから、墓域の区画を目的とした施設の可能性もある。しかし、検出レベルは配石墓9の底面レベルとほとんど変わらず、配石墓9上面検出礫よりかなり下位になる。とりあえず、区画施設と捉えておくが、区画の対象は不明である。

詳細時期は不明であるが、検出層からすると縄文時代後期後半に位置づけられ、晩期前葉の配石墓群の検出状況に照らしても、妥当と言えるであろう。

⑧配石址8 (挿図24、第7図3)

配石址1の北側、配石墓6の南側、褐色土中で検出された。配石址7と同様、直線状に礫4個が配列されることから、配石址とした。長さ1.05mを測り、長軸方向N77°Eを示す。20~30cm程度のやや扁平な礫を使用しており、変成岩類で構成される。配石墓6の南側で検出された配石墓の被覆礫に近接するが、検出レベルはこれより下位になる。斜面に対する位置を同じくする配石址7よりは、やや上位になる。また、配石址1より下位である。直線状を呈することから、なんらかの区画施設と考えるが、配石址7と同様、区画対象等把握していない。本址の北隣中央付近で「十字状」を呈する不明土製品が出土しており、出土レベルから本址に伴うと考えられる。

時期等詳細は不明であるが、検出層からすると縄文時代後期後半~終末に位置づけることが可能である。

⑨配石址9 (挿図25)

配石址1・8の中間、明褐色土中で検出された。配石址1と同レベルで検出されており、中には規則的な配列が看取される部分があることから、一括して配石址とした。こうした配列が幾つかあることから、さらに細かい単位に細分することも可能と言えるが、十分把握されておらず、大雑把に捉えるにとどめる。主に20~30cm程度の円礫を使用しており、礫の形状・組成は土石流の礫と大差ない。図中に網掛けした部分は焼けたと考えられる礫であるが、一見散漫な分布状況を示すように見える。

詳細時期は不明であるが、検出層位・位置・レベルから、配石址1と近接した時期が考えられ、時間幅はあるが、縄文時代後期終末から晩期前葉の間のものであろう。

⑩配石址10 (挿図24)

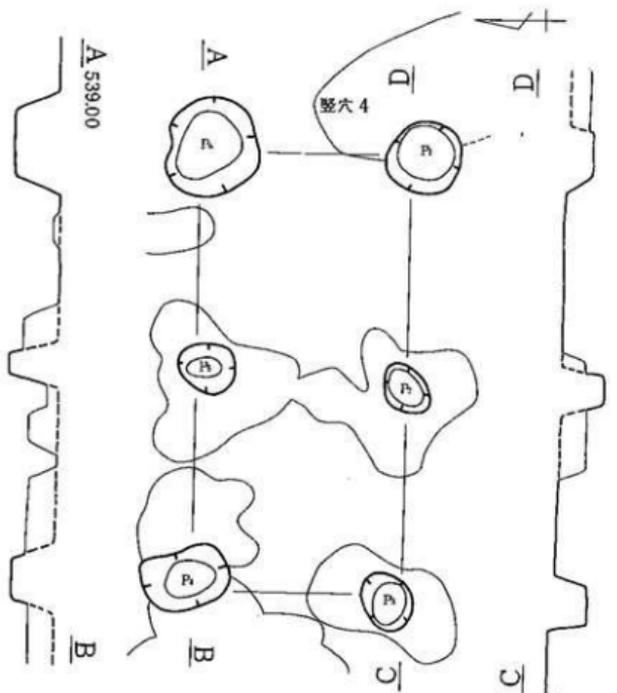
24号住居址の下位付近、褐色土2の上面で検出された。鉄平石がほぼ一列・一面で検出され、1個は斜位であるが、他は水平である。上面側は著しく摩滅している。

土石流の下位に位置することから、縄文時代後期後半に位置づけられる。

(4) 方形柱穴列

①方形柱穴列1 (挿図26)

調査区の北側で検出された。土壌基 6・11・12、土坑54・55・58・59・62、竪穴4と重複する。



挿図26 方形柱穴列1

土坑等として検出・掘り下げており、掘り上げ後検討の結果、方形柱建址であることが判明した。規模7.2×4.1m、主軸方向はN0°Eを示す。80～130cm程度の不整形を呈する柱穴で、隅の柱穴は規模が大きい。深さは30～60cmで、隅の柱穴は浅い。埋土は褐色ないし暗褐色土である。土壌墓6との新旧関係は、断面観察や出土遺物から本址が古く、土壌墓の時期は縄文時代後期後葉に比定される。土坑群との新旧関係は不明であるが、土坑群がやはり後期後葉を主体としていることから、これより古い時期と考える。

出土遺物は検出状況から、他遺構の混入があり、本址に伴う遺物を把握していない。

詳細時期は不明であるが、形態や周辺調査地点の調査状況から縄文時代中期後半の遺構と考えられる。

(5) 掘立柱建物址

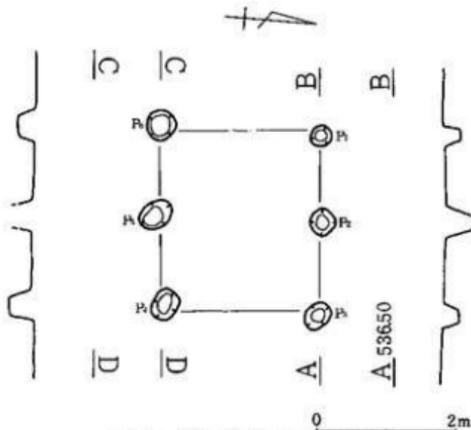
①掘立柱建物址6 (挿図27)

調査区の中央東側、漆黒土下面で検出された。規模2.9×2.6mの、2間×1間の建物址で、主軸方向N87.5°Eを示す。柱穴は35～50cm程度の不整円ないし楕円形を呈し、深さ25～35cmを測る。埋土漆黒土である。

出土遺物は、P2からの粗製無文鉢、P3からの網代底、P4～P6からの網目状燃糸文施文の深鉢、P5からの磨石等がある。

埋土・出土遺物から縄文時代晩期中葉(大洞C2併行期)に属すると考えられる。

(馬場保之)



挿図27 掘立柱建物址6

②掘立柱建物址14

(挿図28)

V区AM18で検出し、一部を除きほぼ全体を調査した。3×1間の掘立柱建物址で、桁行3.3m、梁行2.2mを測る。柱間は桁行が1.4～1m、梁行は1.5mを測り、桁行方向はN13°Eを示す柱掘方は円形もしくは楕円形で径40～24cm・深さ

24~12cmを測る。覆土は黒色土である。

遺物は無文の土器小破片が数点と黒曜石剥片数点がそれぞれピットから出土している。

周辺の遺構の状況より縄文時代晩期中葉に位置づけられる。(吉川金利)

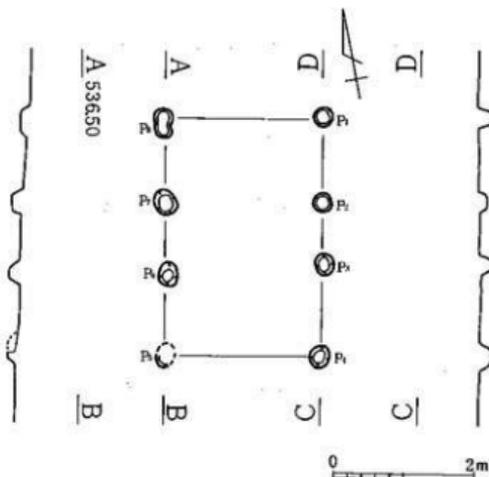
(6) 配石墓 (挿図29・30)

当初、調査区中央北側の斜面部に検出された礫で構成されるものを、配石墓として把握した。精査の結果、配石墓8は地山の礫であることが判明し、欠番とした。配石墓9は再葬墓であるが、蓋石状の部分が上部にあることから、配石墓に一括して記述する。

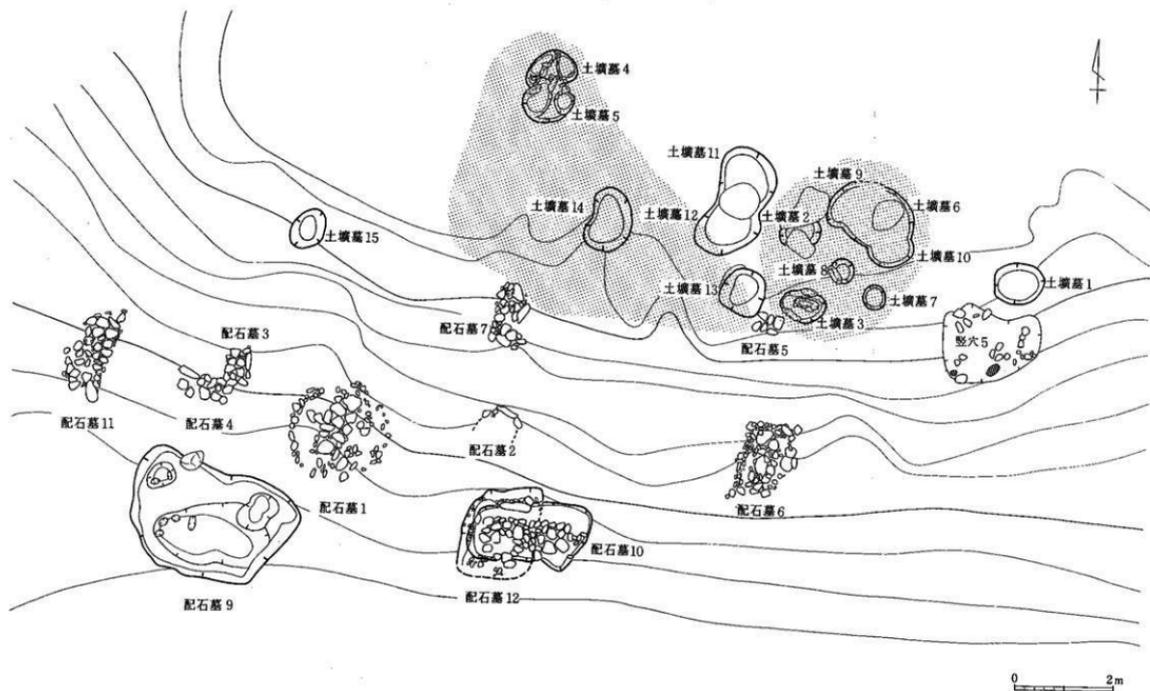
配石墓2~4・6・11の遺構図中、スクリーントーン貼り込みの礫分布図は配石墓の被覆礫を表し、スクリーントーン部分は下部配石墓の敷石範囲を示す。また、配石墓10の遺構図中のスクリーントーン部分は、下部の配石墓12の位置を示す。(馬場保之)

①配石墓1 (挿図13)

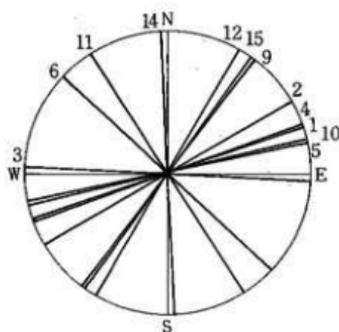
調査区北西側斜面中ほどから、黒色土を剥いだ段階で検出した。東側に配石墓10・12が、南西側に配石墓9が、西側に配石墓3・4がそれぞれ近接する。最大径25cmから人頭大の平らな礫を11個ほど用い、1.3×0.7mの長方形に配している。また、大型の礫の間には拳大の礫を充填している。主軸はN20°Wを向く。長方形の配石の周囲には拳大の礫約60個ほどが取り巻くように、径2mの円形に配される。配石の下部に土坑が存在することが予想されたため、長方形の配石部を外し、下部を調査した。その結果、配石周辺の地山を深さ20cmほどU字状に掘りくぼめ、長方形の配石が置かれる部分のみ舌状に掘り残し、整地していることが判明した。周囲の配石は掘りくぼめた壁際に配されている。



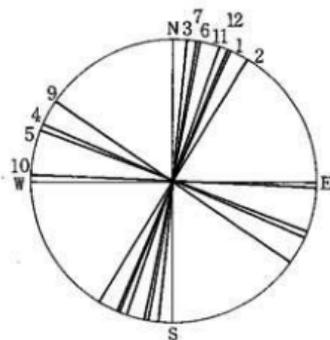
挿図28: 獨立柱建物址14



擇圖29 配石墓・土墳墓・竈穴分布圖



土墳墓



配石墓

挿図30 配石墓・土墳墓軸方向分布図

遺物は、長方形の配石を巡る溝状の部分から、無文の深鉢の小片が出土した。また、配石からは骨片は認められなかった。

遺構の所属時期は遺物が少量のため正確には不明である。 (下平博行)

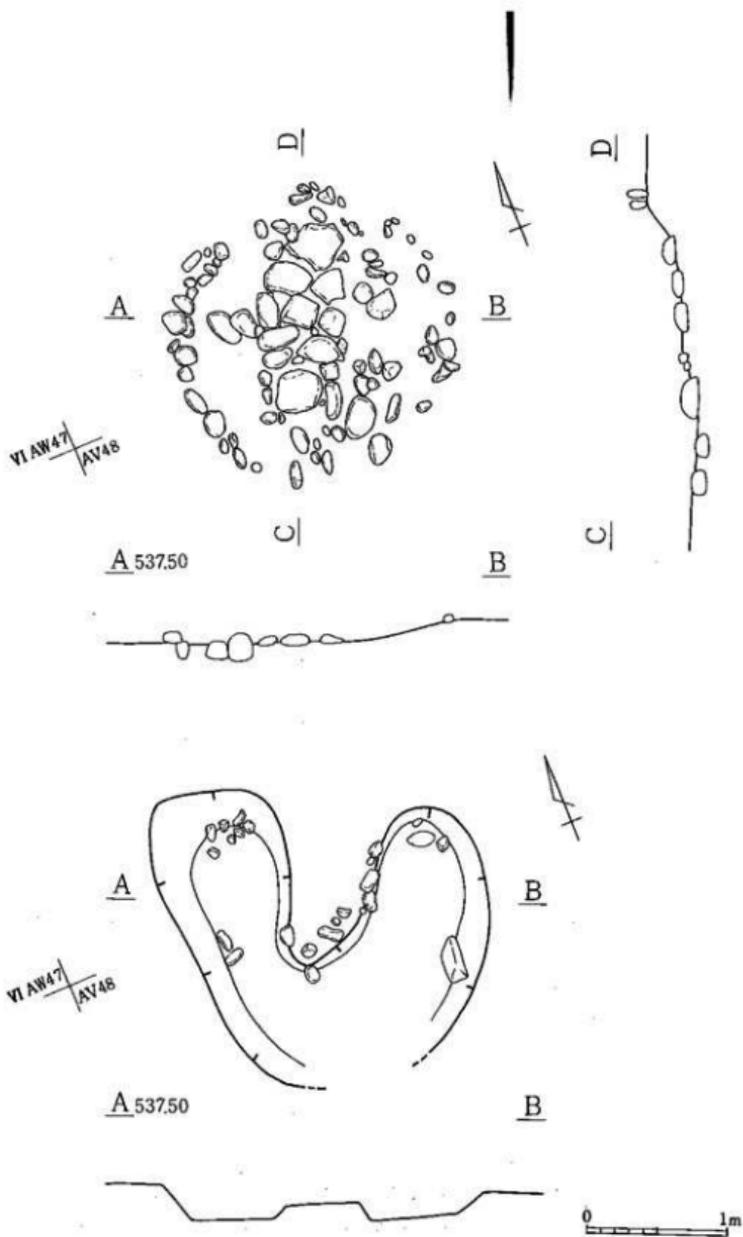
②配石墓2 (挿図32)

配石墓1・6・7・10・12の間、斜面で検出された。50×30cm、厚さ10cm程の扁平な礫が北側に立てられており、その両側に10～20cm程度の礫が並ぶ。長軸方向N31°Eを示すが、削平を受けており、規模等詳細は不明である。底面の敷石を欠く側壁のみの配石墓と捉えることが可能で、他の配石墓と構造を大きく異にしている。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。 (馬場保之)

③ 配石墓3 (挿図33)

調査範囲の北部、西寄りのVI区AW48グリットに検出した。土石流により作られた高低差160cmの段の裾部で、配石墓1と配石墓11の間に配石墓4と併に確認された。南西隅で配石墓4の敷石が本址の敷石に乗っており、本配石墓3が切られている。地山にも、これを覆う包含層にも多量の石が巻き込まれており、底部に並べられた石が露呈して遺構が把握された。精査したが、



挿図31 配石基 1

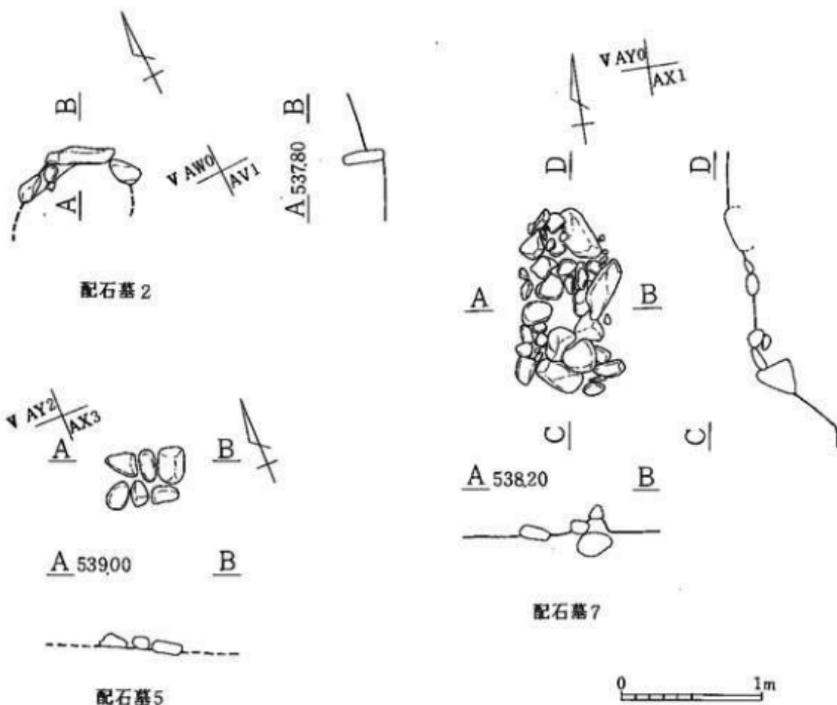
北側の掘り方が一部確認されたのみで、全体の平面形は不明である。残存していた壁高は14cmを測る。石敷は長方形で、規模は0.75×0.5mを測る。長軸方向はN5.5° Eを示す。石は皆厚さ5cm程の扁平な自然石である。ほぼ平坦に三列並べているが、斜面に作られているためか、石の面は南側で5cm程低くなっている。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

(佐合英治)

④配石基4 (挿図33)

調査範囲西よりのAW47で礎の下で検出した。東西 1.2m、南北 0.6mの範囲に人頭大の平らな石が11個置かれて、長軸の方向はN67° Wをさしている。東端の一部が配石基3の石の上にあ



挿図32 配石基2・5・7

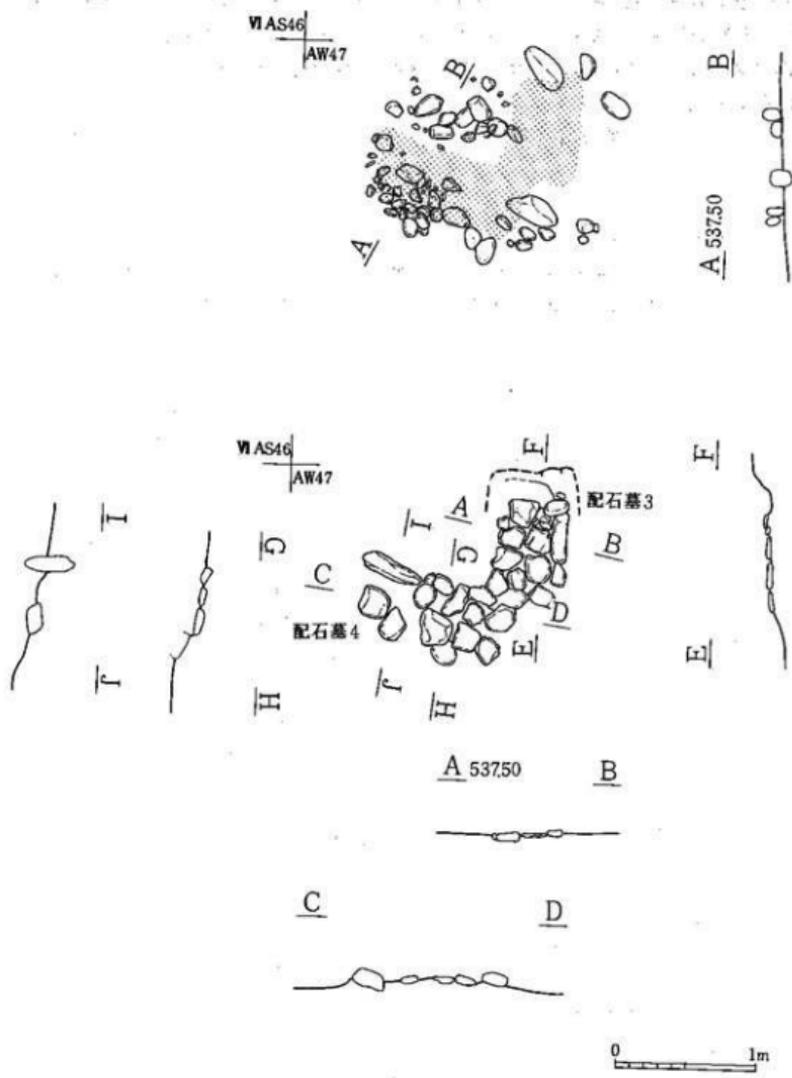


插图33 配石基3·4

り、作られた時期は配石基3より新しい。

石は平坦に並べられているが、東側が整然と並べられているのに対し、西側は並べられたものがはずれたのか隙間がある。

断面観察では、石の下に掘られた形跡はなく、地山に直に石を置いたものと判断できる。しかし、検出箇所が斜面にかかるところであるにもかかわらず、底部がほぼ平らになっているのは石を置く前に平らに削った可能性もある。また、北側にある40cmほどの石が立てられており、側壁としたことが推測される。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

(吉川 豊)

⑤配石基5 (挿図32)

配石基6、土墳基3・13の間で検出された。6個の20~30cm大のやや扁平な礫で構成される長方形を呈する敷石で、確認された規模は0.55×0.4m、長軸方向N69°Wを示す。礫の形状等は、土石流中の礫に見出すことが可能である。地山から僅かに浮いた状態で検出された。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

(馬場保之)

⑥配石基6 (挿図34)

V区AV3で検出し、全体を調査した。1.5×1.2mのほぼ長方形で、長軸方向は地形の斜面方向に沿い、N12°Eである。底面は敷石で、一部大型の地山の石を利用し上部のレベルに合わせて暗褐色土を盛り、人頭大の扁平礫を敷いている。また、北・西側には区画のためと思われる拳大の礫を確認した。南・東側にも存在したと思われるが崩落したと考えられる。側壁は明確に断定できるものはないが、東側中央部の立石はその可能性がある。

遺物は小破片の土器数点が暗褐色土盛土中から出土している。

時期決定できる遺物がなく、詳細時期等不明である。

(吉川金利)

⑦配石基7 (挿図32)

配石基1、土墳基5・14・15、土坑133の間で検出された。配石基5と同様、傾斜の上端部に位置する。地山の礫を含む40個程の礫で構成され、10~50cm大とばらつきがある。やや扁平な礫の他、円礫も使用される。規模1.3×0.8mの不整長方形を呈し、長軸方向N9.5°Eを示す。地山礫を除く礫は、土石流を含め周辺部から採取可能なものである。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

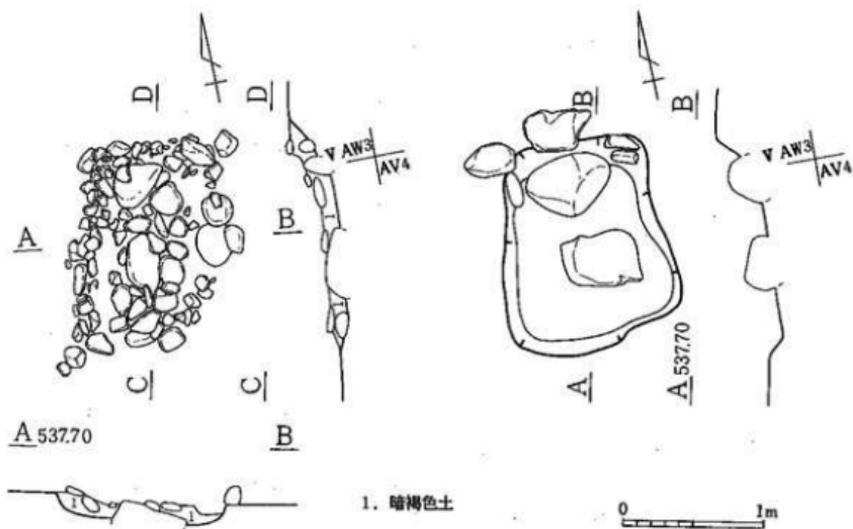
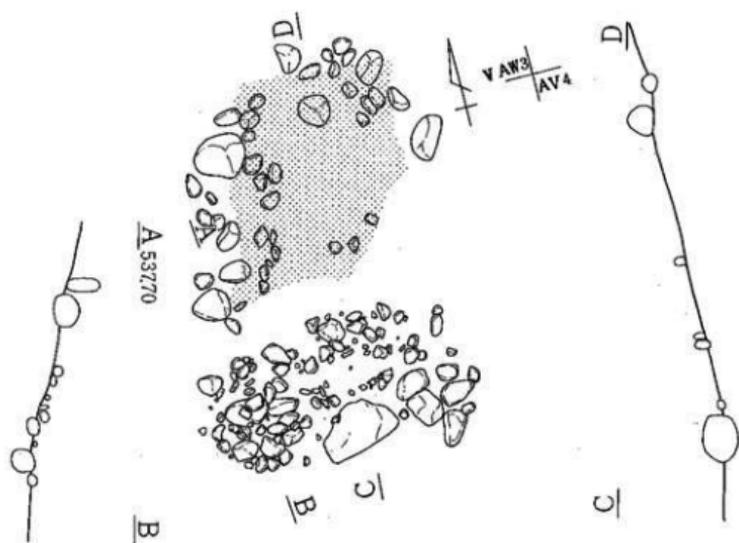
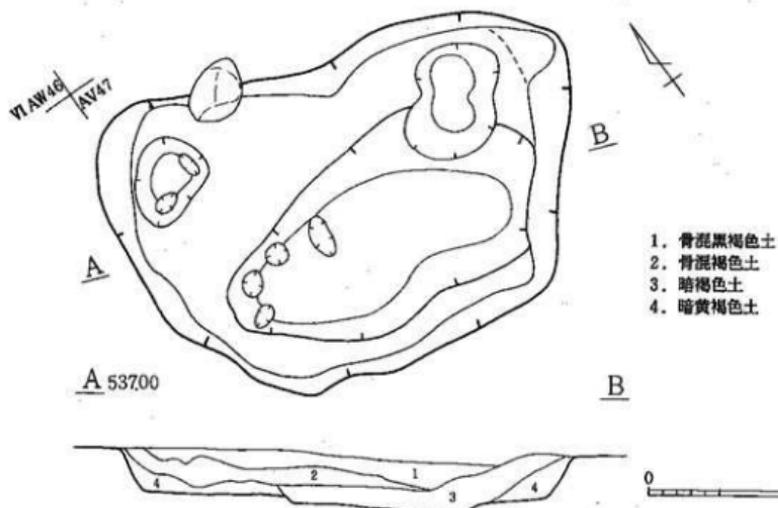
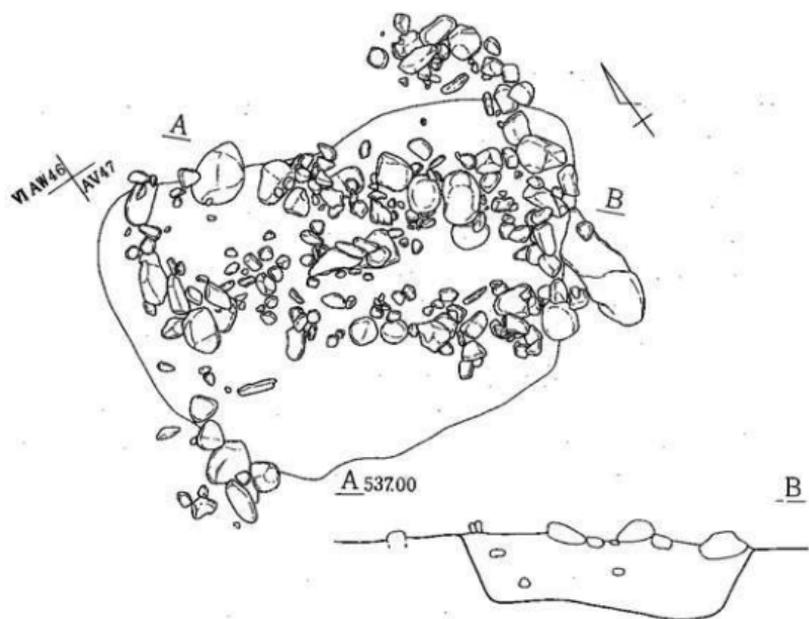


插图34 配石墓6

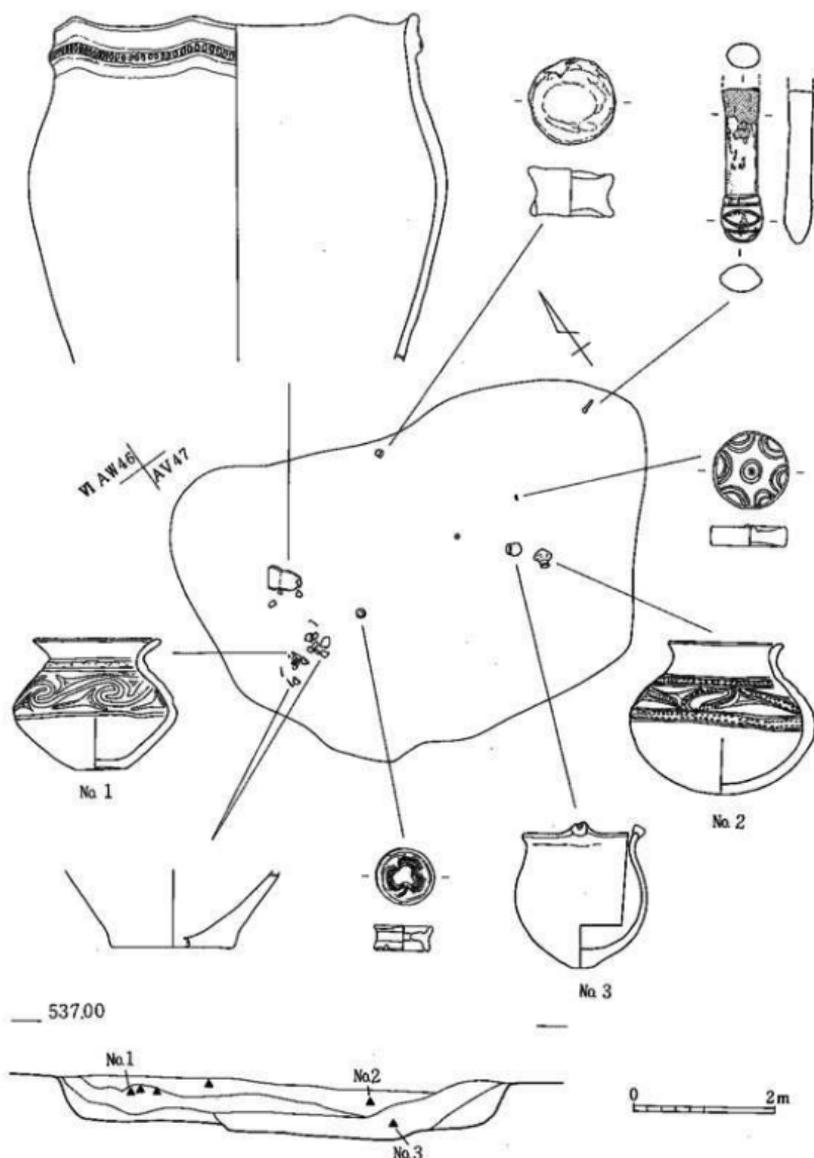
⑧配石墓9 (挿図35・36、第1図～第2図4・8～12、第7図4～10)

配石7、配石墓1・3・4・11、土坑65・156・169の間で検出された。蓋石状部分は3.3×1.6mの長方形に分布しており、長軸方向はN55.5°Wを示す。礫は10～40cm大を測るが、大形の礫が主体で、焼けた礫が多い。掘り方は平面不整形を呈し、規模3.4×2.25m、長軸方向はN73°Wで蓋石状部分の方向とずれがある。歪みがあることから、同位置で重複があった可能性がある。深さ約50cmを測り、埋土は4層に分層される。1層は焼骨の多く混じった黒褐色土、2層はやはり多量の焼骨の入る褐色土、3層暗褐色土と4層暗黄褐色土はわずかに焼骨がある程度である。1・2層層界付近には蓋石状部分を構成する礫より小振りな礫が分布する。焼骨は2mmの篩で選別したもので約32,830g、容積約46,500ccを測る。大半が細片で種属や部位等不明であるが、頭蓋・長管骨・肋骨・椎骨・指骨・歯等人骨がある。今後詳細な分析が必要であるが、ほとんどが人骨であろう。人骨とすれば、福島県霊山根古厓遺跡で成人1体分の焼骨が2kg弱と試算されているので(馬場他 1986)、少なくとも17体以上の焼人骨に相当すると考えられる。細片であるが、変形は見られず、遺骸が晒されて腰等の軟部が脱落した後に焼かれたものと思われる。しかし、指骨といった末端の骨が含まれていることは、そうした状況と矛盾する。焼かれた温度は、歯の歯冠の部分が失われているので800℃程と考えられる(同上)。少なくとも2個体以上の下顎骨に、2C型の抜歯が認められる。一部の焼骨に水色の変色が見られ、原因は不明であるが、保存状態に起因するものと考えている。また、炭は微量ながら5g出土している。蓋石状部分の下部で高さ10cm程度の壺が3個体(第1図1～3)出土しており、内部に焼骨が入っていた。第1図1は、深鉢(第1図7)の内部にやや斜位の入れ子状で検出され、焼骨52gが入っていた。2・3は横倒しで検出され、2内部には20gの焼骨が含まれていた。検出状況から、小型壺は副葬品とは考え難く、土器棺と考えられる。他に、小型壺破片が1片あり(第1図4)、4基の土器棺が確認された。

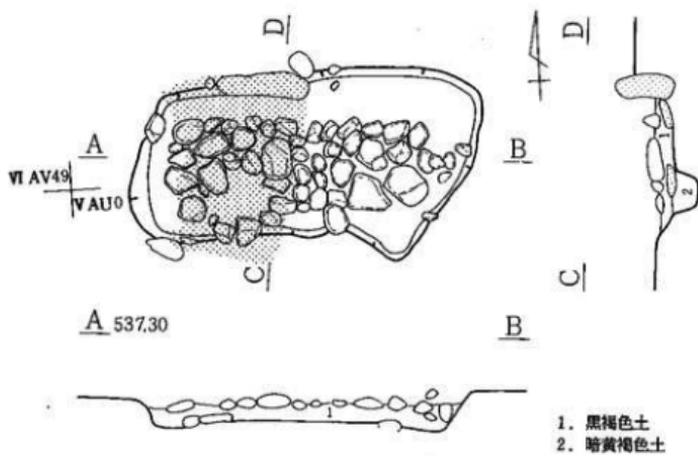
出土遺物は小型壺(第1図1～4)、蓋(5)、深鉢(6・第2図1)、石剣(第3図1～3)、定角式磨製石斧(第2図2・3)、磨製石斧(4)、石錐(第2図8)、土製耳飾り(第7図4～10)、丸小玉(第2図9～12)等がある。第1図1は、やや太めの沈線で入組文と三叉文が描かれ、頸部の平行沈線間は刺突後磨り消される。2は三叉文が入組文で連結され、沈線間に刺突が施される。いずれも、内外面丁寧にミガキが施される。3は口縁部に1単位の突起が付される。4は頸部凸帯上に刺突が施され、内面はヘケナアされるが接合痕をとどめる。蓋(5)は粗い作りで、手捏ねに近い。6は口縁部7単位の小波状を呈すると考えられ、刺突の施される凸帯も波状を呈する。7は二次焼成を受けていると考えられる脆い土器で、網代底である。定角式磨製石斧(第2図2)は焼けて白色に変色し、細かい亀裂が残る筋も走る。磨製石斧(4)は緑色岩製で、敲打痕が顕著に残る。土製耳飾り(第7図9・10)は二次焼成を受けている。丸小玉は翡翠・蛇紋岩製で、漏斗状に穿孔されており、二次焼成を受けているものがある。石剣・定角式磨製石斧・磨製石斧・石錐・土製耳飾り・丸小玉は副葬品と考えられるが、二次焼成を受けているもの



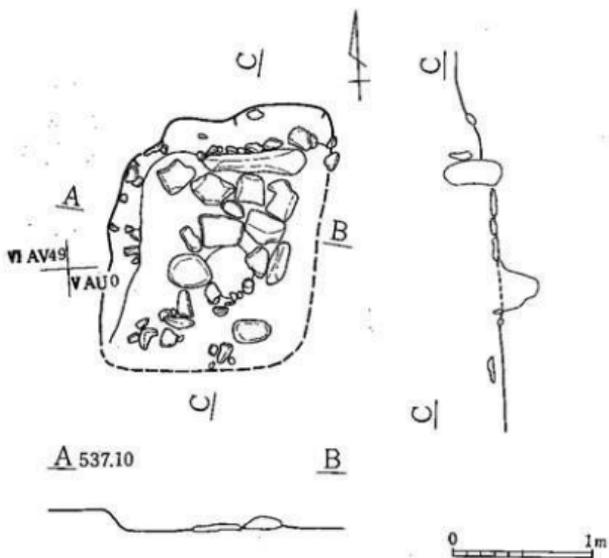
挿図35 配石墓9



挿圖36 配石墓9遺物分布状況



配石墓10



配石墓12

插图37 配石墓10·12

とそうでないものがあり、前者が一次葬に際しての副葬品であるのに対し、後者は二次葬に関わる副葬品であろう。

小型甕の土器棺や多量の焼骨から再葬墓（二次葬施設）であり、出土遺物から縄文時代晩期前葉（大洞BC式併行期）に比定される。

⑨配石墓10（挿図37）

配石墓1・2・6の間、配石墓12の上部にほぼ接して検出された。規模1.85×0.65mの不整形長方形を呈し、長軸方向N87.5°Wを示す。10～40cm大の、厚さ10cm程の扁平な礫で構築しており、43個用いられている。配石墓12の掘り方まで一気に掘り下げたため、東側半分の敷石下の掘り方底面の状態は不明である。いずれにしても、本址は整地のための削り込みを伴うことは確実で、側壁の抜き取り等の痕跡がないことから、敷石のみの配石墓である。敷石上部の埋土は、黒褐色土である。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

本址と配石墓11は、配石墓1・3～7・12と比較して長辺が倍近く長く、伸展葬と屈葬の相違を示すと考えられる。
(馬場保之)

⑩配石墓11（挿図38）

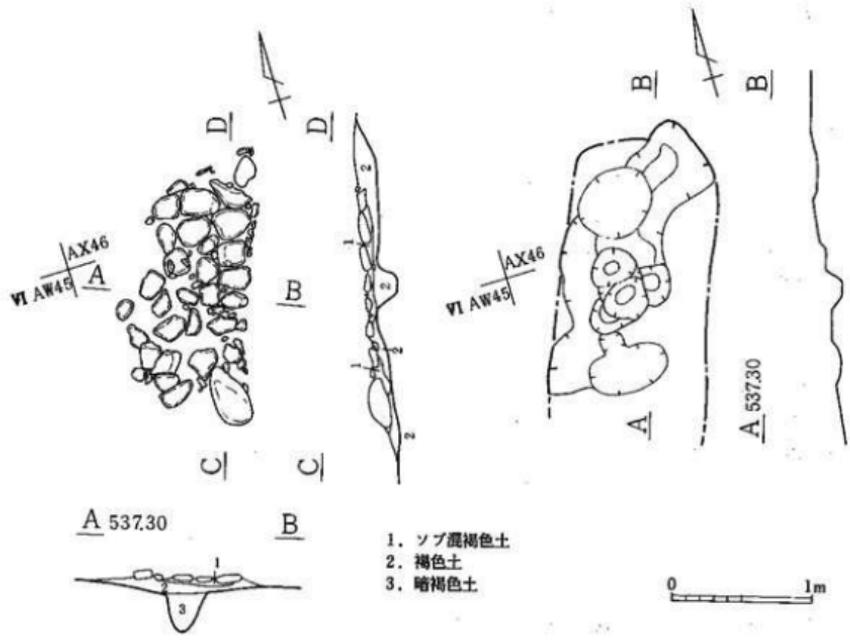
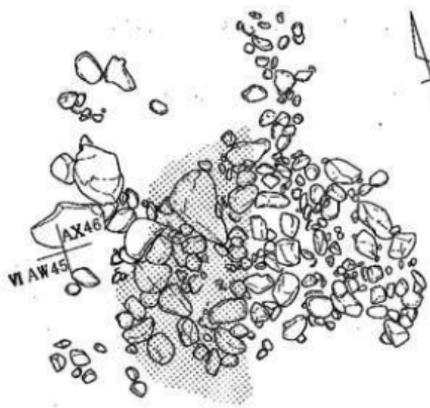
調査範囲の北部、西端のVI区AW46グリットに検出した。ほとんどの配石墓が確認された斜面下に本址もあり、押し出された石を取り除いた時点で、石敷が把握された。南西部は乱れているが、長方形に並べられている。規模は1.6×0.75mを測る。長軸方向はN19°Eを示す。使われている扁平の自然石は、大きさ厚さともややばらつきがあるが、長径40～50cmのものが多く、厚さは10cm程である。北東隅には大きな石の外側に5～10cmの石を据えており、全体に覆っていた可能性がある。石敷上部に掘り方があったかは不明であるが、石を据えるための掘り込みが、深さ4～8cm確認できた。この掘り方の規模は1.8×1.05mである。また、石敷の中央部となる位置には、深さ15cm程の穴が2個、32cm前後の穴が2個切りあっており、深い穴の北側のものには、覆土中に炭が含まれていた。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

(佐合英治)

⑪配石墓12（挿図37）

調査区北西側斜面下から、配石墓10の構成礫を外した段階で検出した。付近に配石墓2が近接する。配石墓10とは主軸が90度異なり、ほぼ真北を向く。配石の周囲は1.7×1.5m、深さ20cm



挿図38 配石墓11

ほどの長方形に掘りくぼめられ、その内部に径30cmほどの平たい礫12個ほど1.3×0.8mの長方形に配される。また、配石北端には60cmほどの平たい礫が立てられていた。配石ほぼ中央には径30cmの穴がみられるが、時期が異なると思われる。配石下部には何ら施設は見られなかった。

遺物はなく、骨片等も検出されなかった。

遺構の所属時期は、周囲の遺構との関係から配石墓10より古いのが、詳細は不明である。

(下平博行)

(7) 土墳墓 (挿図29・30)

調査区の北側斜面縁辺部に検出された、埋土に焼骨を含む土坑を土墳墓として一括把握した。耕土を剥いだところで、一面に焼骨の混じった黒褐色土が分布し、その層の下面で検出された。焼骨の分布範囲は土墳墓の外側にも広がっており、時期を異にすると考えられる。

①土墳墓1 (挿図39)

方形柱列址1、土墳墓6・9・10、竪穴4の間で検出された。不整楕円形を呈し、規模1.05×0.8m、深さ10cmを測る。長軸方向N71°Eを示す。埋土漆黒土で、中から焼骨が3g出土した。出土遺物は僅少で、無文の粗製深鉢、木葉痕をもつ底部がある。

時期の判る遺物がなく、詳細時期は不明であるが、縄文時代後・晩期の遺構である。

②土墳墓2 (挿図39)

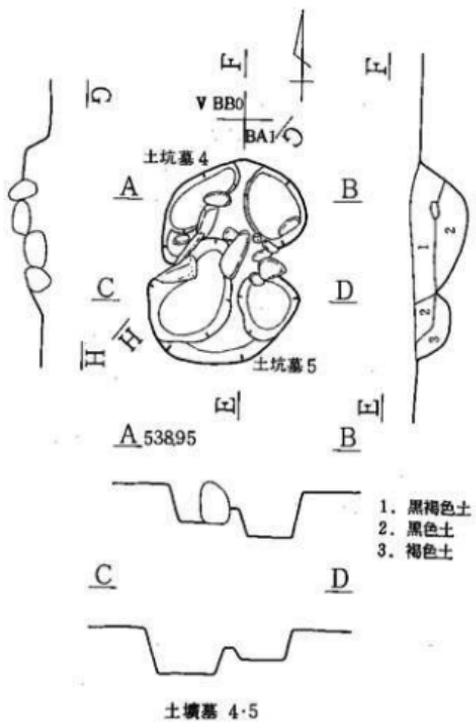
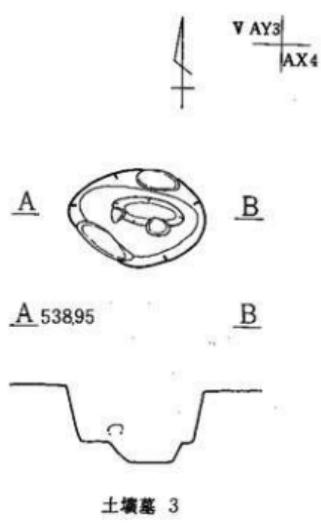
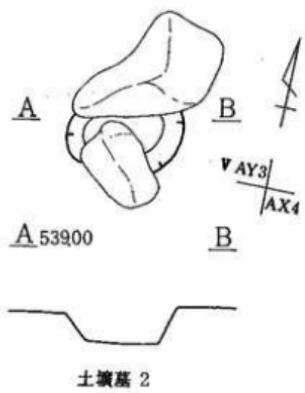
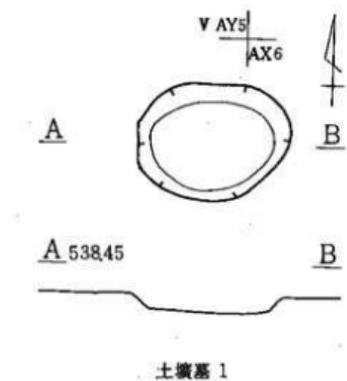
土墳墓3・6・8～13の間で検出された。地山の礫の間に掘り込まれており、不整楕円形を呈すると思われる。規模0.85×(0.6)m、深さ30cmを測り、長軸方向N60°Eを示す。西壁がやや緩やかな立ち上がりを示す。埋土黒色土混暗褐色土で、中から焼骨92g、炭が微量出土した。

出土遺物は僅少で、無文の粗製深鉢小片、土製耳飾りがある。土製耳飾りは無文の、いわゆる日形耳飾である。

詳細時期等は不明であるが、縄文時代後・晩期と考えられる。

③土墳墓3 (挿図39)

配石墓5、土墳墓2・7・8・12・13の間で検出された。不整楕円形を呈し、内面が一段深くなる。規模0.95×0.7m、深さ52cmを測り、長軸方向N87°Wを示す。壁はほぼ直立する。埋土暗褐色土で、中から焼骨が169g出土した。



挿図39 土墳基 1~5

出土遺物は僅少で、磨消縄文、羽状沈線文が施される土器がある。

縄文時代後期後半に比定される土壌墓である。

④土壌墓4 (押図39)

土壌墓11・12・14・15、土坑54・61の間で検出された。土壌墓5と重複し、断面観察の結果本址が新しいと判断された。不整楕円形を呈し、底面は平坦でない。規模1.05×0.7m、深さ30cmを測り、長軸方向N70°Eを示す。壁はやや急な立ち上がりを示す。埋土上層は黒褐色土、下層が黒色土である。土壌墓5と重複する位置の西側に平石が立っており、その両側に円礫が側壁状に列をなしている。土壌墓5を含めて考えると1基の配石墓と捉えることも可能であるが、掘り方の形態や埋土から、2基の土壌墓の重複と判断した。中から焼骨1gが出土した。

出土遺物には対弧線が施されるもの、粗製無文の深鉢がある。

出土遺物から、時期は縄文時代後期後半と考えられる。

⑤土壌墓5 (押図39)

土壌墓4に切られて検出された。土壌墓4と同様、不整楕円形を呈し、底面は平坦でない。規模1.05×0.75m、深さ30cmを測り、長軸方向N78°Eを示す。壁はやや急な立ち上がりを示す。埋土上層は黒色土、下層が褐色土である。中から焼骨4gが出土した。

出土遺物は比較的多く、隆帯上に刻みの施される浅鉢、磨消縄文、羽状沈線文が施される土器、口縁部波状を呈する深鉢がある。また、分銅形打製石斧・横刃型石器・剥片がある。

出土遺物から、時期は縄文時代後期後半と考えられる。

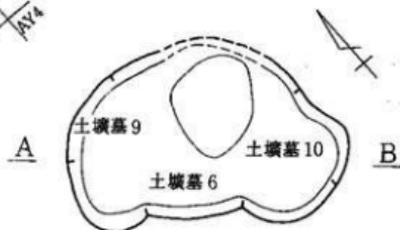
⑥土壌墓6 (押図40)

方形柱列址1を切り、土壌墓1・2・7・8の間で検出された。土壌墓9・10と重複するが、新旧関係は不明である。方形柱列址1との切り合いは、断面観察の結果本址が新しいと判断された。重複があるが、不整楕円形を呈すると思われる。規模(1.3)×1.25m、深さ25cmを測り、長軸方向N47°Wを示す。埋土漆黒土である。中から焼骨37gが出土した。

出土遺物には、貼り着される台付鉢台部がある。

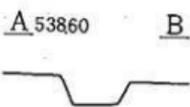
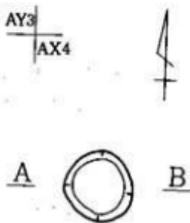
本址の所属時期は、出土遺物から縄文時代後期後半と考えられる。

V BA3
AY4



土墳墓 6·9·10

V AY3
AX4



土墳墓 7

V AY3
AX4

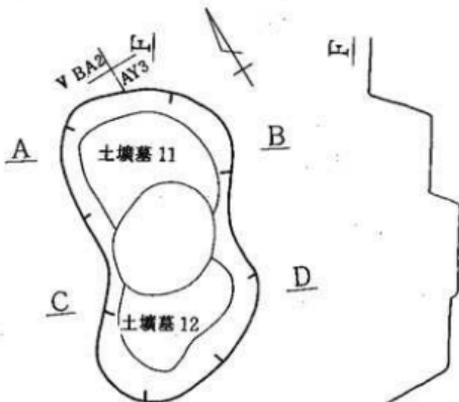


A 53895 B



土墳墓 8

V BA2
AY3



A 53880 B E

C D



土墳墓 11·12

挿圖40 土墳墓 6~12



⑦土墳墓7 (挿図40)

土墳墓1・3・6・8～10の間で検出された。不整形形を呈する。規模は0.5×0.45mと小さく、深さ20cmを測る。埋土暗褐色土である。中から焼骨17gが出土した。

出土遺物はない。詳細時期は不明である。

⑧土墳墓8 (挿図40)

土墳墓2・3・6・7・9・10の間で検出された。地山礫にかかるとは思われる。規模0.5×0.4m、深さ25cmを測る。埋土暗褐色土である。中から焼骨9g、炭1gが出土した。

出土遺物は粗製無文の深鉢がある。

本址の詳細時期不明であり、縄文時代後・晩期と考えられる。

⑨土墳墓9 (挿図40)

土墳墓2・6・8・11の間で検出された。土墳墓6と重複する。重複のため詳細は不明であるが、不整形形を呈すると思われる。規模0.95×(0.7)m、深さ45cmを測り、長軸方向N37°Eを示す。埋土漆黒土である。中から焼骨77gが出土した。

出土遺物には、浅鉢、羽状沈線文の施される深鉢、粗製無文の深鉢がある。

本址の所属時期は、出土遺物から縄文時代後期後半と考えられる。

⑩土墳墓10 (挿図40)

土墳墓1・6～8の間で、土墳墓6と重複して検出された。不整形形を呈すると思われる土墳墓で、規模0.9×(0.65)m、深さ15cmを測り、長軸方向N77°Eを示す。埋土漆黒土である。

出土遺物は粗製無文の深鉢があり、時期は縄文時代後・晩期と考えられる。

⑪土墳墓11 (挿図40)

土墳墓2・4・5・14の間で検出された。方形柱列址1、土墳墓12と重複するが、新旧関係は把握していない。不整形形を呈すると思われる。規模1.2×(0.95)m、深さ41cmを測り、長軸方向N32.5°Wを示す。埋土暗褐色土である。壁はやや緩やかな立ち上がりを示す。中から僅かに焼骨が出土した。

出土遺物は、口唇部に刻み、外面に羽状沈線と思われる斜位の沈線文が施される小破片がある。

本址の所属時期は、出土遺物から縄文時代後期後半と考えられる。

⑫土墳墓12 (挿図40)

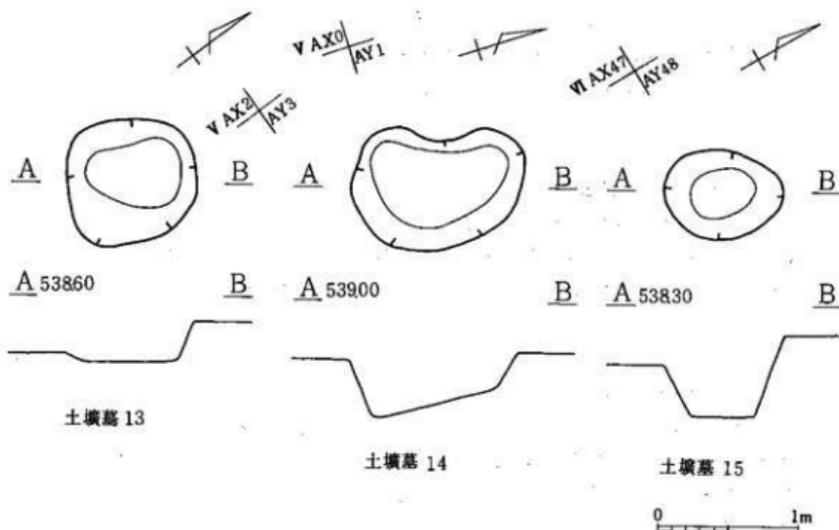
土墳墓2・3・5・13・14の間で検出された。方形柱列址1、土墳墓11と重複する。不整楕円形を呈すると思われる。規模(1.15)×1.0m、深さ43cmを測り、長軸方向N30°Eを示す。埋土暗褐色土である。西壁がやや急であるのに対し、東壁はやや緩やかな立ち上がりを示す。中から38gの焼骨と微量の炭が出土した。

出土遺物は、口唇部に刻みのある浅鉢、磨消縄文施文される厚手の浅鉢、粗製無文の深鉢がある。

出土遺物から、縄文時代後期後半に比定される。

⑬土墳墓13 (挿図41)

配石墓5・6、土墳墓2・3・12・14の間で検出された。不整形形を呈する土墳墓で、規模



挿図41 土墳墓13~15

0.95×0.9m、深さ15cmを測る。埋土暗褐色土である。壁は片上がりである。中から焼骨12gが出土した。

出土遺物は、羽状沈線文の施される鉢、対弧文施文の鉢がある。
本址は、出土遺物から縄文時代後期後半に属すると考えられる。

⑭土墳墓14(挿図41)

配石墓7、土墳墓5・11～13の間で検出された。不整形を呈する土墳墓である。規模1.2×0.9m、深さ20cmを測り、長軸方向N2.5°Wを示す。埋土暗褐色土である。底面は平坦でなく、北側が高い。壁の立ち上がりの状態は、やや緩やかである。中から32gの焼骨が出土した。

出土遺物は、内外面がよく研磨された浅鉢、羽状沈線の施される深鉢、粗製無文の深鉢がある。出土遺物から、縄文時代後期後半に比定される。

⑮土墳墓15(挿図41)

配石墓1・3・7、土墳墓5・14の間で検出された。不整楕円形を呈する土墳墓で、規模0.8×0.65m、深さ30cmを測る。埋土漆黒土である。壁は北側がやや急な立ち上がりを示す。中から焼骨28gが出土した。

出土遺物は、口縁部外縁に刺突・以下沈線が施される深鉢、粗製無文の深鉢がある。
本址の時期は、縄文時代後期後半と考えられる。(馬場保之)

(8) 土坑

ここでは、配石址1下部から検出された、炭化した堅果類を含む土坑について触れ、他の土坑(他地点を含む)は表に一括した(表1～9)。

①土坑63(挿図20)

配石址1の東側から配石を外した段階で検出した。土坑146に近接する。1.0×0.8mの楕円形を呈し、深さは42cmを測る。底面はほぼ平坦になり、壁は全体的に急角度である。黒色の埋土からは少量の堅果類・炭化物・縄文後期の土器片が出土した。

堅果類の存在から貯蔵施設としての性格が考えられる。

②土坑101(挿図20)

配石址1の南東から配石を外した段階で検出した。2×1.4mの楕円形で南側は不明瞭であった。深さは68cmで、底面はほぼ平坦である。壁は全体的に急角度である。黒色の埋土からは、検出面から遺構底面まで多くの堅果類が縄文後期の土器片と共に出土した。

堅果類の存在から貯蔵施設としての性格が考えられる。

③土坑102(挿図20)

配石址1内の北東側、配石址1の床面下で検出した。土坑の北東壁が一部配石の下部に及んでいる。2.1×1.8mの不整形円で、深さは41cmを測る。土坑南西側は底面から急角度に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。黒色の埋土からは、検出面から遺構底面まで、堅果類をはじめとする炭化物、骨片、縄文後期の土器片などが多く出土した。

堅果類等の存在から貯蔵施設としての性格が考えられる。

④土坑103(挿図20)

配石址1内の南側床面下で検出した。1.8×1.3mの不整形楕円形で、土坑160に近接する。深さは57cmを測り、底面中央に長径約60cmの穴がある他、壁際にも直径約40cm程の穴が2個見られる。黒色の埋土からは、検出面から遺構底面まで、少量の堅果類が縄文後期の土器片と共に出土した。

堅果類の存在から貯蔵施設としての性格が考えられる。

⑤土坑104(挿図20)

配石址1内の南東側床面下で検出した。土坑141を切り、土坑101に切られている。1.5×0.7mの不整形楕円形を呈し、深さは49cmを測る。底面はほぼ平坦になり、北側は緩やかに立ち上がる。黒色の埋土上面から土製耳飾り・縄文後期の土器片・堅果類が、底面近くからは堅果類が多量に出土した。

堅果類の存在から貯蔵施設としての性格が考えられる。

⑥土坑105(挿図20)

配石址1内の東側床面下で検出した。土坑146に近接する。0.8×0.5mの不整形楕円形を呈し、深さは13cmと浅い。底面はほぼ平坦になり、壁は緩やかに立ち上がる。黒色の埋土から土製耳飾り・縄文後期の土器片・堅果類がわずかに出土した。

堅果類が出土しているものの、他の土坑に比べ規模が小さい点などからその性格は不明である。

⑦土坑106(挿図20)

配石址1内の南側床面下で検出した。土坑138を切り、土坑107に近接する。2.0×2.0mの不整形を呈し、深さは50cmを測り、土坑東側に段がありテラス状になる。テラスには長径約40cmの穴がある。あるいは他の土坑との重複の可能性があるが、調査時には判断できなかった。底面は緩やかな丸みを帯び、壁は急角度に立ち上がる。黒色の埋土からは検出面から底面にかけて堅果類・縄文後期の土器片が出土した。

堅果類の存在から貯蔵施設としての性格が考えられる。

⑧土坑107(挿図20)

配石址1内の南側床面下で検出した。土坑138を切り、土坑106に近接する。また土坑南側は一部配石の下にかかる。1.2×1.0mの不整楕円形を呈し、深さは約1mである。土坑東側には長径約60cmの楕円形の穴が見られる。底面は緩やかな丸みを帯び、壁は北側で緩やかに、南側は急角度に立ち上がる。黒色の埋土からは検出面から堅果類が縄文後期の土器片と共に出土し、底面からは堅果類が特に多量に出土した。

堅果類の存在から貯蔵施設としての性格が考えられる。

⑨土坑108(挿図20)

配石址1内のほぼ中央床面下で検出した。0.8×0.6mの不整楕円形を呈し、深さは約30cmを測る。底面は、ほぼ平坦になり、壁は急角度に立ち上がる。黒色の埋土からは、ごく少量の堅果類が縄文後期の土器片と共に出土した。

堅果類が僅かしか見られず、土坑の規模も小さい点からその性格は不明である。

⑩土坑138(挿図20)

配石址1内の北側床面下で検出した。土坑106・107・141に切られ、土坑101に近接する。2.9×1.1mの不整楕円形を呈すると思われ、深さは44cmを測る。底面の形状は切り合い関係から不明である。壁は北側で緩やかに立ち上がる。黒色の埋土からは、検出面から土坑内部にかけて堅果類をはじめとする炭化物・縄文後期の土器片が出土した。

堅果類の存在から貯蔵施設としての性格が考えられる。

⑪土坑141(押図20)

配石址1内の北側床面下で検出した。土坑104・101に切られ、土坑138を切る。0.8×0.8mの楕円形を呈すると思われ、深さは31cmを測る。底面はほぼ平坦になり、壁は急角度に立ち上がる。黒色の埋土からは堅果類・縄文後期の土器片が少量出土した。

堅果類の存在から貯蔵施設としての性格が考えられる。

⑫土坑146(押図20)

配石址1内の東側から配石を外した段階で検出した。1.4×1.0mの楕円形を呈し、深さは64cmを測る。底面はほぼ平坦になり、壁は東側で緩やかに、西側は急角度に立ち上がる。黒色の埋土からは堅果類・縄文後期の土器片が少量出土した。

堅果類の存在から貯蔵施設としての性格が考えられる。

⑬土坑152(押図20)

配石址1内の北西側から配石を外した段階で検出した。土坑160に切られている。1.0×0.6mの楕円形を呈すると思われ、深さは27cmを測る。底面はほぼ平坦になり、壁は北側で緩やかに立ち上がる。黒色の埋土からは縄文後期の土器片が少量出土した。

堅果類も出土しておらず、遺物も少なく土坑の性格は不明である。

⑭土坑160(押図20)

配石址1内の北西側から配石を外した段階で検出した。土坑152を切り、土坑103に近接する。3.2×2.4mの不整形を呈し、深さは79cmを測る。底面ほぼ中央がテラス状に一段高くなり、土坑底面を分割するような形態になる。壁は西側で緩やかに、東側は急角度に立ち上がる。黒色の埋土からは少量の堅果類・炭化物・縄文中期・後期の土器片が出土した。

堅果類の存在から貯蔵施設としての性格が考えられる。

(下平博行)

(9) 竪穴

①竪穴4 (挿図42)

方形柱列址1の東側に重複して検出された。斜面にかかり、南側は把握していない。確認面から底面まで浅く、壁の立ち上がりの状態は不明である。底面はほぼ傾斜に沿って平坦である。特に、焼けたり硬い部分はなく、礫等も確認できなかった。埋土暗褐色土で、焼土・炭等の混入はない。

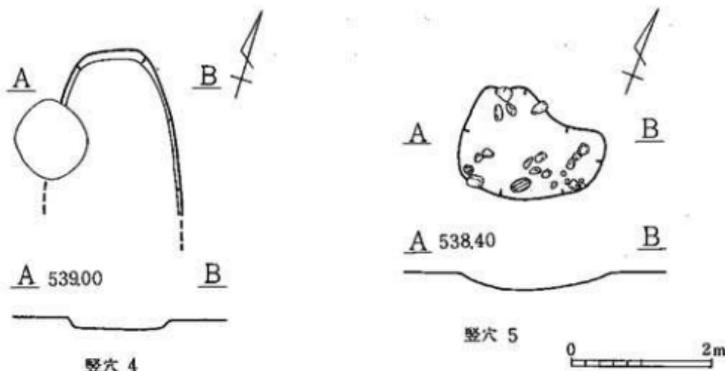
出土遺物は、羽状沈線の施される鉢、波状口縁の波頂部から垂下する隆帯に押圧が施される深鉢等がある。

出土遺物から、縄文時代後期末に属すると考えられ、方形柱列址1より新しいといえる。

②竪穴5 (挿図29・42)

土墳墓1の南側に検出された。斜面にかかり、十分に形態等把握していないが、不整方ないし楕円形を呈するものと考えられる。規模2.5×2mを測り、断面浅い皿状を呈する。埋土黒褐色土である。焼けた礫(スクリーン・トーン貼付部分)等が、底面からやや浮いた状態で、しかも周辺に寄って検出された。礫は土石流を構成する礫と差がなく、20~30cm程度の大きさである。焼土・炭・灰・焼骨等はなく、また、底面も焼けていない。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明であるが、焼けた礫が検出されたことから、あるいは周辺に分布する配石墓との関連で遺骸の処理に関わる施設の可能性も考えられよう。



挿図42 竪穴4・5

00 溝址

①溝址5 (押図43・44)

調査区の北側から東側にかけて検出された。土坑181付近から掘立柱建物址14付近にかけては削平を受けて遺存していない。蛇行しており、調査区北端からN43° W、N74° W、N13° W、N34° E、N65° W、N68° Eと流路を変える。総延長 86mを測り、幅 2.4~4.4m、深さは最大60cm程度である。北側は壁が緩やかで底面もやや丸みを帯びた、いわば断面丸底状を呈するのに対し、東側はやや壁が急で、底面は平坦に近い。上層は黒色土で20~100cm程度の礫が入る。下層は灰黒色の砂利層である。形態等から自然流路と考えられる。

出土遺物は、縄文時代後・晩期の土器や石剣等の石器の他、須恵器甕・坏、灰釉陶器瓶・碗、陶器壺等がある。前者の出土量は圧倒的に多いが、埋土下層からは後者の出土がみられる。

遺物の出土状況等から、平安時代後期から中世にかけての遺構と考えられる。

01 溝状址

①溝状址11 (押図45)

調査区の中央西側、調査区際で検出された。黄白色砂を剥いだところで確認され、埋土は黄白色砂である。土坑112・123を切る。長さ2.8m、幅0.5m、深さ約20cmを測り、長軸方向はN40° Wを示す。内部にP1~P3が掘り込まれており、やはり埋土は黄白色砂である。規模30~50cmのおおむね不整形円形を呈し、深さは30~60cmを測る。南西側に同じ埋土のP4~P6があり、調査区外に同様の柱穴が存在する可能性もある。これらの配列から、竪穴住居址の周溝と柱穴と捉えることも可能である。

出土遺物には、口縁部波状を呈し沈線が施される深鉢、磨製石斧の未製品がある。

出土土器は縄文時代後期後半に比定されるが、埋土から晩期前葉の洪水直前まで機能していたと考えられ、所属時期も後者に求められよう。

②溝状址12 (押図20)

調査区の中央、配石址1北側の礫の下位、褐色土2下面で検出された。検出時に単一の遺構と把握し、遺物の取り上げも同じくしており、一括して溝状址としておく。中央が膨らみかつ深い形態からすると、中央は土坑が重複しているといえる。規模4.2×1.0m、深さ30cm程度で、中央は65cmと深くなる。長軸方向はN85° Eを示す。壁は急な立ち上がりを示し、底面は平坦である。埋土は黒色土で炭化物が多量に混じる。状況からすると、本址の中央部が、配石址1の下位で検出された炭化した堅果類が多量に入る土坑群と関連するものと考えられる。

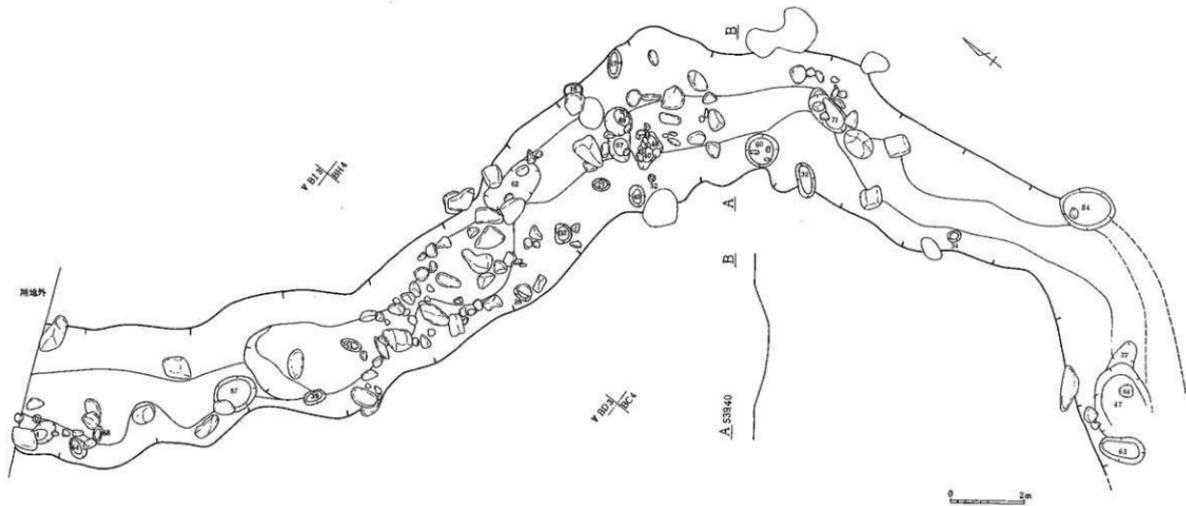


插图43 遗址5

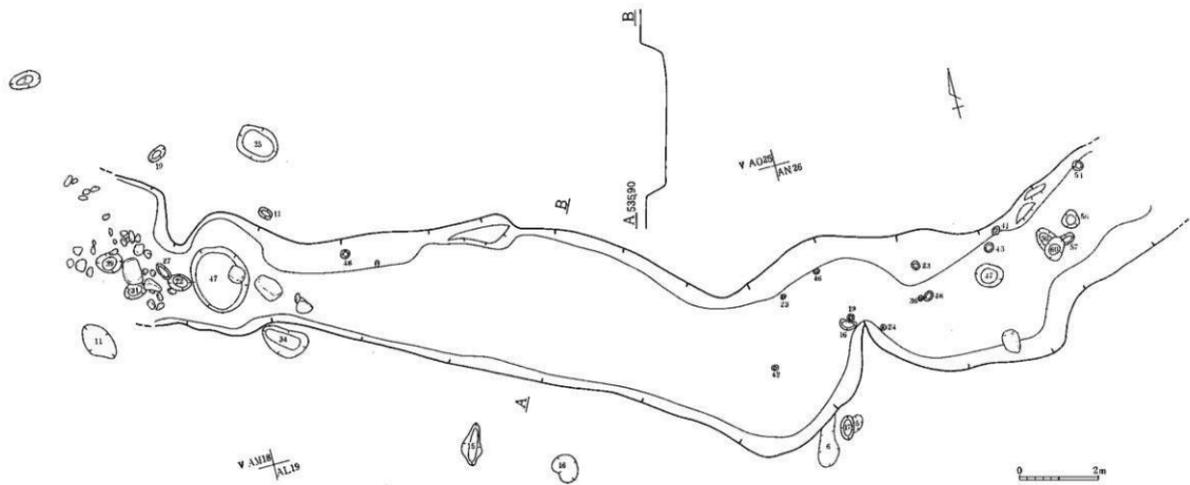
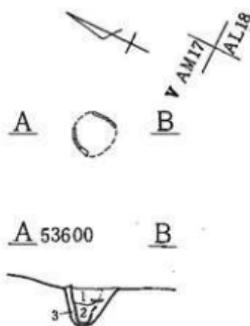


图44 遗址5



樺図45 溝状址11



埋設土器 2

1. 黒色土
2. 暗黄褐色土
3. 黒褐色土

樺図46 埋設土器 2

(12) 埋設土器

①埋設土器 2 (樺図46)

調査区の東側、漆黒土下面で検出した。掘立柱建物址14と重複するが、柱穴との切り合いはない。規模35cm・深さ30cm程度の掘り方に、正位に据えられていた。掘り方埋土は黒褐色土、土器埋土は黒色土・暗黄褐色土である。

埋設された土器は、粗製無文の深鉢で、胴径30cm、底径8cm、残存高32cm、器厚5mmを測る。粘土帯積み上げの凹凸が残り、いわゆる外頰の接合痕が看取される。外面はほぼ縦位、内面横位のナデ調整が施され、内面下半に炭化物が厚く付着している。底面に網代等の痕跡はなく、胎土に粗大な石英等砂粒を多く含む。

詳細時期は不明であるが、縄文時代後期後半から晩期前葉に属すると考えられる。検出状況から日常生活に供された深鉢が転用された土器棺と考えられ、立位に据えられることは同時期の近畿地方の土器棺の様相と同じくするものといえる。

(13) その他

①焼土(樺図47、第2図15)

調査区の中央、配石址1の周辺で焼土19ヶ所を検出した。検出層位は大部分が褐色土上面および中で、褐色土2上面が1ヶ所ある。検出状況から配石址1よりも古い時期のもの

と考えられ、焼土の分布範囲に焼骨の分布が重なることから、祭祀等に伴うものと考えられる。
IV A S 49褐色土上面検出の焼土中から土製勾玉が1点出土している。

②柱穴（押図48～64）

調査区中央および北側に分布する。褐色土2（押図51～53）および黒色土上面（押図54～56）で検出された規模の大きなものうち遺物出土がないものや、規模の小さいものを一括した。形態はまちまちである。縄文時代後期後半から終末にかけての遺構と考えられる。

04 遺構外出土遺物（押図65～85）

漆黒土・明褐色土・褐色土を中心に各層から遺物が出土している。殊に、明褐色土・褐色土からの遺物出土が多い。各層のおおまかな時期は、漆黒土が縄文時代晩期中葉、明褐色土が後期終末から晩期前葉、褐色土が後期後半と考えられる。押図65～85は配石址1を中心とした遺物の多出地点の出土状況を、遺物（土器を除く）・グリッド・層毎に示したものである。グリッド内の数字は、上段が明褐色土、中段が褐色土、下段がその他を示す。

1) 土器

遺構外出土遺物は、中型の整理箱で400箱以上にのぼる膨大な量である。土器の大半は在地系のもので、粗製無文の深鉢片が主体的で詳細時期不明である。また、在地系の土器に伴って、他地域からの影響を受けた土器や搬入された土器がある。有文土器の概要を記す。

①縄文時代後期後半

土石流直下を中心に、在地系の羽状沈線文の施される土器群が良好な遺存状態で出土している。いわゆる高井東様式の大波状口縁の深鉢（安孫子 1993）と、平口縁の精製深鉢、注口土器、吊り手土器等（押図65）がある。大波状口縁の深鉢は4単位で、口縁部に平行して2条の沈線が施され、その下位に刻みと貼付が施された隆帯が付される。波頂部および波底部から胴中部まで稲妻状沈線が施文される。他に破片であるが、発達した波頂部も多く出土している。平口縁の精製深鉢は、大きく分けて3種類の器形がある。口縁部がやや内折し直下に最大径があり胴中央に屈曲ないしわずかな膨らみをもつもの、口縁部が大きく開き胴中央にわずかな膨らみをもつもの、口縁部がやや内湾し胴部に膨らみをもたないものがある。口縁部文様帯には弧線文が施されるもの、対向する弧線文に円形押圧が組み合うもの、弧線文と瘤が施されるもの、1～3条の沈線が施文されるもの、2段の沈線がとところどころ途切れるもの、刻みの施された縦位の隆帯によ

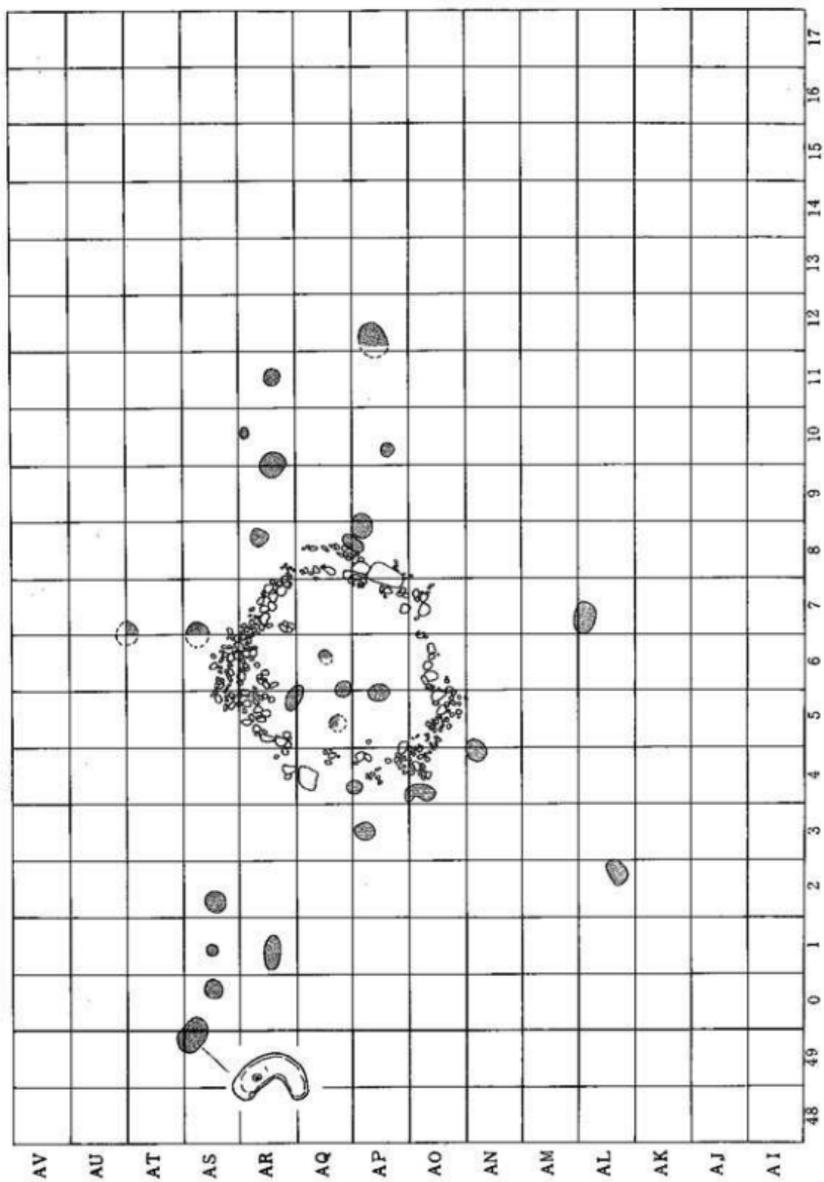


圖47 第 十

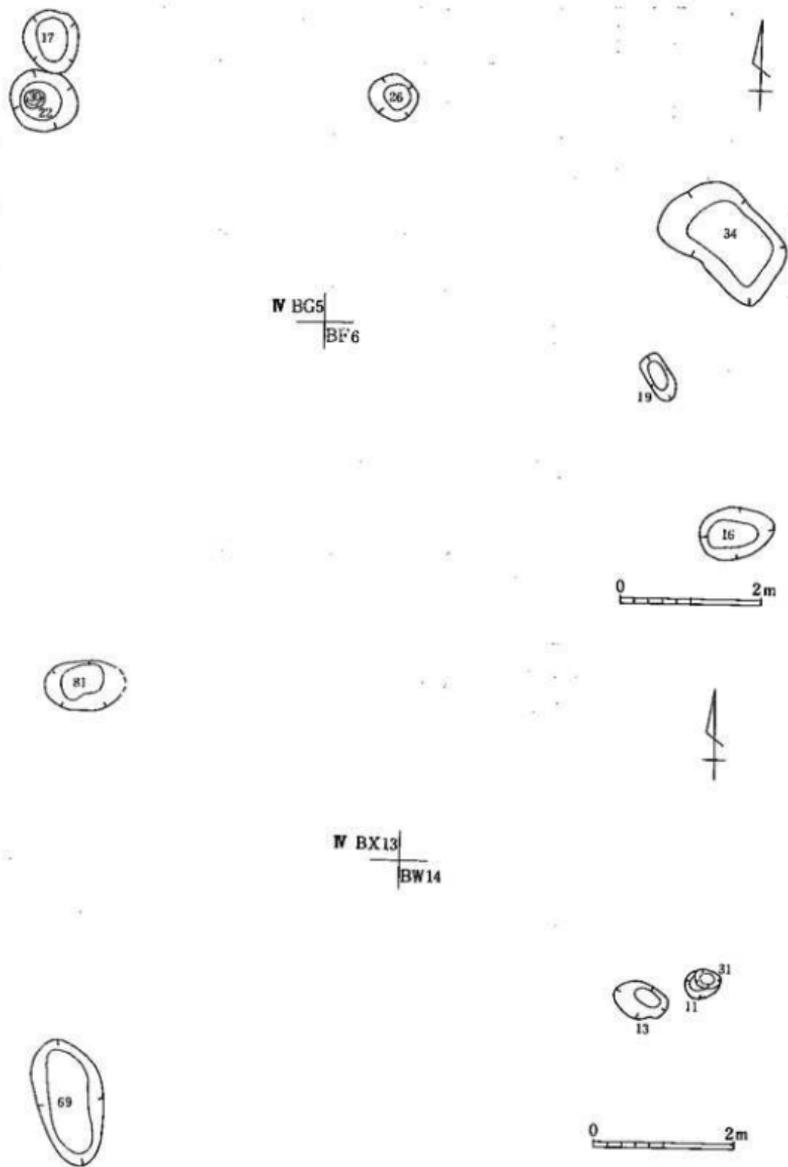


插图48 周边土坑·柱穴平面图(1)

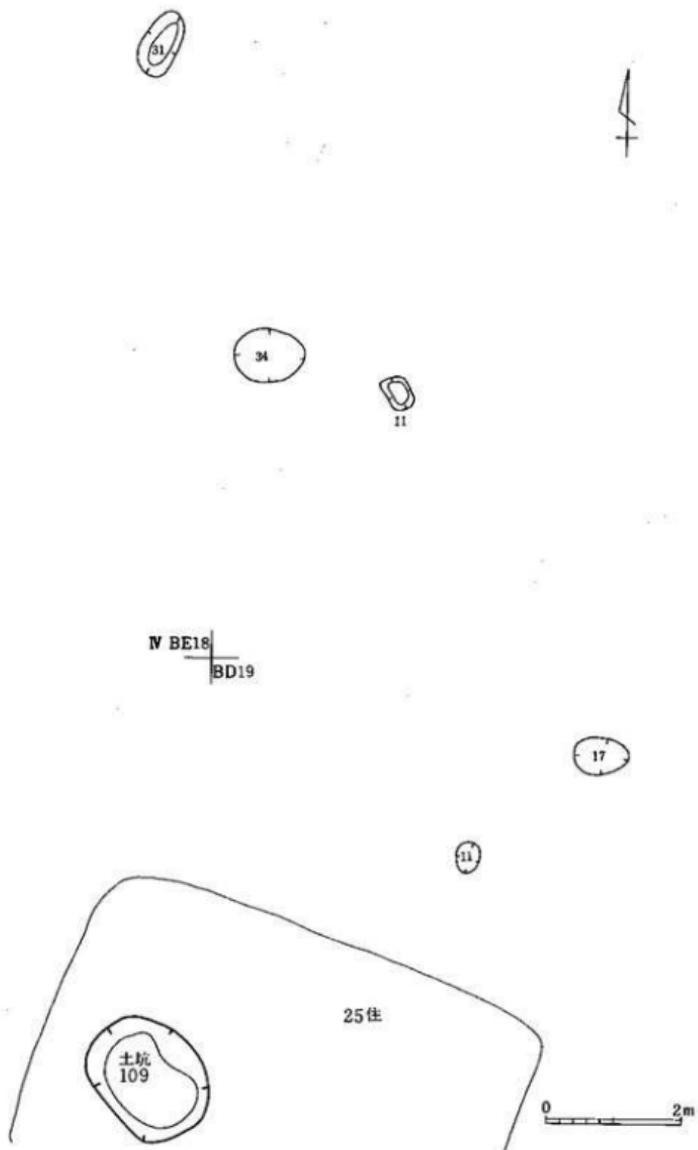


插图49 周边土坑・柱穴平面图(2)

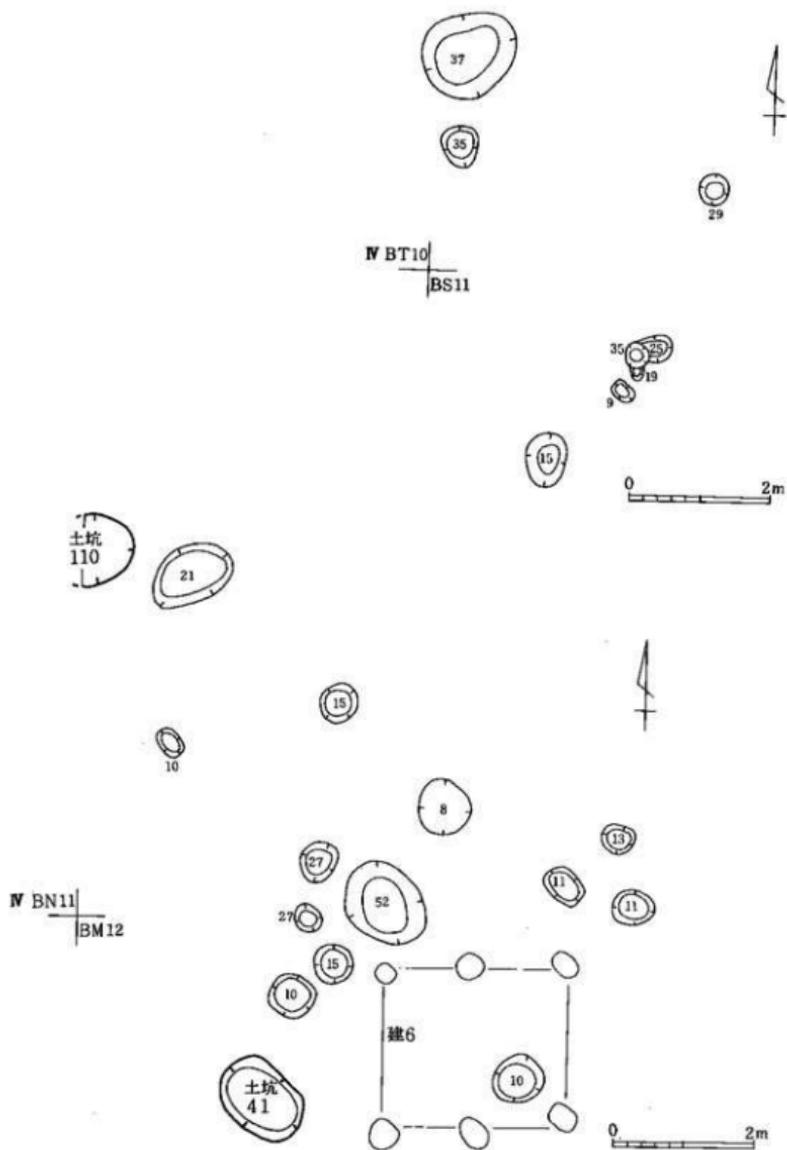
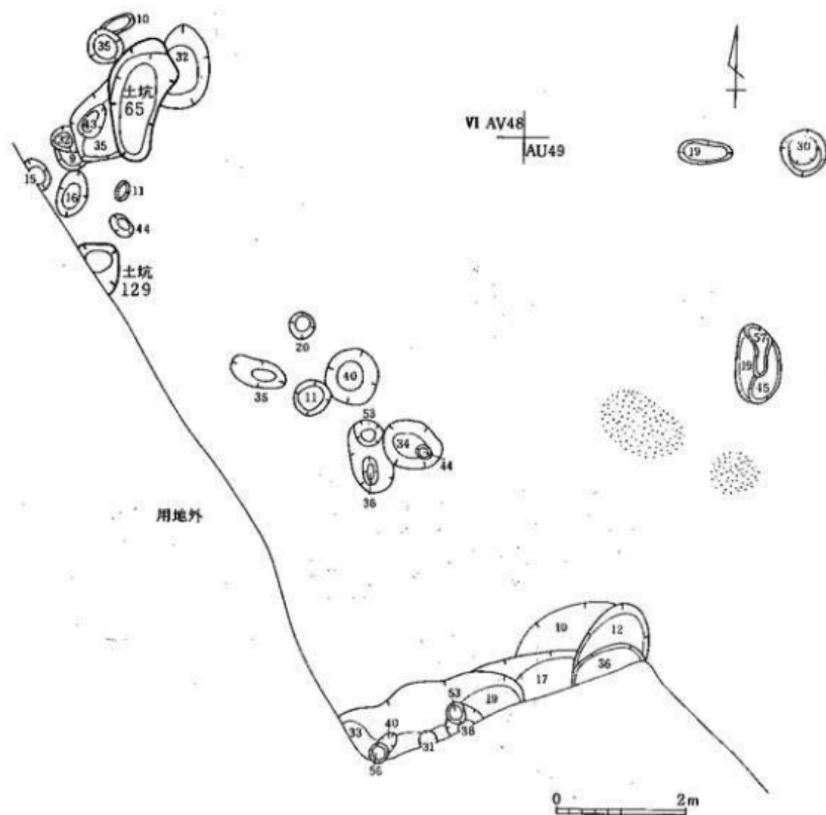


插图50 周边土坑·柱穴平面图(3)

る区画内に平行沈線化した対弧文を描き、その上下に刻みを施すもの、無文のもの等がある。口縁外縁に刻みを施されるもの、沈線間に縄文施文されるものがある。窟には上部に縄文が施文されるものがある。胴部の文様帯は1～4条の沈線が施されるもの、2段の沈線がところどころ途切れるもの、弧線文が施されるもの、文様帯が消滅するもの等がある。中には、口縁部文様帯と同様、縄文施文されるものがある。頭部から胴部文様帯下位にかけて羽状沈線文



挿図51 周辺土坑・柱穴平面図(4)

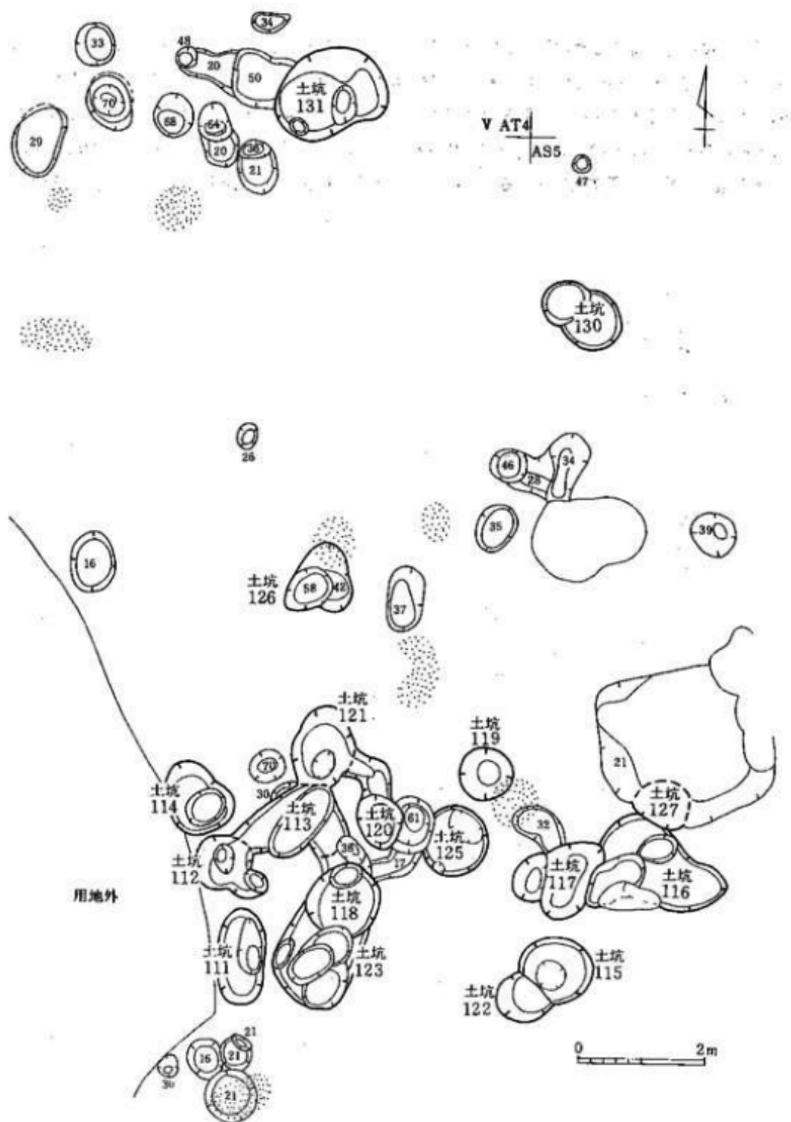


插图52 周边土坑·柱穴平面图(5)

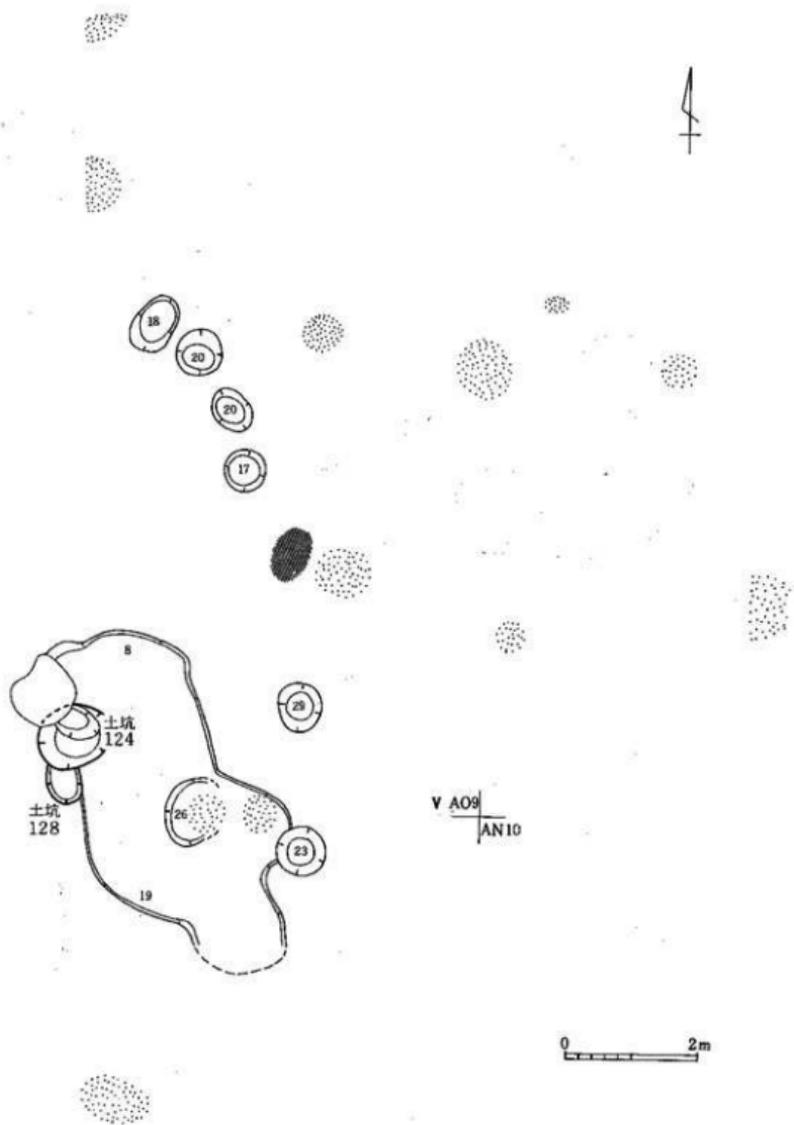


插图53 周边土坑·柱穴平面图(6)

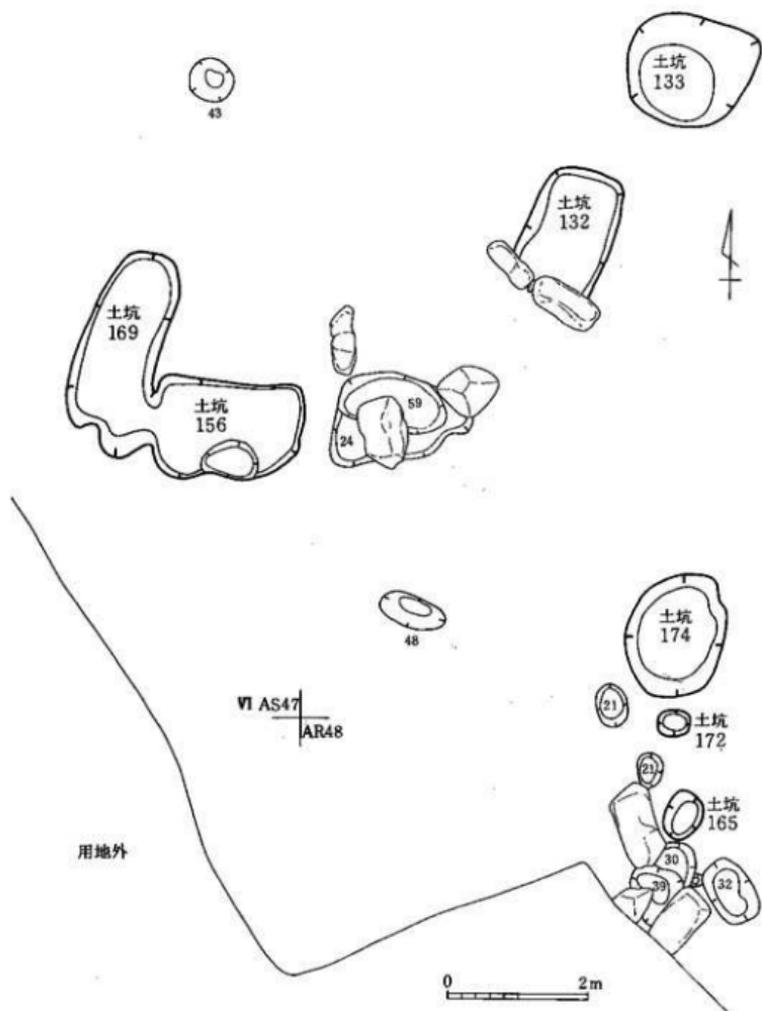


插图64 周边土坑·柱穴平面图(7)

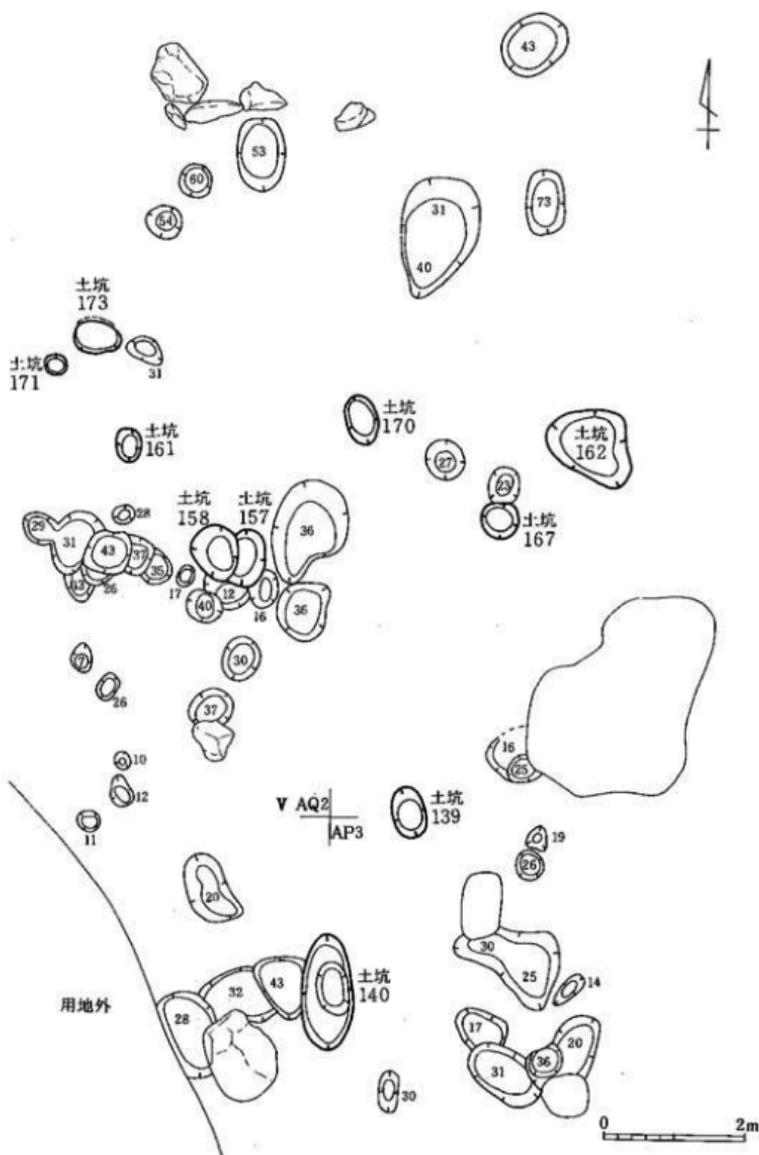


插图55 周边土坑·柱穴平面图(8)

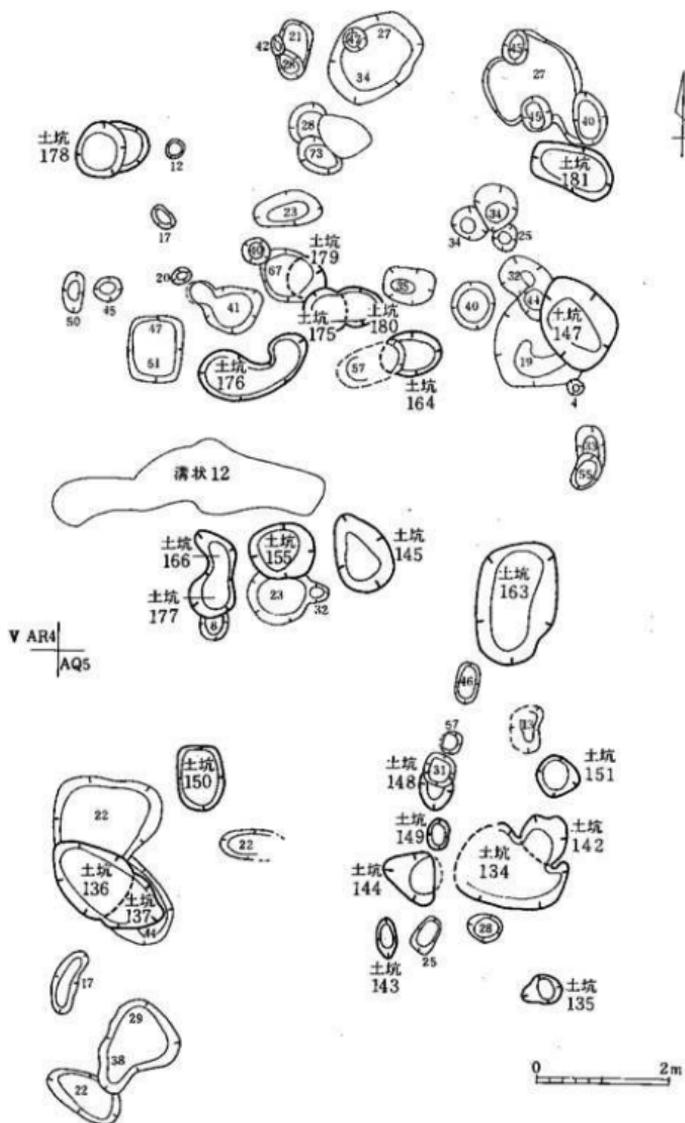
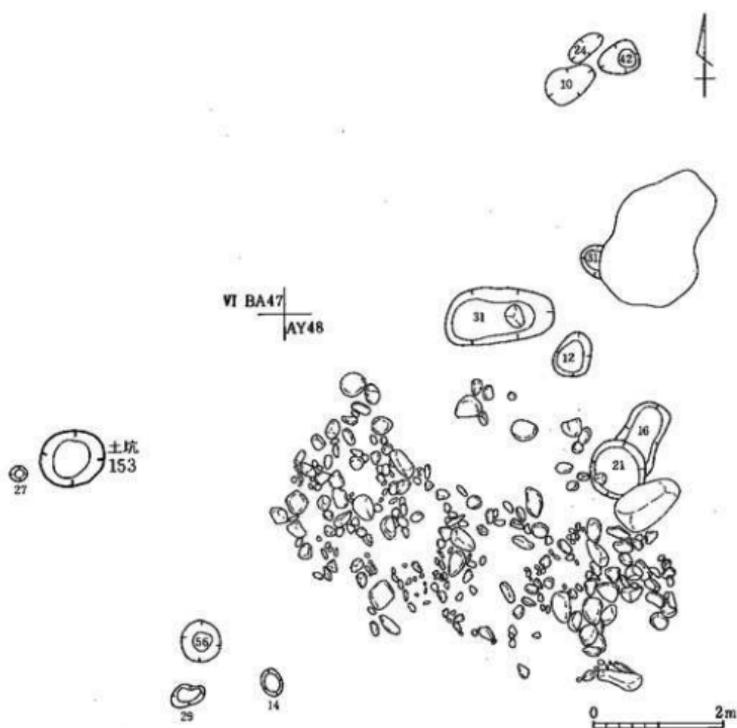


插图56 周边土坑·柱穴平面图(9)

が施文されるものが多い。他に、平口縁に近い6単位の小さな突起をもつもの、平口縁に近い6単位の小さな突起をもつもの、わずかに波状を呈する精製深鉢がある。前者は、口縁部に2条の弧線と縄文、胴部も沈線間に縄文施文され、胴部文様帯下位まで羽状沈線が施文される。注口土器は、手無文で、器壁が薄い。土石流の低位からは、断片的ではあるが、加曾利B II式併行期から遺物があり、後期末の安行I式の影響を受けているものまでの時間幅がある。

東北系の土器は、新地式が少なくとも4個体ある。いずれも壺形土器で、うち1個体は赤色塗彩される。また、外面に黒漆が塗付されたものが1個体ある。

関東系の土器で搬入されたと考えられるものは、曾谷式等少量であるが、口縁部や胴部の文様



挿図57 周辺土坑・柱穴平面図⑩

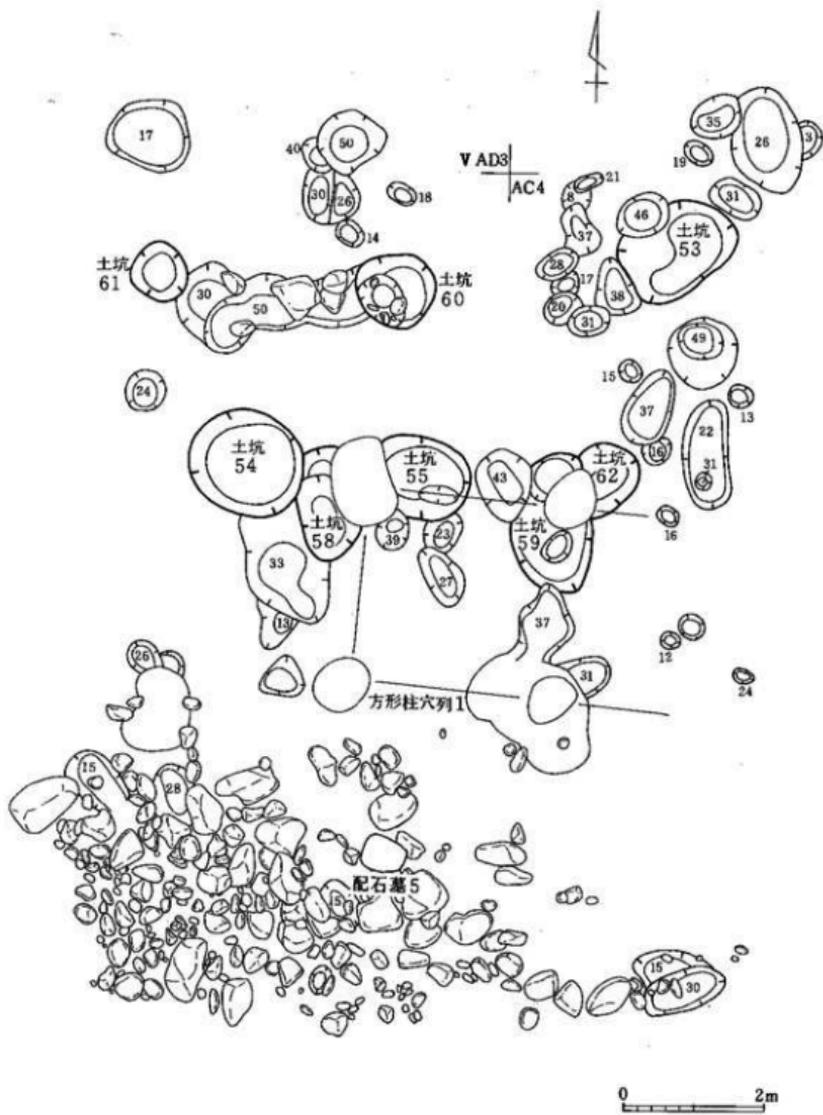


插图58 周边土坑·柱穴平面图①

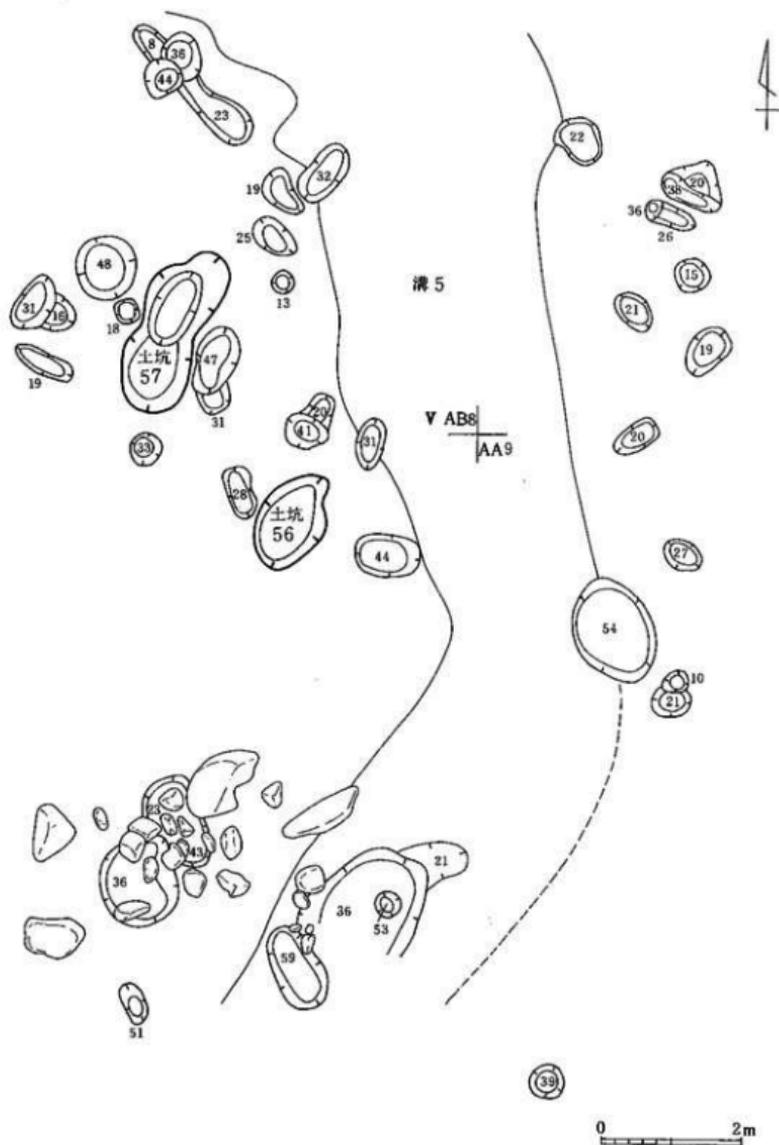


插图59 周边土坑·柱穴平面图①

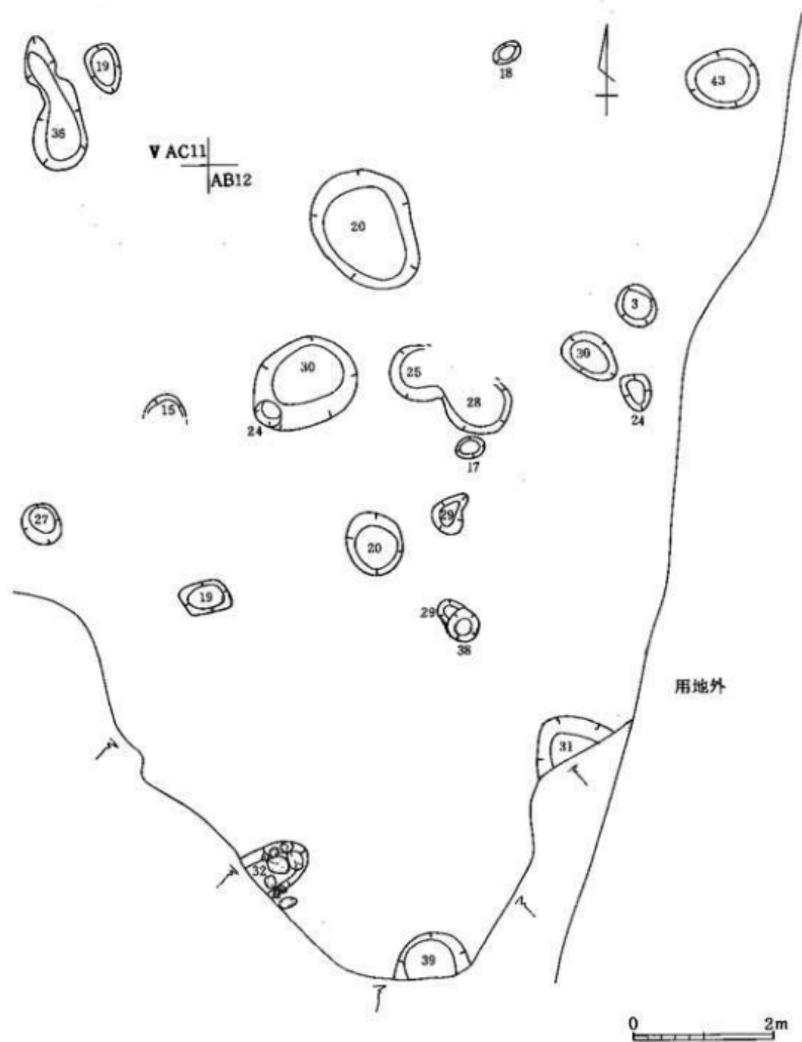


插图60 周边土坑·柱穴平面图(3)

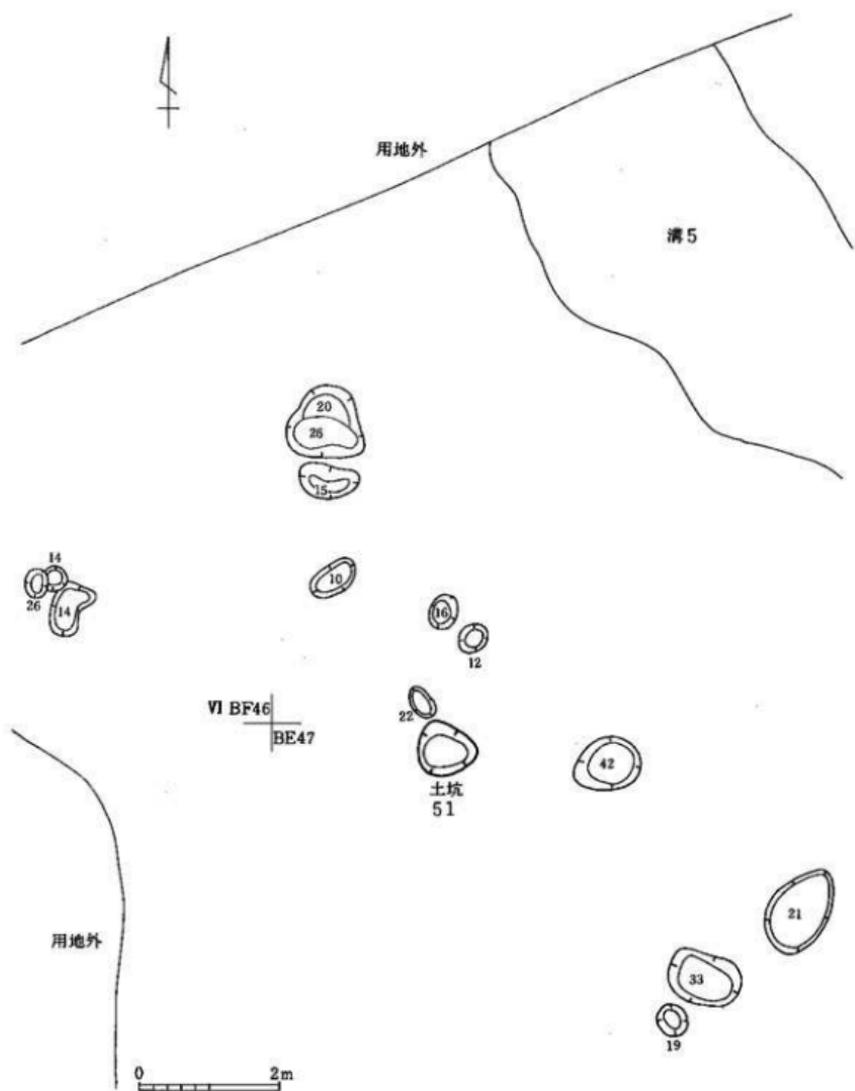


插图61 周边土坑·柱穴平面图14

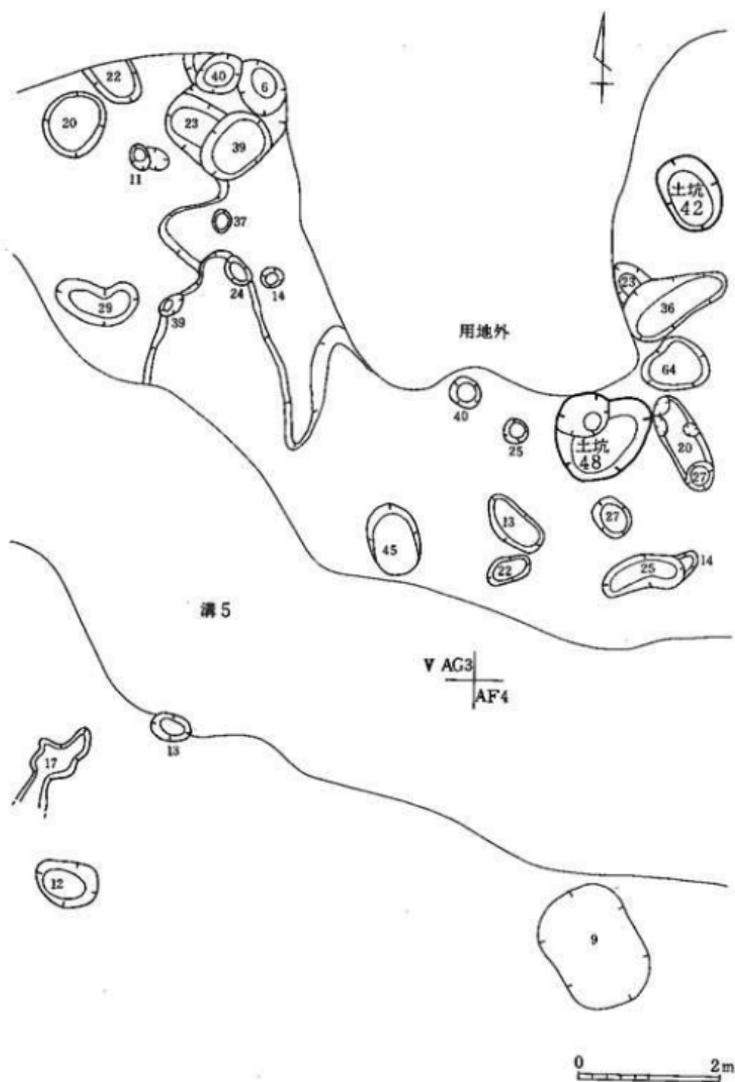


插图62 周边土坑·柱穴平面图①

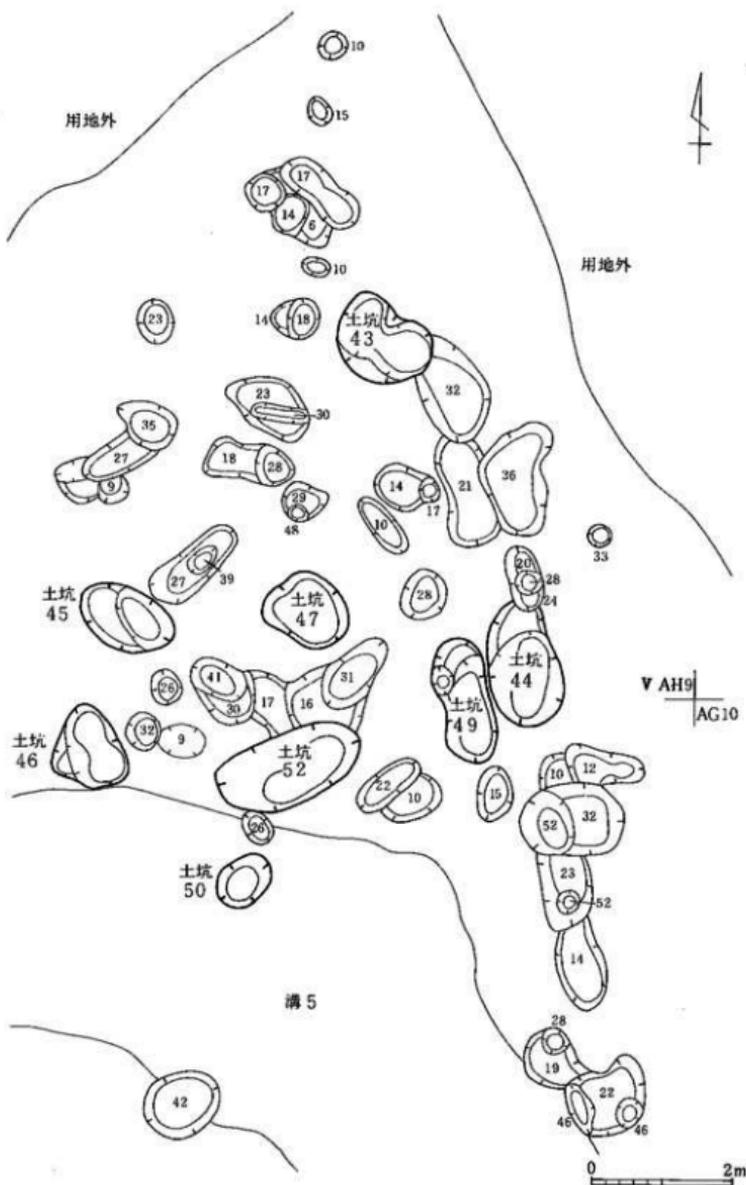
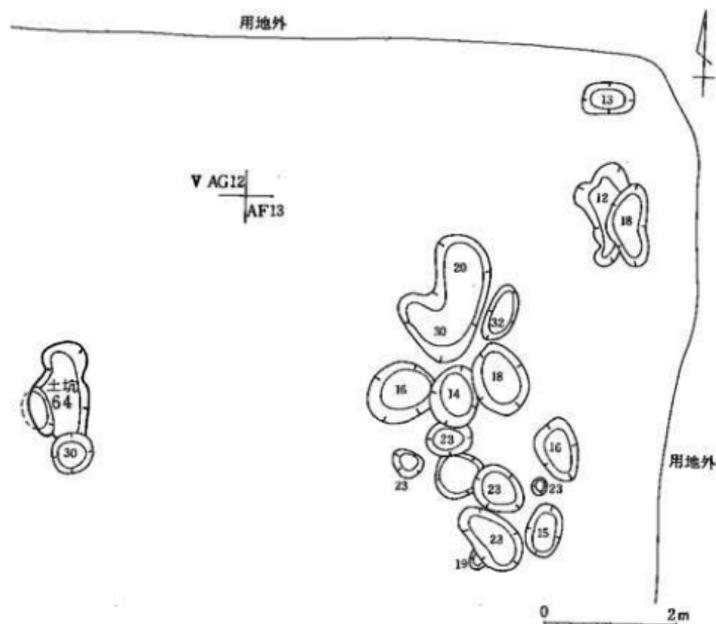


插图63 周边土坑·柱穴平面图④

帯に施文される縄文や、安行I式にみられる突起等の影響を見いだすことができる。香炉形土器は、口縁部に二段の透しをもち、突起が付される。胴部には二重の弧線文が施文されており、調整等在地系の土器と大きく異なる。

北陸系の土器もしくはその影響の土器は、外来系の土器のなかで大きな比重を占める。朱で塗彩された蓋は八日市新保式に比定され、他に、口縁部文様帯の区画文として縦位2列の井桁状文と刺突が施され、細かい対弧文が施文される土器は、八日市新保式の模倣と考えられる。また、貼付文と丁寧なミガキが施される厚手土器の器形は、北陸的な様相をもつ。また、内そぎ状の口縁部を呈し、縄文地文に口縁部文様帯は幅広の工具による沈線、胴部文様帯は細く鋭い沈線が横位に施文される深鉢が2個体ある。頭部は無文である。器形や縄文地文は、新潟県刈羽大平遺跡の土器に類似すると考えられる。

東海系の土器は十分に把握しきれていないが、比較的出土している。二重の下向きの弧線文が施文される土器は、口縁外縁に刻みが施されるが、吉胡下層式ないし寺津下層式と考えられる。



挿図64 周辺土坑・柱穴平面図(1)

4単位の櫛状工具により細かい刺突と条線が施文される土器は、後期終末から本刈谷式併行の東三河周辺の土器と考えられる。凹線文施文の土器で、下向きの扇状圧痕が施される深鉢は、宮滝式併行期の東海系の土器と考えられる。

近畿系の土器として、一乗寺K式に類似する土器がある。少なくとも、元住吉山Ⅰ式に比定される遺物があることは確実で、細かい斜格子状の沈線に刺突が併用される二段屈曲の注口土器破片で、他に影響を受けた土器として、渦文と対弧文施文の深鉢がある。半周は単節縄文、もう半周は無節縄文、渦文部は無節の縄文が施文される。元住吉山Ⅱ式に比定されるものとして、巻貝を縦に押圧し、その両側に殻頂を折った巻貝で刺突を施した、凹線文施文の土器がある。また、凹線を2本の縦位沈線で区切り、口縁直下に細かい連続する刺突、胴部屈曲上に刻みが施される土器がある。元住吉山Ⅱ式に対比できると考えられる。宮滝式系の土器は、深鉢・注口土器がある。扇状圧痕が施されており、凹線内部を丁寧に磨かれている。宮滝Ⅰ式に比定される。

系統は不明であるが、内面に朱の付着した鉢がある。三重県森添遺跡等に類似があるが、器形を異にする。近畿系とすれば宮滝式に対比されよう。口縁部に縦位の貼付文が付される焼成不良な深鉢2個体・壺1個体がある。近畿・東海・北陸方面に淵源を求められると思われ、一乗寺K式併行あたりに位置付けられよう。

②縄文時代晩期前葉

明褐色土を中心に出土しており、後期後半に比較すると遺物量はやや少なくなる。晩期の初頭に比定される遺物はほとんどない。

東北・関東系の遺物はそれ程ない。安行Ⅲb式に類似する、葉状の鋭い沈線内に細かい刺突が施される、黄褐色を呈する土器がある。口縁部文様帯に沈線と刺突で長方形区画され、区画内は横方向からの挟りが入る破片と同一個体と考えられる。口縁部文様帯に用いられる横方向の挟りの手法はあるいは北陸方面と共通するのかも知れない。上田市下前沖遺跡や群馬県方面に類似が求められよう。

東海・近畿の影響として、後期から晩期前葉にかけての巻貝条痕がある。滋賀Ⅲb式併行期には東海・近畿系の遺物量が増加する。28号住居址付近からは滋賀Ⅲb式以降にみられる二枚貝の条痕が出土する。また、リボン状突起に似た突起が付される無文の鉢は、口径はそれほど大きくはないが、滋賀Ⅲb式の調整と類似する。

③縄文時代晩期中葉

黄白色砂層を中心に、縄文時代晩期中葉の遺物が出土している。大洞CⅠ式に併行するものとして、楕円鉢と小型の壺がある。壺は胴部の縄文地に沈線で眼鏡状に区画し、内部を研磨するもので、楕円鉢よりやや新しい。

黄白色砂層上部の漆黒土中からは、掘立柱建物址6周辺で網目状捻糸文施文の深鉢片が比較的

多く出土している。

2) 石器

大部分が縄文時代後期後半から晩期中葉のものと考えられる。形態・製作技術・使用痕・石材等に基づいて分類すべきであるが、形態によって概数を把握したにとどまる。

①打製石斧（挿図66・67）

分銅形石斧は明褐色土10点、褐色土66点、その他21点、遺構外計78点が出土した。素材は硬砂岩・緑色岩で、刃部の欠損したものが多く、挟り部付近まで欠損が及んでいるものもある。

分銅形以外の打製石斧は、明褐色土15点、褐色土145点、その他73点、遺構外計233点が出土した。素材は硬砂岩・緑色岩である。

②打製石器・横刃型石器（挿図68・69）

二次調整を施されたその他の打製石器は、明褐色土19点、褐色土210点、その他110点、遺構外計339点が出土した。素材は硬砂岩が主体で、緑色岩がこれに次ぐ。

横刃型石器は刃部調整や背部の刃潰しが施されていない剥片を含む。明褐色土36点、褐色土163点、その他117点、遺構外計316点が出土した。素材は硬砂岩・緑色岩である。

③磨製石斧（挿図70・71）

定角式磨製石斧は明褐色土3点、褐色土13点、その他7点、遺構外計23点が出土した。また、その他の磨製石斧は明褐色土6点、褐色土26点、その他25点、遺構外計57点が出土した。定角式磨製石斧には大型品と規格が揃った小型品があり、後者は蛇紋岩製で北陸地方から搬入された可能性がある。これに対して、自前で製作された実用品と考えられるものが前者である。また、その他の磨製石斧には、大型蛤刃石斧を小型化したような敲打痕を著しくとどめる石斧や、棒状礫の自然面が大きく残る石斧があり、緑色岩等を使用している点で打製石斧の石材と未分化である。

④石錘

明褐色土・褐色土の他から1点出土した。硬砂岩の長辺両端を打ち欠いた礫石錘である。

⑤石鏃（挿図72）

石鏃は明褐色土246点、褐色土953点、その他458点、遺構外計1,657点が出土した。凹基無茎鏃・凹基有茎鏃・五角形鏃・凸基有茎鏃・片脚鏃・飛行機鏃等がある。石材は黒曜石・下呂石・チャート・水晶等が使用されている。石鏃のうち、26点、1.6%が局部磨製石鏃である。うち20点が黒

曜石、6点が下呂石である。早期の局部磨製石鏃とは、形態や擦られた部位が異なる。

⑥石錐（挿図73）

石錐は明褐色土6点、褐色土17点、その他16点、遺構外計39点が出土した。石材は黒曜石・下呂石・チャート等である。棒状のもの、つまみの付くもの等ある。

⑦敲石（挿図74）

敲石は明褐色土8点、褐色土38点、その他36点、遺構外計82点が出土した。棒状礫・円礫が使用される。

⑧磨石・凹み石（挿図75）

磨石・凹み石は形態が類似し、凹み石にも擦れた面があることから一括した。明褐色土15点、褐色土42点、その他20点、遺構外計77点が出土した。磨石の中には赤色顔料の付着するものもみられる。

⑨石皿（挿図76）

明褐色土6点、褐色土7点、その他2点、遺構外計15点が出土した。

⑩砥石（挿図77）

明褐色土7点、褐色土34点、その他30点、遺構外計71点が出土した。主として、砂岩を石材としている。配石址10の鉄平石は、片面が著しく擦れているが、石英粒を多く含んでおり、砥石の可能性もあろう。

⑪丸石（挿図78）

球形の礫や、敲打等によって球形に整形された石である。直径5cm程の小型のものから、30cm程度の大型のものまでサイズはまちまちである。明褐色土5点、褐色土13点、その他8点、遺構外計26点が出土した。主として、堆積岩を石材としているが、大型のものは花崗岩である。

⑫石核（挿図79）

明褐色土13点、褐色土82点、その他14点、遺構外計109点が出土した。主として、硬砂岩素材であるが、緑色岩もある。円盤状を呈する握り拳大のものが大半で、横刃型石器の素材となる剥片を連続的にとった結果、こうした形状になったと考えられる。中に敲打器として転用された可能性のあるものもある。

3) 石棒・石剣・石刀(挿図80、第3～6図)

明褐色土10点、褐色土34点、その他32点、遺構外計76点が出土した。

第3図9は配石址1と26号住居址の中間から出土した、完形の両頭石棒である。脇に堆積岩素材の磨石が1点並んで置かれていた。朱がほぼ全面に付着しており、石棒の下部には厚く残存していた。石棒は結晶片岩素材が多いが、岐阜県宮川ないしは群馬県方面に供給地を求められよう。第4図3は、V区A J 8と他の石棒・石剣類の分布よりやや外側の、土石流の付近から出土している。ほとんどが中・小型の可動の石棒であるのに対し、掘え置き型のものであり、石棒をめぐる祭祀の二極化をみて取ることができよう。

第5図12は柄部が肥厚して、横・斜位に凹線が施される。安行Ⅲb・Ⅲc式のなかに類例を求めることができよう。また、第6図2は柄部に鐮状の凸帯が巡り、端部が肥厚して突起が2個つく。東北系と考えられる石剣である。

石棒・石剣・石刀は、大部分が細片で、焼かれたり、叩く・突くという行為で砕かれたりしており、なかにはその後再び擦られたりして再利用されているものもある。他地域から搬入された遺物であることを考慮すると、最後まで使い尽くされたということができよう。

4) 石冠

V区AM3明褐色土、V区A J 4褐色土からそれぞれ1点が出土している。いずれも砂岩系の石材を使用しており、前者は粒径が細かくやや軟質である。後者は粗いもののやや堅緻である。

5) 土偶(挿図81、第10～19図)

明褐色土5点、褐色土26点、その他16点、接合個体を1点と計算して遺構外計44点が出土した。

第10図5～第11図2は縄文時代後期の山形土偶風の顔立ちの土偶と考えられる。第12図3は安行系の消化器土偶で、孔は貫通していないようである。第14図3は中空の遮光器土偶の左腕と考えられる。遮光器土偶は県内では下高井郡山ノ内町佐野遺跡、埴科郡戸倉町円光房遺跡、同板城町込山E遺跡、小諸市石神遺跡から出土しており、中・南信では初めての出土である。第16図4は胴部のみであるが、鍵の手状の文様が施されており、北陸系の土偶と考える。第16図3は腰や脚が張っており、大洞C2～A式併行の土偶と考えられる。

6) 土製耳飾り(挿図82、第7～9図)

明褐色土87点、褐色土361点、その他163点、遺構外計611点(小破片を含む)が出土した。

いわゆる白形耳飾りや環状耳飾りが多いが、漏斗状の耳飾りや、環状でテラスやブリッジを持

つ耳飾りも出土している。大きさは径1cm程度の小型のものから、8cmを超える大型のものまである。図示したもののうち、濃いスクリーントーンを貼った部分は朱彩された朱の残存部分、薄いスクリーントーンを貼った部分は二次焼成を受けた部分である。

7) 有孔球状土製品 (第2図5)

第2図5は、V区AO12・AP8褐色土中で出土した。俵型を呈し、中央と端部に沈線と縄文が施文される。分布は北陸(富山県東部・新潟県西部)が圧倒的に多く、東北の三陸沿岸、東京湾沿岸周辺に見られる遺物である。県内では、南安曇郡穂高町離山遺跡・松本市エリ穴遺跡・上田市下前沖遺跡等これまで東・北信に限られ、南限にあたる。

8) 不明土製品 (第2図6)

第2図6は、V区AL7褐色土中で出土した。土版とも考えたが、末端が広がっており、不明土製品とした。

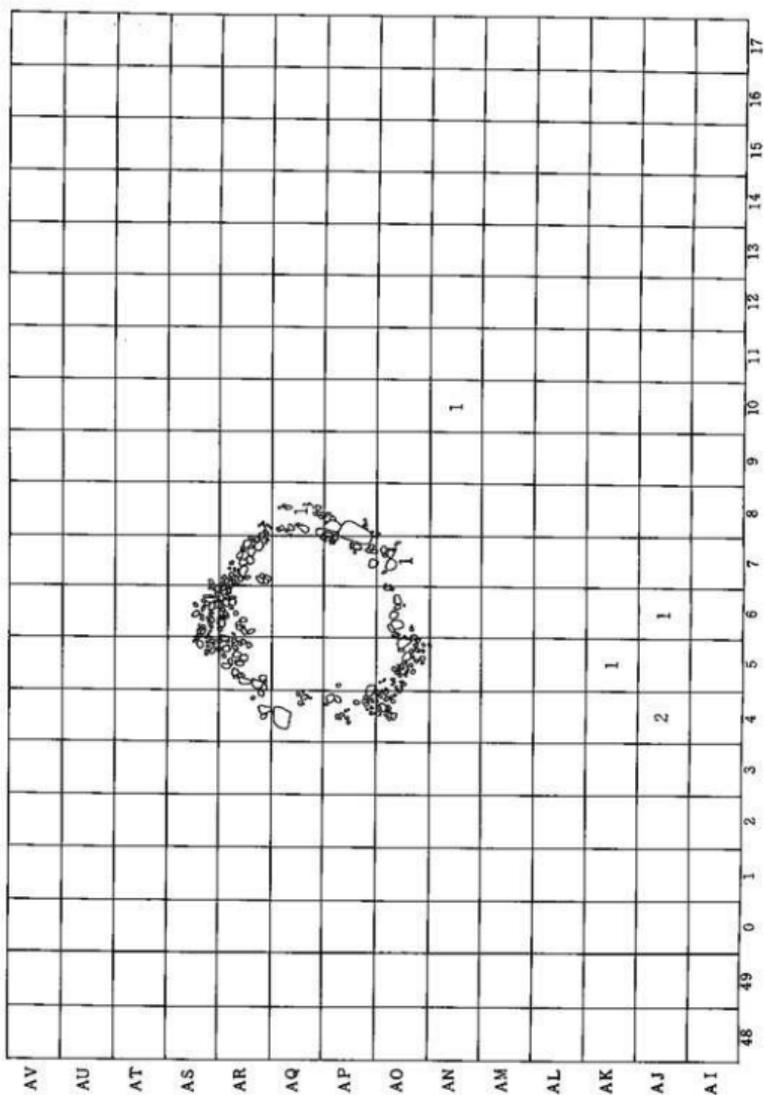
9) 玉類 (第2図13・14)

翡翠製玉(第2図13)はV区AL7褐色土2中で出土した。漏斗状に穿孔される。土製玉(14)はV区AH5褐色土中で出土した。

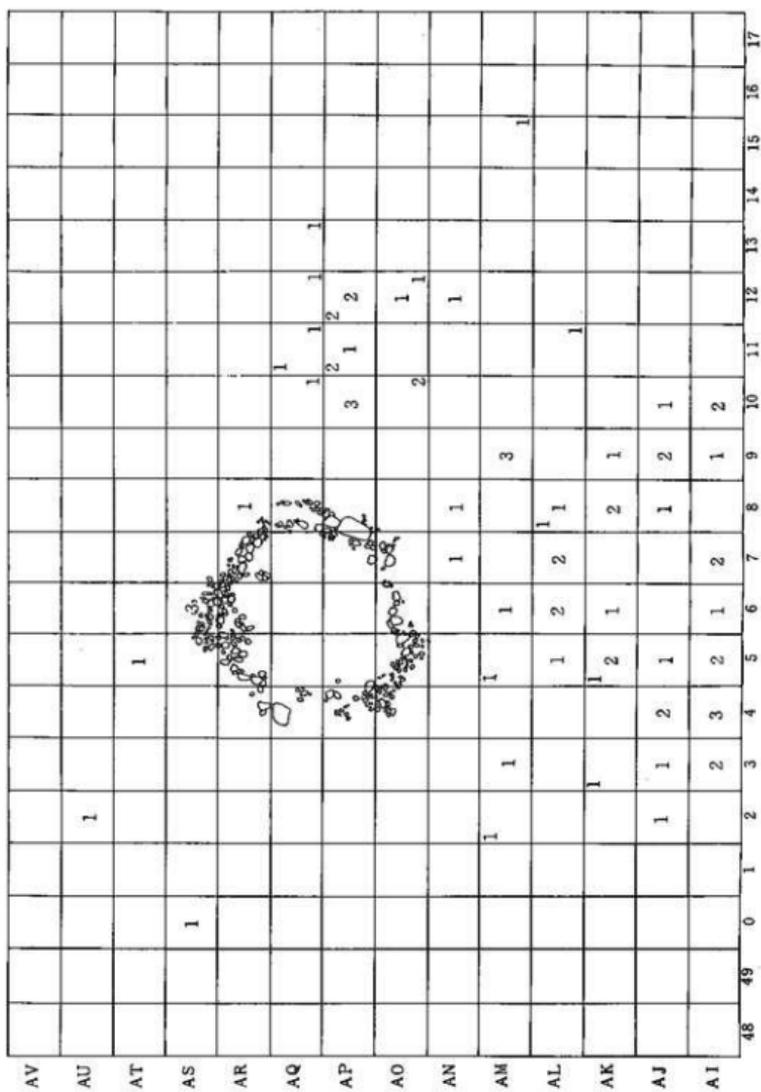
10) その他 (挿図83~85)

挿図83は焼骨、挿図84は焼骨の中に鹿角が含まれているグリッド、挿図85は炭化物の分布を配石址1を中心に示す。鹿角のスクリーントーン貼り付け部分のうち、濃い方は明褐色土中、薄い方は褐色土中を示す。焼骨は、明褐色土158g、褐色土750g、その他582g、遺構外計1,490gが出土した。また、炭は、明褐色土1g、褐色土146g、その他9g、遺構外計156gが出土した。鹿角は検出位置・層位から配石址2・3と関連すると考えられる。

その他、本遺跡では白色凝灰岩と思われる石材が1点出土しており、剥離痕が看取される。岩版の未製品とも考えられる。(馬場保之)



挿図65 道橋外出土遺物分布図(1) (吊り手土器)



挿圖86 遺構外出土植物分布圖(2) (分類形石芥)

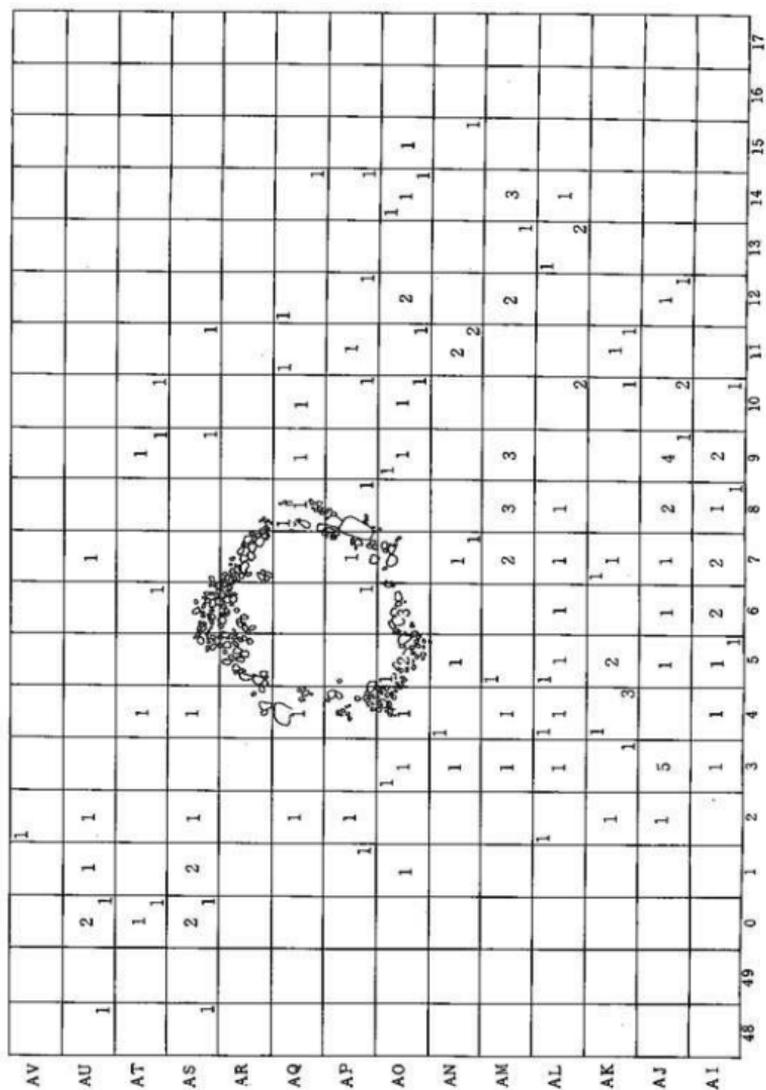
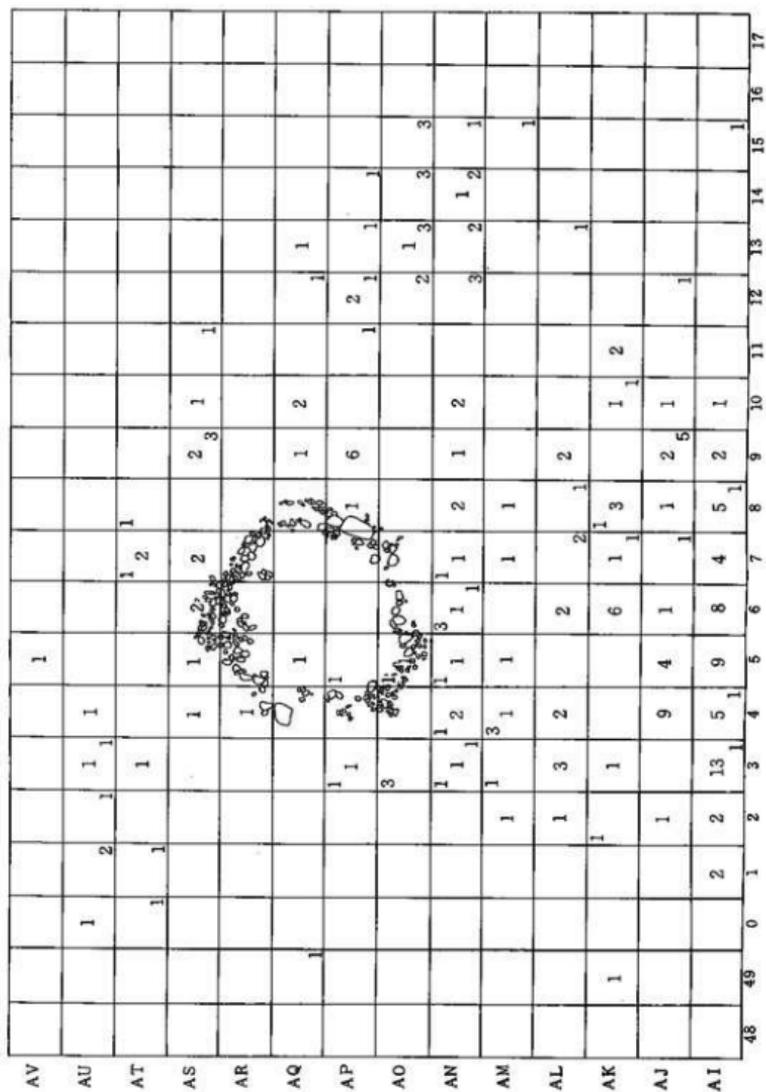


插图67 遺構外出土遺物分布図(3) (打製石斧・その他)



挿圖88 遺構外出土遺物分布圖(4) (打製石器)

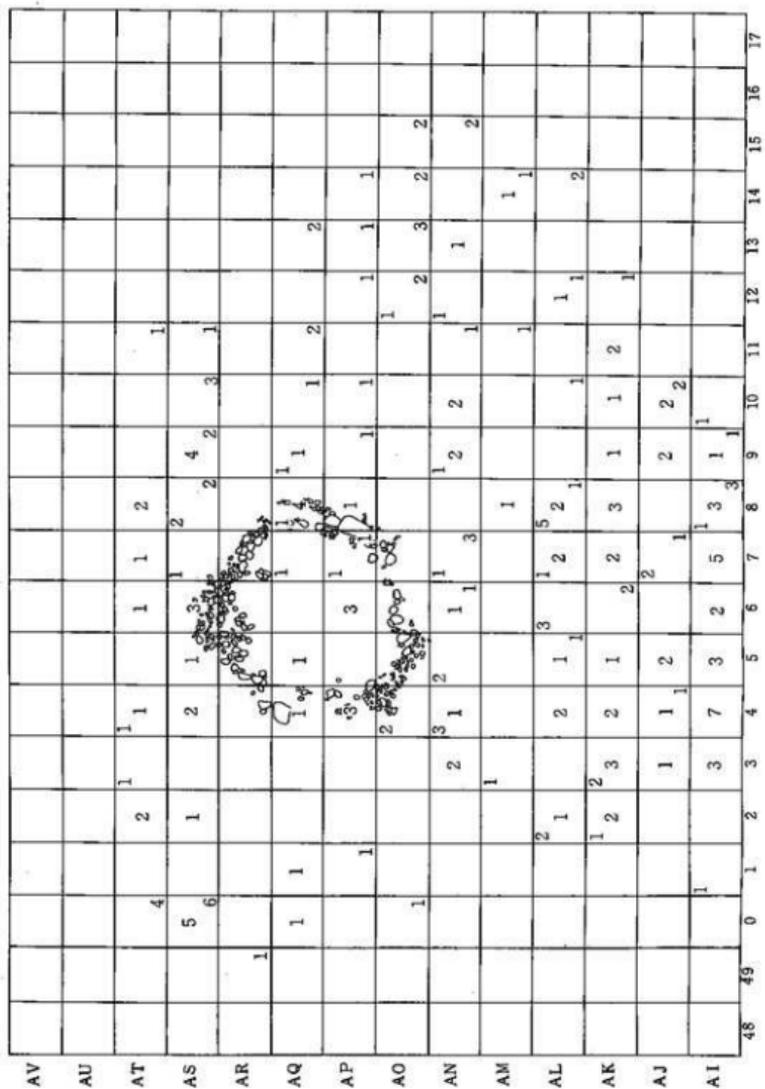


插图88 道模外在土遗物分布图(5) (横刃型石器)

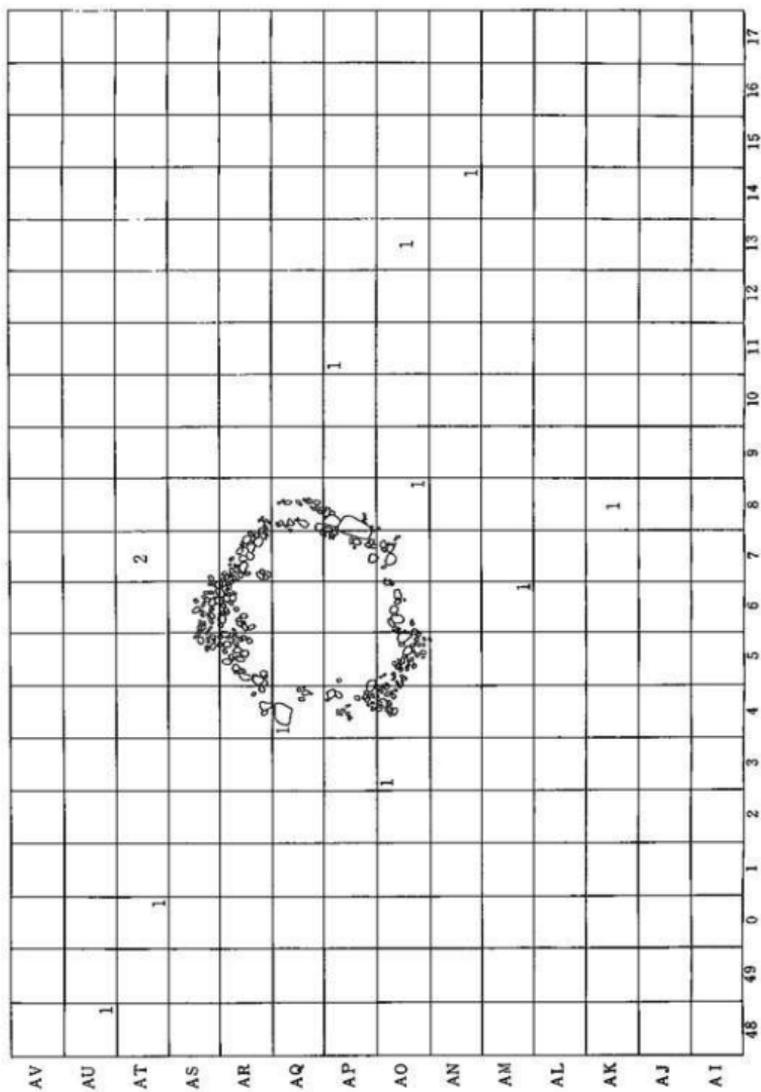
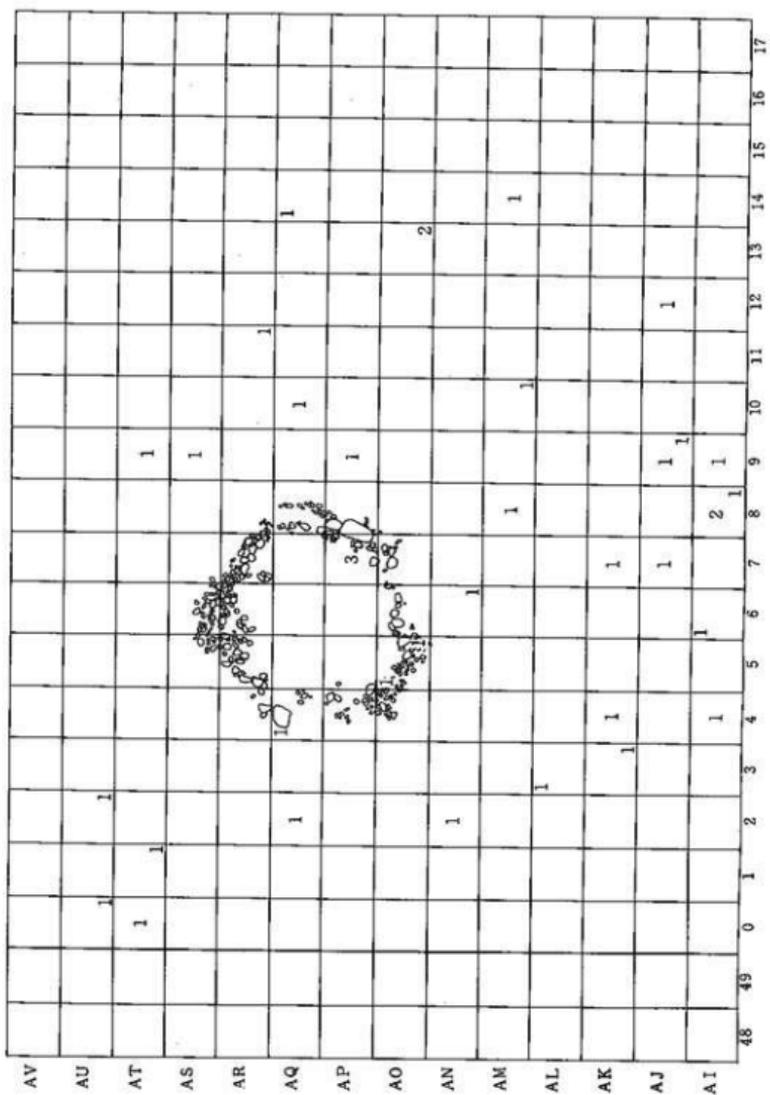


插图70 遗址外庄土遗址分布图(6) (直角式磨制石斧)



押図71 道橋外出土遺物分布図(7) (磨製石斧・その他)

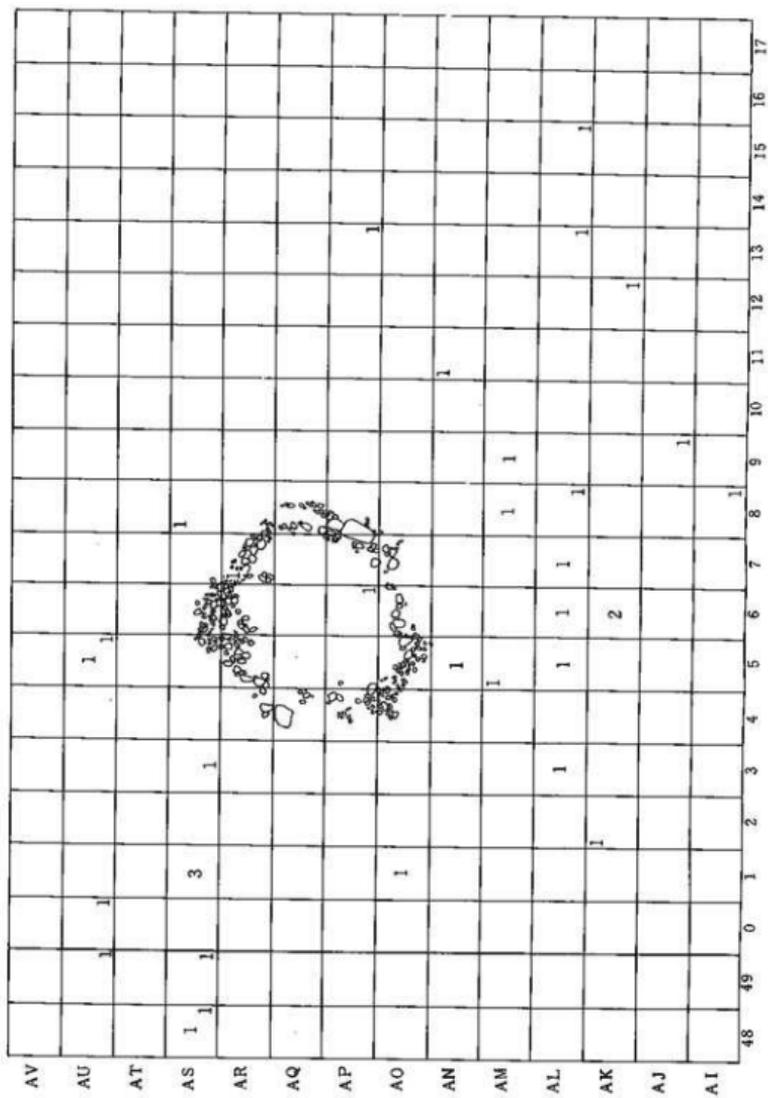


插图73 濠洲外庄土遗址分布图(9) (石城)

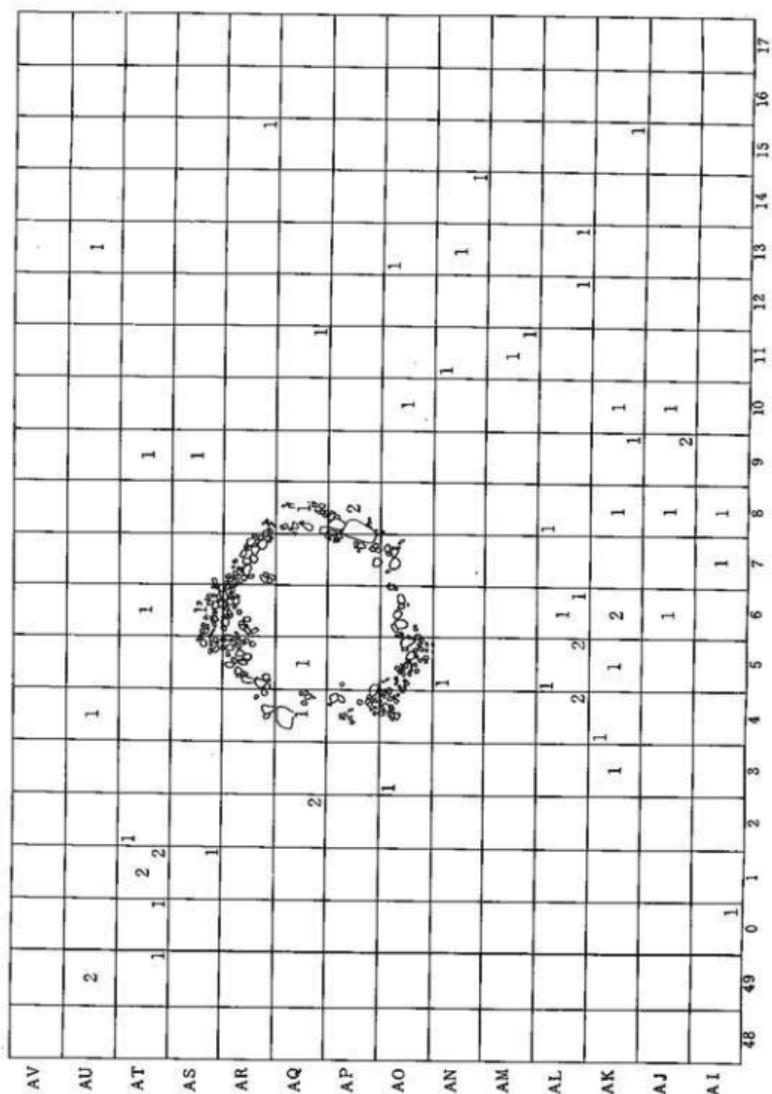


插图74 遺構外出土遺物分布図⑩(鼓石)

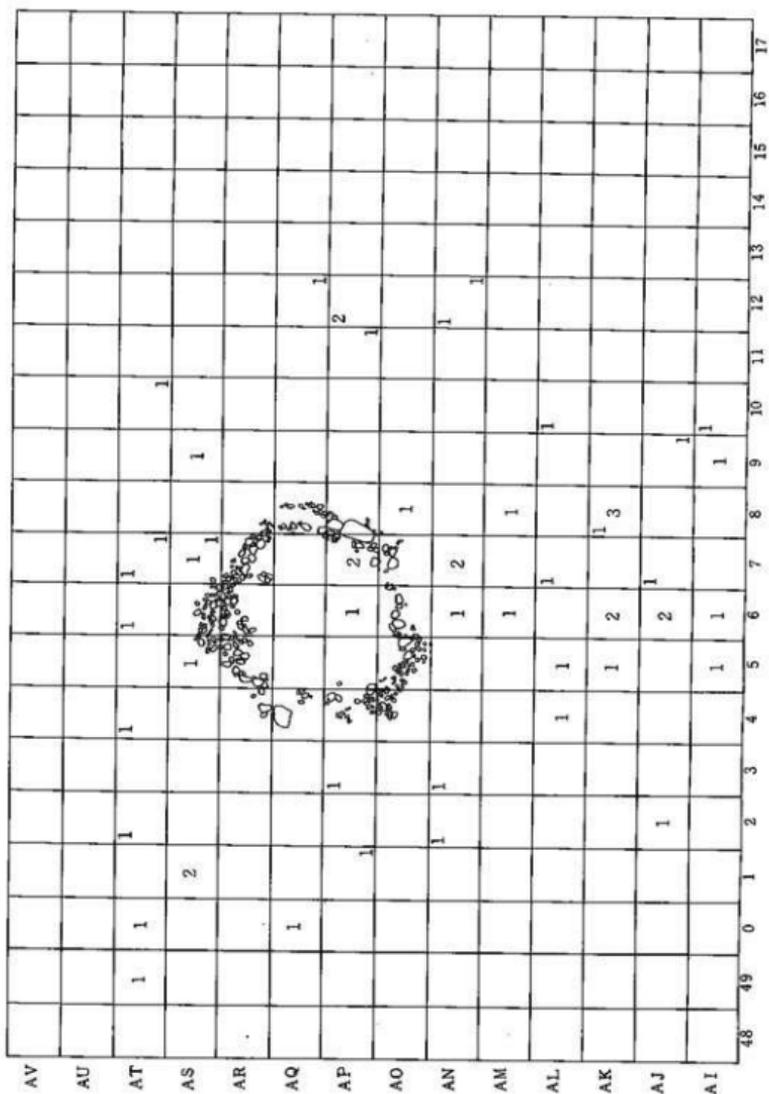
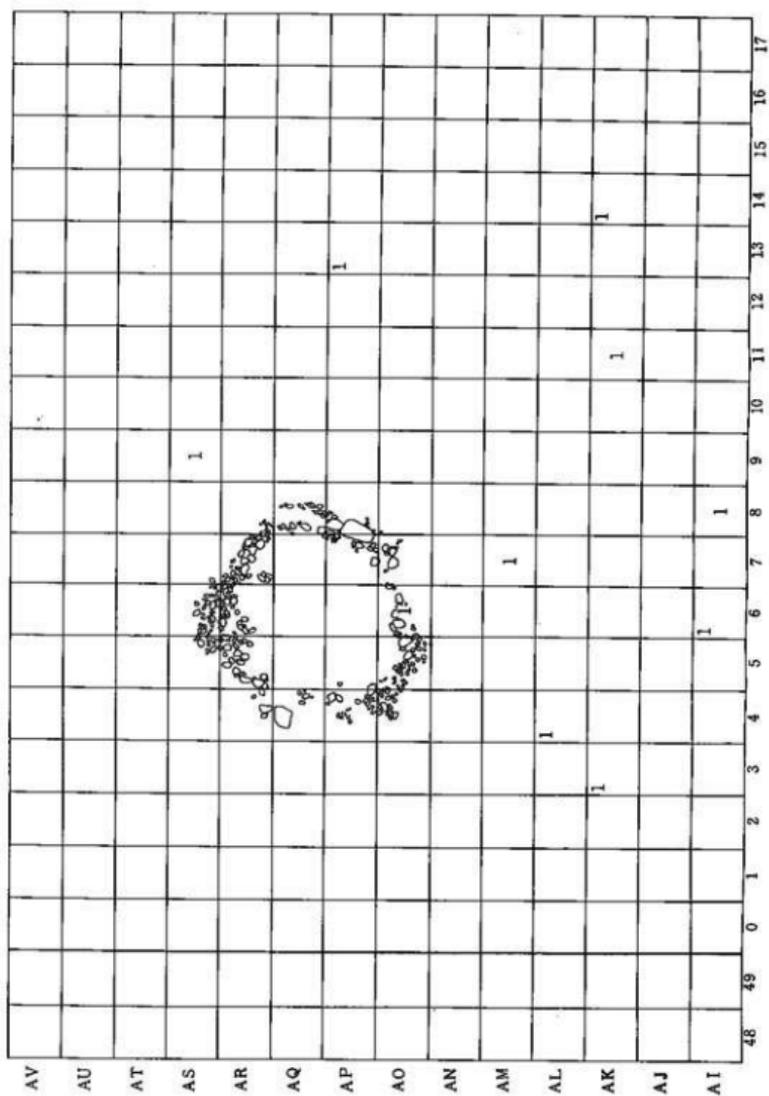


插图76 遺構外在土遺物分布図⑩(陶石・凹み石)



擇図76 遺構外出土遺物分布図⑫(石皿)

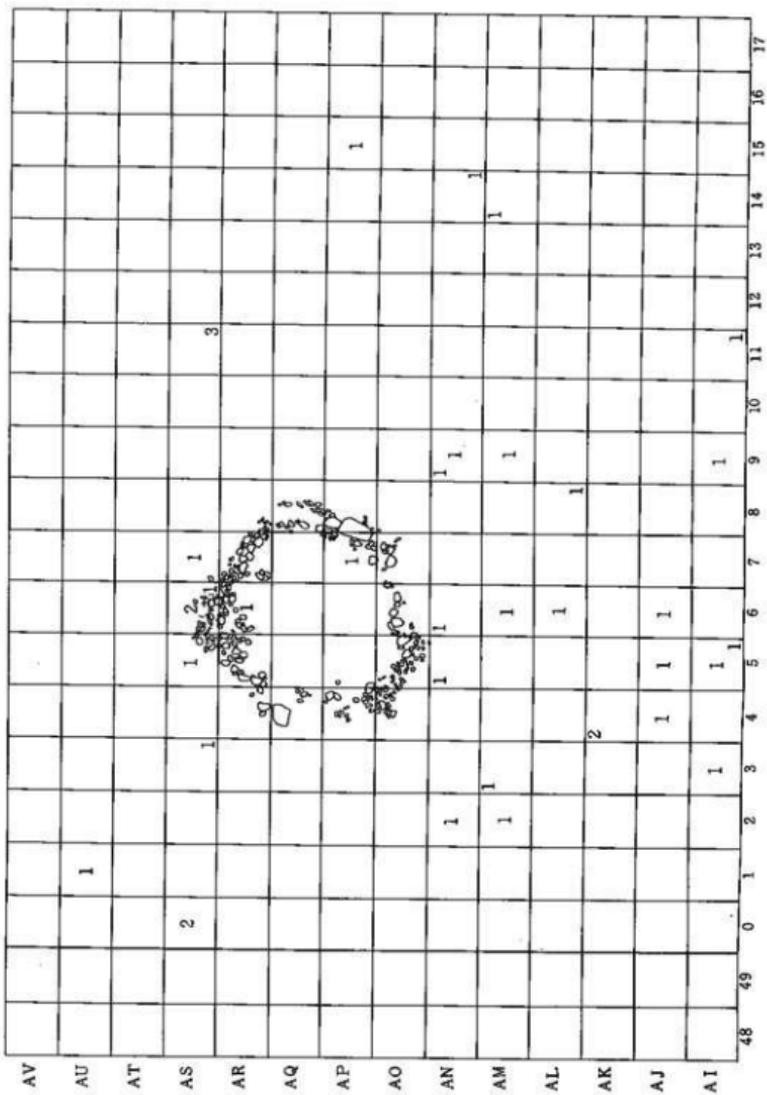


插图77 濠濮外出土遗物分布图(2) (磁石)

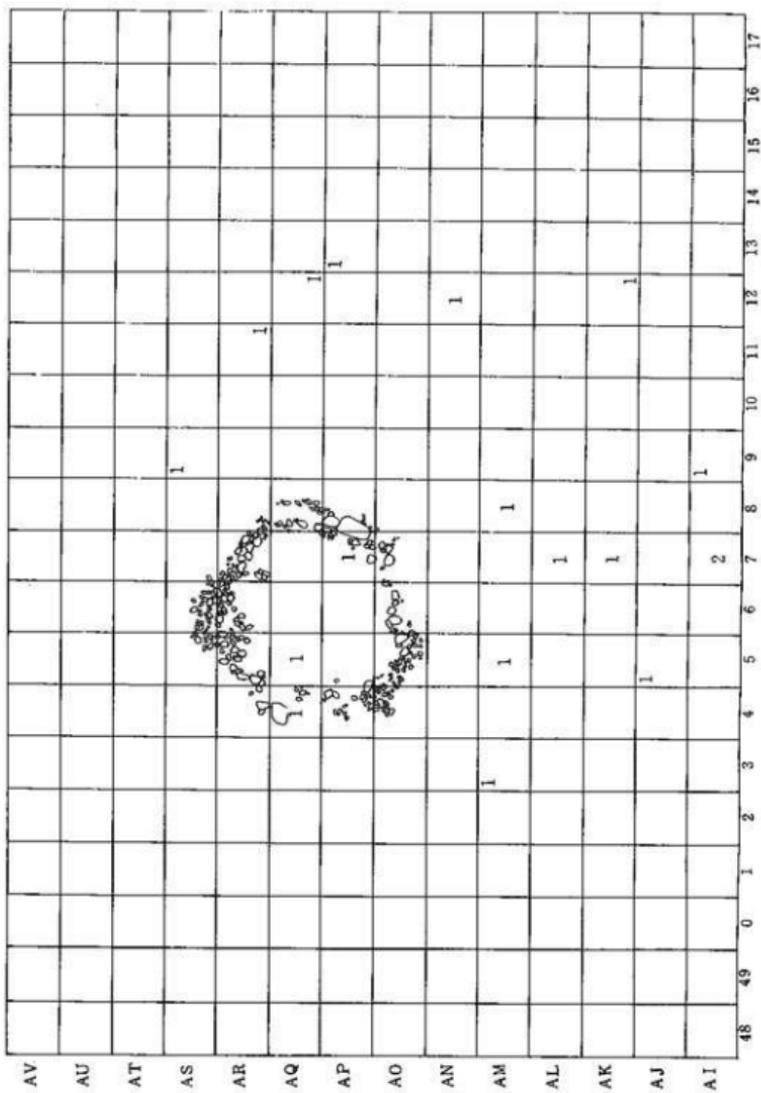


插图78 埼玉外出土遺物分布图④(丸石)

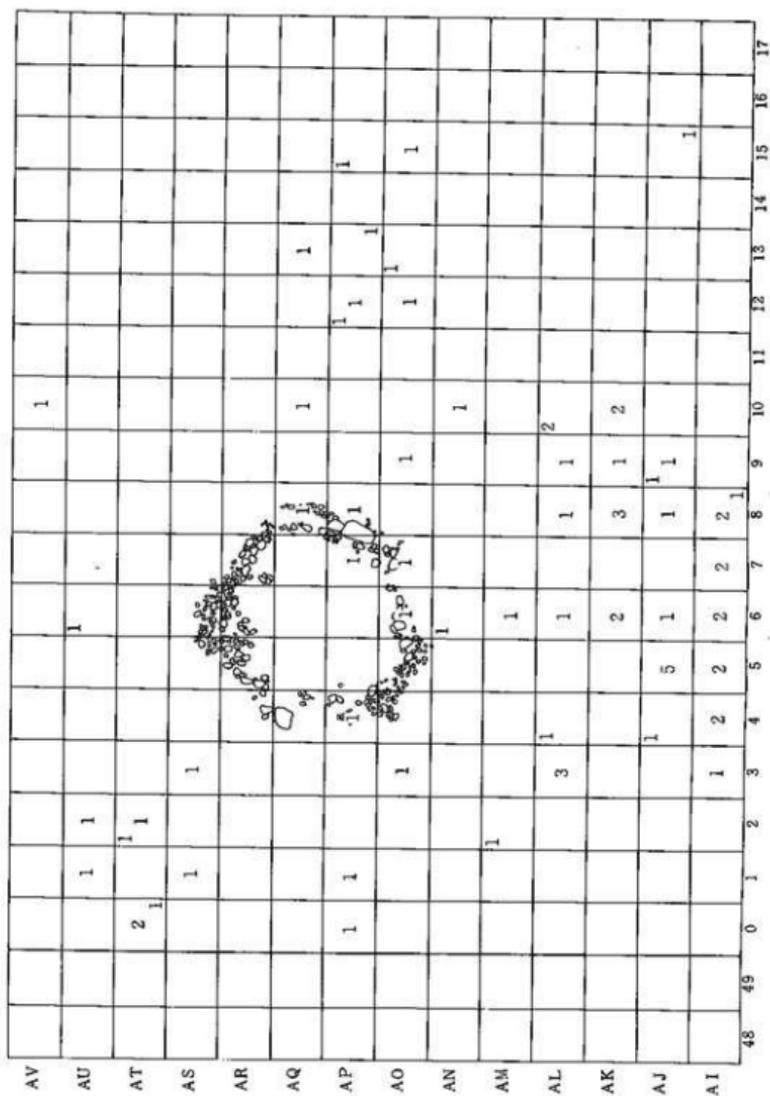


插图79 遺構外出土遺物分布図(石核)

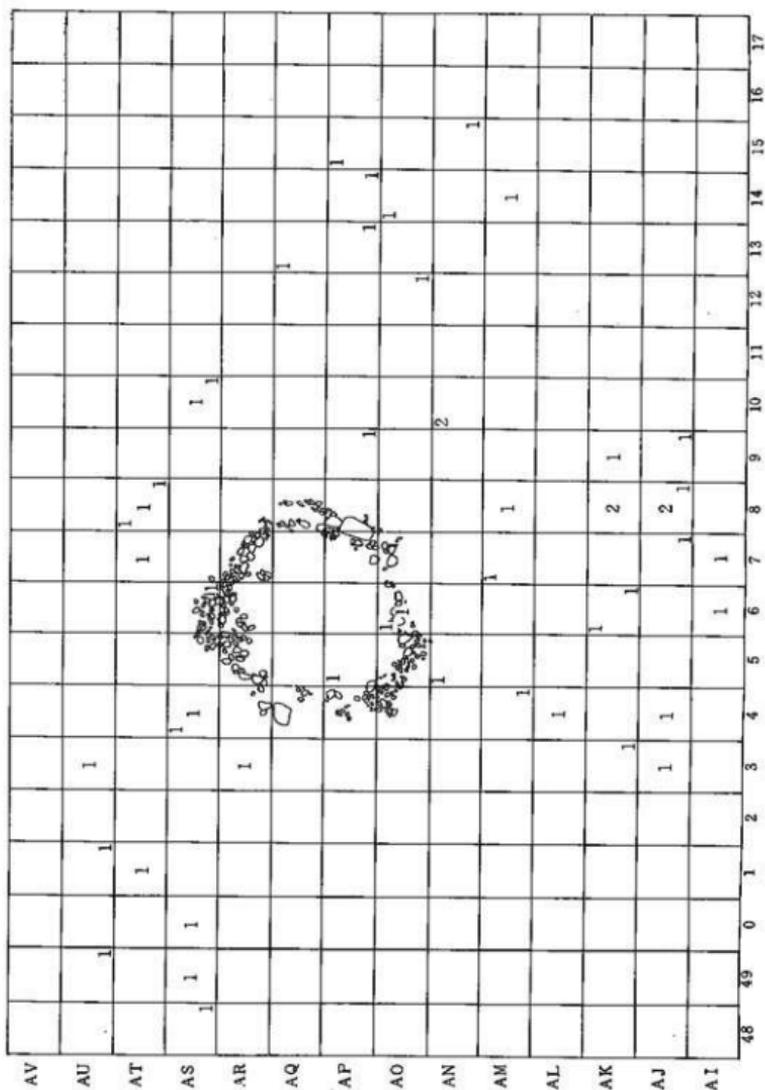
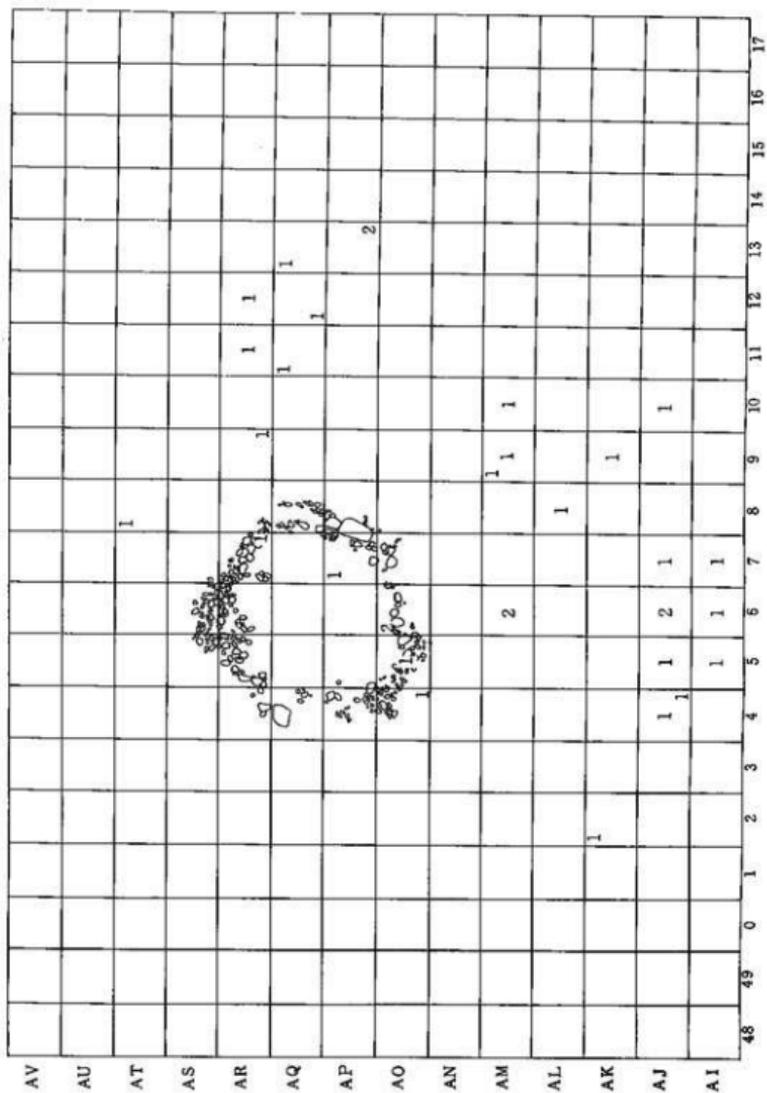


插图80 遺構外庄土遺物分布図⑥(石棒・石剣・石刀)



挿図81 遺構外庄土遺物分布図⑦(土偶)

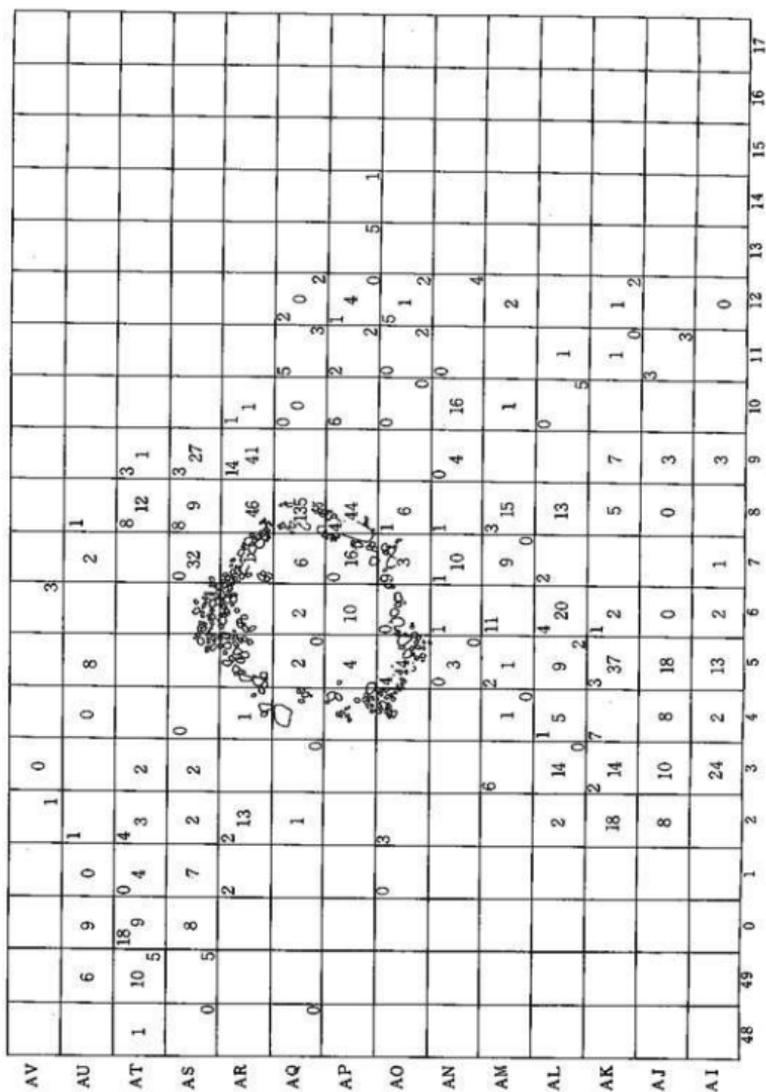


图83 遺構外出土遺物分布図(燒骨)

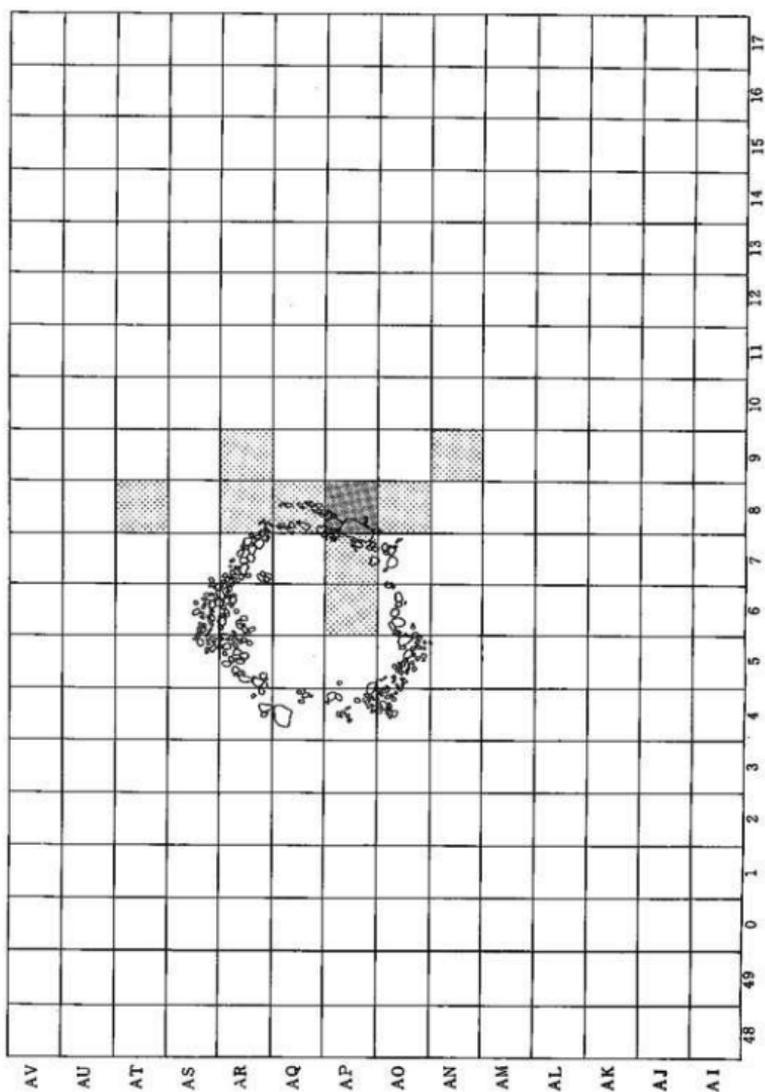
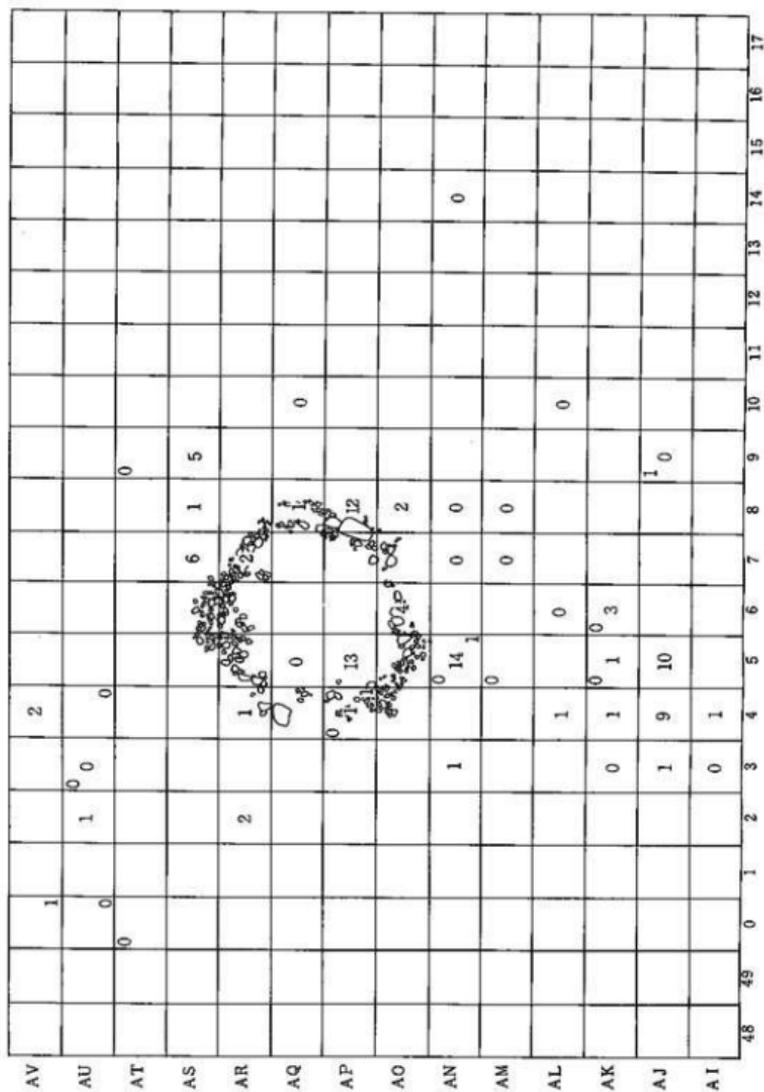


插图84 董寨外出土遗物分布图(鹿角)



挿図95 遺構外出土遺物分布図①(炭化物)

4. 第3地点（調査面積3,760㎡、付図3）

(1) 竪穴住居址

1) 縄文時代中期

①33号住居址（押図86）

本住居址は、東側の43号住居址、北側の45号住居址を切る。住居址内の北側床面にあるのは45号住居址の埋塞であり、本址には埋塞は伴わない。規模5.3×5.4mのやや方形に近い円形を呈する。主軸方向N18°E、深さ19～25cmを測る。主柱穴は4箇所を確認された。中央やや北側寄りに石囲炉がある。

出土遺物は、沈線あるいは沈線と刺突文による区画内に結節縄文を施すのを特徴とする深鉢が主体となる。他に土製円板1と石器としては炉内より局部磨製石斧1が出土したほか、砂岩製横刃型石器、石斧、黒曜石片が出土している。

縄文時代中期後葉に比定される。

（渋谷恵美子）

②35号住居址（押図87）

Ⅲ区AN17を中心として検出し、北東～北側は削平されているが、ほぼ全体を調査した。弥生時代後期の34号住居址に切られる。主軸方向が5.2mを測る楕円形の竪穴住居址で、主軸方向はN6°Eを示す。壁高は最大24cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。周溝が南西側壁下に認められた。床面は炉址周辺と壁際が部分的に貼床になっており、全体的に締まりがあり良好である。主柱穴はP1～P4でP5・P6は入口施設と思われるが詳細は不明である。炉址は中央からやや北に位置し、西側が抜石されているが、石組炉で、1.3×1.5mの方形を呈する。炭・焼土等は検出されなかった。

遺物は覆土下層中より多く出土している。

出土遺物より縄文中期後葉に位置づけられる。

（吉川金利）

③37号住居址（押図88）

調査範囲の北寄り、用地境に近いBE3付近で検出し、完掘した。当初は土坑として掘り上げていた場所が炉であることがわかり、周囲を精査したところ、直径約3.4mのやや歪んだ円形の竪穴住居址となった。入り口は特定できないが主軸方向は推定でN5°Wである。

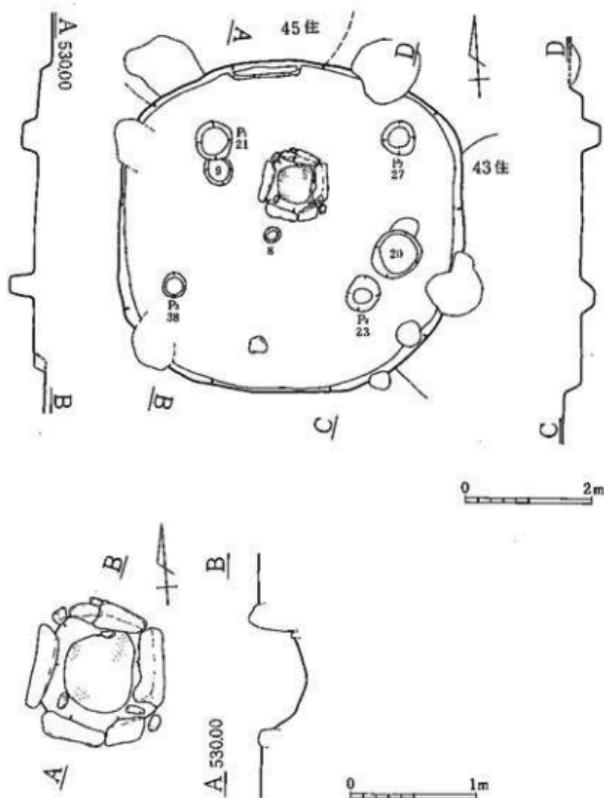
主柱穴は4本確認できたが、それ以外には床面に穴はなかった。主柱穴はいずれも平面形は円形を呈するが、大きさはまちまちである。深さは50～40cmと比較的しっかり掘られている。

床面は不明瞭で、北から南にむかってやや傾斜をしている。壁は比較的急角度に立ち上がって

おり、壁高は16~12cmはあるが、北西側の壁は少ししか残っていない。周溝は北側の壁直下に幅28cm、長さ1.2m、深さ4cmのものが一部残るのみである。

炉は住居址のほぼ中央にあり、大小の石を円形に近い方形に並べたもので、90×90cmある。深さは床面から24cmあり、炉の壁面と底部には深鉢の破片が敷き詰められていた。

遺物としては、炉に敷き詰められていた深鉢は胴部に綾杉文をもつ深鉢であり、ほぼ一固体分



挿図86 33号住居址

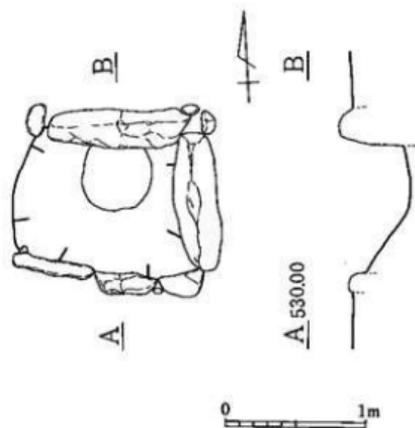
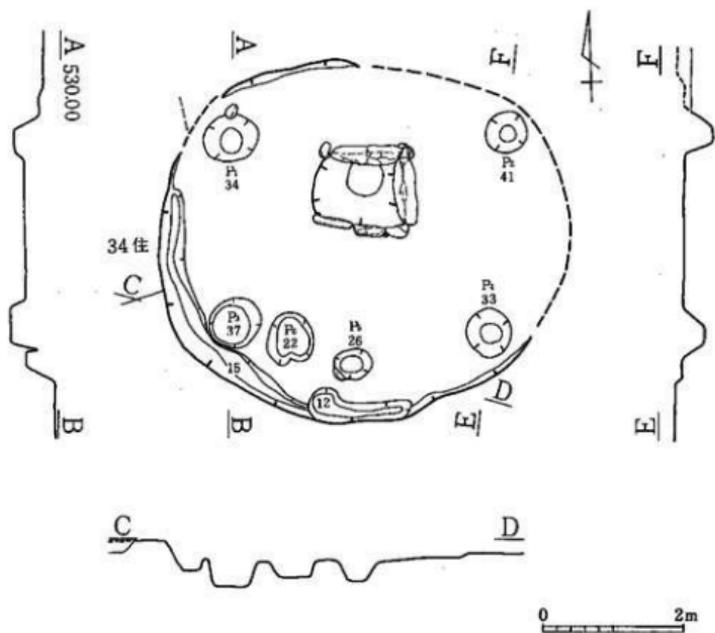


插图87 35号住居址

が出土した。その他にも、破片ではあるが同時期の土器片がある。

石器としては、西よりの主柱穴から 9×6 cmの黒曜石の塊が出土した。また、炉からは自然面が磨滅した 9×9 cmの緑色岩の破片が出土した。

出土した遺物から縄文時代中期後葉の遺構と判断できる。

(吉川 豊)

④38号住居址

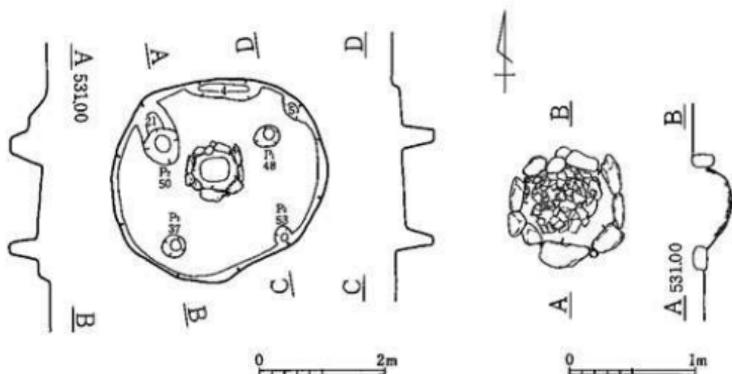
調査区北東で検出した。土坑66が住居ほぼ中央に掘りこまれている。住居址東側半分は耕作時に削平され、壁が確認できなかった。(5.1)×(5.5m)の不整楕円形と推測される。主軸方向は $N20^\circ W$ と推測される。床面は南西部に一部貼り床が見られたのみで他は軟弱である。壁は床面から急角度に立ち上がり、西側と東側に幅狭の周溝が約3mほどみられる。またP1とP4の間にもう一本周溝がみられることから、あるいは拡張されていることも考えられる。

柱穴はP1からP4の4本が考えられるが、住居址内部に多数の穴がみられ、詳細は不明である。また炉址は住居中央に掘り込まれた土坑によって壊されている。

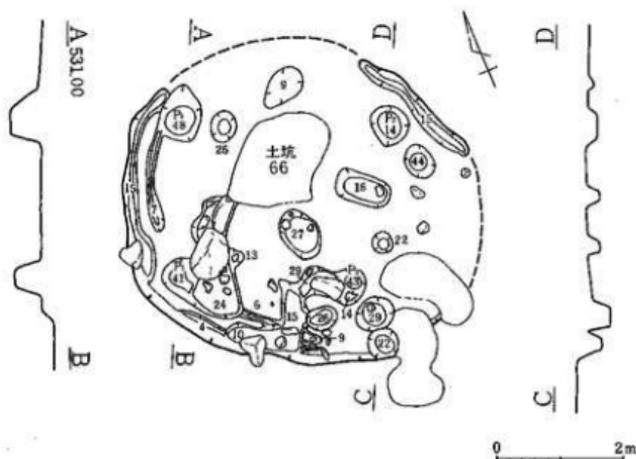
遺物は住居北東部に多く見られたが、その多くは小片である。また埋壁等も見られなかった。

住居の所属時期は遺物から縄文時代中期後葉と思われる。

(下平博行)



擇図88 37号住居址



樺図89 38号住居址

⑤39号住居址 (樺図90)

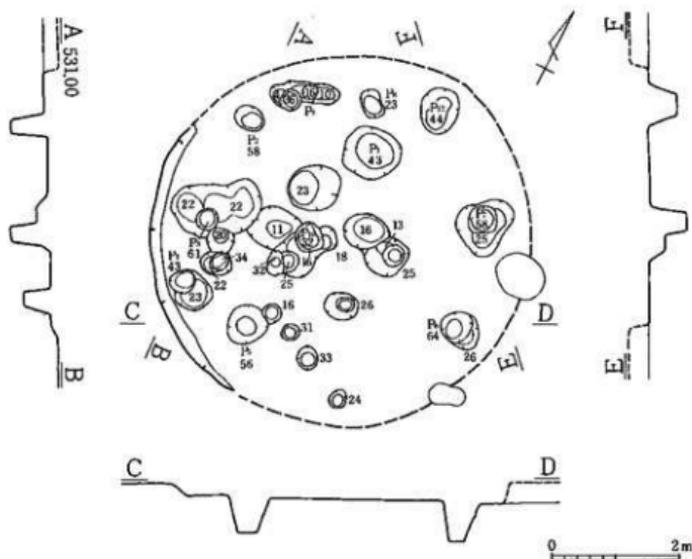
調査区の北東寄りAX13を中心に検出し、調査した。床と西側の壁が一部残っていたのみであるが、周囲の穴を含めて円形の竪穴住居址とした。

規模は直径6mの円形と見られる。入り口の特定はできないため柱穴の並びから軸方向はN27°Eと推定される。

支柱穴は6本確認できた。北にあるP8は楕円形で深さ44cm、北東にあるP7は、80cmの不整形の穴の西よりある40cmの隅丸方形の穴で、深さが58cmとしっかり掘られている。P6は東にあり、二段に掘られ最深部で64cmある。南側にあるP5は円形の平面形をしており、56cmの深さがある。南西のP3は大きな楕円形の穴の南側に掘られた、直径30cmの穴で深さは61cmある。北西にあるP2は他のものに比べれば掘り方は小さい楕円形であるが、深さは58cmとしっかり掘られている。中央やや東寄りに直径80cmの円形の穴がある。深さ40cmとしっかり掘り込まれていることから、貯蔵施設の可能性もある。

床面はP3とP4の間に貼床が残っているがそれ以外では確認できなかった。壁も最高壁高15cmのものが西側に一部確認できたのみで、その他の部分では削平のためわからなかった。

床の中央やや北西よりに直径80cmの円形で深さ23cmの穴がある。焼土等の出土はないが位置的に炉と判断できる。

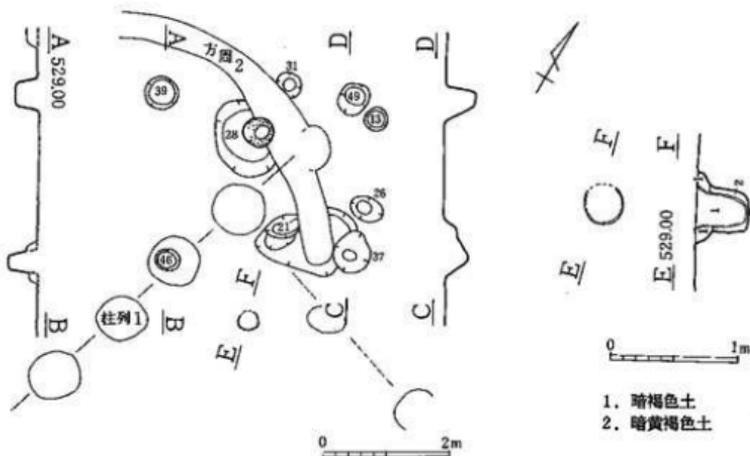


挿図90 39号住居址

遺物は、覆土中や柱穴等から比較的多量に出土している。土器では深鉢の破片が中心である。石器としては、打製石斧や横刃型石器と黒曜石の破片が出土している。遺物から縄文時代中期後葉の遺構である。 (吉川 豊)

⑥41号住居址 (挿図91)

Ⅲ区AE24を中心として検出した。遺構全体が削平されており、住居内施設のみ検出した。時期不明の方形周溝墓2・柱列址1に切られる。規模は不明であるが、主軸方向はN29°Wを示す竪穴住居址である。壁・床面とも削平され、不明である。主柱穴はP1～P4である。炉址は北西側主柱穴の中間よりやや内側に位置するが、方形周溝墓2とピットに切られており、詳細は不明である。炉底に焼土が認められた。埋甕は南東側主柱穴の中間よりやや外側に位置し、深鉢を正位に埋設する。



挿図91 41号住居址

遺物はほとんど出土しておらず、埋蔵が主な遺物である。
出土遺物より縄文時代中期後葉に位置づけられる。

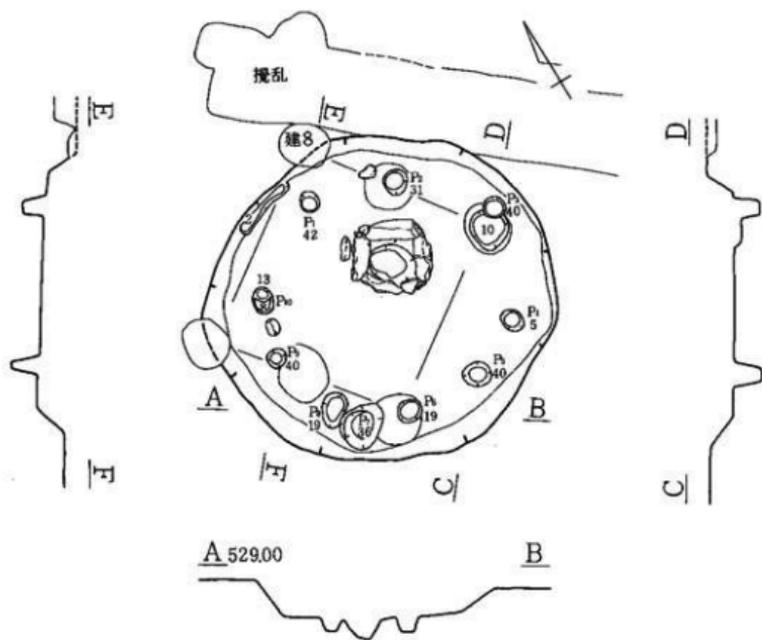
⑦42号住居址（挿図92）

Ⅱ区B X15を中心として検出し、中世の掘立柱建物址8に切られるがほぼ全体を調査した。4.4×4.8mのほぼ円形の竪穴住居址で、主軸方向はN36° Eを示す。覆土は上層が暗褐色土で下層が暗黄褐色土でいわゆるレンズ状堆積となっている。壁高は最大40cmを測り、ほぼ垂直な壁面をなす。床面はP3の周囲を除き、貼床で締まりがあり良好である。主柱穴はP1・P3・P5・P9の4本柱で、P7は入口施設と思われる。炉址は中央よりやや北東に位置する石囲炉で、1.1×1.1mの方形を呈する。焼土等は検出できなかった。

遺物は覆土上層から多く出土している。

出土遺物より縄文中期後葉に位置づけられる。

（吉川金利）



0 2m

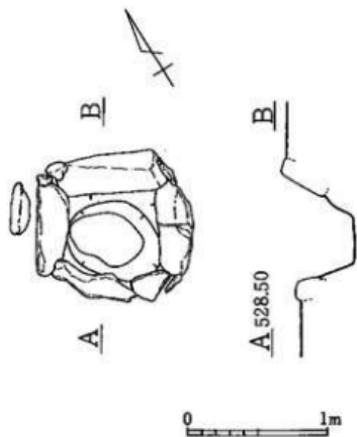
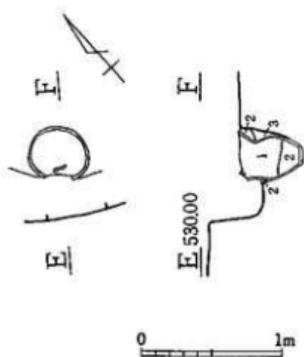
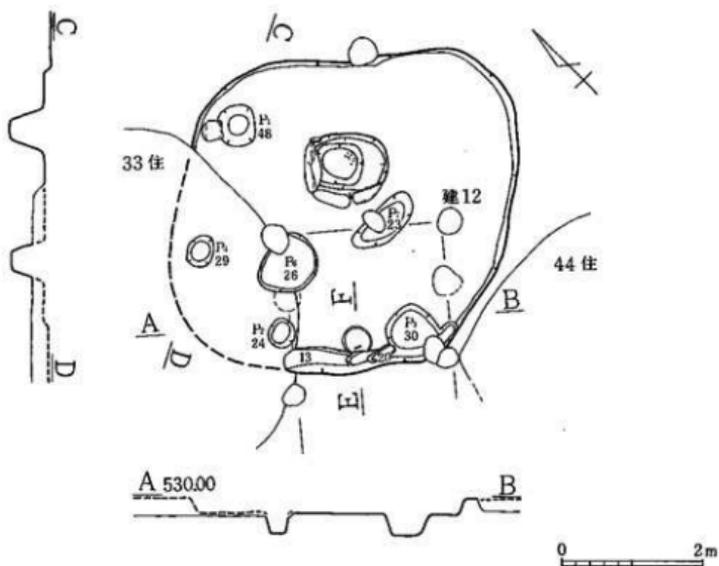


插图92 42号住居址



1. 暗褐色土
2. 褐色土
3. ローム

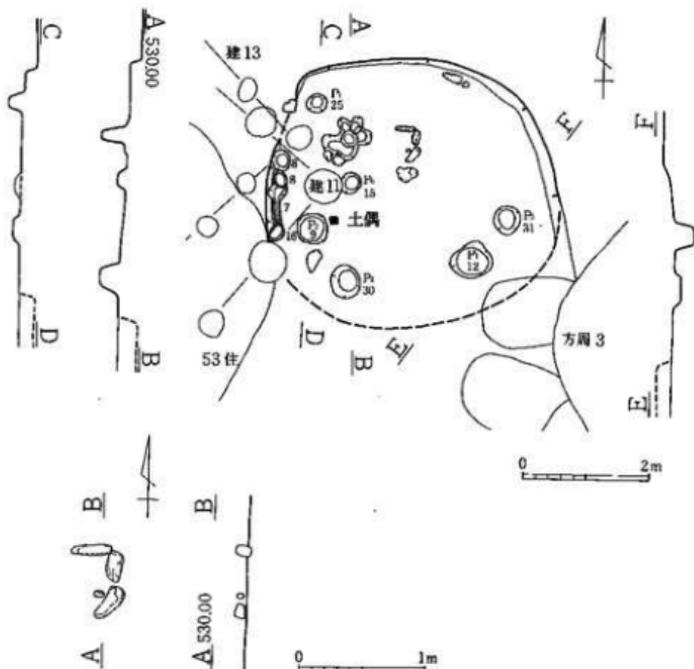
挿図93 43号住居址

⑧43号住居址 (挿図93)

33号住居址、掘立柱建物址12に切られる。推定規模4.6×4.4mのゆがんだ隅丸方形を呈する。主軸方向N45° E、深さ12~22cmを測る。本址の東側1/4弱はロームマウンドに切られており、支柱穴は4箇所に確認されたが本来は5本あったと思われる。床面は炉周辺が堅く締まる。埋壔は南西壁際のP2, P3の中間にある。中央やや北東壁寄りにある石囲炉は、ロームマウンドに半分を切られているため、石は北側と西側の2面が残るのみだが、炉の掘り込みは確認できた。

埋壔は一部を欠くことなく、深鉢1個体をそのまま使用している。口縁部にうずまき状の隆帯を施し、頸部から胴部にかけて連弧文がめぐる。他は破片資料である。石器には、花崗岩製石皿・砂岩製横刃型石器・石斧がある。

縄文時代中期後葉に比定される。



挿図94 44号住居址

④44号住居址(挿図94)

掘立柱建物址11、掘立柱建物址13に切られる。上部削平のため、南側壁面を確認できなかったが、主柱穴の位置から本址の規模が推定できる。規模4.2×4.6mの円形を呈するものと思われ、主軸方向N3°W、深さは北側で12~19cmを測る。主柱穴は5箇所に確認したが、柱の間隔からは北側にさらにもう1本あった可能性がある。北側のロームマウンド上にある石囲炉は、周辺の住居址に比べて小型の石を用いたもので、北と東側の一部を残すのみである。埋甕は確認できなかった。

覆土内より「河童型土偶」が出土したほかは、深鉢等の破片のみである。

縄文時代中期に比定される。

(渋谷恵美子)

④45号住居址(挿図95)

Ⅲ区AN12を中心として検出し、8割方調査した。縄文時代中期後葉の33号住居址に切られる。推定4.4×4.5mの円形の竪穴住居址で、主軸方向はN5°Wを示す。壁高は東側が削平されており不明であるが、最大14cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は貼床でしまりが良好である。壁際に主柱穴と思われるピットがあるが、断定できなかった。炉址は中央からやや北に位置する石囲炉で南側の一部の礎が抜かれている。炭・焼土は検出されなかった。埋甕は33号住居址周囲内で検出されたが破壊されており、深鉢の胴部下部のみ確認できた。なお、この埋甕は底部穿孔されていた。

遺物は覆土から多く出土している。

出土遺物より縄文中期後葉に位置づけられる。

(吉川金利)

④46号住居址(挿図96)

北側の溝址6に切られる。方形に近いびつな平面形を呈するが、規模4.1×4.2m、主軸方向N41°W、深さは6~12cmを測る。主柱穴は南に寄った位置に5箇所に確認した。石囲炉は中央やや南東寄りであるが、南側は後世の穴に切られている。埋甕は確認できなかったが、溝址6に切られている点を考慮しても、本址が33号住居址と同時期にあたることから、本来埋甕はなかった可能性がある。

本址に伴う遺物は少ない。結節縄文のある土器片のほか、土製円板2・黒曜石片が出土している。

縄文時代中期後葉に比定される。

(渋谷恵美子)

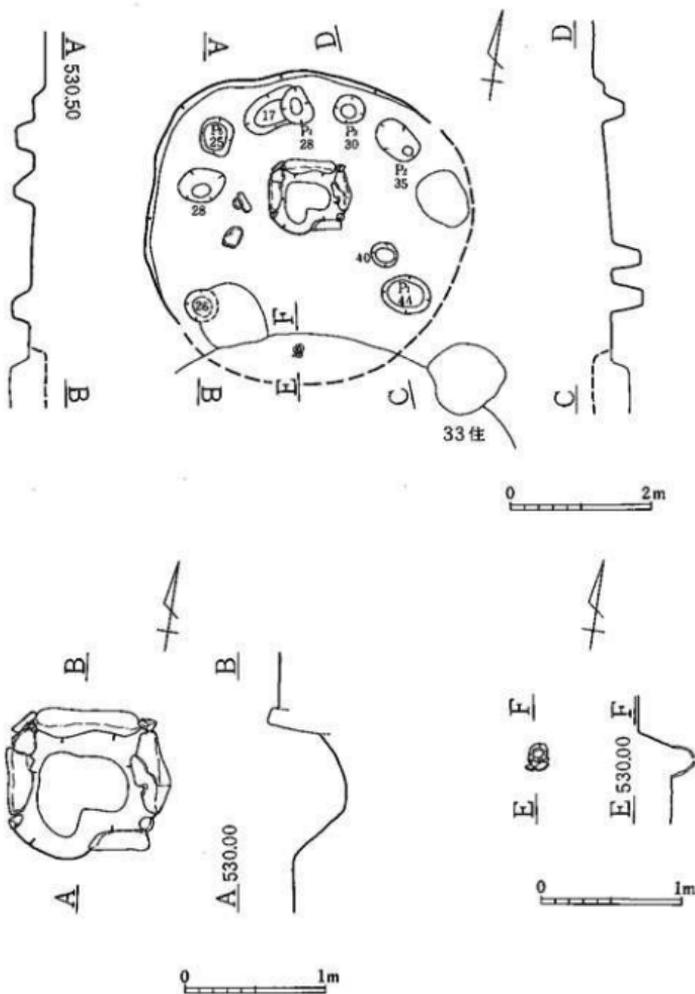


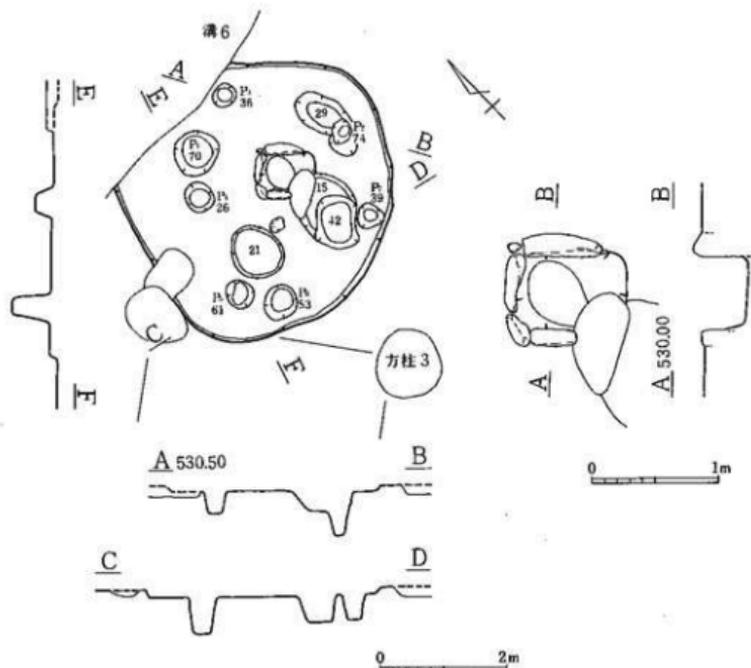
插图95 45号住居址

④47号住居址 (挿図97)

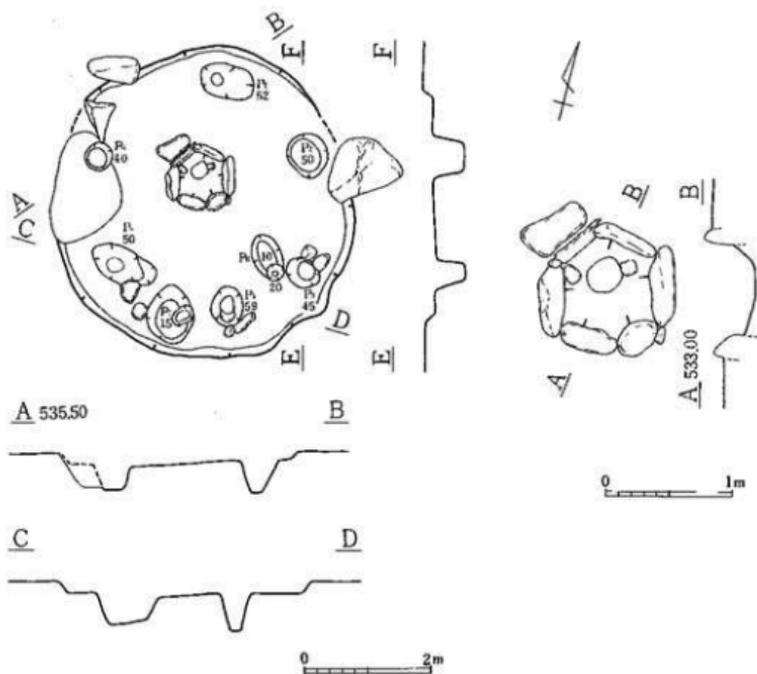
IV区BL30を中心として検出し、一部ピットに切られるがほぼ全体を調査した。4.6×4.7mを測る円形の堅穴住居址で、主軸方向はN42°Wを示す。壁高は一部削平されており、最大20cmを測り、ほぼ垂直な壁面をなす。また、北東壁は地山の大型の石を利用している。床面は極一部分に貼床があるが全般的に締まりはなく不良である。主柱穴はP1～P6で6本で構成されている。炉址は中央よりやや北西に位置する石囲炉で、1×1.2mの六角形を呈する。北西側に偏平礫を配置しており、使用痕等は確認できなかったが台石的に使用されたものと推定される。なお、焼土・炭等は検出されなかった。

遺物は覆土上層から多く出土している。

出土遺物より縄文中期後半に位置づけられる。



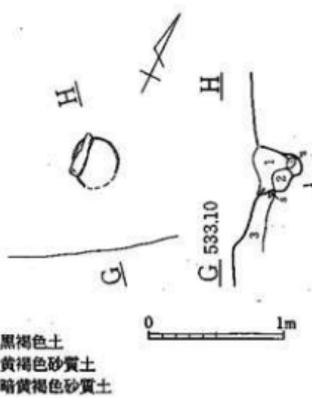
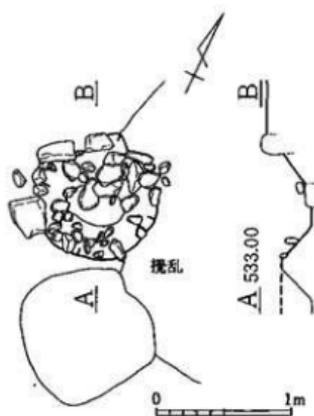
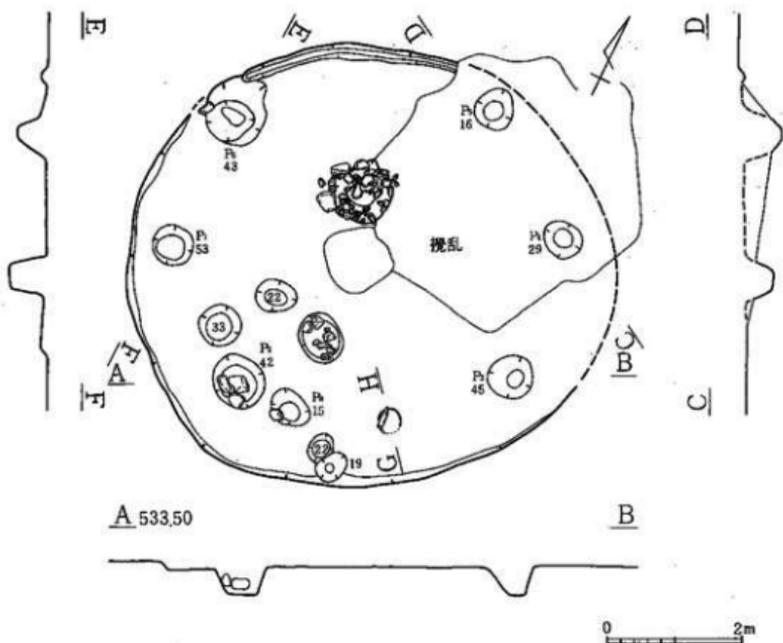
挿図96 46号住居址



挿図97 47号住居址

④48号住居址 (挿図98)

IV区BK34を中心として検出し、北東側は削平され、また攪乱に切られるため、全体の1/3程を調査した。縄文時代中期後半の埋設土器5に切られる。主軸方向が6.5mを測る楕円形の竪穴住居址で、焼失家屋である。主軸方向は $N26^{\circ}W$ を示す。壁高は最大16cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。北西側壁際に周溝を確認した。床面は焼失家屋のため、詳細は不明であるが、床面の焼土が地山のものとは異なっていたので貼床になっていたと思われる。主柱穴はP1～P6で、6本柱で構成されている。炉址は中央よりやや北西に位置し、 $0.9 \times 1.0m$ を測る石敷炉で、方形を呈すると思われるが、北～北東側は攪乱で破壊されている。拳大から人頭大の不定形の礫が敷き



1. 黑褐色土
2. 黄褐色砂質土
3. 暗黄褐色砂質土

插图98 48号住居址

詰められていた。炉址に伴う焼土等は確認できなかった。埋甕がP2とP3の間よりやや外側に位置する箇所で検出され、深鉢の底部を除く胴部下を正位に埋設する。また、上部の礫は埋甕とは直接関係ないものと思われる。本址は前述した如く焼失家屋であるが、覆土及び床面から炭化物は出土していない。

遺物は覆土下層から床面にかけて多く出土している。

出土遺物より縄文中期後葉に位置づけられる。

④49号住居址（押図99）

Ⅲ区A J 8を中心として検出し、奈良時代の掘立柱建物址9に切られるがほぼ全体を調査した。4.8×4.8mの方形に近い円形の堅穴住居址で、主軸方向はN19° Wを示す。壁高は約50cmを測り、ほぼ垂直な壁面をなす。周溝が壁下を全周している。床面は貼床で良好である。主柱穴はP1～P4である。南壁際のピットは入口施設と考えられる。炉址は中央よりやや北に位置する石囲炉で、1.3×1.3mの方形を呈する。南・西側の礫は抜石されている。炉底から深鉢の胴部下が検出された。また、炉底やや上部壁に焼土が確認された。

遺物は覆土上層から下層にかけて大型の礫と共に大量に出土している。

出土遺物より縄文中期後葉に位置づけられる。

⑤60号住居址（押図100）

Ⅲ区A D 13を中心として検出し、全体を調査した。縄文時代中期後葉の51号住居址を切る。6.6×6.0mを測る縦長の楕円形を呈する堅穴住居址で、増築された痕跡が見られる。主軸方向はN30° Eを示す。壁高は最大60cmを測り、ほぼ垂直な壁面をなす。周溝が壁下を全周する。床面は壁際を除きしまりがあり良好である。主柱穴はP1～P4で、P1・P2は増築前と兼用しており、4本柱で構成されている。炉址は増築前後とも同じ位置で、中央よりやや北東に位置し、推定1.4×1.4mを測る石囲炉で、方形を呈すると思われるが、抜石されており、炉底に落とされていた。また、南東側は後世のピットに切られている。増築前の本址は5.4×6.0mの方形に近い円形を呈し、南西側の壁の一部に地山の岩を利用し、周溝が壁下を全周する。主柱穴はP1・P2・P5・P6である。

遺物は覆土上層から多く出土している。

出土遺物より縄文中期後葉に位置づけられる。

⑤51号住居址（押図101）

Ⅲ区A D 13を中心として検出し、縄文時代中期後葉の50号住居址に切られるため、全体の1割

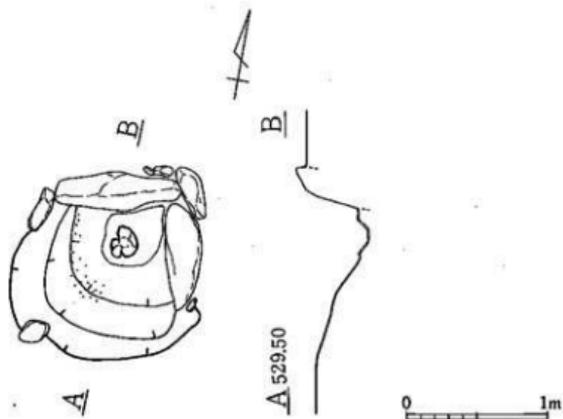
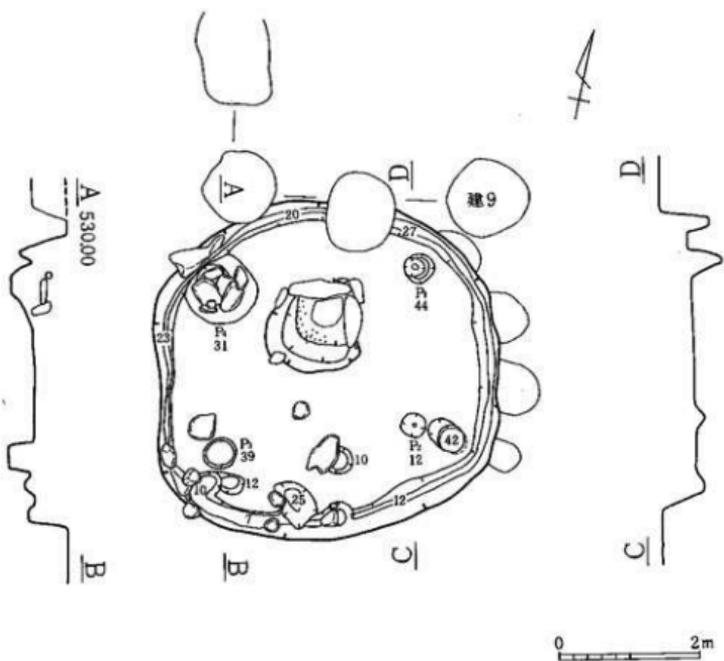
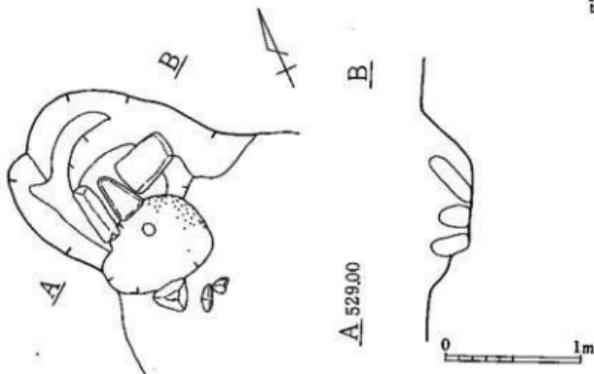
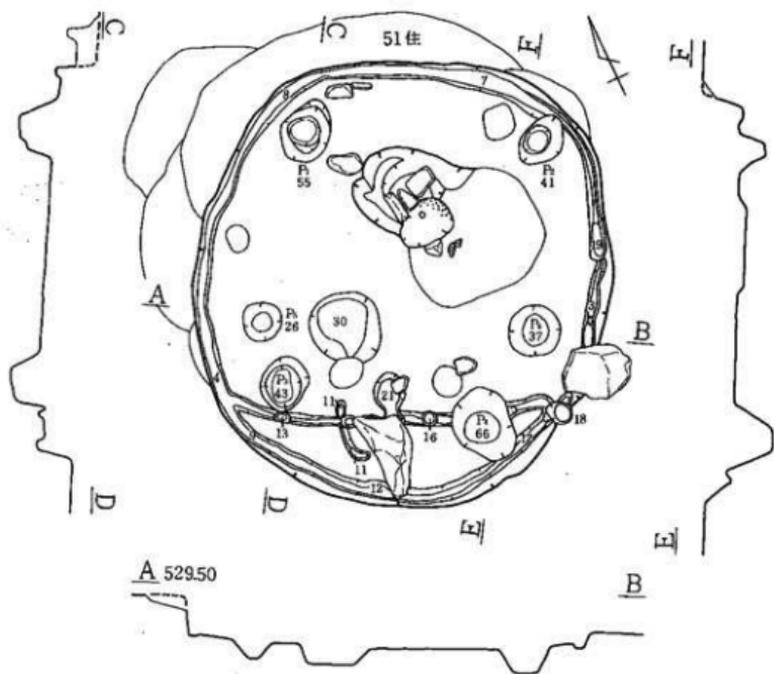


插图99 49号住居址



挿図100 50号住居址

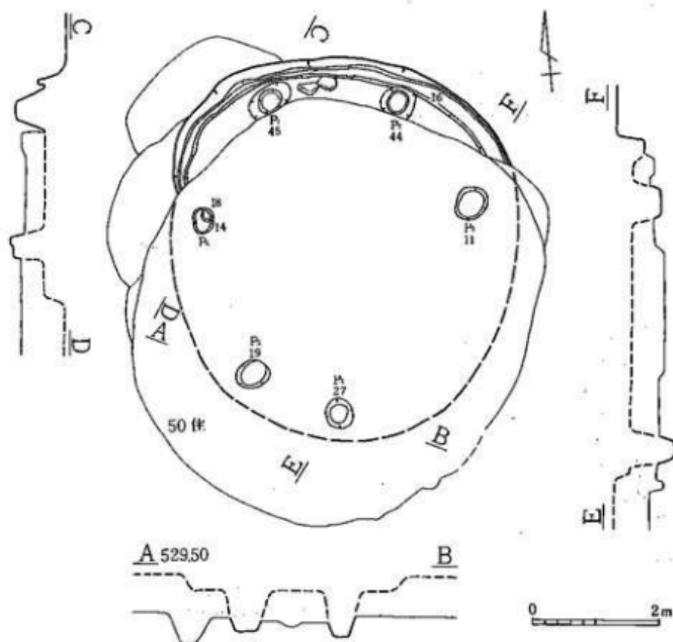
程調査した。規模等は不明であるが、円形を呈する竪穴住居址と思われる。主軸方向は主柱穴の構成の状況からN51°Wを示すと考えられる。壁高は最大44cmを測り、ほぼ垂直な壁面をなす。周溝が壁下を巡る。床面はしまりがあり、良好である。主柱穴は主柱穴はP1～P6で、6本柱で構成されている。炉址は切り合いのため、状況は不明である。

遺物は覆土上層から下層にかけて多く出土している。

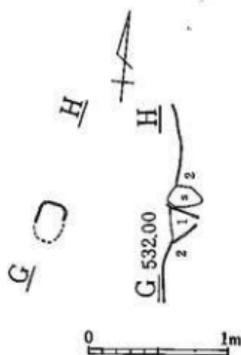
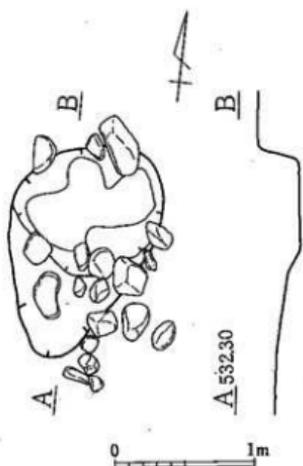
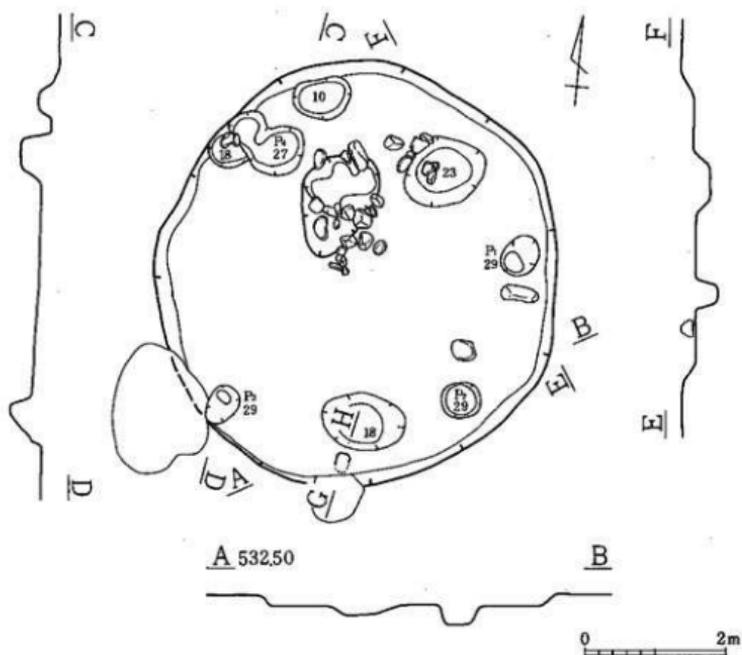
出土遺物より縄文中期後葉に位置づけられる。

㊦52号住居址 (挿図102)

IV区BF39を中心として検出し、縄文時代中期後葉の埋設土器6に近接している。規模は、6.0



挿図101 51号住居址



1. 暗黄褐色砂土
2. 暗黄褐色砂壤土
(单~人头大砾含砾)

插图102 52号住居址

×5.6mを測る円形を呈する竪穴住居址である。主軸方向はほぼ真北を示す。壁高は最大20cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はしまりがなく、不明瞭である。主柱穴はP1～P4で、4本柱で構成されている。炉址は後世の土坑により破壊されていると思われる。埋甕は南側壁直下で確認され、胴部下底部穿孔された深鉢が埋設されている。

遺物は覆土上層から下層にかけて多く出土している。

出土遺物より縄文中期後葉に位置づけられる。

(吉川金利)

㉔53号住居址(挿図103)

調査区中央やや北寄り、44号住居址の西側で検出し、完掘した直径5.6mの円形の竪穴住居址である。西側の床面は2.4mの隅丸方形の土坑により切られている。また、上面で検出できた掘立柱建物址11および13の柱穴により床や壁が切っている箇所がある。主軸方向はN17°Wを示している。

主柱穴は4本を確認できたが、位置的に考えると西側の土坑75の付近にもう1本あった可能性が強い。確認できた主柱穴の大きさや深さは東側と西側でかなり違っている。東側の2個は不整形円形ではあるが径80cm前後と大きく、深さも40cmを越えている。それに対し西側の2個は直径40cmの円形で深さも25cm前後と比較的浅いものである。

床は地形にあわせてあるのか、南に向かってやや傾斜している。また、床面は柔らかくはつきりしていない。床面では数個の柱穴が検出されたが、いずれも直径30cm前後の円形のものであり、住居内の空間利用施設に用いられたものと見られる。

壁は北側で壁高が24cmあり、急角度に掘り込まれているのに対し、南側では12cmと低く、掘り込みも緩やかである。

住居址の中央やや北寄りで、20cm前後の石を半円形に並べたところがあった。石で囲まれた80cm範囲内では焼土が確認できたため炉とした。この石組の炉の南側半分は石が抜き取られた穴で石は残っていなかった。

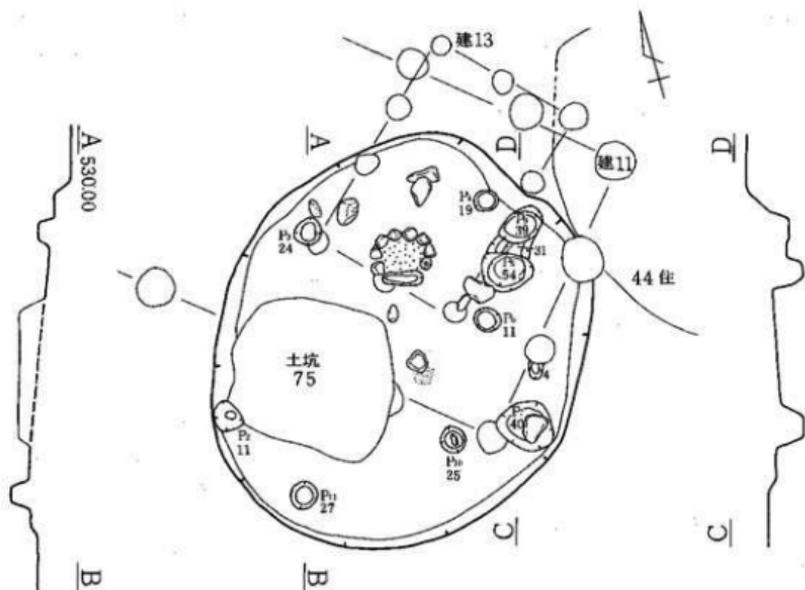
遺物は比較的多く出土している。土器としては、深鉢の破片がほとんどである。

一方石器としては、石鏃が2点完形で出土している。使用痕のある黒曜石の剥片や硬砂岩の横刃型石器も出土している。打製石斧は硬砂岩製のものが5点、緑色岩製のものが2点ある。さらに緑色岩製のものとチャートと見られる敲打器も出土している。

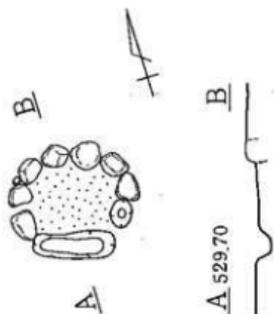
遺物から縄文時代中期後葉の遺構と判断できる。

㉔54号住居址(挿図104)

調査区の南端BY7を中心に検出したが、用地外にかかるため半分を調査するにとどまった。



0 2m



0 1m

插图103 53号住居址

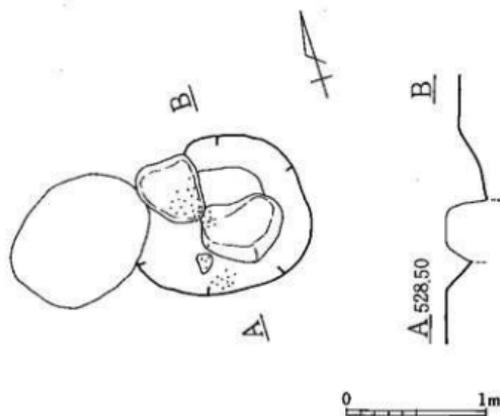
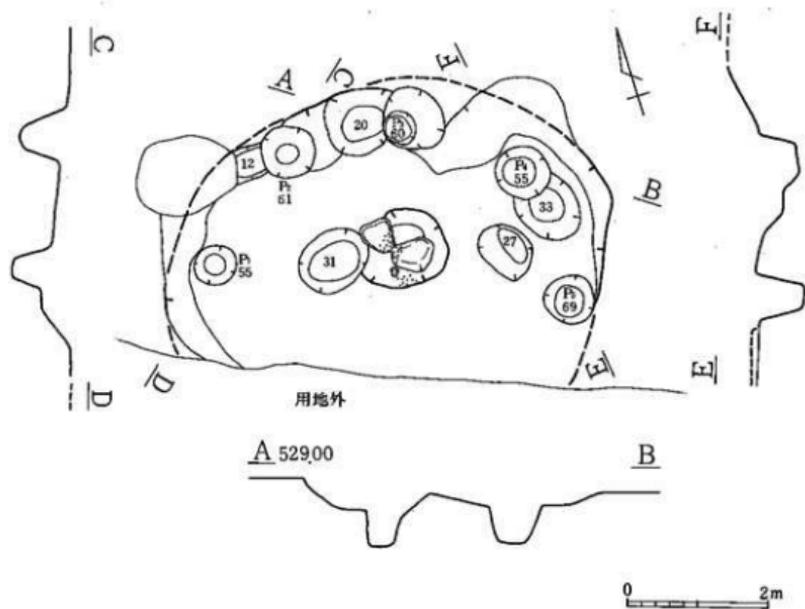


插图104 54号住居址

水田の造成により削平されたとみられる検出面は用地境に向かって傾斜していた。大きさは、推定ではあるが直径6mの円形の堅穴住居址である。

支柱穴と炉の位置は確認できたが、入り口部の特定ができず主軸方向はわからない。

支柱穴は5本が確認できたが、用地外にさらに存在するものと見られる。確認できた柱穴はいずれも70cm前後の円形を呈しており深さも60cm前後とほぼ一定である。

床面には地山の礫が露出しており、はっきりした箇所はない。壁、周溝ともほとんど残っていない。支柱穴の他に床面に数個の穴が確認できた。支柱穴より掘り込みが浅いことから、空間利用施設に用いられたものと見られる。

ほぼ中央に焼土と大きな石を2個伴う1.1mの穴があり、炉とした。これらの石の状況から炉は破壊されたものと考えられる。

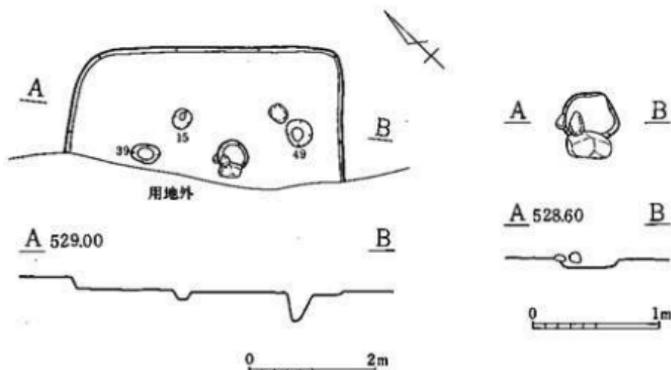
遺物は覆土中から多く出土している。土器としては深鉢の破片が中心である。石器では半分に分れた花崗岩製の石皿と緑色岩の敲打器が床直上から出土している。

この住居址の時期は遺物から判断すると縄文時代中期終末である。 (吉川 豊)

2) 弥生時代後期

①30号住居址 (挿図105)

調査区の南端に検出した。一部が調査区外にかかるため、約半分を調査したのみである。隅丸



挿図105 30号住居址

方形を呈し、主軸方向はN46° E、規模は北東側壁で4.3m、深さ6~16cmを測る。床面は堅く、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。主柱穴は確認できず、炉址は南端ある浅い掘り込みかとも考えられるが疑問もある。

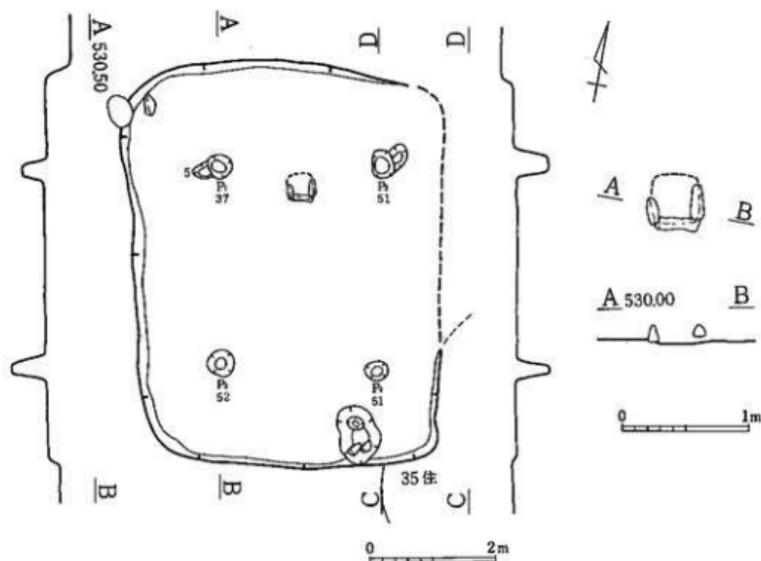
全面積の半分以下の調査のため出土遺物は少ない。

木葉痕のある壘の底部のほか、床面直上より刀子が1点、東側壁ぎわと住居址中央よりミニチュアが2点出土している。

時期判断の資料が少ないが、弥生時代後期に比定されるものと思われる。

②34号住居址 (挿図106)

35号住居址を切る。上部は削平されていたが、壁の一部と床面を確認できた。6.4×4.8mの隅丸長方形を呈し、深さ13~18cmを測る。主軸方向N12° W。4箇所に主柱穴を確認し、P1とP2間に方形の石囲があるが本址の炉と考えてよいか疑問もある。



挿図106 34号住居址

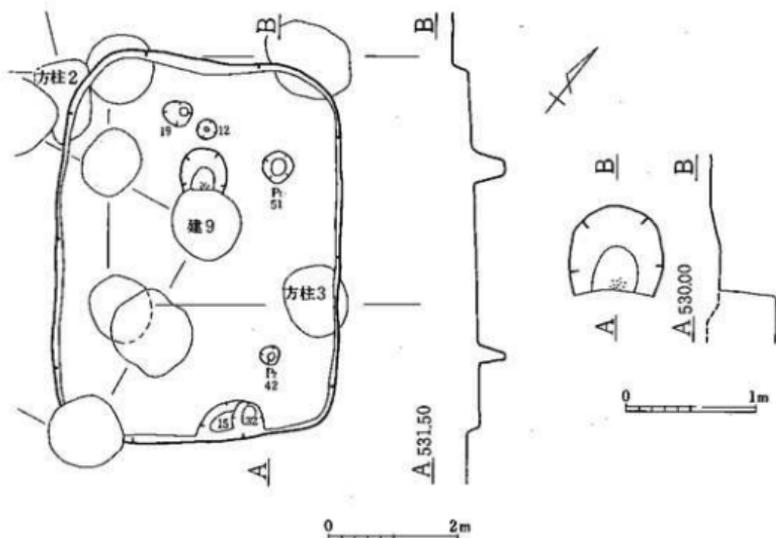
遺物の量は少なく、時期決定の良好な資料はない。北側壁中央からミニチュアの甕の一部が出土しているほか、波状文のある甕破片、有肩扇状形石器、石斧が出土している。

住居址の形態などから、弥生時代後期に比定される。

(渋谷恵美子)

③40号住居址 (押図107)

Ⅲ区AM8を中心として検出し、縄文時代中期後葉の方形柱穴列3を切り、奈良時代の掘立柱建物址9に切られるため、3/4程を調査した。5.9×4.4mを測る隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN36°Wを示す。覆土は黒褐色土の単層である。壁高は最大35cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は部分的にたたき状の箇所があるが全体的に柔らかく不良である。主柱穴はP1・P2で、4本柱で構成されると思われるが、他の2本は掘立柱建物址9に切られると考えられる。南東壁中央やや東寄りの柱穴は、入口施設と思われる。炉址はP1の南西側に位置する地床炉で、床面を単軸方向に71cm掘り凹めている。南東側が掘立柱建物址9に切られるため、炉縁石の有無は不明である。炉底には焼土を確認した。



押図107 40号住居址

遺物は覆土から多くが出土している。

出土遺物より弥生時代後期に位置づけられる。

(吉川金利)

3) 古墳時代後期

①29号住居址 (押図108)

調査区の南端に検出した。南側が調査区外になるため、住居址の約半分を調査したのみである。掘立柱建物址7に切られる。隅丸方形を呈し、主軸方向はN33° W、規模は調査をした北側壁部分で4.9m、深さ30~40cmを測る。床面は堅く、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。主柱穴を2箇所(P1, P2)と北側壁のカマドの東脇に貯蔵穴(P3)を確認した。カマドは袖と天井部分に石を用いる石芯粘土カマドで、残りは極めて良い。煙道部分も煙出し部分を除いてほぼ完全に残っていたが、その構築方法がトンネル状に掘り抜いていったものか上から掘り込み天井部分を作ったかは煙道の断面観察では判断できなかった。カマド中央には石の支脚があり長胴の甕が据えられていた。甕とともに高環も出土している。

出土遺物は北側壁際に集中し、土師器が主体となる。

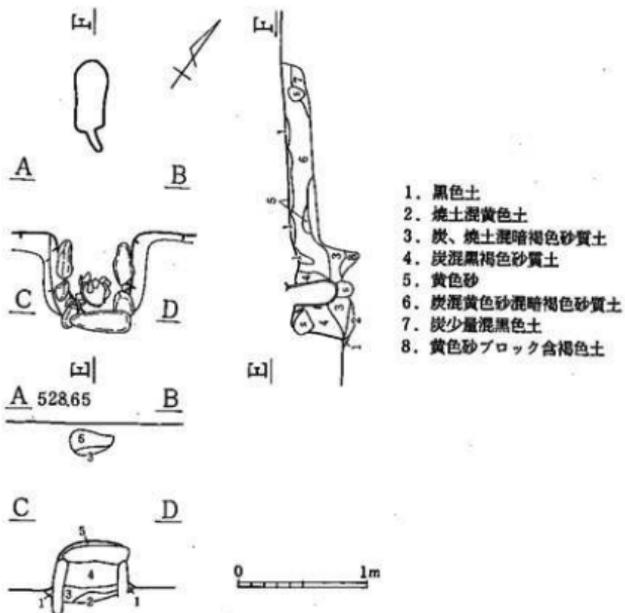
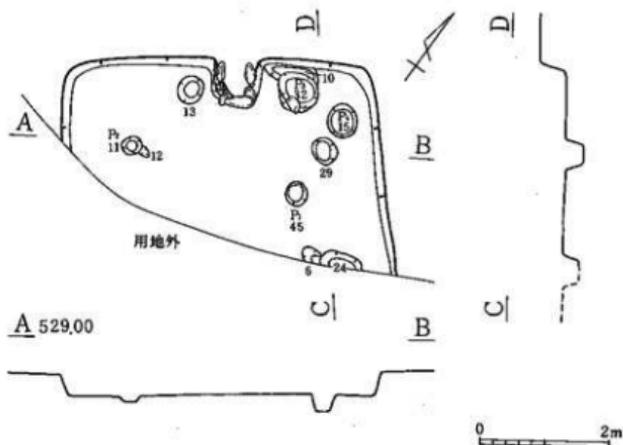
カマド内からは長胴甕1・環部に内黒処理された長脚の高環1・小型甕片が、吹き口部付近より長胴甕が出土している。貯蔵穴付近からは球胴の甕が、主柱穴間の床面より刀子が出土している。その他に環・内黒環・小型壺・壺・短脚の高環・甕片等があるが、特に環に楕円舟底状を呈するものがあることが特筆される。

古墳時代後期に比定される。

②31号住居址 (押図109)

調査区の南側に検出した。他の遺構との切り合いがなく、比較的良好な状態で全体を確認することができた。

隅丸方形を呈し、主軸方向N30° W、規模は、5.6m×6.0m、深さ44~48cmを測る。床面は一部壁際にやわらかい部分があるが、全体的には堅く締まっている。壁面は垂直に立ち上がる。主柱穴を4箇所に確認し、これから壁に平行して延びる溝があり、間仕切りがあったかと思われる。周溝はほぼ全周する。カマドの付け替えがなされている。最初に作られた西側壁中央のカマドは完全に壊され、住居址内には焼土が残っているのみであるが、住居址外の煙道は一部残存していた。二度目に作られたカマド(石芯粘土カマド)は北西壁中央に位置し、天井石ははずされていたが、煙道の一部と共に比較的残りは良い。カマドの両側には貯蔵穴があり、甕等がほぼ完全な形で出土している。本住居址は大型のものであり、カマドが2箇所にあることから住居址拡張の可能性も考えられるが、2つのカマドは壁の中央に位置し、拡張に伴う柱穴も確認できなかった。



挿図108 29号住居址

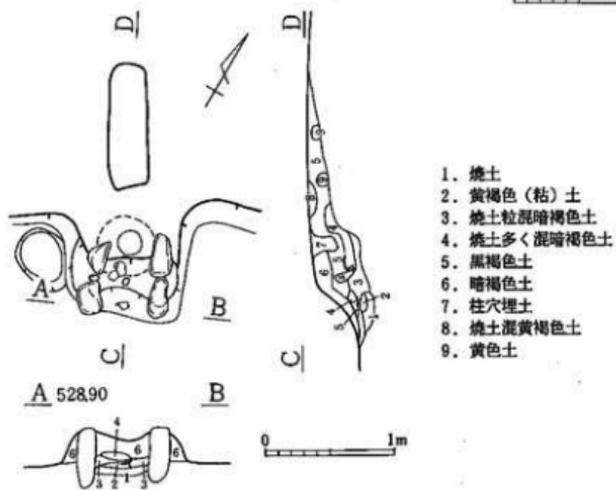
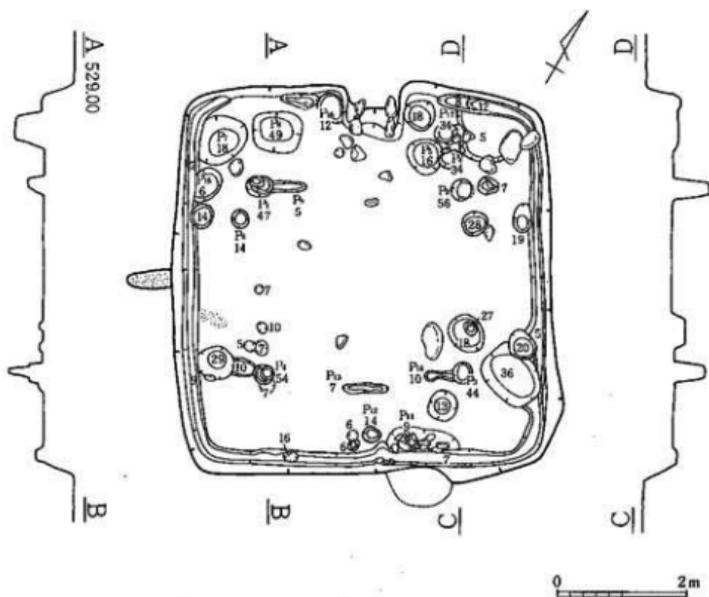


插图109 31号住居址

た。

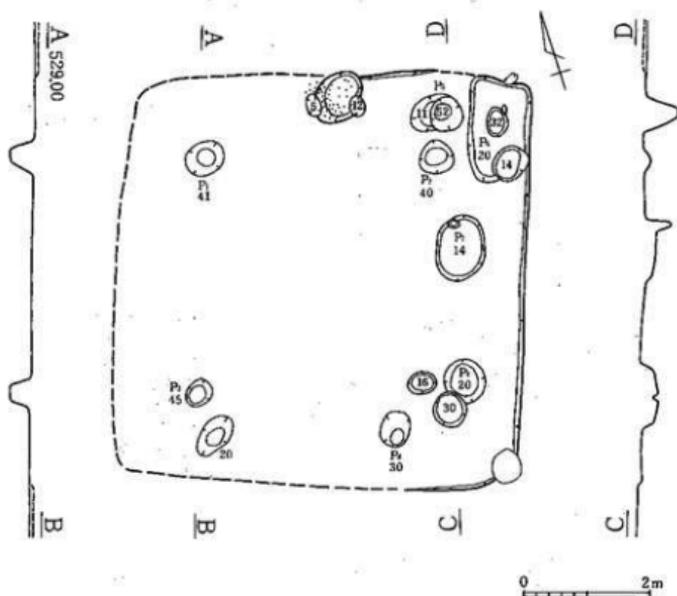
出土遺物は多く、土師器が主体となる。

甕・長胴の甕・小型の甕・長脚高坏・壺・内黒坏・坏・甌等がある。甕などに表面調整のかなり粗いものがみられる。須恵器は甕や波状文のある脚の一部などわずかな破片のみである。良好な遺物の出土状況であるにもかかわらず土師器の量に比べ、須恵器の絶対量が少ない。

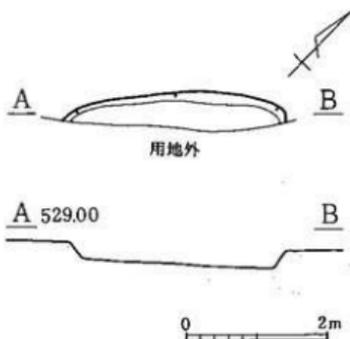
古墳時代後期に比定される。

③36号住居址 (挿図110)

調査区の東側に検出した。上部は削平されていたが、壁の一部とカマドの痕跡、支柱穴を4箇所に確認することができた。それから推定される本址の規模は約6.5m四方である。主軸方向はN21° E。カマドは10cm程度の浅い掘り込みと焼土と、袖石の抜取り痕が残るのみである。



挿図110 36号住居址



挿図111 32号住居址

上述の状況により良好な出土状況を示す遺物はない。量的には少ないが、東隅にやや集中している。須恵器の甕片のほか、東隅のP6より甕・内黒の小型壺・高坏脚部が、P5とP7より甕片が出土している。縄文時代中期の住居址（41号住居址）を切っているため混入品もある。

古墳時代後期に比定される。

（渋谷恵美子）

4) 時期不明

①32号住居址（挿図111）

調査区南東側、調査区際で検出された。大部分が調査区外にかかり詳細は不明である。壁の立ち上がりの状態が急なため、とりあえず住居址とした。北西壁の方向はN43° Eを示す。埋土は黒褐色土の一層である。

出土遺物はない。時期不明である。

（馬場保之）

(2) 方形柱穴列

①方形柱穴列2（挿図112）

Ⅲ区AM4で検出し、全体を調査した。3×1間の方形柱穴列で、桁行6.6m・梁行3.4mを測る。柱間は桁行が2.4～2.2mを測り、桁行方向はN59° Eを示す。柱廻り方は円形もしくは楕円形で径1.5～0.8m、深さ1.1～0.2mを測る。P5は内湾するが、多くがほぼ垂直な立上りをもつ。

遺物は覆土上層から下層にかけて全域で出土した。

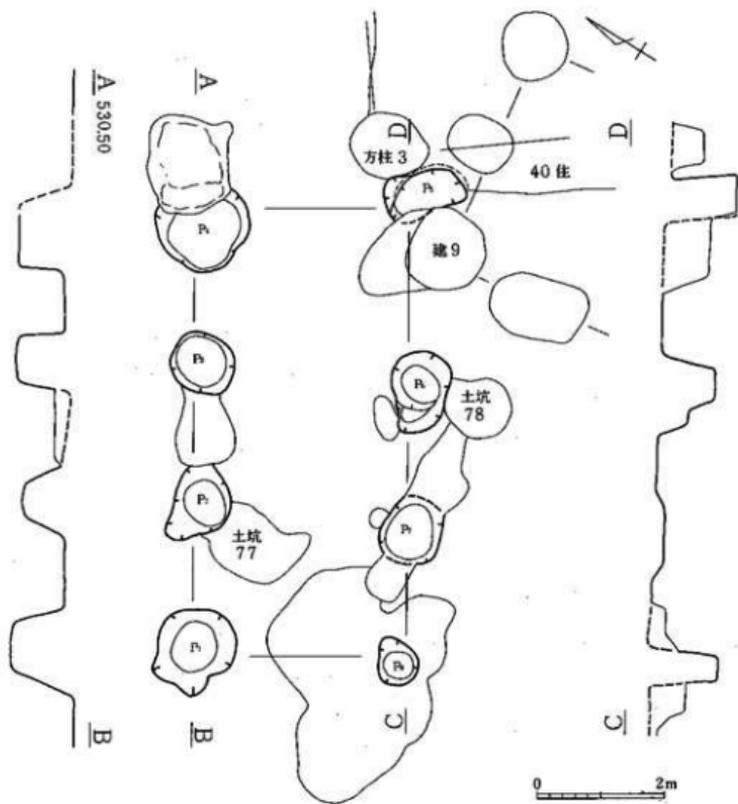
出土遺物より縄文時代中期後葉に位置づけられる。

②方形柱穴列3（挿図113）

Ⅲ区AM9で検出し、全体を調査した。2×1間の方形柱穴列で、桁行5.9m・梁行3.8mを測る。柱間は桁行が3.0～2.9mを測り、桁行方向はN52° Eを示す。柱廻り方は円形もしくは楕円形で径1.4～0.76m、深さ1.0～0.8mを測る。内湾するもの、ほぼ垂直な立上りをもつものとする。

遺物は覆土上層から下層にかけて全域で出土した。

出土遺物より縄文時代中期後葉に位置づけられる。

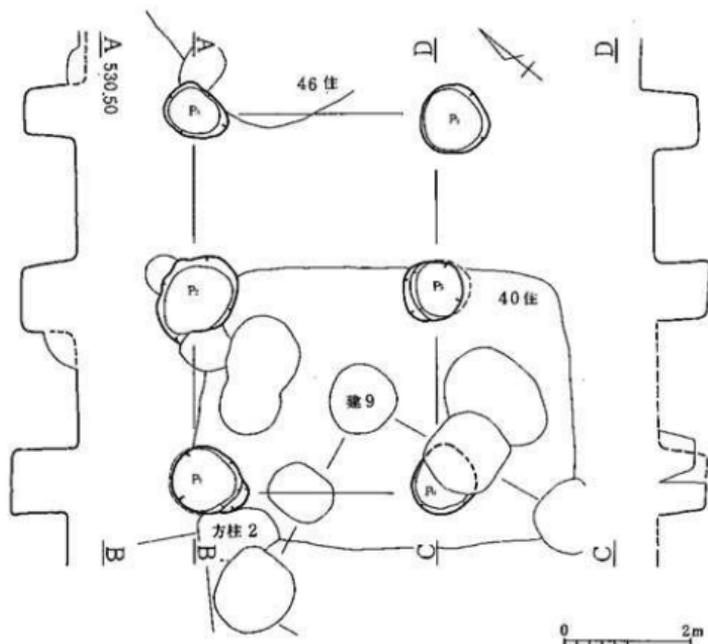


挿図112 方形柱穴列2

(3) 掘立柱建物址

①掘立柱建物址7 (挿図114)

調査区の南側に検出した。29号住居址を切る。同址との重複により柱穴のすべてを確認できておらず、現状では桁行3間×梁行2間の掘立柱建物址となるが、さらに南側に広がる可能性もある。



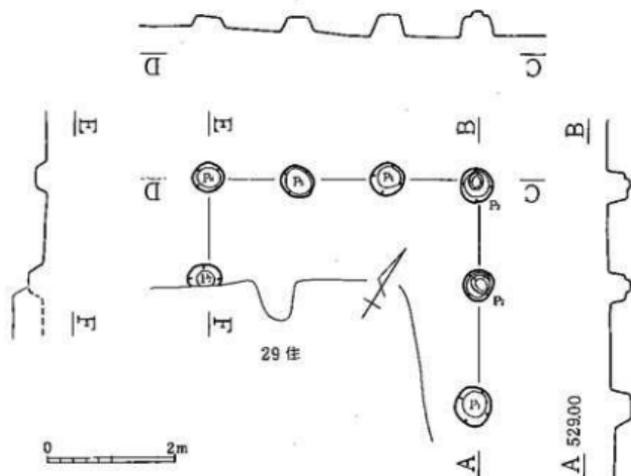
挿図113 方形柱穴列3

芯々距離で東西方向に4.2m、南北方向に3.5mである。柱穴の掘り方は隅丸方形で、縄文土器片、黒曜石片、土師器片が出土しているが混入品であり、本址の時期決定には至らない。

②掘立柱建物址8 (挿図115)

調査区の南側に検出した。42号住居址を切る。桁行2間×梁行1間の側柱建物址である。芯々距離で桁行2.8m、梁行3.2m、桁行方向N36°W、柱穴の掘り方は方形を呈する。柱穴内からの遺物は縄文土器、土師器、石器類等の混入品であり、本址に直接伴うものではない。

(渋谷恵美子)



挿図114 掘立柱建物址7

③掘立柱建物址9 (挿図116)

調査区の中央部、40・49号住居址、方形柱穴列2・3を切って検出された。2間×2間、規模4.7×4.7m、芯々で3.7×3.7mの側柱の建物である。柱間寸法は桁行・梁行とも185cmで、桁行方向はN10°Wを示す。掘り方は95~150cmの不整円・方形・長方形を呈し、ばらつきがある。急角度で掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。掘り方が巨大なのに対し、柱痕はかなり貧弱である。柱痕は径25~50cmの不整円形を呈しており、掘り方底面までは達していない。深さは40~48cmで隅柱が深い。埋土は黒褐色土と明黄褐色土の互層でよく叩き締められており、柱がしっかりと固定されていたと考えられる。

出土遺物は、土師器甕・坏・高坏、須恵器甕、砥石等がある。

出土遺物等から、奈良時代の建物址である。

(馬場保之)

④掘立柱建物址10 (挿図117)

方形周溝墓3を切る。方形周溝墓と同様に南東側を削り取られており、全体を把握できなかった。東西方向に3間、南北方向に2間の側柱建物址であるが、南東側に広がる可能性もある。現

状では芯々距離で東西方向に3.9m、南北方向に2.3mを測る。柱穴からの出土遺物は縄文土器等の混入品であり、本址に直接伴うものではない。

⑤ 掘立柱建物址11(挿図118)

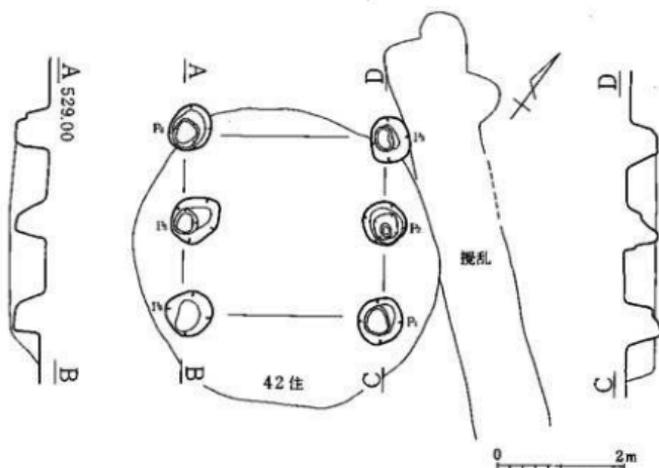
33・44・53号住居址、掘立柱建物址12を切る。掘立柱建物址13と重複するが、両者には切り合いがなく、新旧関係を把握できなかった。他の遺構との重複により、一部柱穴を確認できなかったが、桁行4間×梁行3間の側柱建物址である。芯々距離で桁行6.8m、梁行4.2m、桁行方向N51°Wを測る。

柱穴からの出土遺物は縄文土器片、石斧等で混入品とみられ、本址に直接伴うものではない。

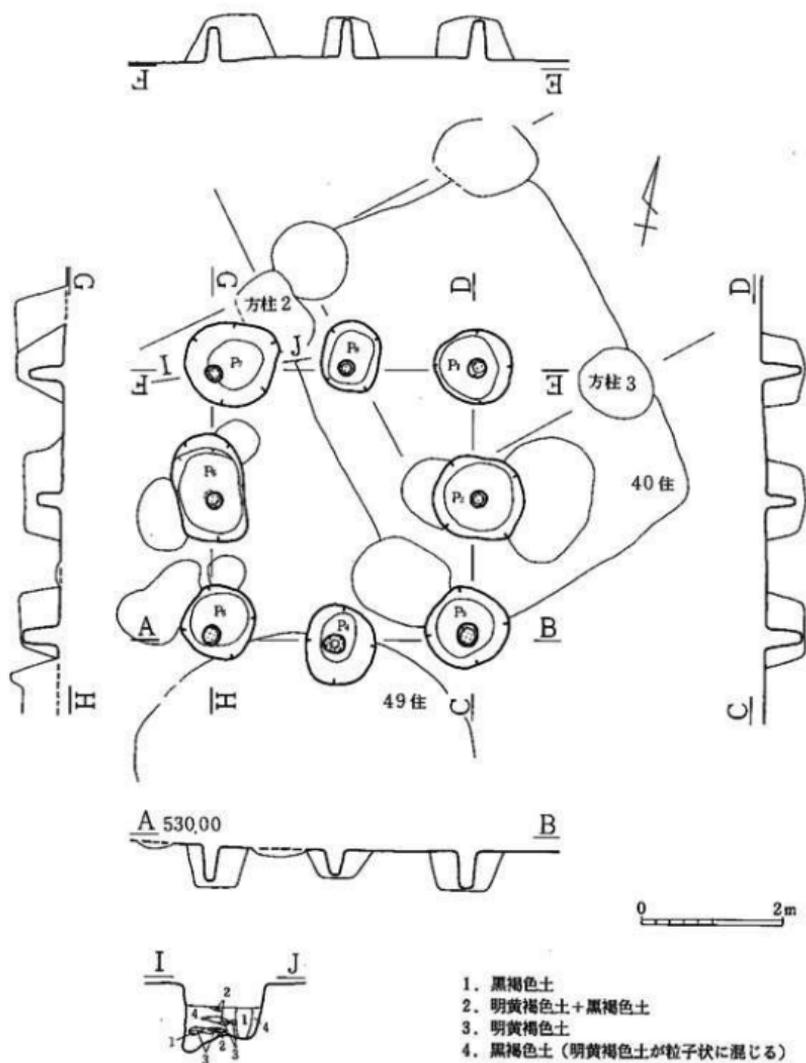
⑥ 掘立柱建物址12(挿図119)

33・43号住居址を切り、掘立柱建物址11に切られる。1箇所柱穴を確認できなかったが、桁行3間×梁行1間の側柱建物址である。芯々距離で桁行3.2m、梁行2.2m、桁行方向N41°Eを測る。

柱穴からの出土遺物は縄文土器片等で混入品とみられ、本址に直接伴うものではない。



挿図115 掘立柱建物址 8



挿図116 孤立柱建物址9

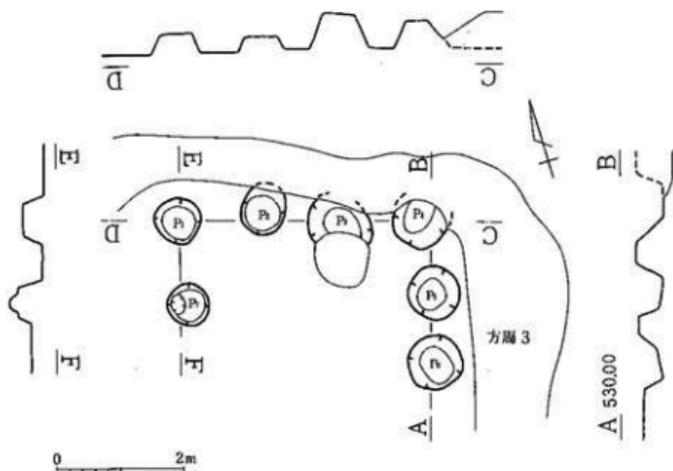


插图117 掘立柱建物址10

⑦掘立柱建物址13 (挿図120)

44・53号住居址を切る。桁行3間×梁行2間の側柱建物址である。芯々距離で桁行3.2m、梁行2.2m、桁行方向N45°Eを測る。

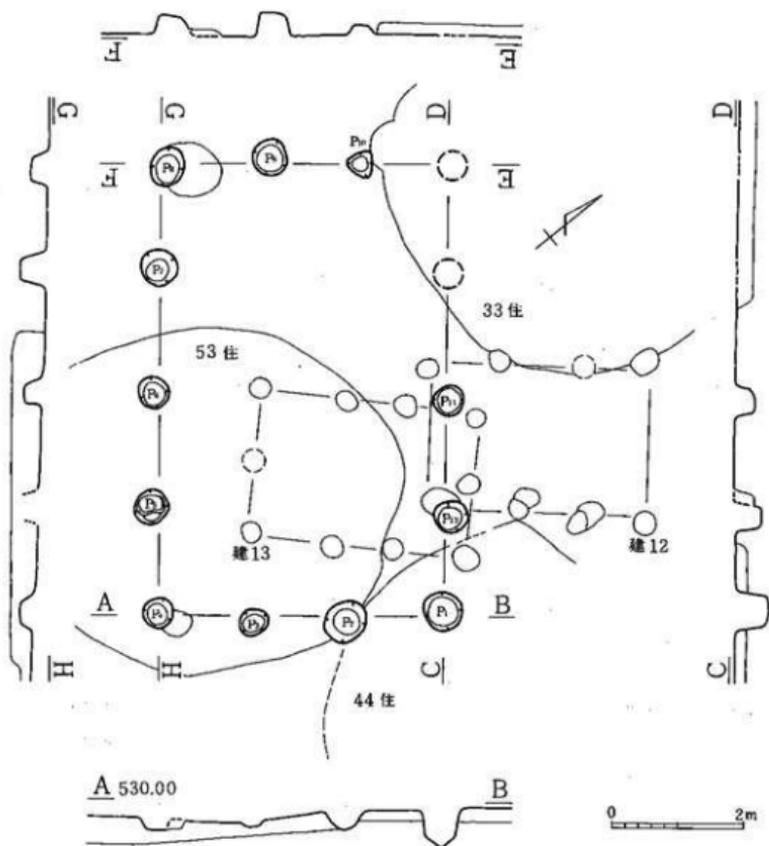
柱穴からの出土遺物は縄文土器片等で混入品とみられ、本址に直接伴うものではない。

本址は、掘立柱建物址12と梁行の間数こそ異なるが、規模・桁行方向とも同じであるが、両者の柱穴の切り合いがなく、新旧関係を把握できない。掘立柱建物址11・12・13は、縄文時代の住居址と重複し、同時代の遺物包含層を掘り込んでいるため、柱穴を確認することはできたものの時期については把握できない。周辺にはいくつかのピットがあり、他にも掘立柱建物址がある可能性もある。

(4) 柱列址

①柱列址1 (挿図121)

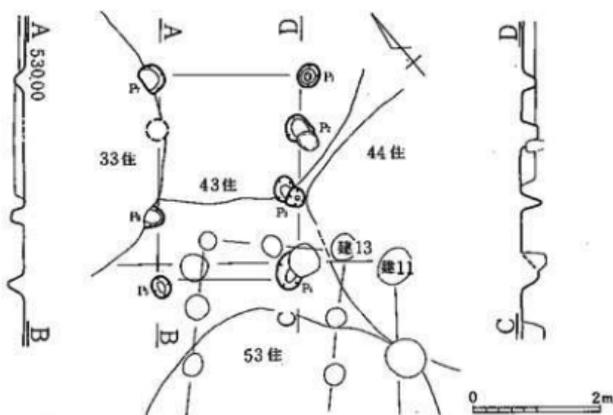
南北に並ぶ6つの柱穴を確認した。東側にも2つ同様のピットがあるが調査区外にかかることから、本址が掘立柱建物であるのか、他の遺構になるのかは不明であるため、便宜上柱列址とし



擇図118 掘立柱建物址11

て記述する。方形周溝基2・41号住居址を切る。南北方向の芯々距離は7.2m、主軸方向N19°Eである。

柱穴内からは縄文土器片が出土しているのみであり、本址の時期は不明である。



挿図119 掘立柱建物址12

(5) 方形周溝墓

①方形周溝墓1 (挿図124)

西側の一部を調査したのみで、そのほとんどの部分が調査範囲外で削り取られているため、その全体を把握できなかった。本址の西側にある方形周溝墓2に切られる。確認できた部分での溝の幅1.0~1.4mを測る。

前述のような状況から、本址に伴う資料は確認できない。

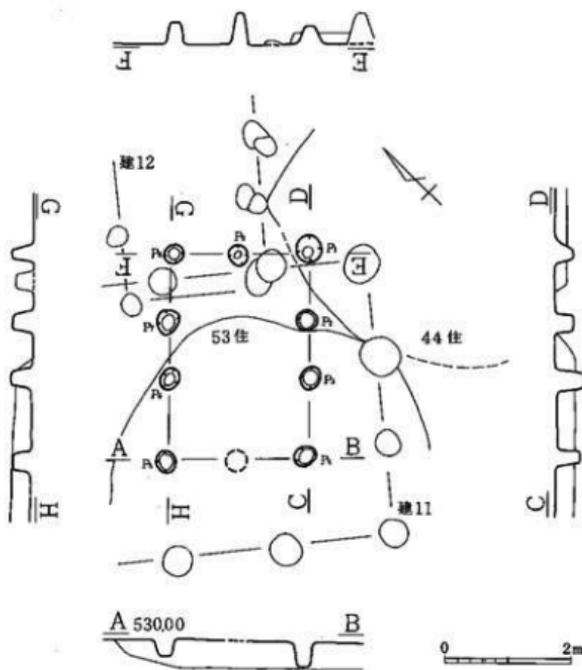
②方形周溝墓2 (挿図124)

方形周溝墓1、41号住居址を切り、柱穴址1に切られる。やや円形に近い方形を呈し、規模7.2m、溝の幅0.6~0.3mを測る。上部は削平され、主体部を確認することはできなかった。

周溝内からは縄文土器片や土師器片が出土しているが、本址に確実に伴うものはない。

③方形周溝墓3 (挿図125)

上部及び南東部の半分を削り取られており、主体部を含めて全容を把握できなかった。掘立柱

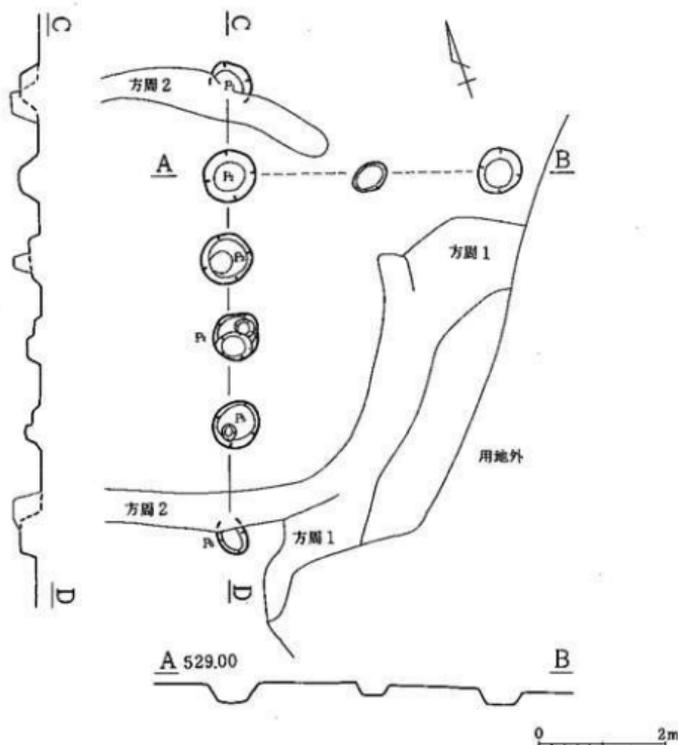


挿図120 独立柱建物址13

建物址10に切られる。確認できた部分での規模は約9.2m、溝の幅0.8~1.3mを測る。

縄文土器片等が周溝内より出土しているが、方形周溝墓1・2同様確実に伴うものはない。

方形周溝墓については、それぞれの時期の把握ができないため推定でしかないが、1と3については、周溝の規模・方向がほぼ同じであると思われることから、同時期のものである可能性が高い。
(渋谷恵美子)



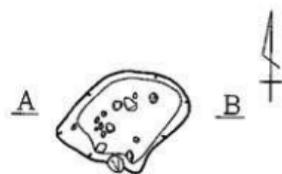
挿図121 柱列址1

(6) 竪穴

①竪穴2 (挿図126)

IV区AR6で検出し、全体を調査した。1.6×1.3m、深さ44cmを測る楕円形の竪穴で、長軸方向はN12°Wを示す。やや緩やかな立上りをなす。覆土上層から拳大から人頭大の礫が確認され、出土遺物に二次焼成を受けた摺鉢が出土しているので火葬墓の可能性も指摘しておく。

遺物は前述の近世の摺鉢と流れ込みと思われる縄文土器片・弥生土器片が出土している。出土遺物より近世に位置づけられる。



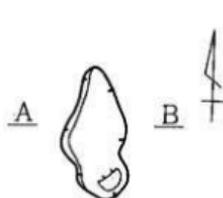
A 531.00 B

土坑 66



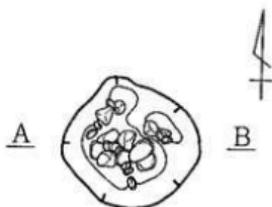
A 531.00 B

土坑 67



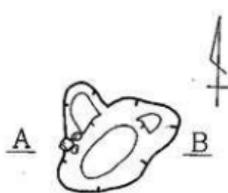
A 531.00 B

土坑 68



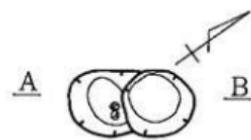
A 531.00 B

土坑 69



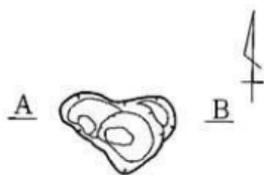
A 531.00 B

土坑 70



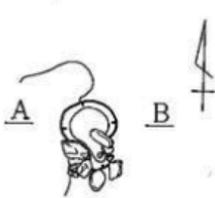
A 531.00 B

土坑 71-72



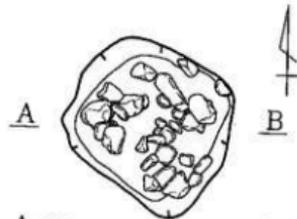
A 531.00 B

土坑 73



A 531.00 B

土坑 74

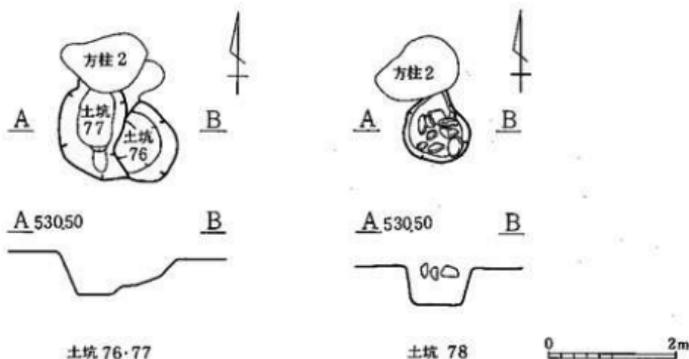


A 530.00 B

土坑 75

0 2m

插图122 土坑66~75



挿図123 土坑76~78

② 竪穴 3 (挿図126)

IV区AQ1で検出し、全体を調査した。1.9×1.1m、深さ52cmを測る長方形の竪穴で、長軸方向はN12°Wを示す。やや緩やかな立上りをなす。底部よりやや浮いた位置で人頭大の礫を確認し、底部に2箇所の落ち込みを確認した。

遺物は縄文土器片が数点出土している。

出土遺物より縄文時代中期後葉に位置づけられる。

(吉川金利)

(7) 竪穴状遺構

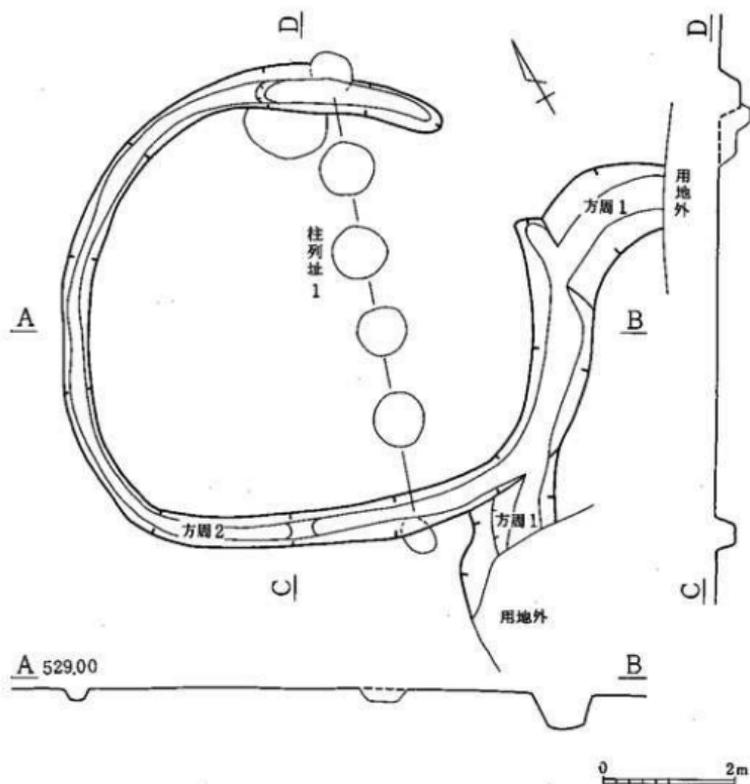
① 竪穴状遺構 1 (挿図127)

方形周溝墓3の北側にごく浅い不定形の掘り込みを確認した。縄文土器片がわずかに出土したのみで、性格等は不明である。

(8) 溝址

① 溝址 6

46号住居址の北側にあり、同住居址を切る。一部を調査したのみで全体を把握していない。中世のものと考えられるが、性格は不明である。



挿図124 方形周溝墓1・2

(9) 溝状址

①溝状址10 (挿図128)

調査区の西側で検出した長さ約2.2mの溝状の遺構である。縄文土器が出土しているが、性格は不明である。(渋谷恵美子)

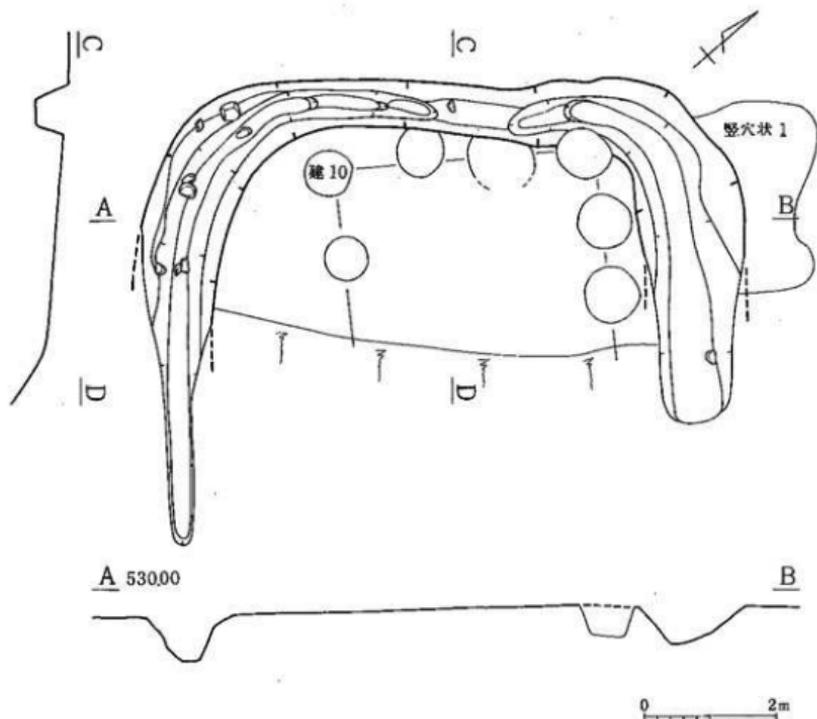
00 火葬墓

①火葬墓1 (挿図129)

A W 6 で検出した1.9×1.4mの円形の落ち込みである。西側は水田の畦畔で壁の一部が切られている。深さは28cmと浅く、底は平坦である。覆土中には拳大の石があり、南東の壁際に集まっていた。これらは人為的に入れられたものと見られ、骨片の出土はなかったが、状況から火葬墓と判断した。

壁は全体に緩やかな立ち上がりをしているが、北西の壁際には0.5×0.3mの穴により切られている。

遺物としては瀬戸産の灰釉菊皿の破片が出土しており、中世に属するものである。(吉川 豊)



挿図125 方形周溝墓3

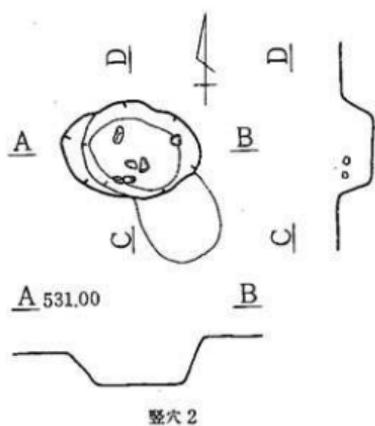


插图126 竖穴 2·3

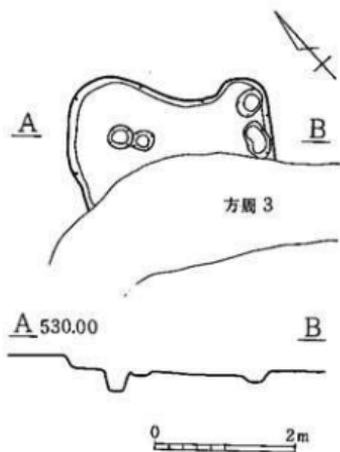


插图127 竖穴状遺構 1

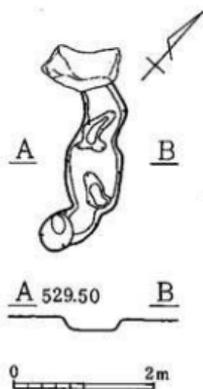
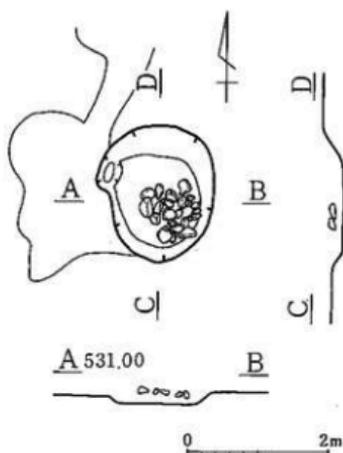


插图128 溝状址10



挿図129 火葬墓 1

遺物より縄文時代中期後葉に位置づけられる。

③埋設土器 4 (挿図130)

Ⅲ区A F 15で検出し、全体を調査した。底部を欠く胴部のみを深鉢を埋設する。本址の性格を位置づける痕跡は確認できなかった。

遺物より縄文時代後期に位置づけられる。

④埋設土器 5 (挿図130)

Ⅳ区B L 33で検出し、全体を調査した。縄文時代中期後半の48号住居址を切る。口縁部から頸部までの深鉢を埋設する。掘り方は明確には確認できなかった。

遺物より縄文時代中期後葉に位置づけられる。

⑤埋設土器 6 (挿図130)

Ⅳ区B F 41で検出し、全体を調査したが、土器内埋土は調査前に掘ってしまった。深鉢の胴部の一部を埋設する。掘り方は確認できなかった。

00 埋設土器

①埋設土器 1 (挿図130)

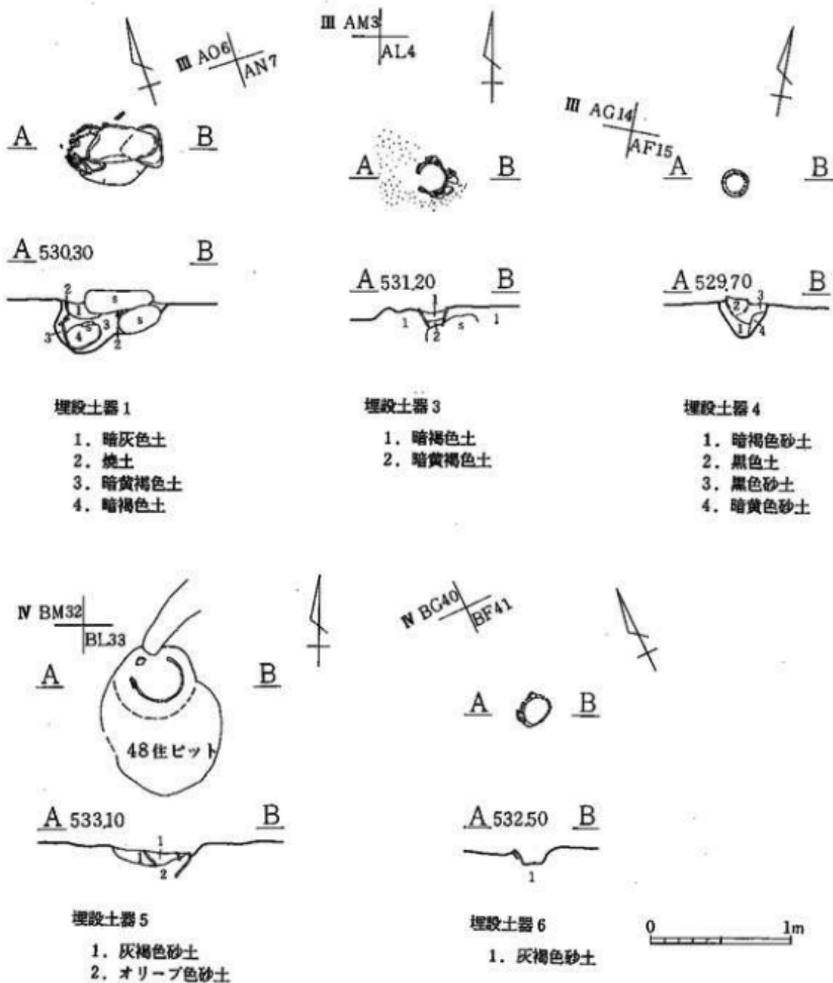
Ⅲ区AN 5で検出し、全体を調査した。縄文時代中期後葉の方形柱穴列2を切る。南東側壁下に、頸部から上を除く深鉢を埋設する。掘り方内からは人頭大の礫が確認された。また、焼土が検出され、炉的な使用も考えられる。

切り合い関係・遺物より縄文時代後期に位置づけられる。

②埋設土器 3 (挿図130)

Ⅲ区A L 4で検出し、全体を調査した。底部を欠く胴部のみを深鉢を埋設する。掘り方は確認できなかった。周囲に焼土を確認したが、埋設土器内では確認できなかった。

遺物より縄文時代中期後葉に位置づけられる。

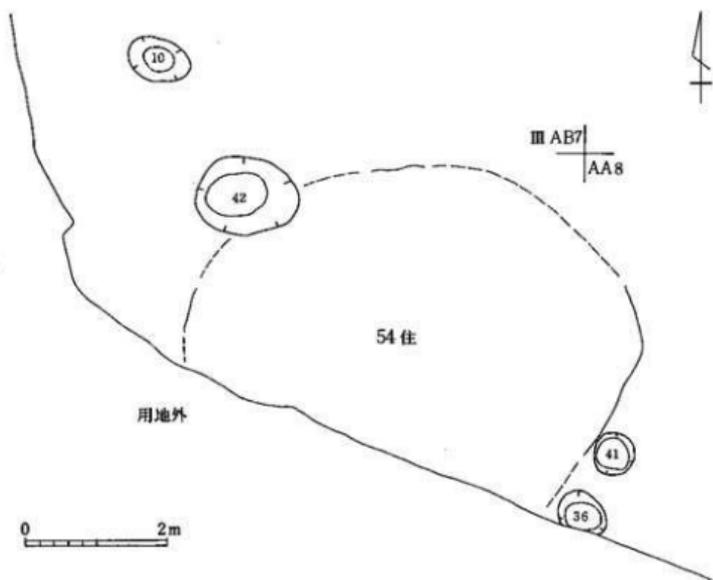


挿図130 埋設土器 1・3～6

02 その他

①柱穴 (挿図131~151)

方形柱穴列 3周辺で、覆土・規模等が類似する柱穴を検出したが、方形柱穴列として把握できなかった。1×1間の方柱穴列及び単独の立柱の存在を指摘しておく。(吉川金利)



挿図131 周辺柱穴平面図(1)

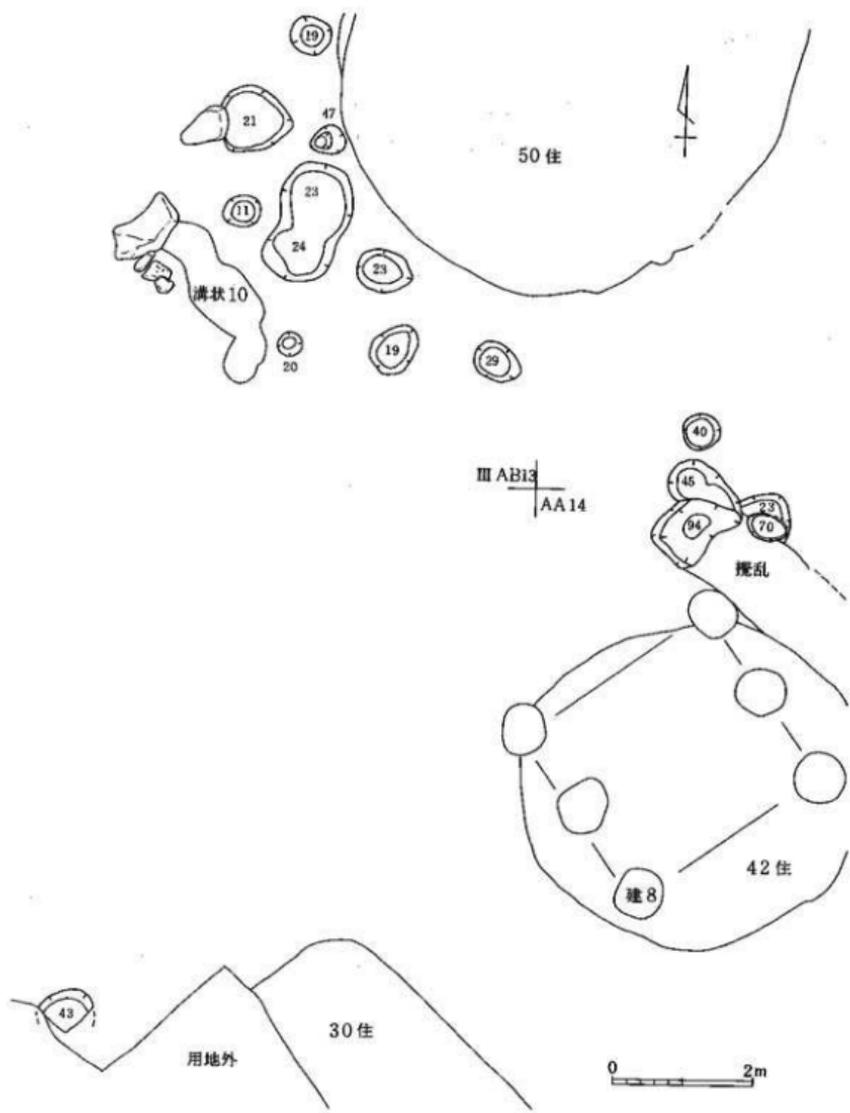
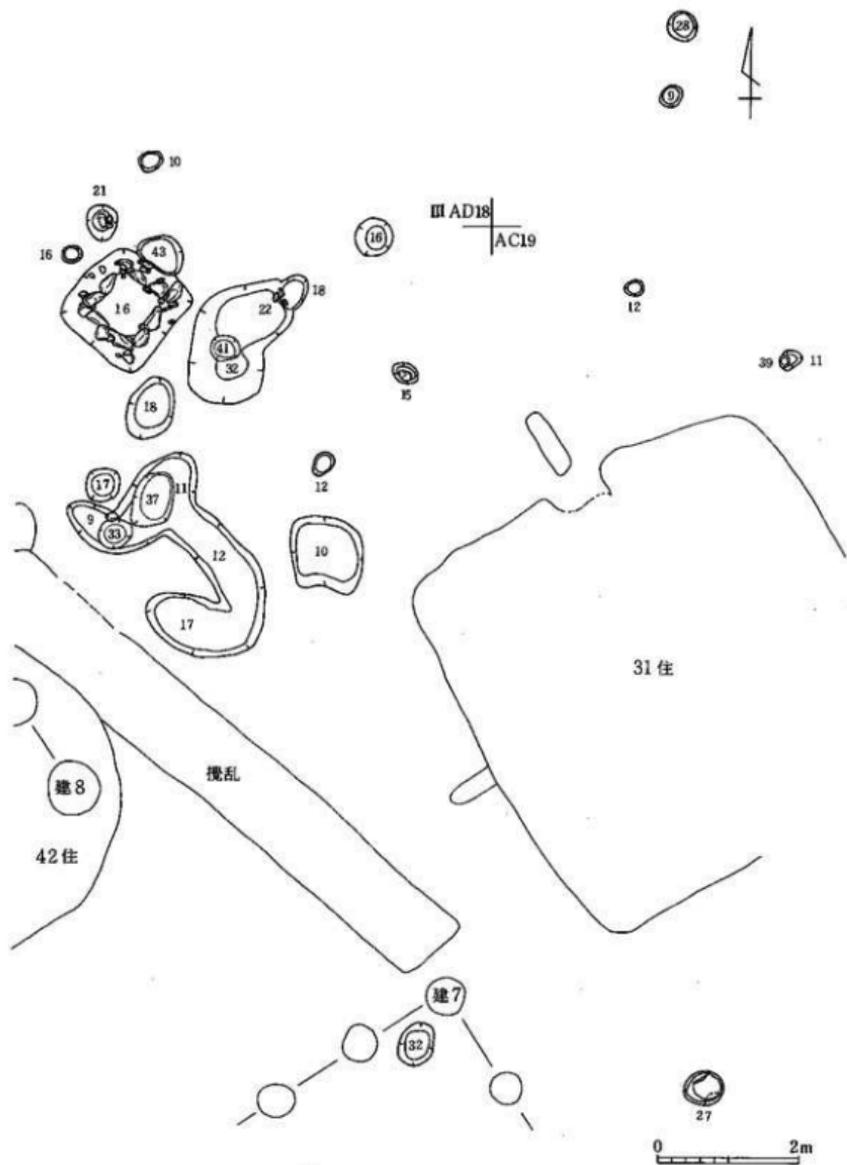


插图132 周边柱穴平面图(2)



挿図133 周辺柱穴平面図(3)

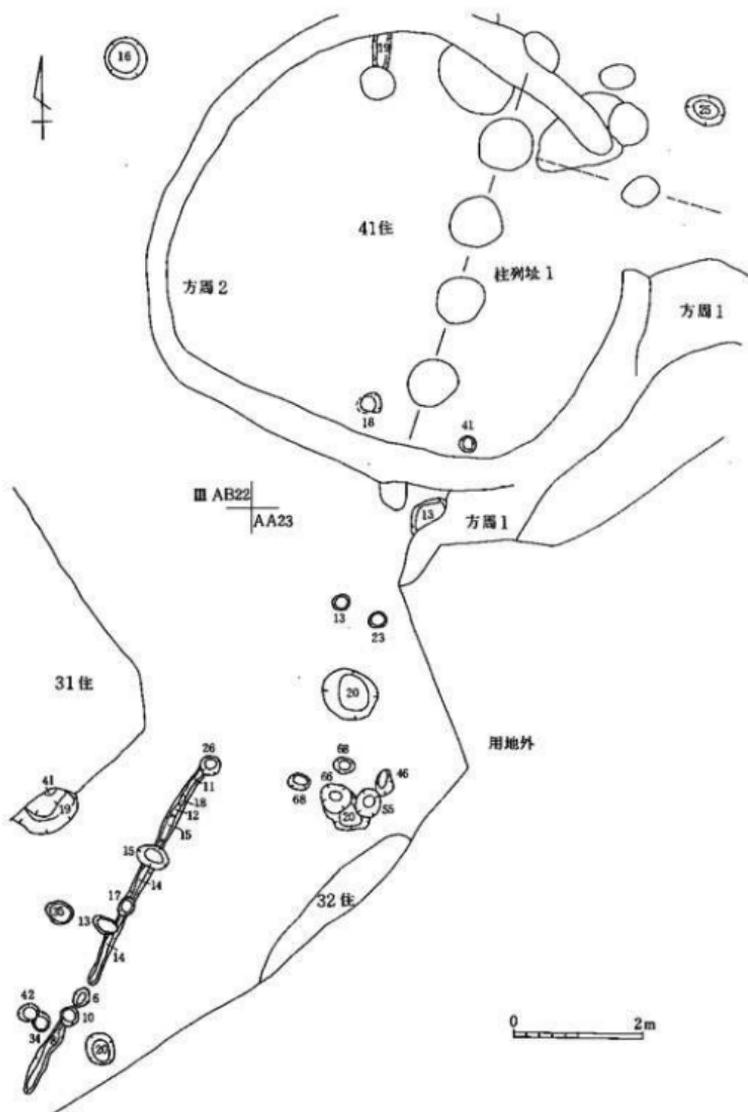


插图134 周边柱穴平面图(4)

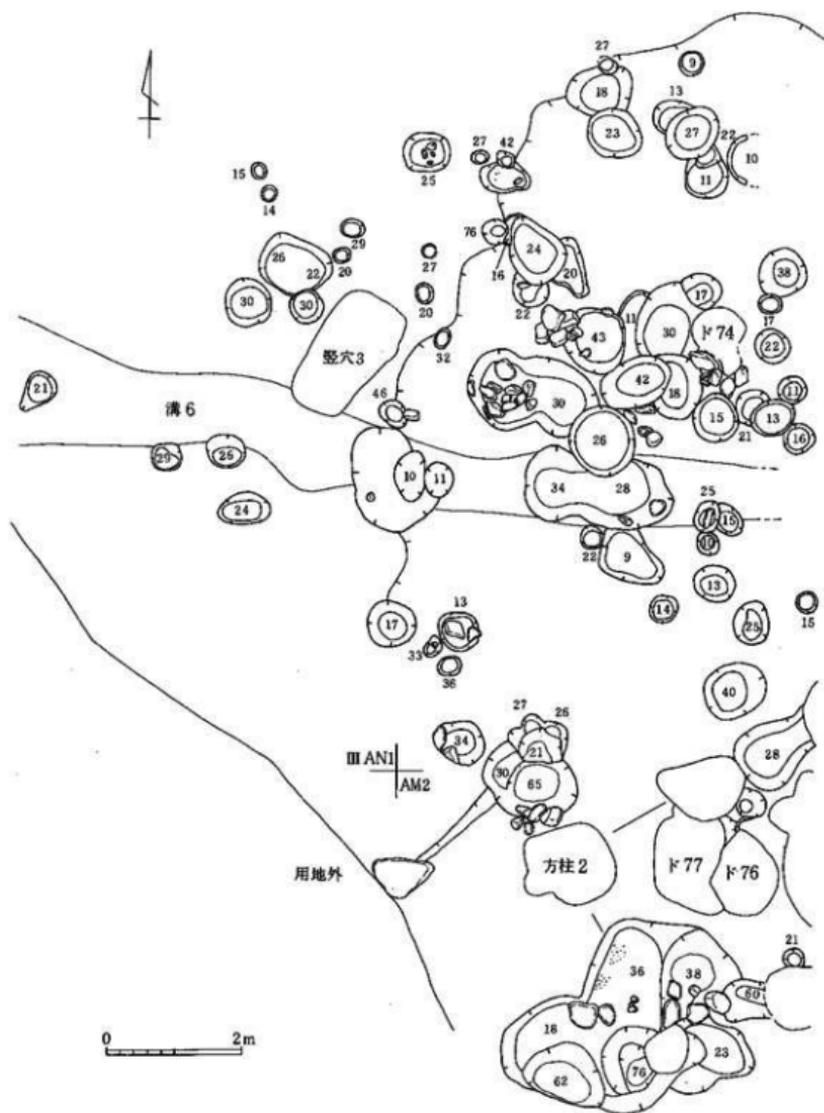


插图135 周边柱穴平面图(5)

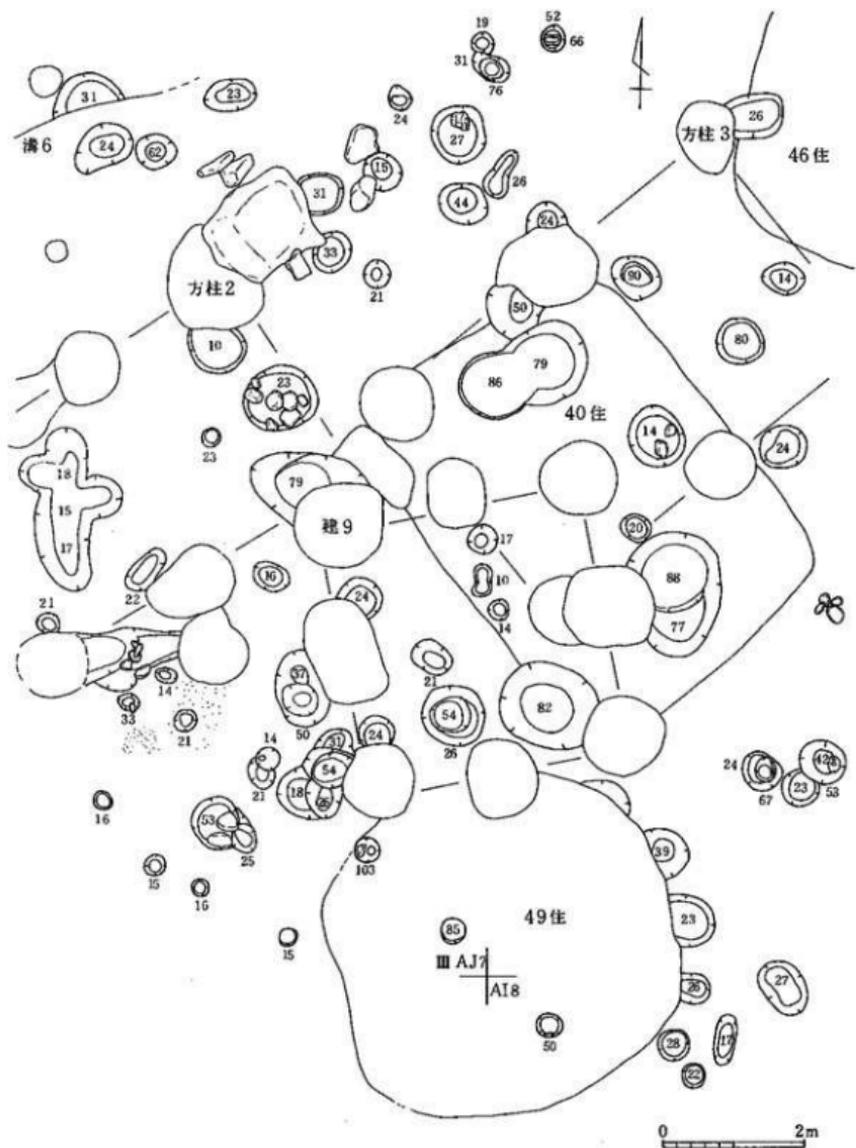


插图136 周边柱穴平面图(6)

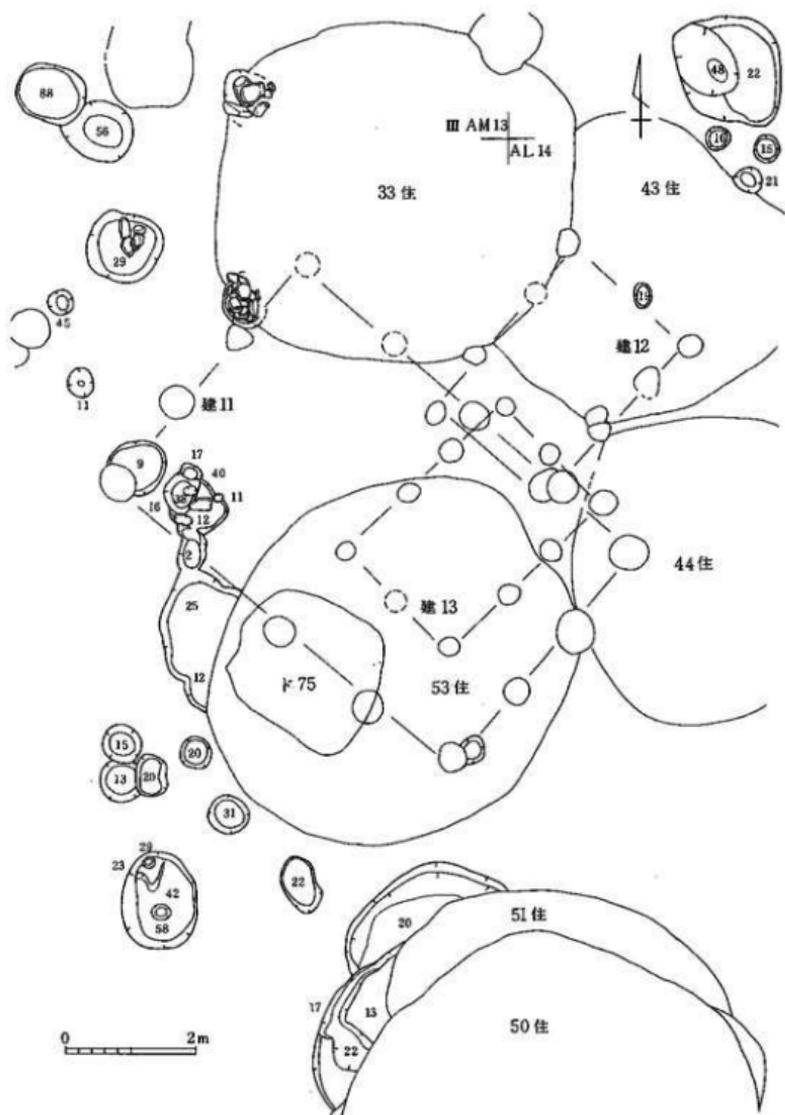


插图137 周边柱穴平面图(7)

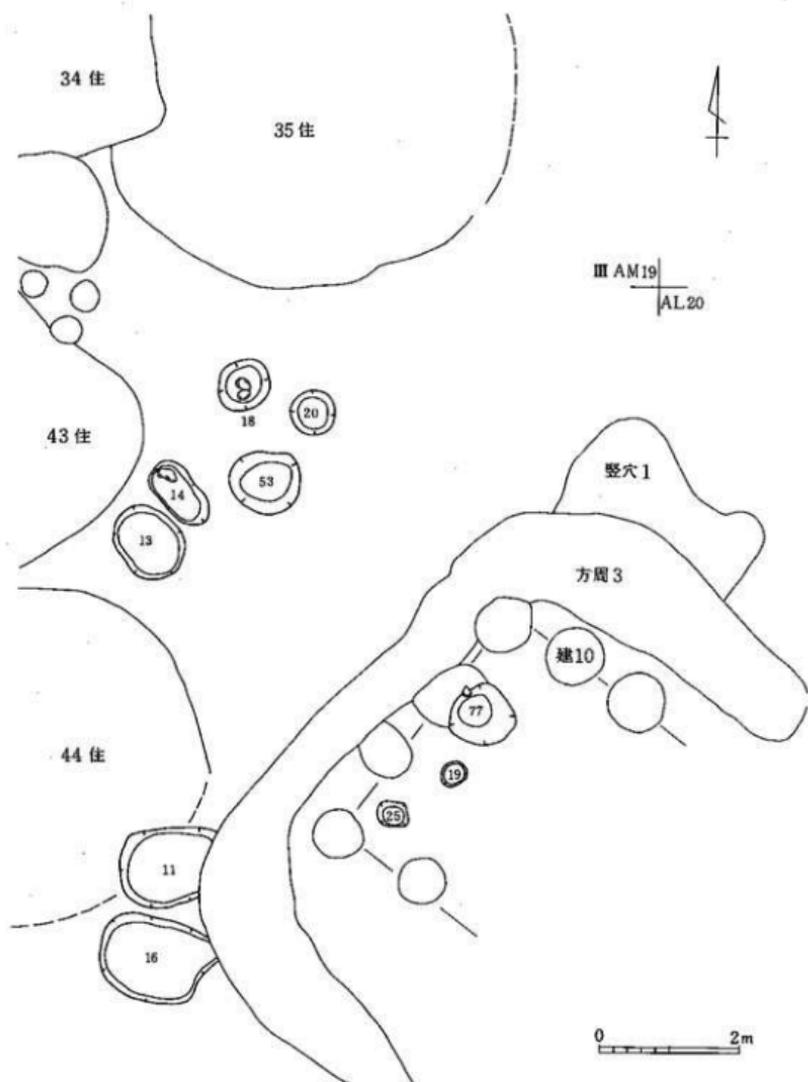


插图138 周园柱穴平面图(8)

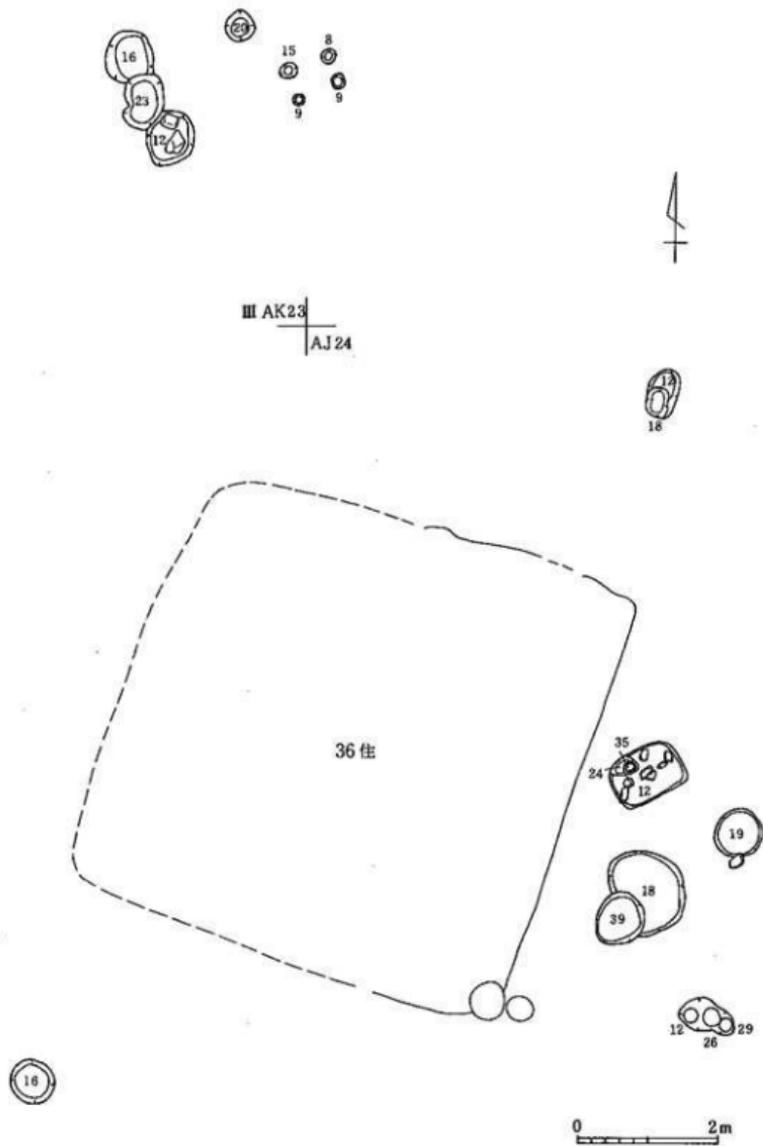


插图139 周边柱穴平面图(9)

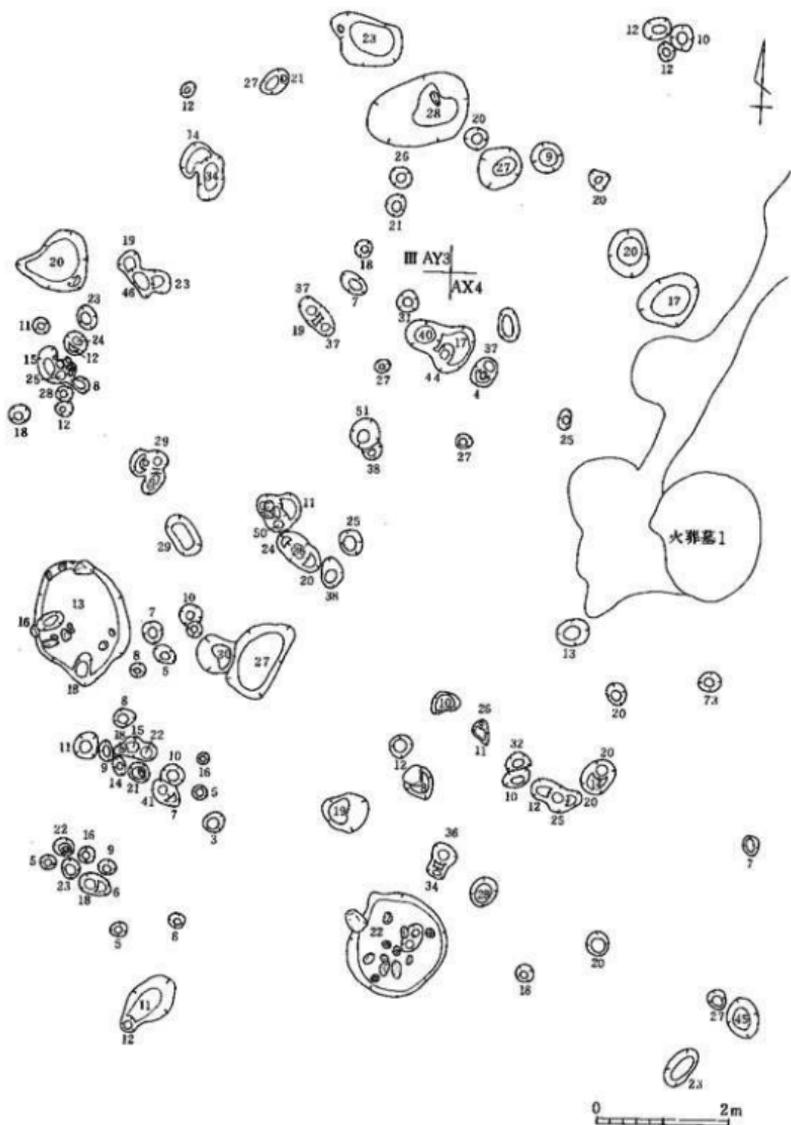


插图140 周边柱穴平面图⑩

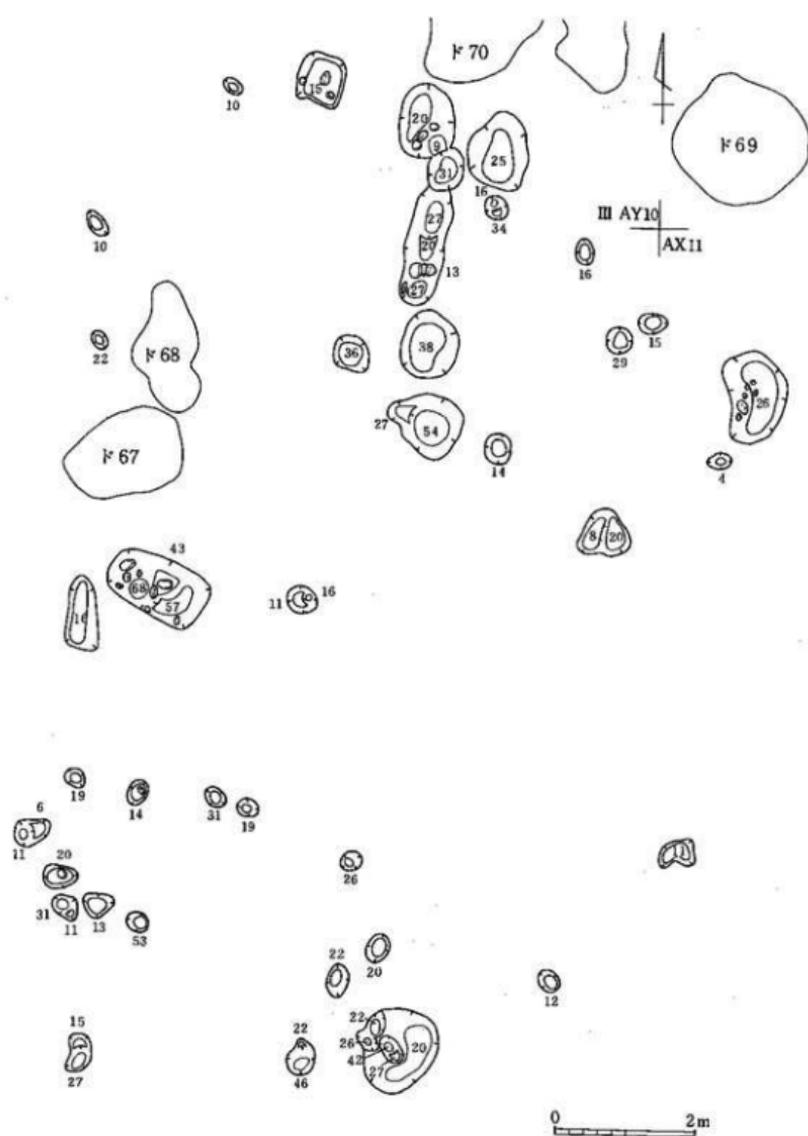


插图141 周边柱穴平面图

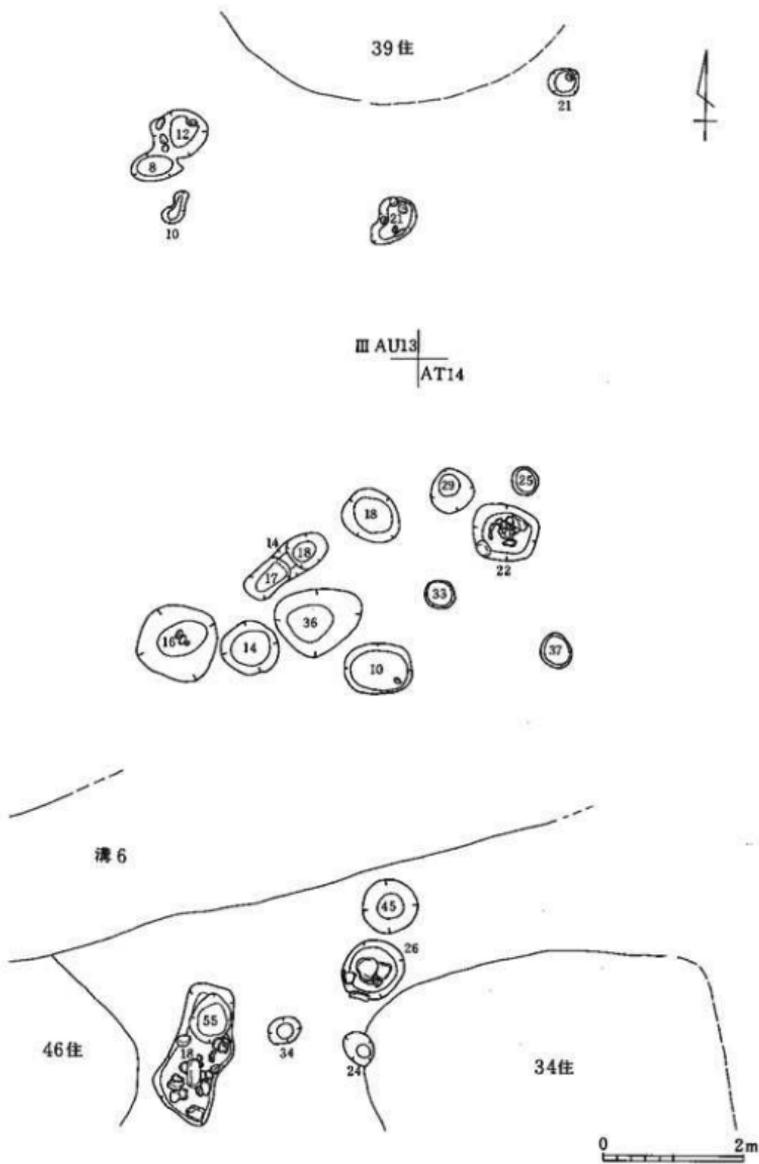


插图142 周边柱穴平面图(12)

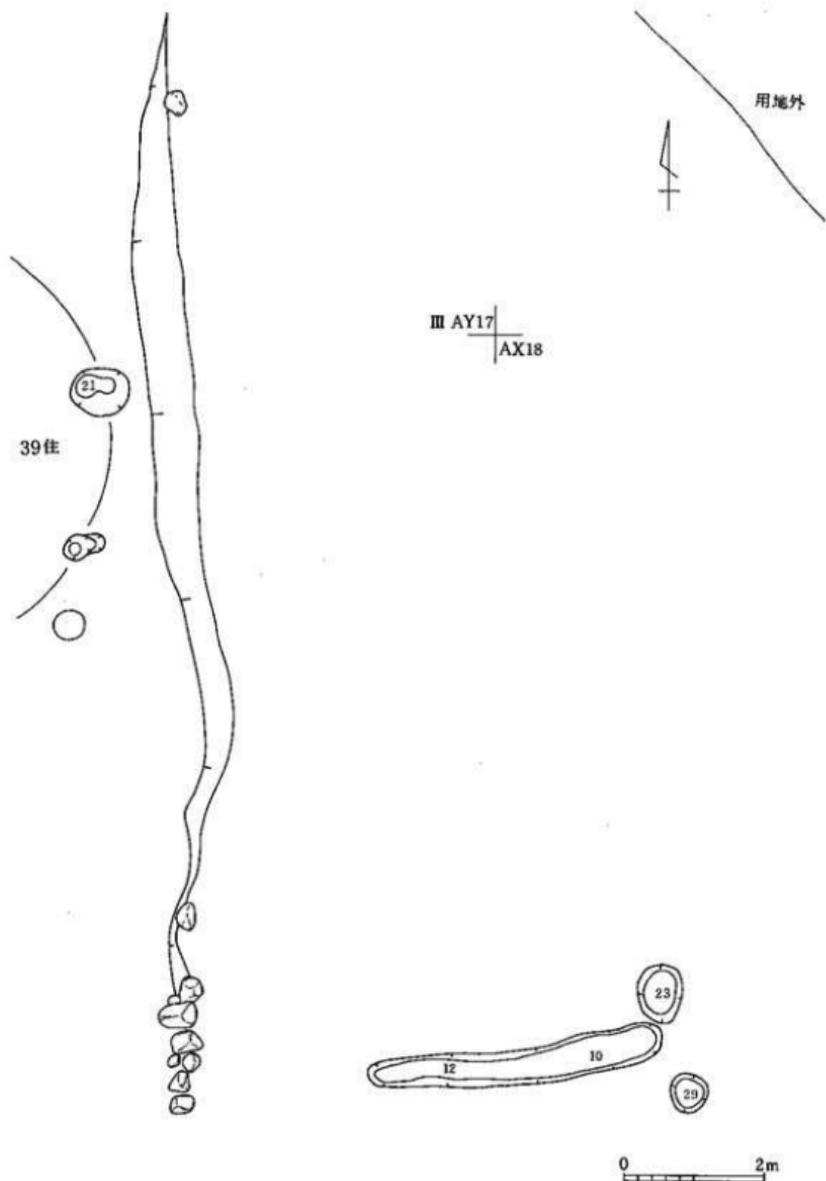


插图143 周边柱穴平面图⑬

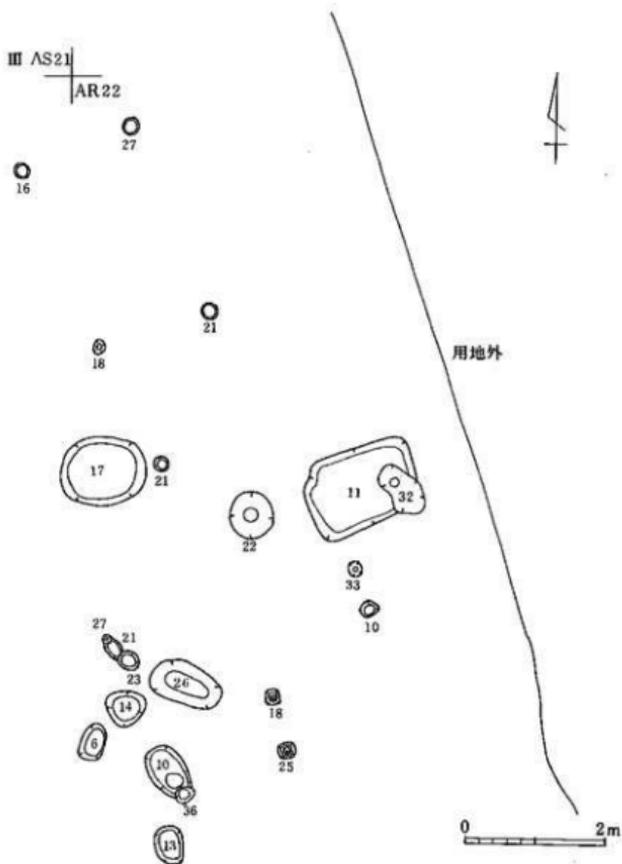


插图144 周边柱穴平面图(4)

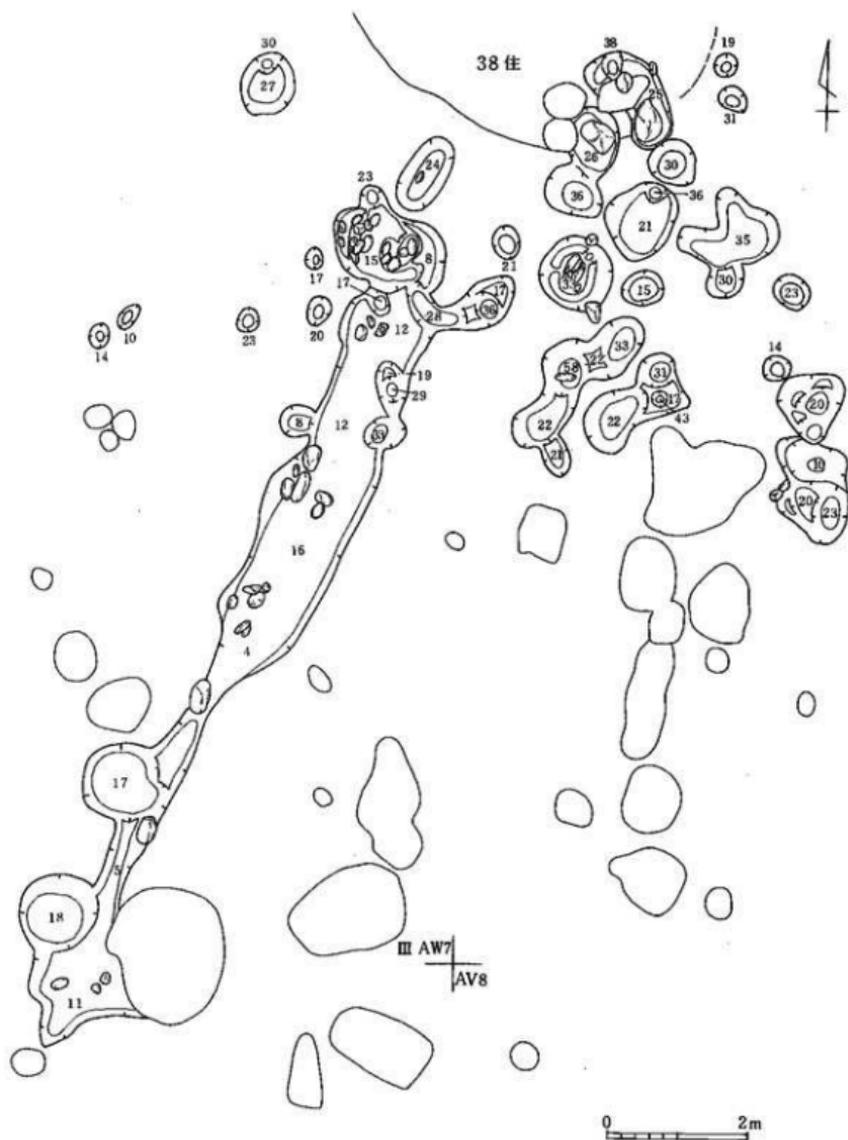


插图145 周边柱穴平面图⑨



插图146 周边柱穴平面图

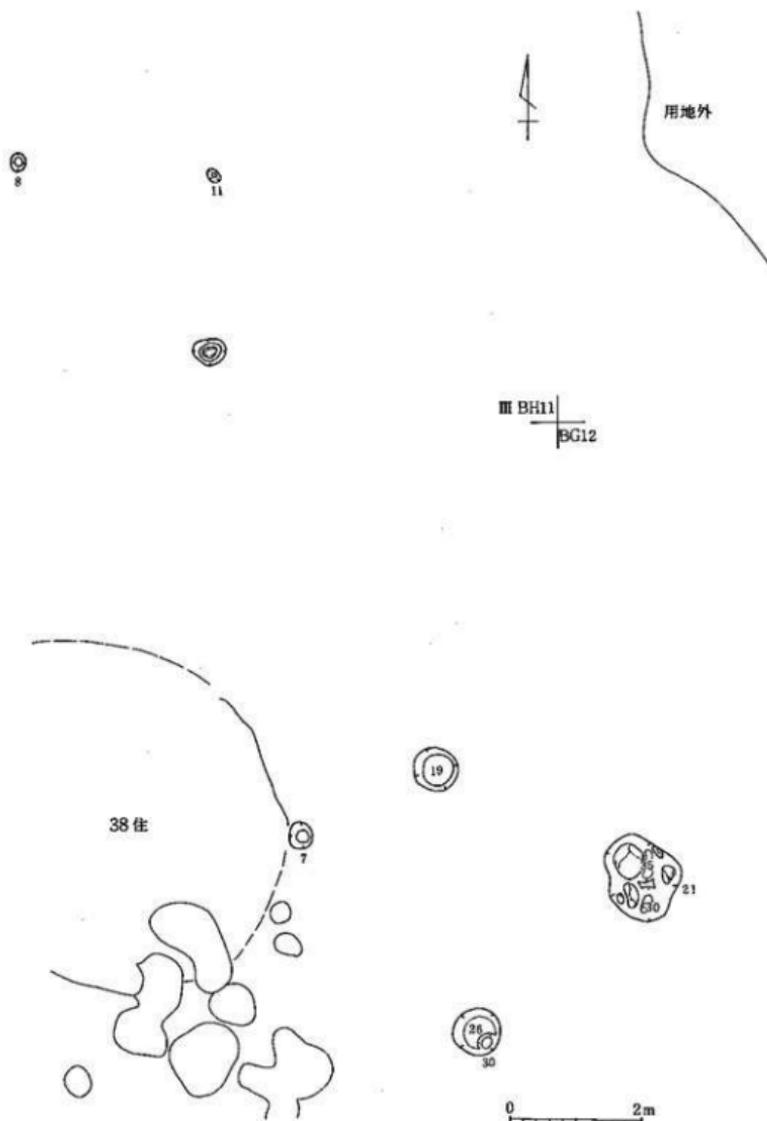


插图147 周园柱穴平面图(初)

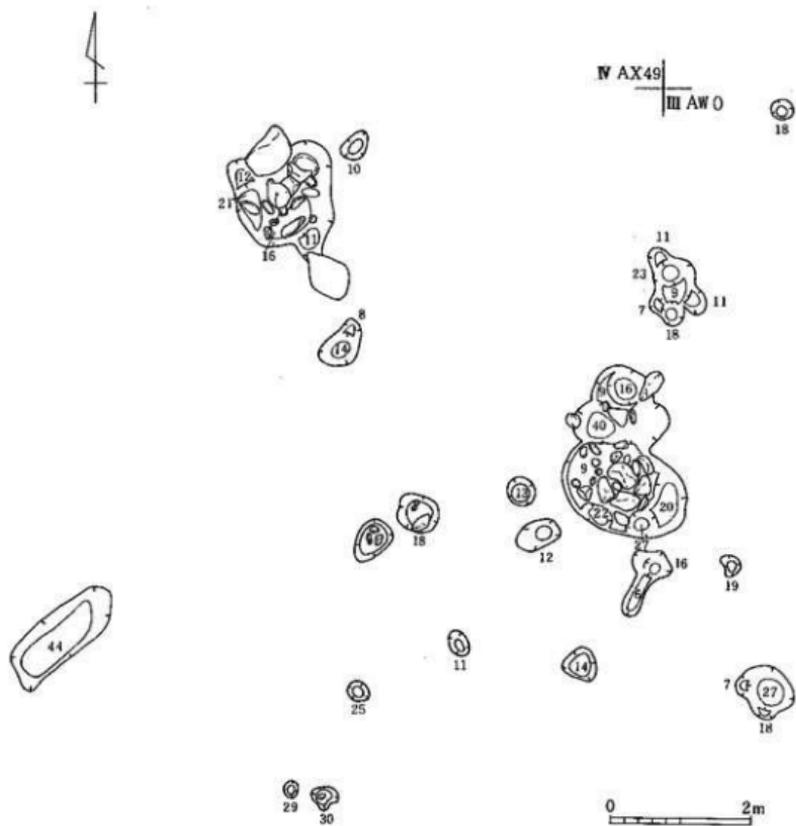
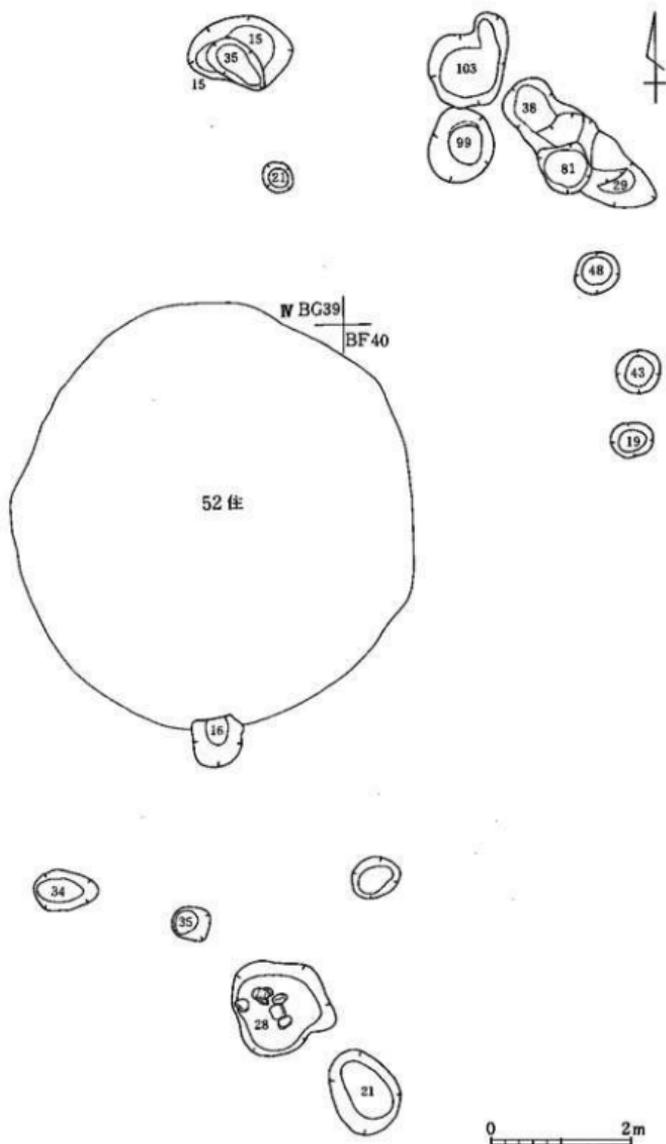


插图148 周园柱穴平面图①



挿図149 周辺柱穴平面図(19)

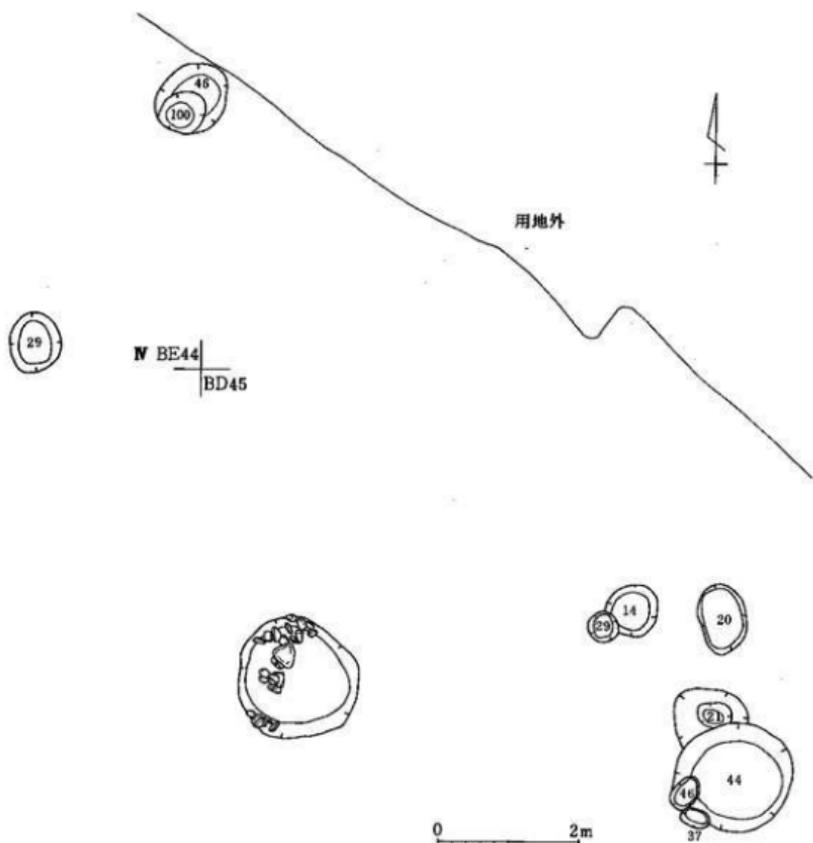


插图150 周边柱穴平面图②

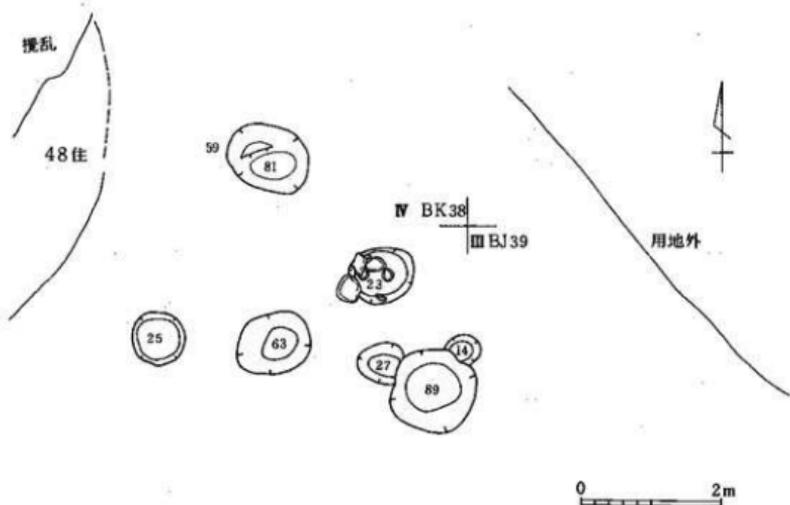
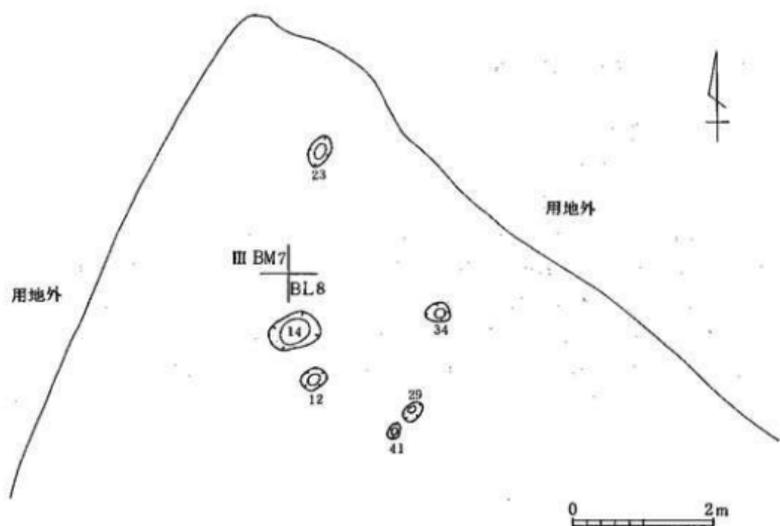


插图151 周园柱穴平面图(2)

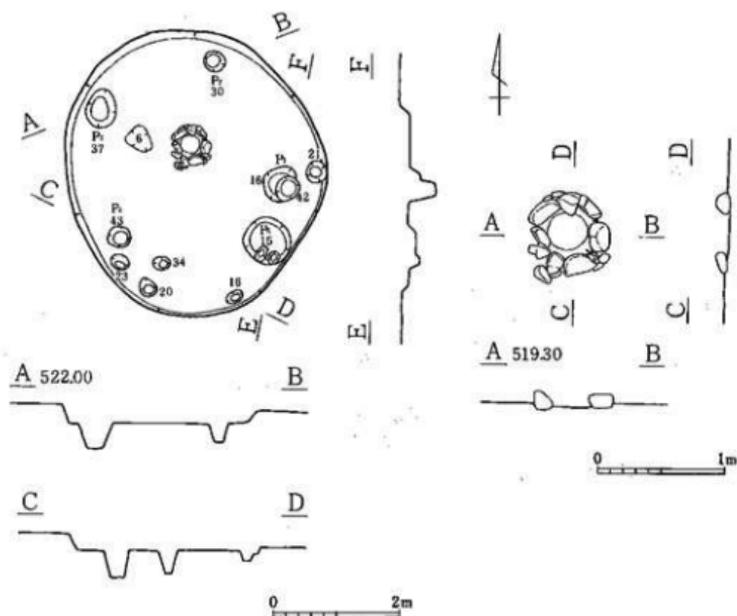
5. 第4地点（調査面積約2,950㎡、付図4）

(1) 竪穴住居址

1) 縄文時代中期

①21号住居址（挿図152）

調査区東端で、南東向きの緩やかな斜面で検出した4.4×4.4mの楕円形の竪穴住居址である。炉は中心より、やや北側に位置し、20cm前後の花崗岩8つより作られている。炉の内部で若干の焼土は確認できるが、炉縁石に顕著な焼けはみられず、炭化物も確認されない。主軸方向は、N 17° Wを示す。埋土は黒色土、床面は黄色混黒褐色土で硬く、東側は凹凸が激しい。柱穴は床面で確認できず、黄白色砂層まで掘り下げて確認した。柱穴の覆土はすべて暗褐色土で、P1～P4の4本が確認され、掘り方は約30～55cmと、あまり大きくなく、深さは30～43cmと比較的浅い。



挿図152 21号住居址

壁高は、検出面から24cm前後で残存状態は良好である。周溝は確認できない。

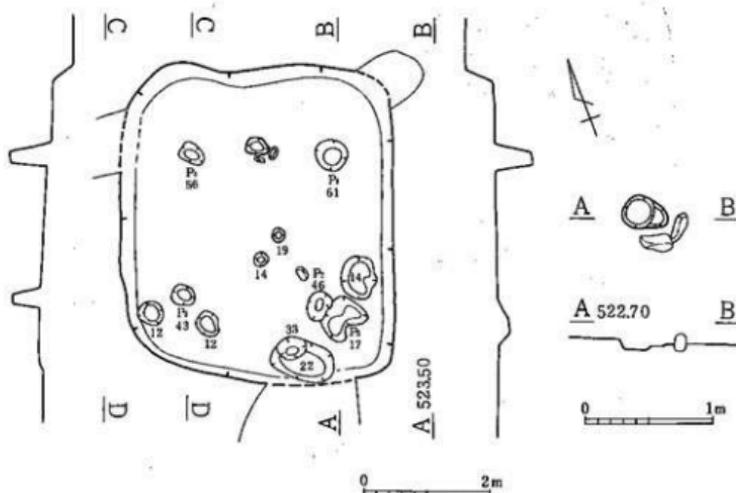
出土遺物は、口縁部から胴部にかけて一部欠損した深鉢形土器が1点、その他土器片が多数ある。深鉢形土器は、波状口縁で平行沈線が縦に入り、胴部には隆帯が巻かれ隆帯上には押圧文が施される。口径11.8cm、高さ29.5cmを測る。出土遺物は、ほとんどがこれに類する深鉢片である。これらは平出Ⅲ類Aに位置づけられる。石器は打製石斧・横刃形石器等があるが、量的には少ない。

出土遺物より、本住居址は縄文時代中期中葉の住居址と思われる。 (福澤好晃)

2) 弥生時代後期

① 8号住居址 (挿図 153)

調査区南西側で検出された。4.9×4.3mの不整隅丸長方形を呈する竪穴住居址で、東壁が対辺に比較して長く、その結果歪んだ平面形を呈する。また、北西隅の張り出しについては、上部に



挿図153 8号住居址

攪乱があり、十分な検討ができなかった。主軸方向はN21.5° Eを示す。埋土は上層漆黒土、下層黒褐色土で、いわゆるレンズ状の堆積を示す。床面は硬く締まる。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は遺存状態の良い北壁側で45cmを測る。主柱穴はP1～P4の4本が確認され、おおむね平面楕円形を呈する。半截材を使用したとも考えられる。主柱穴の大きさは40～50cm程度で、深さは43～61cmを測り、南側がやや浅い。埋土黒褐色土である。南壁中央東寄りに入り口施設と考えられる掘り込みがある。炉址は主柱穴P1・P4中間やや外側に検出され、2個の炉緑石を持つ地床炉と考えられる。炉址底部に僅かに炭が検出された。

出土遺物には、弥生土器壺・甕、石甕丁・有肩扇状形石器・敲石・磨製石鏃等がある。石甕丁は、直線刃半月形形の石甕丁である。

形態・出土遺物等から弥生時代後期後半の竪穴住居址である。



挿図154 9号住居址

②9号住居址 (挿図154)

調査区南側で、8号住居址と並んで検出された。土坑15に切られる。南側は調査区外に延びて南北方向の規模は不明であるが、東西方向は3.9mを測る。隅丸長方形を呈する竪穴住居址と考えられる。主軸方向はN20° Eを示す。埋土は漆黒土である。床面は西壁際、攪乱の北側が硬く締まるが、全体的に柔らかい。北壁はやや緩やかに立ち上がるのに対し、西壁は緩やかである。壁高は遺存状態の良い北壁側で15cm程度を測る。主柱穴はP1・P2・P4の3本が確認され、他の1本は攪乱に壊されて確認できなかった。他の柱穴との重複もあり、形態・規模もはっきりしないが、おおむね平面円形を呈すると考えられる。深さは21~44cmと揃わない。埋土黒褐色土である。炉址は主柱穴P1・P4中間や内側に検出され、8号住居址と同様、内側に4個の炉縁石を持つ地床炉と考えられる。内部に焼土・炭は検出されなかった。

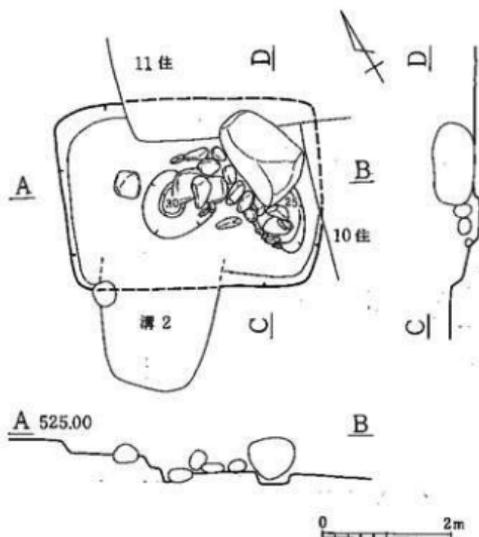
出土遺物はほとんどない。

形態等から、8号住居址と同様、弥生時代後期後半の竪穴住居址である。

③12号住居址

(挿図 155)

調査区西側で検出された。10・11号住居址に切られ、溝2と重複する。重複他遺構や、150cmの巨大な礫をはじめとする多数の礫のため、諸施設の詳細は不明であるが、形態や遺物出土から竪穴住居址とした。集積礫は、11号住居址の床面上に検出されたため、本址に伴わないと判断した。平面形・規模ははっきりしないが、(4.0)×2.8mを測り、不整隅丸長方形を呈する。長軸方向はN60° Wを示す。埋土は黒色土である。床面は硬い部分



挿図155 12号住居址

がない。壁はだらだらとしており、壁高は20cm程度を測る。主柱穴・炉址ともに確認できなかった。

出土遺物は弥生土器甕の大きな破片がある。

出土遺物から、弥生時代後期後半の竪穴住居址と考えられる。

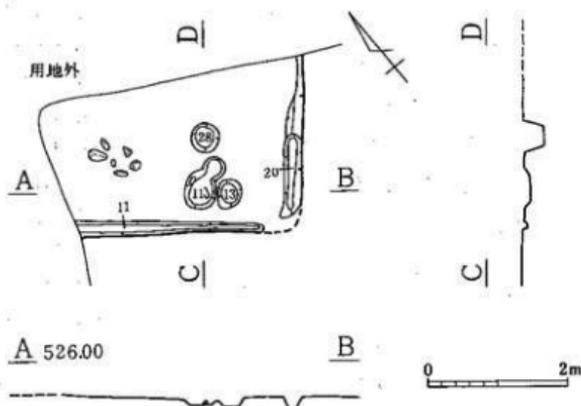
3) 古墳時代後期

① 2号住居址 (挿図156)

調査区北西側、調査区外にかかって検出された。ごく一部分を調査したにとどまり、規模等詳細は不明である。検出された周溝から、方形を呈すると考えられる竪穴住居址で、南東壁の方向はN42° Eを示す。埋土は、焼土・炭が多量に混じる黒褐色土で、焼失住居と考えられる。低湿地に面した位置にあり、床面は硬い部分が確認されなかった。確認された南西壁は、攪乱が上部を壊しており、立ち上がりの状態は不明である。周溝は、幅20cm程度、深さ10~20cmを測る。

出土遺物は土師器甕・環が少量ある。

形態・出土遺物等から、古墳時代後期の竪穴住居址と考えられるが、詳細は不明である。



挿図156 2号住居址

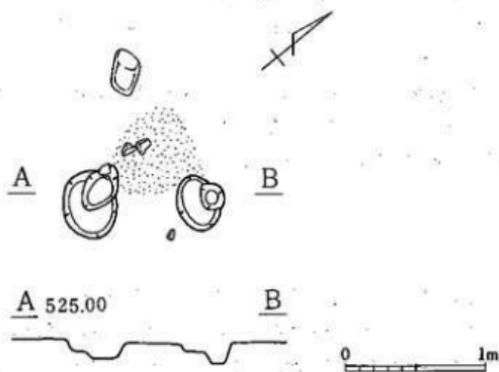
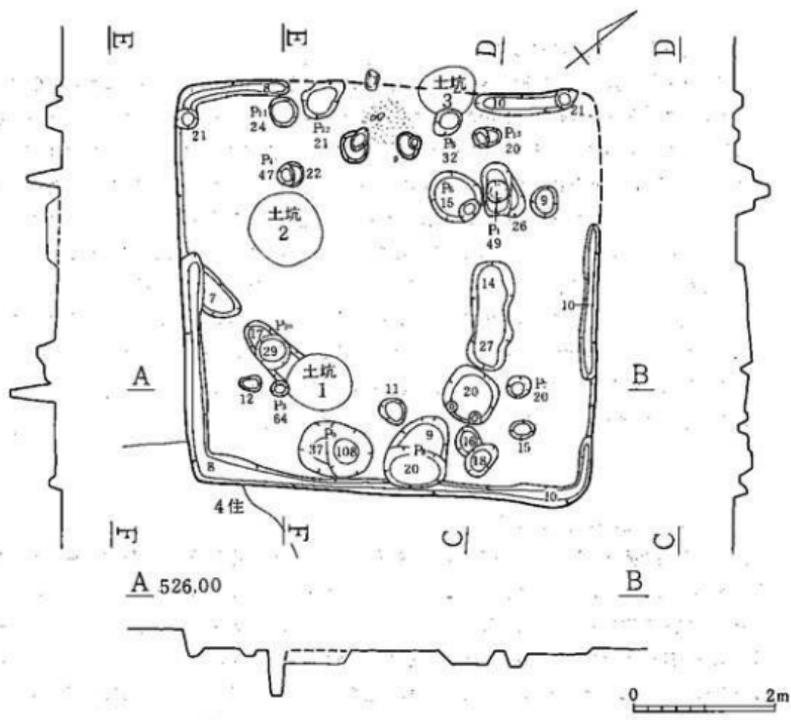


插图157 3号住居址

②3号住居址（押図157）

調査区北西側、調査区際に出検された。4号住居址・土坑1～3に切られる。本址の北側は削平されており、壁は遺存せず、周溝の一部を確認した。5.7×5.7mの方形を呈すると考えられる竪穴住居址で、主軸方向はN39.5° Wを示す。埋土は黒褐色土である。主柱穴はP1・P3・P4は確認されたが、P2は攪乱に壊され検出できなかった。不整形を呈し、P3は他の2つよりも深い。低温地に移行する部分にあり、2号住居址同様、床面の硬い部分はなかった。確認された南西壁は、急な立ち上がりの状態を示し、約25cmの壁高を測る。周溝は、幅25～30cm程度、深さ8～10cmを測る。カマドは削平され遺存しておらず、袖石の抜き取り痕から袖石一対の石芯粘土カマドと考えられる。火床はかなり焼けており、その壁側に土師器壺破片があった。P9は貯蔵穴と考えられ、内部に粘土塊があった。P4・P11の間には台石が据えられていた。

出土遺物は土師器壺・環・鉢・甗、棒状の纏物石2点、不明鉄製品がある。

形態・出土遺物等から、古墳時代後期前半の竪穴住居址である。

③5号住居址（押図158）

調査区西側で検出された。6.8×6.6mの不整形を呈する竪穴住居址で、南隅で周溝がやや内側で検出されたことから、建て替えがなされたものと判断した。床面の一部・柱穴、東隅に焼土があり、焼後建て替えられた可能性もある。主軸方向はN42° Wを示す。埋土は黒褐色土の1層である。床面は中央付近が硬く締まる。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は15cm程度である。主柱穴はP1～P4の4本が確認され、おおむね平面不整形を呈する。P1を除き60cm前後と深い。P1脇に台石が据えられる。P8の周囲には土手状縁部が確認され、内部から土師器壺が出土した。カマドは袖石一対の石芯粘土カマドで、右袖の遺存状態は悪い。火床に焼土が厚く発達し、支脚周辺から土師器壺・環が各1個体出土した。

出土遺物には、土師器壺・壺・小型壺・環・高環・鉢・ミニチュア土器、須恵器壺・蓋環・甗、不明鉄製品、砥石等がある。土師器高環は環部下半に稜帯をもつ。

形態・出土遺物等から古墳時代後期前半の竪穴住居址である。

④7号住居址（押図159）

調査区西側、5号住居址と並んで検出された。削平を受けており、床面を検出したのみで、これに伴うと思われる柱穴が幾つかあり、内部からの遺物出土がある。カマド等の痕跡も確認できなかった。規模等詳細は不明である。硬い床面の南西側の柱穴がほぼ直線状になるので、この部分に壁があるとすると、南西壁の方向はN47° Wを示す。柱穴埋土は黒褐色土である。一部周溝状の幅広い部分がある。

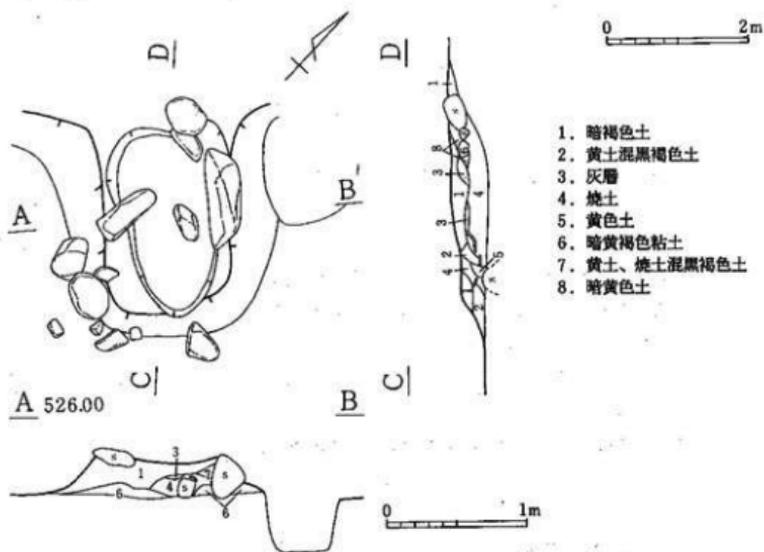
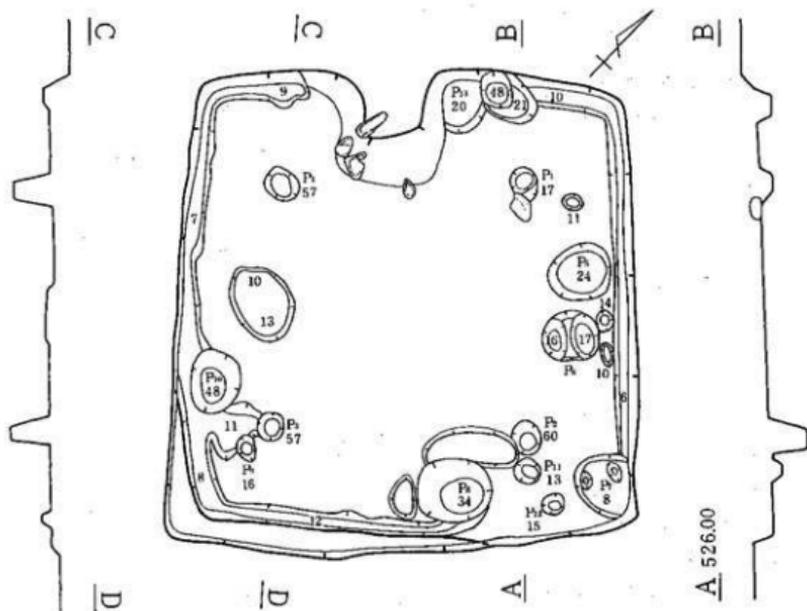


插图158 5号住居址

出土遺物は土師器甕・環・高環・甌・ミニチュア土器があり、環はヘラミガキが施される。

出土遺物等から、古墳時代後期前半の竪穴住居址と考えられるが、詳細は不明である。

⑤10号住居址 (押図160)

調査区西側で検出された。12号住居址を切り、11号住居址・土坑19に切られる。4.6×4.0mの不整長方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN73°Wを示す。埋土は黄土混黒色土の一層である。床面は貼り床されており、中央付近がやや硬く

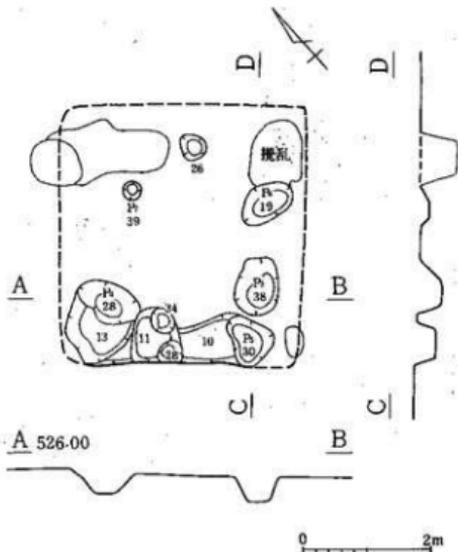
締まり、床直に焼土が検出された。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は20～30cm程度である。主柱穴は不明であり、また、周溝の浅い掘り込みが壁寄りにある等、同時期の住居址とは異なる。中央付近の貼り床下からは、掘り込みが確認され、時期の大きな差は認められないことから、床の貼り替えがなされたと考えられる。カマドは西壁中央南側に構築されており、石芯粘土カマドである。遺存する袖石が1個あり、左袖には抜き取り痕が検出されたことから、袖石は一對と考えられる。火床は焼土がそれほど発達していない。

出土遺物には、土師器広口壺・甕・環・高環・鉢・甌等がある。土師器高環は環部下半に稜帯をもつ。鉢は内湾する。

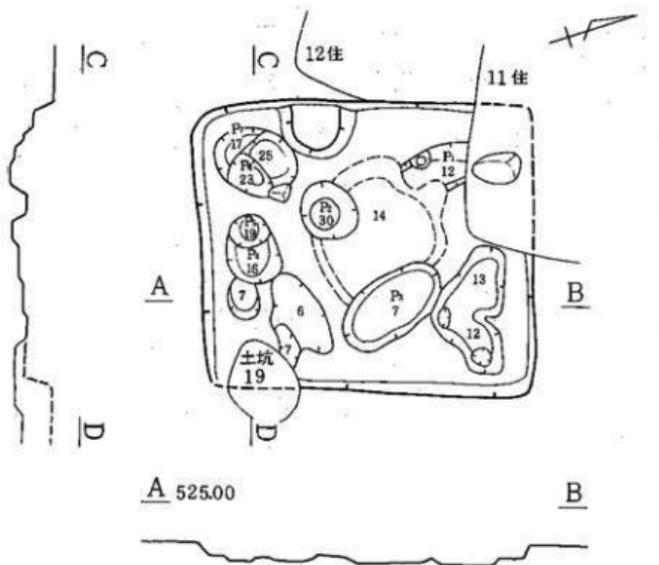
新旧関係・出土遺物等から古墳時代後期前半の竪穴住居址である。

⑥11号住居址 (押図161)

調査区西側で検出された。10・12号住居址を切る。また、溝址2と重複する。4.8×4.5mの不



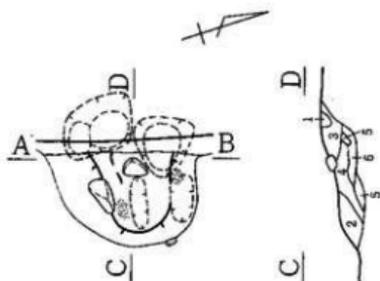
押図159 7号住居址



A 525.00

B

0 2m



A 524.70

B

0 1m

1. 黄褐色土
2. 黑褐色土
3. 黄土混黑褐色土
4. 灰层
5. 烧土
6. 烧土混暗褐色土
7. 黑色土

插图160 10号住居址

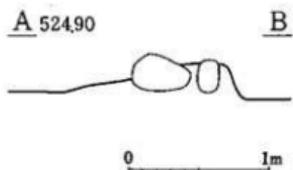
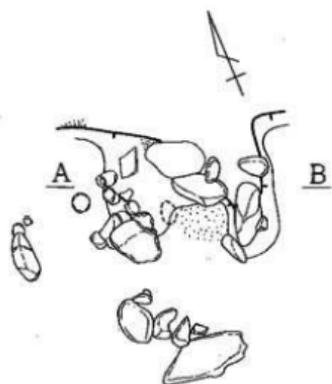
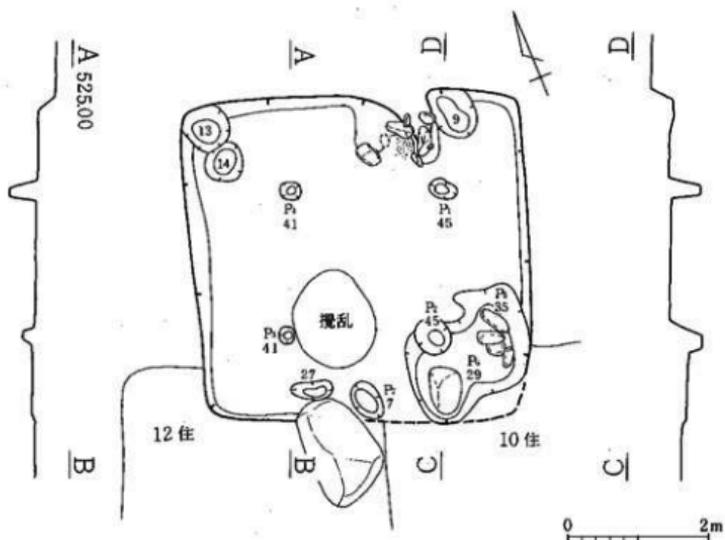


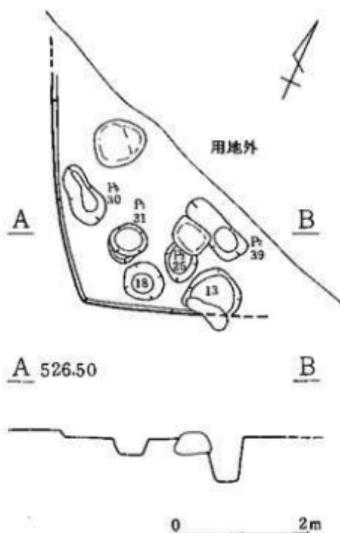
插图161 11号住居址

整方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向は $N21^{\circ} E$ を示す。埋土は炭灰漆黒土である。床面は硬く焼け締まり、焼失住居である。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は25~30cm程度である。主柱穴はP1~P4の4本が検出され、径30~50cmの不整円形を呈しており、深さは東側の2本がやや深い。周溝はない。北東隅には、床面より20cm上位に貼り床状の部分がある。P5は貼り床下の柱穴である。P6は貯蔵穴と考えられる。カマドは北壁中央に構築されており、左袖・支脚等遺存状態はやや不良である。右袖は粘土があり、袖石の抜き取り痕と考えられる凹みが確認された。袖石一對の石芯粘土カマドと考えられる。火床は著しく焼ける。カマドの西側から遺物が多出しており、土師器環が特に多い。

出土遺物には、土師器広口壺・有段口縁の壺・小型甕・環・高環・鉢等がある。土師器環・鉢は底部ヘラケズリされるもの、また、鉢はヘラミガキされるものがある。

新旧関係・出土遺物等から古墳時代後期前半の竪穴住居址である。

⑦14号住居址 (挿図162)



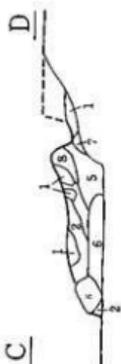
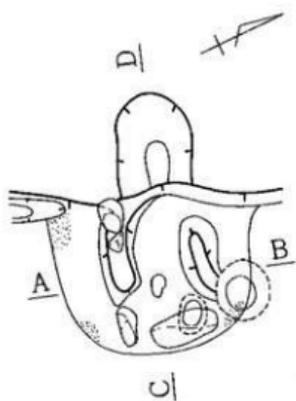
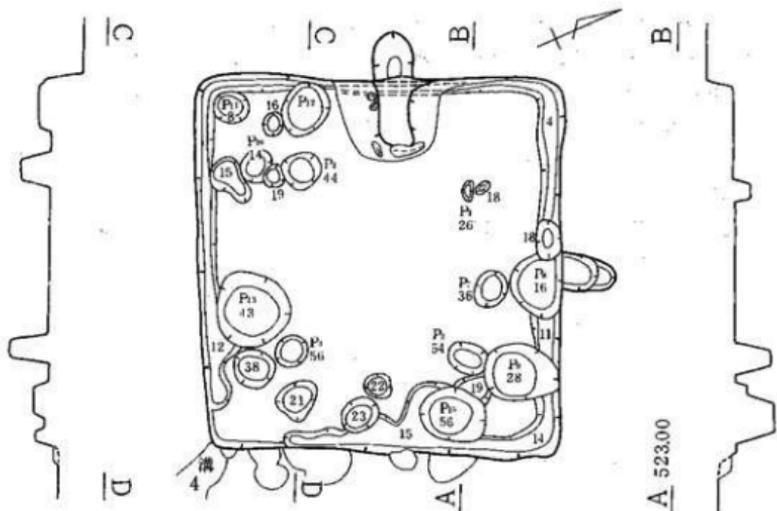
挿図162 14号住居址

調査区北東側で検出された。貼り床下に土坑34・35がある。調査区外にかかり、規模等詳細は不明である。不整方形を呈すると思われる竪穴住居址で、南西壁の方向は $N32^{\circ} W$ を示す。埋土は黒色土である。床面は貼り床がなされ、硬く締まる。壁の立ち上がりの状態は、検出面からそれほど深くなく不明で、壁高は10cm程度である。主柱穴はP1の1本が検出され、径約50cmの不整円形を呈し、深さは31cmを測る。

出土遺物には、土師器広口壺・甕・小型甕・環・高環・鉢・甗等がある。環は内外ヘラミガキされるもの、外面ヘラケズリ内面に稜をもつもの等ある。鉢はヘラケズリ・ヘラミガキされる。

詳細は不明であるが、出土遺物等から古墳時代後期前半の竪穴住居址である。

(馬場保之)



1. 漆黑土
2. 黑色土
3. 烧土混黑色土
4. 黑土混黄褐色土
5. 烧土灰炭混黑褐色土
6. 烧土
7. 黑褐色土
8. 粘土

A 522,70

B

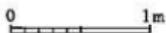
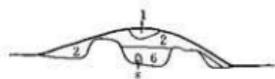


插图163 18号住居址

⑨18号住居址（押図163）

19号住居址の北西側、調査区端で検出した5.1×4.9mの方形の竪穴住居址である。主軸はN66°Wを示す。北西側壁のほぼ中央にカマドがあり、遺存状態の良い煙道が確認できる。カマドのほぼ中央には支脚があり、右袖の壁際には、据え置き袖石と掘り据え袖石がある。左袖袖石は、中央に倒れており、壁際には袖石があったと思われる跡が確認される。このカマドの下には、堅く締まった床面が確認され、また、北東壁のP8には焼土が僅かに残り、煙道跡と推定できる穴が確認できるため、P8付近にあったカマドを移築したと推測される。埋土は黒色土で遺物が多く、礫はほとんどない。床面は黒色土混黄褐色土で硬く、南側では土師器片が多く出土し、鉄製品も鎌など3点確認された。柱穴はP1～P4の4本が確認され、その埋土は黒色土で、掘り方は56～24cm、深さは56～26cmを測る。壁高は検出面から42cm前後と高く、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は南端の一部以外、全面で確認され、埋土は黒褐色土であり、深さは4～15cmを測る。

出土遺物は、土師器甕・環・高杯、須恵器環・轆などがあり、出土量は多い。土師器甕は、口縁部から胴部にかけて丁寧なナデ整形により仕上げられている。高杯は環部に段があり、外面ではそれがはっきりと確認できるが、内面はヘラケズリをしており、なだらかなのである。土師器環の多くは、内面に中央に向かう荒いナデがあり、いずれも小石粒を含む胎土で、色調は暗褐色から黒褐色を呈している。焼成はどの土師器も良好である。須恵器は6片のみで全体から見るとかなり少ない。石器は打製石斧・石皿等混入がある。

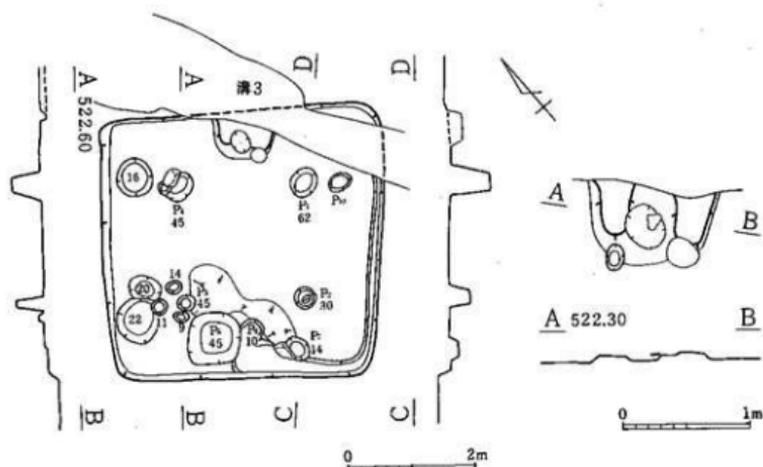
出土遺物、カマドの状況より、古墳時代後期に位置づけられる。（福澤好晃）

⑨19号住居址（押図164）

調査区東側で検出された。溝址3に切られる。4.3×4.3mの不整形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN41°Eを示す。埋土は黒褐色土である。貼り床はなく、中央部が硬く締まる。壁の立ち上がりは急で、壁高は20cm程度を測る。南西壁の一部および南東壁の壁際に、幅の狭い周溝がめぐる。主柱穴はP1～P4の4本が検出され、径30～45cmの不整形円形を呈し、深さは30～62cmとばらつく。P4北側に台石が据えられる。P5の周囲に、僅かに土手状縁部が検出された。また、P5・P6からの遺物出土が多い。P2の周囲、P4南西側および南西隅に焼土があった。また、P5および本址の埋土中より炭が出ており、焼失住居と考えられる。カマドは削平を受け、遺存状態は悪い。粘土が両袖に検出され、粘土カマドである。袖石の痕跡は確認できなかった。火床は著しく焼けていた。

出土遺物には、土師器甕・小型甕・環・鉢等がある。環はヘラケズリ・ヘラミガキされるもの、鉢はヘラケズリされる。

形態・出土遺物等から古墳時代後期前半の竪穴住居址である。（馬場保之）



挿図184 19号住居址

②20号住居址 (挿図165)

21号住居址の西側で検出した6.2×6.4mの方形の竪穴住居址である。主軸方向はN14°Wを示す。北側壁のほぼ中央部にはカマドがあり、一部分19号住居址に切られている煙道も確認できる。カマドの残存状態は良好で、ほぼ中央部分に支脚があり、両側に袖石が残る。天井石は中央部分から割れている。支脚周辺と煙道には焼土が確認され、特に支脚周辺は著しく焼けており、また、数点の土師器片の出土が見られる。住居址全体の埋土は上層が黒色土で、床面付近は炭混黒色土である。床面は黒色混黄色土で硬く、炭が全体に広がっており、焼土も広範囲で確認できる。特にP3付近及び西側周溝付近では著しく焼けており、焼失した住居址であると思われる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は検出面から30cm前後である。周溝は全体で確認され、埋土は炭混黒色土で深さ4～11cmである。主柱穴はP1～P4が確認され、埋土はすべて黒色土である。掘り方は24～32cmと小さいが、深さは53～41cmと深い。

出土遺物は、土師器甕・坏・高坏・瓶・埴などがあり、出土量は多い。瓶は、ほぼ完形で内面に細かいナデがある。埴は口縁部分が一部欠損しているが、ほぼ完形で火災による二次焼成がみられる。甕は器高15cm前後の小型の物が多く、ほぼ完形の甕は4点出土する。焼失住居であるため、遺物の残りが良く、そのほとんどの遺物は二次焼成を受けている。鉄製品は刀子1点が出土している。石器は打製石斧・石製模造品等が出土するが、量的には少ない。須恵器は確認されな

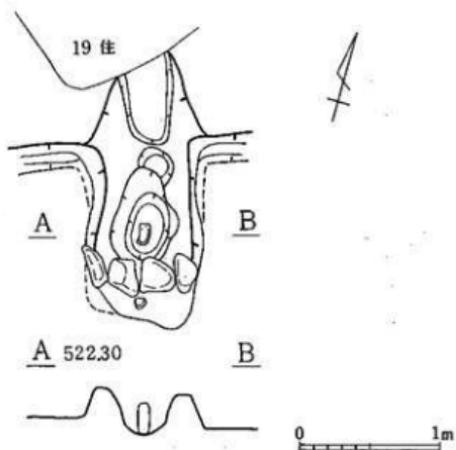
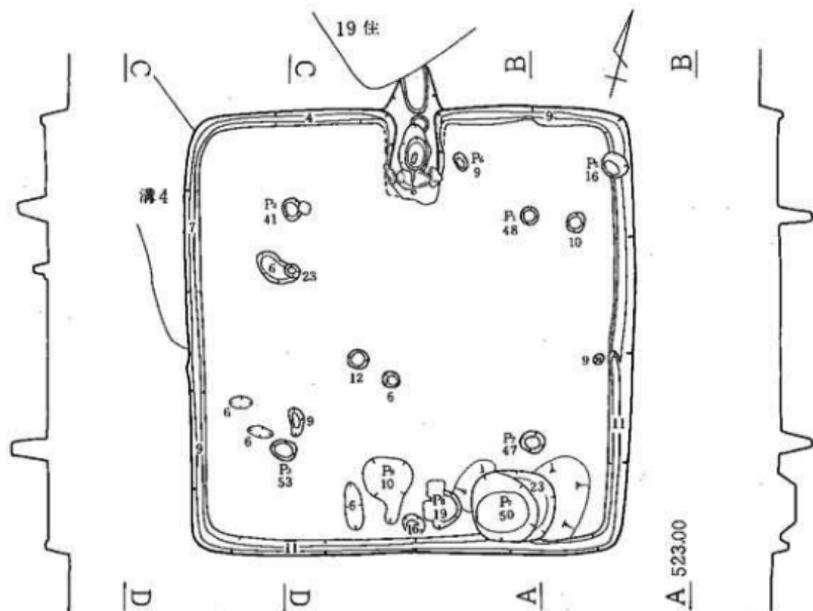


插图165 20号住居址

い。

出土遺物等から、この住居址は古墳時代後期前半に位置づけられる。

(福澤好晃)

4) 中世

① 4号住居址 (挿図166)

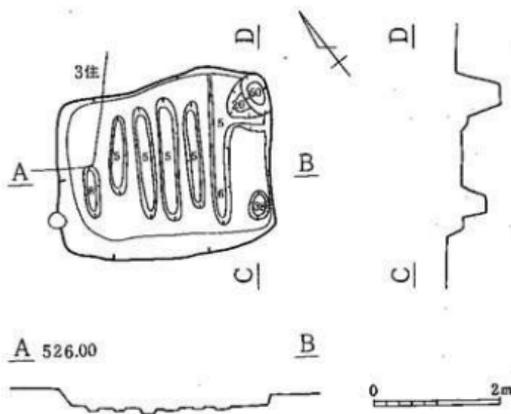
調査区北西側で検出された。3号住居址を切る。方形の掘り込みが確認されたことから、竪穴住居址とした。3.4×2.8mの不整形方形を呈する遺構で、長軸方向はN56W°を示す。埋土は黄土混黒色土である。床面は硬くなく、6条の掘り込みが確認された。長さ80~190cm、幅25cm程度、深さ5~8cmを測るもので、埋土が同一で、かつ本址の外側には伸びないことから、本址に伴うと判断した。板敷の床を支えた材の痕跡とも考えられる。壁の立ち上がりはだらだらとしており、壁高は30cm程度を測る。

出土遺物には、鉄軸の摺鉢、鉄滓等がある。

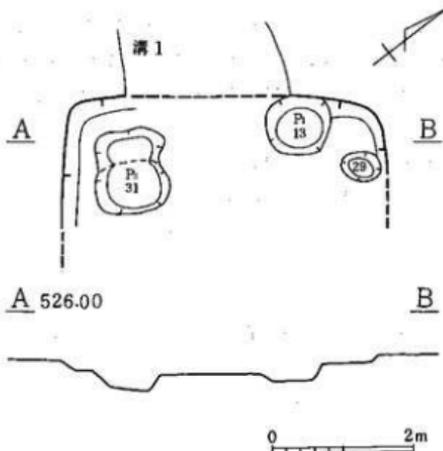
出土遺物等から中世に位置づく。

② 6号住居址 (挿図167)

調査区西側、南東側は畦畔により壊されて遺存していない。溝址1に切られる。新旧関係は床



挿図166 4号住居址

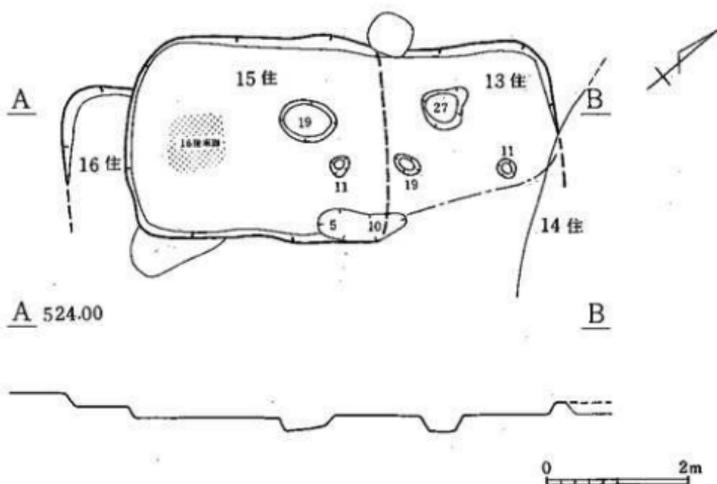


挿図167 6号住居址

面の状態および埋土の状況で判断した。隅丸方形を呈すると考えられ、北東南西方向は4.6mを測る。北西壁の方向は $N38^{\circ}E$ を示す。埋土は黒褐色土である。床面は硬くない。壁はやはりだらだらとしており、壁高は15cmを測る。

出土遺物は内耳・大平鉢・陶器碗・磁石、鉄滓等がある。

形態・出土遺物等から、中世に位置づく。



挿図168 13・15・16号住居址

③13号住居址 (押図168)

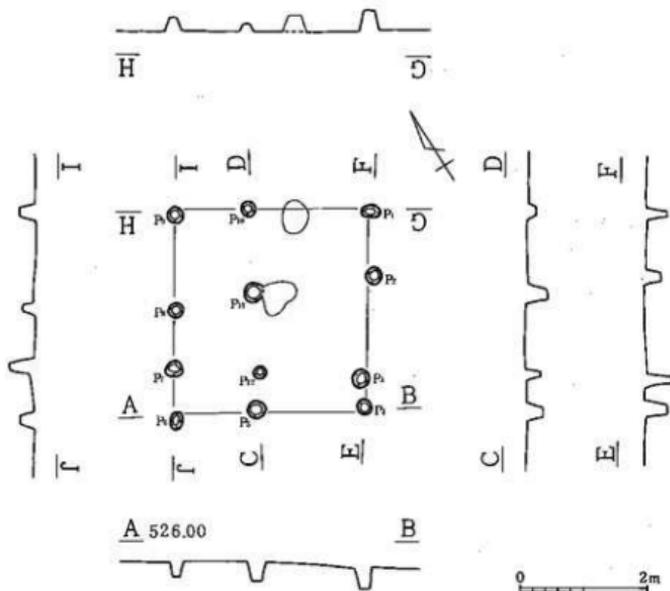
調査区北東側、15号住居址と重複して検出された。本址の東側は削平を受けて、確認していない。15号住居址との新旧関係は、埋土が黒色土で同一で、床面も差がなく、判断ができなかった。検出状況から、本址の詳細は不明であり、北西壁の方向はN33° Eを示す。壁は緩やかな立ち上がりを示す。床面は硬い。

出土遺物は柱穴からの須恵器破片があるが、混入と考えられる。

形態等から、中世に位置づくと考えられるが、詳細は不明である。

④15号住居址 (押図168)

調査区北東側で検出された。16号住居址に切られ、13号住居址と重複して検出された。(3.7)



押図168 掘立柱建物址 1

×2.8mの不整隅丸長方形を呈する遺構で、長軸方向はN33° Eを示す。埋土は黒色土であり、床面は硬い。壁は緩やかに立ち上がり、北西壁際に20～80cm大の礫が多量に集積しているが、石垣ではない。南西壁際中央付近で砥石が出土した。

出土遺物には、土師器破片、不明鉄製品、砥石がある。

重複遺構・形態・出土遺物等から、中世に比定される。

⑤16号住居址（挿図168）

調査区北東側、15号住居址を切って検出された。新旧関係は、15号住居址上部に本址の貼り床が確認されたことによる。南東側は削平されており、規模等詳細は不明である。南西壁の方向はN57° Wを示す。床面の硬い部分は、15号住居址上部で確認された箇所のみである。埋土は黒色土である。

出土遺物は土師器破、大平鉢がある。

新旧関係・出土遺物等から、中世の遺構と考えられる。

(2) 掘立柱建物址

①掘立柱建物址1（挿図169）

調査区の北西側、3・4号住居址と溝址1の間で検出された。3間×2間、規模3.5×3.2mの総柱建物で、桁行・梁行ともに柱間寸法にばらつきがあり、50～190cmである。柱間および柱穴の深さから、P4～P6は廂の柱穴とも考えられる。総柱建物の場合桁行方向はN33.5° E、片面廂の建物の場合、桁行方向はN56.5° Wを示す。柱穴は径20～25cmの不整円形を呈し、埋土黒色土である。周辺には、規模や埋土が類似する柱穴が多数あり、これらとともに建物址を構成する可能性もある。

出土遺物はないが、形態や埋土から中世に位置づくと考えられる。

②掘立柱建物址2（挿図170）

調査区の中央部で検出された。2間×2間、規模5.2×4.7mの側柱の建物で、柱間寸法は桁行240cm、梁行200cmで、桁行方向はN0° Eを示す。柱穴は径40～55cmの不整円形を呈し、隅柱がやや大きい。深さは東側が深い。埋土黒土である。

出土遺物はない。

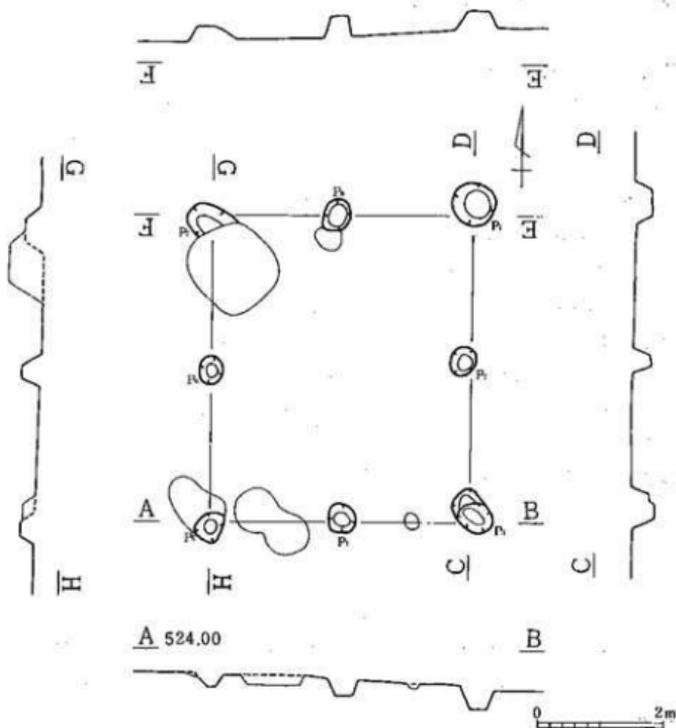
形態から古墳時代後期の建物址と考えられる。

③掘立柱建物址3 (挿図171)

調査区の中央部、掘立柱建物址2の南側、掘立柱建物址4と重複して検出された。2間×2間、規模4.1×4.0mの側柱の建物で、柱間寸法は桁行170cm、梁行150・195cmで、棟持柱がやや西側に寄る。桁行方向はN23.5°Wを示す。柱穴は棟持柱を除き規模が大きく、主に径50～60cmの不整形円形を呈する。深さは、傾斜の下側にあたる東側が深い。埋土漆黒土である。

出土遺物はない。

形態から、掘立柱建物址2と同様、古墳時代後期の建物址と考えられる。



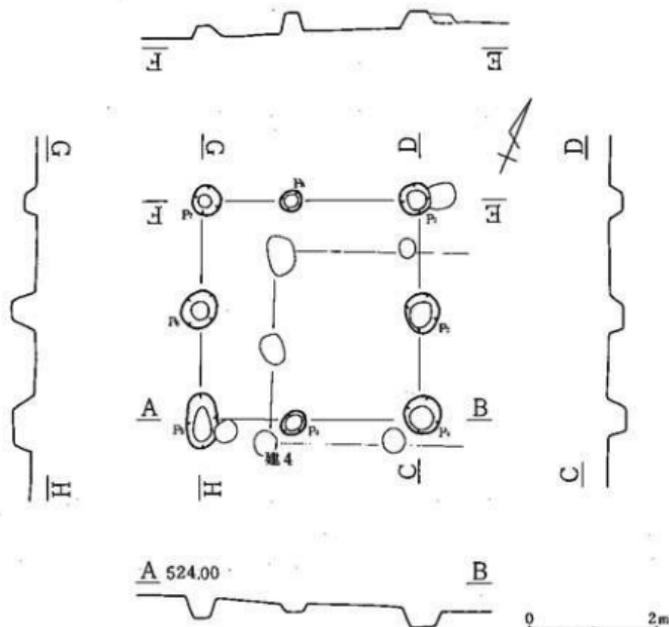
挿図170 掘立柱建物址2

④掘立柱建物址 4 (挿図172)

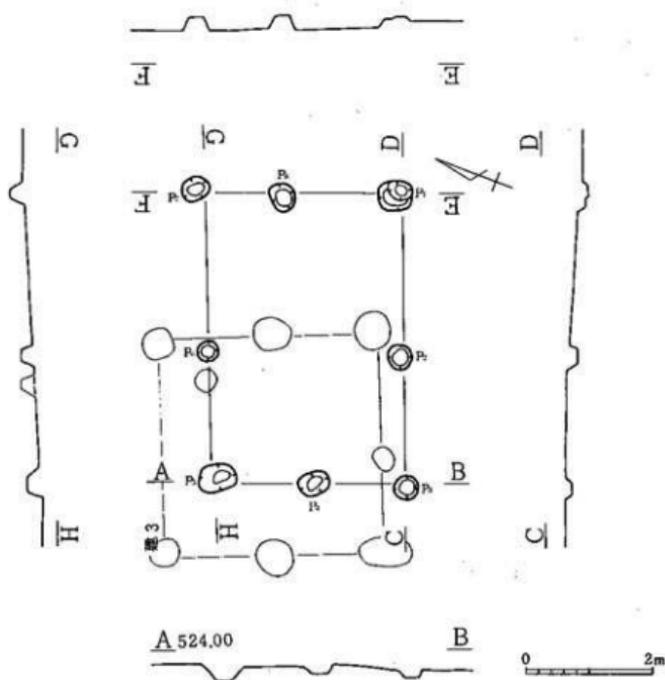
調査区の中央部、掘立柱建物址 2 の南側、掘立柱建物址 3 と重複して検出された。2 間×2 間、規模 5.0×3.4m の側柱の建物で、柱間寸法は桁行 210・255cm、梁行 145cm で、P8 がややずれる。桁行方向は N68° E を示す。柱穴は径 40~55cm の不整形円形を呈し、埋土黒褐色土である。深さは、他の建物址と同様、傾斜の下側にあたる東側が深い。

出土遺物はない。

形態から、掘立柱建物址 2・3 と同様、古墳時代後期の建物址と考えられる。



挿図171 掘立柱建物址 3



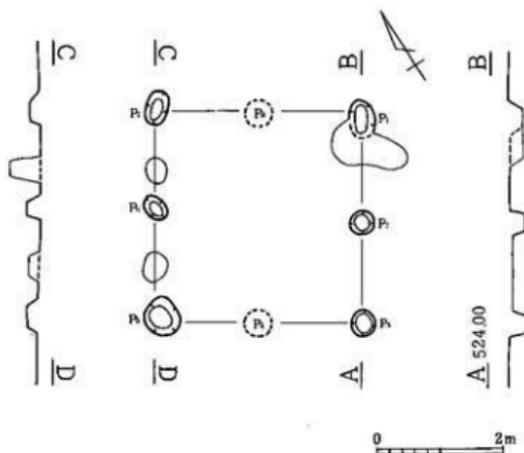
挿図172 掘立柱建物址 4

⑤掘立柱建物址 5 (挿図173)

調査区の西側、土坑17・18の間で検出された。2間×2間、規模3.8×3.6mの側柱の建物と考えられるが、P4・P8は地山礫があり、確認できなかった。柱間寸法は桁行160cm、梁行は推定160cmで、桁行方向はN33°Eを示す。柱穴は径30~55cmの不整円ないし楕円形を呈し、埋土黒褐色土である。深さは、南側が深い。

出土遺物はない。

柱穴の形態は他の建物と異なり、詳細は不明であるが、古墳時代後期の建物址の可能性はある。



挿図173 掘立柱建物址5

(3) 竪穴

①竪穴1 (挿図178)

調査区西側、土坑12・13の間で検出された。南東側は畦畔により壊されており、把握できなかった。不整形を呈すると考えられ、規模3.3×2.9m、深さ約30cmを測る。埋土は黒色土である。底面は軟らかく、東側が一段凹む。壁の立ち上りの状態は、西側がだらだらとしているのに対して、東・北側はやや急である。

出土遺物は土師器甕・杯・高環等がある。

出土遺物から、古墳時代後期に属すると考えられる。

(4) 溝址

①溝址1 (挿図179)

調査区北西側、6号住居址を切り、土坑22・27と重複して検出された。6号住居址付近で壁の手に折れて、方向をN65.5°WからN30°Eに変える。北西側は、削平のため途中で切れるが、調査区外まで伸びることが調査区断面で確認された。また、本址の北東側も調査区外に伸びる。

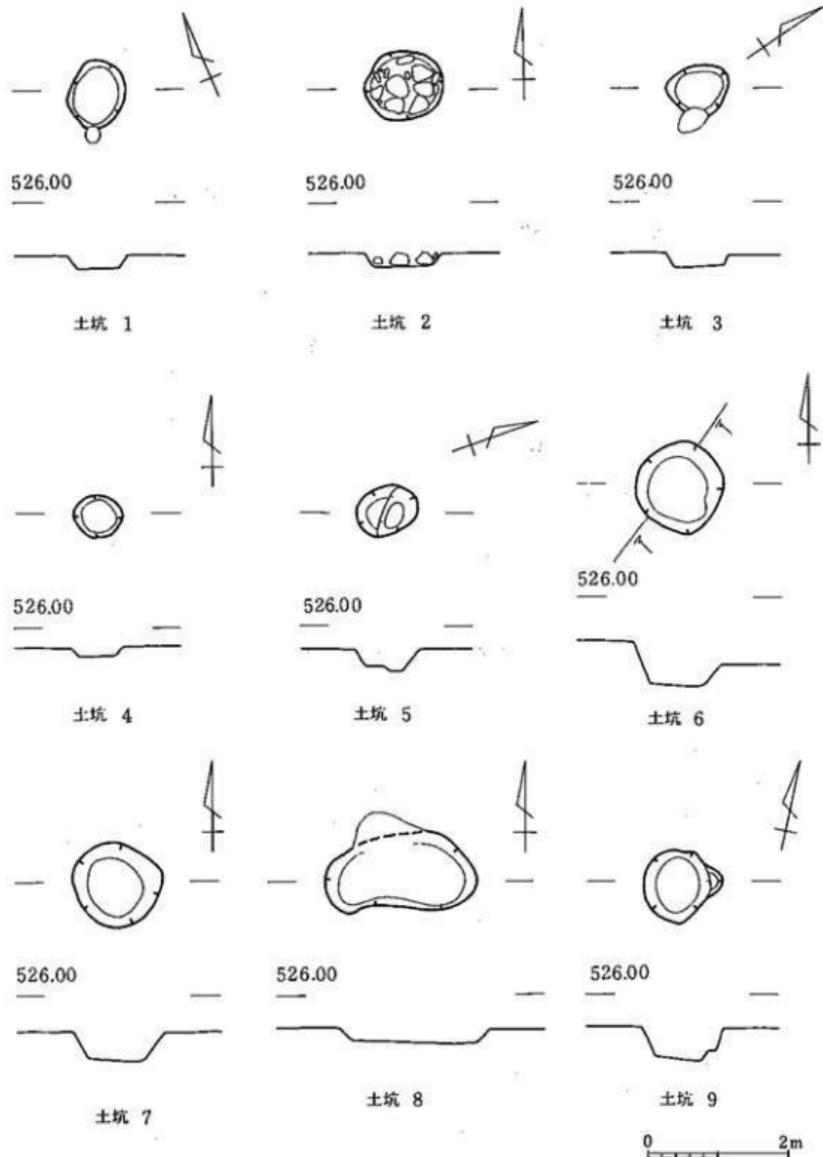


插图174 土坑1~9

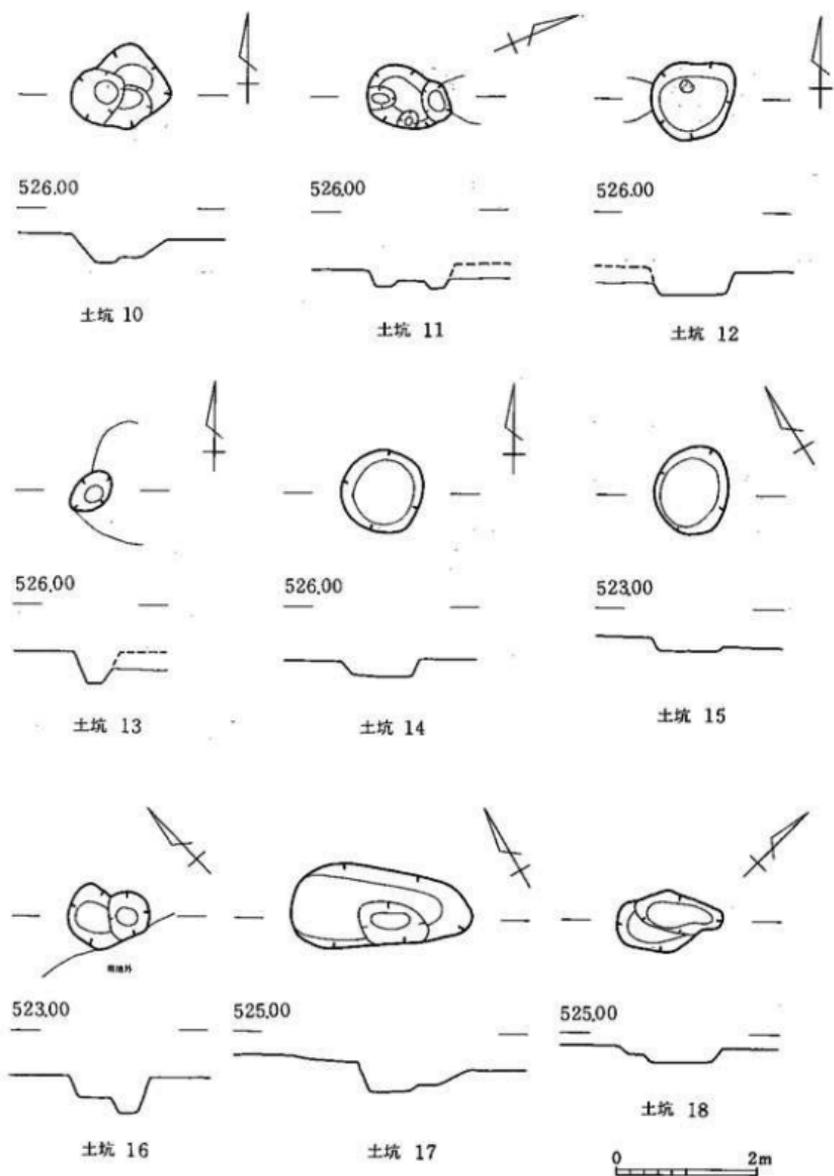


插图175 土坑10~18

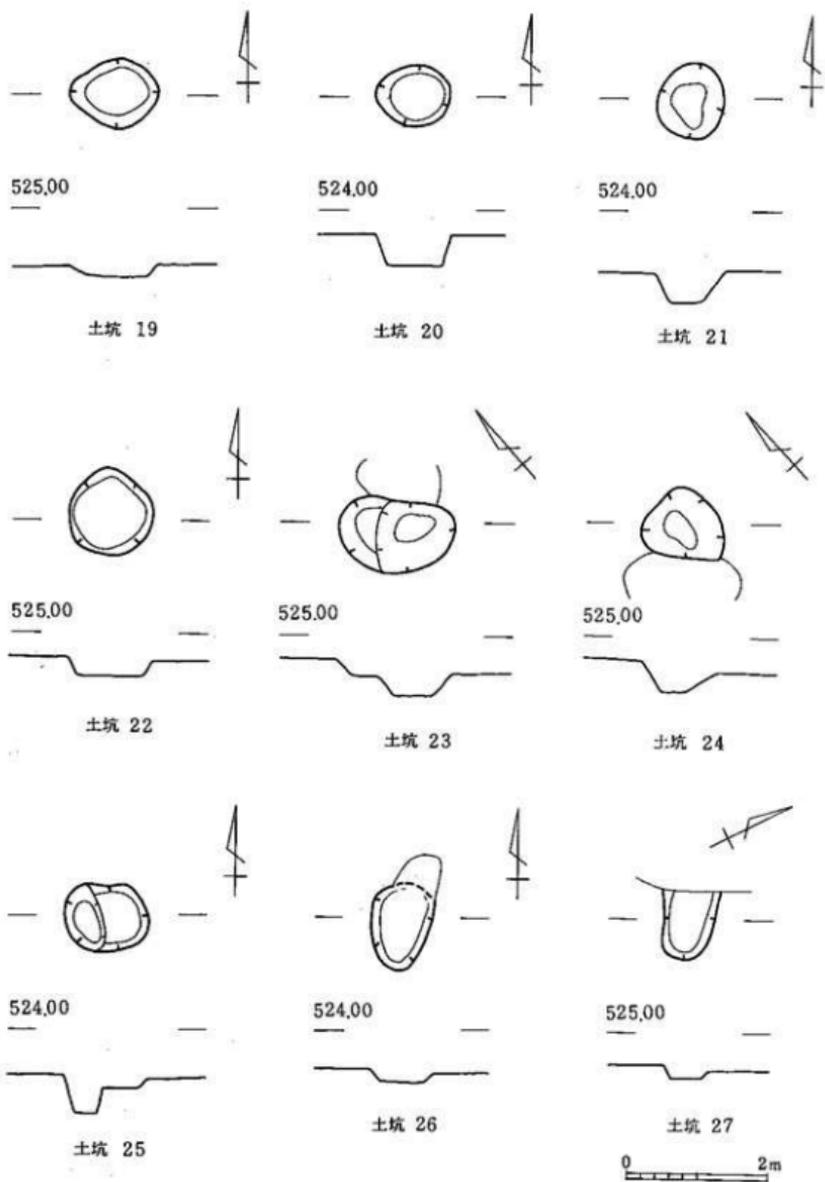


插图176 土坑19~27

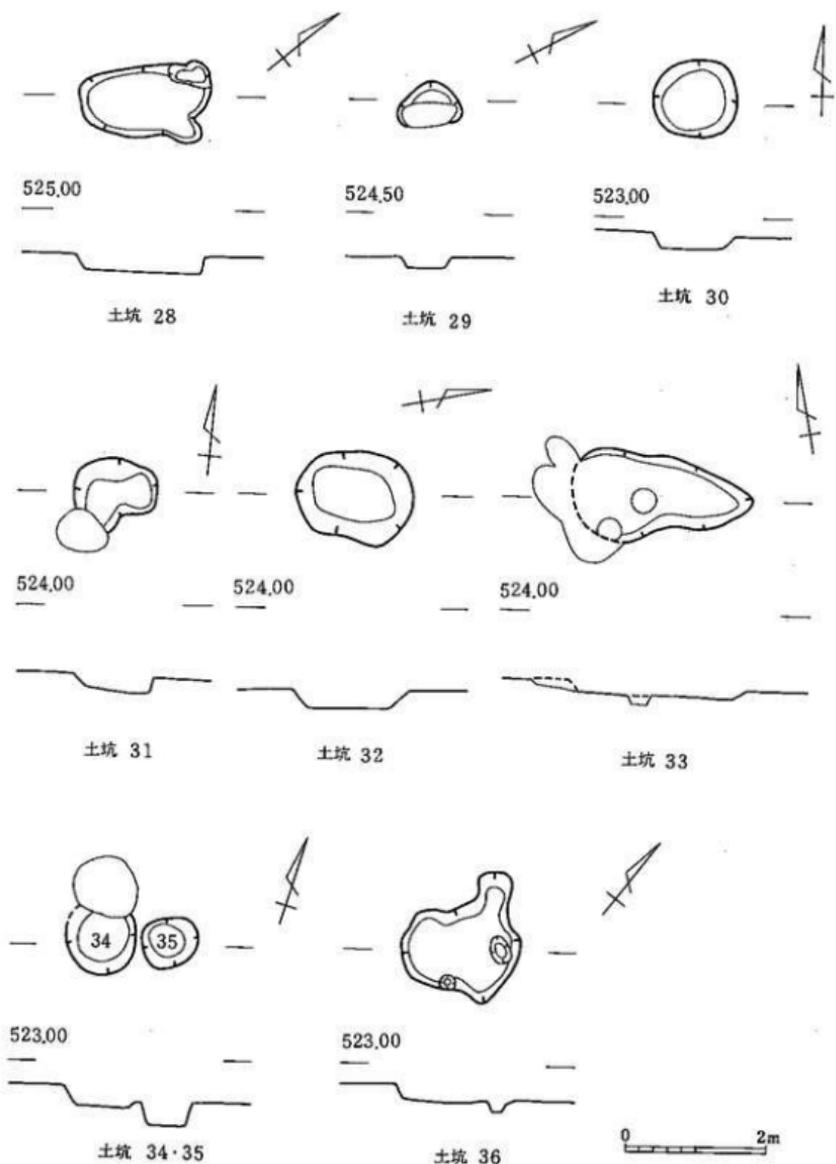


插图177 土坑28~36

確認された部分は、長さ35.6m、幅2.0~2.25m、深さ約30cmを測る。埋土は上層が黒色土で、下層は20~30cm大の礫が混じる砂利層である。北西半は底面が逆溝鋸形を呈するのに対し、北東半は西壁際が一部分凹むものの全体的に平坦である。

出土遺物は内耳・鉄軸雷鉢・陶器皿・天目碗、磁石、鉄滓等がある。

出土遺物等から、中世に位置づく。

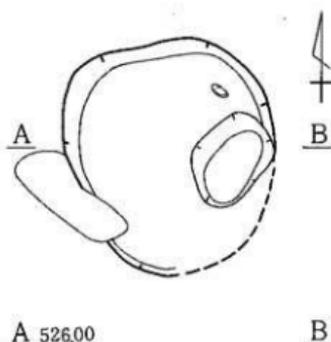


図178 竪穴1

②溝址2 (挿図179)

調査区西側で検出された。11・12号住居址と重複する。重複部分が多いが、埋土が黄土混黒色土で同一であるため、一連の遺構であると判断した。推定の長さは12m、幅0.95~1.7m、深さ約15cmを測る。弧状を呈すると考えられ、確認部分での長軸方向はN37.5° E、N71° Eである。断面皿状を呈する。

出土遺物には、土師器甕、土師質皿がある。

時期等詳細は不明である。

③溝址3 (挿図180)

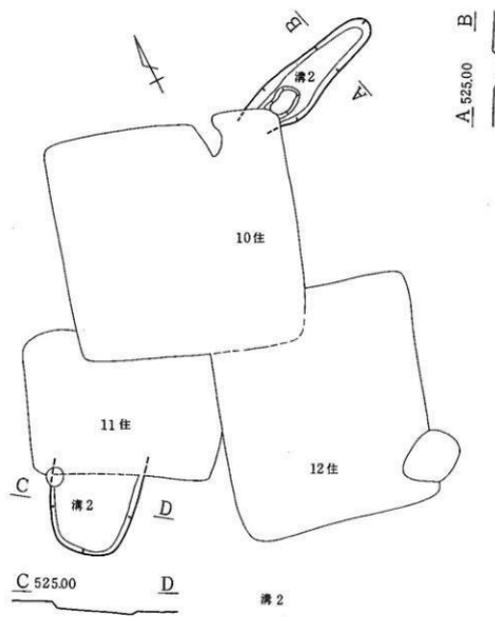
調査区東側で検出された。19号住居址を切る。北側は調査区外に伸びる。20号住居址付近から確認できず、南東側は削平されたと考えられる。確認された部分の長さは9.0m、幅0.8~1.6m、深さ約25cmを測る。長軸方向はN22° Wで、溝址4とはほぼ平行する。埋土黒色土である。底面は平坦である。

出土遺物には、土師器甕・環、須恵器甕、陶器甕がある。

出土遺物から中世と考えられる。

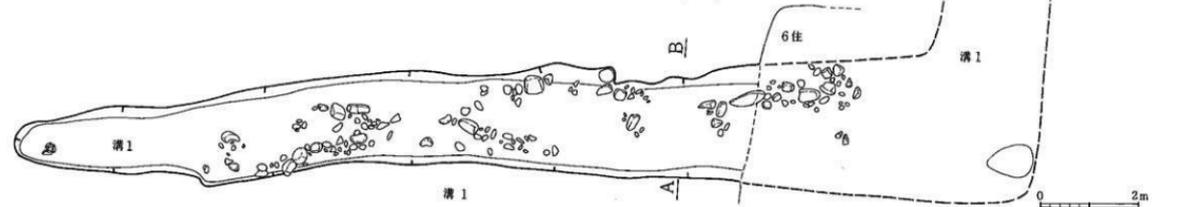
④溝址4 (挿図180)

調査区東側で検出された。18・20号住居址と重複する。20号住居址北西壁付近で方向を変える可能性もある。確認された部分の長さは6.8m、幅0.45~1.2m、深さ約20cmを測る。長軸方向は



C 525.00 D

A 525.00 B



B A 525.00 B

榑園179 溝址1・2

N30° Wを示す。埋土黄混黒褐色土である。底面は平坦で、床面状に硬い。

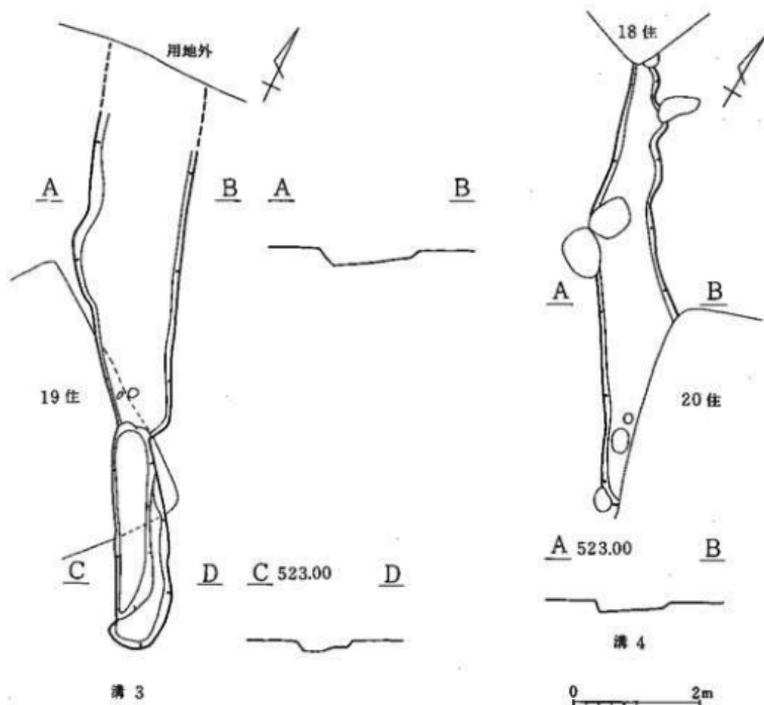
出土遺物には、土師器甕・坏、鉄滓がある。

出土遺物等から、他の溝址と同様中世に属すると考えられるが、詳細は不明である。

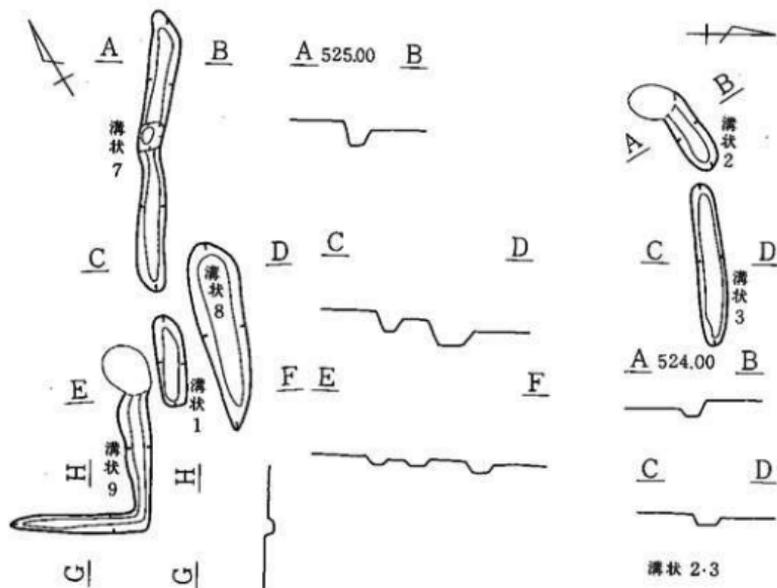
(5) 溝状址

①溝状址1 (挿図181)

調査区中央、溝状址7～9の間で検出された。長さ1.3m、幅0.4m、深さ約30cmを測る。長軸方向はN28° Eを示す。埋土黒褐色土である。



挿図180 溝址3・4



沟状 1·7·8·9

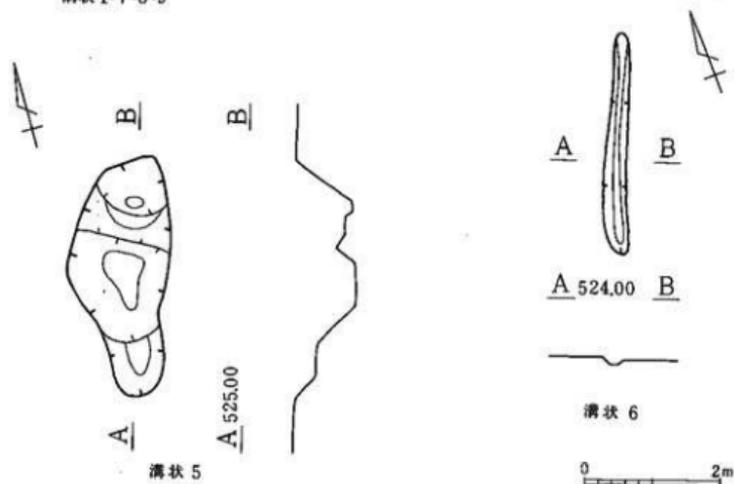


插图181 沟状址 1~3·5~9

出土遺物には、土師器甕小片1片がある。
時期等詳細は不明である。

②溝状址2（挿図181）

調査区南側、溝状址3の隣で検出された。長さ1.25m、幅0.4m、深さ約25cmを測る。長軸方向はN40° Eを示す。埋土黒褐色土である。

出土遺物には、土師器高環脚がある。
時期等詳細は不明である。

③溝状址3（挿図181）

調査区南側、溝状址2の隣で検出された。長さ2.35m、幅0.4m、深さ約15cmを測る。長軸方向はN83° Eを示す。埋土黒色土である。

出土遺物には、土師器甕1片がある。
時期等詳細は不明である。

④溝状址5（挿図181）

調査区北側、土坑28・29の隣で検出された。長さ3.45m、幅1.5m、深さは最深度で約100cmを測る。底部は深さが揃わず、複数柱穴の重複とも考えられる。長軸方向はN11° Eを示す。埋土黒褐色土である。

出土遺物には、縄文土器小1片がある。
時期等詳細は不明である。

⑤溝状址6（挿図181）

調査区中央、16号住居址、土坑25・31～33の間で検出された。長さ3.2m、幅0.35m、深さ約10cmを測る。長軸方向はN23° Eを示す。埋土黒色土である。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

⑥溝状址7（挿図181）

調査区中央、溝状址1・8・9の隣で検出された。長さ4.0m、幅0.4m、深さ約35cmを測る。

長軸方向はN34° Eを示す。埋土黒色土である。
出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

⑦溝状址8 (挿図181)

調査区中央、溝状址1・7の隣で検出された。長さ2.8m、幅0.75m、深さ約35cmを測る。長軸方向はN22° Eを示す。埋土黒色土である。
時期等詳細は不明である。

⑧溝状址9 (挿図181)

調査区中央、溝状址1の隣で検出された。鍵の手に折れており、延長4.3m、幅0.25～0.5m、深さは最深部で約10cmを測る。長軸方向は北西半がN29° E、北東半がN59° Wを示す。埋土黒色ないし黒褐色土である。溝状址9の北東半と溝状址7は方向が揃っており、北西側に20～30cmの円形の柱穴が不規則ではあるが分布しており、いわゆる囲溝址の一部とも考えられる。
出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

(6) その他

①柱穴 (挿図182～201)

調査区全体に多数の柱穴が分布する。大半が埋土黒色ないし黒褐色土であり、径20～30cm程度の円形を呈するもの、50cm以上の不整形を呈するもの等がある。前者は13～16・18～20号住居址周辺に集中しており、この付近に中世以降の建物等が存在した可能性がある。後者は、主に古墳時代後期の掘立柱建物址2～4周辺に分布している。この部分は竪穴住居址の空白域であり、柱穴の中には掘立柱建物址を構成する可能性をもつものもある。

②その他 (挿図197)

18号住居址南東壁縁に、やや斜位に立った直方体状の花崗岩がある。付近に21号住居址が単独で確認されていること、この隙の周辺の柱穴から中期の深鉢片が若干出土していること、そして隙の遺存状況を考慮すると、縄文時代中期後半の竪穴住居址に伴う石組炉の一部と考えられる。

(馬場保之)

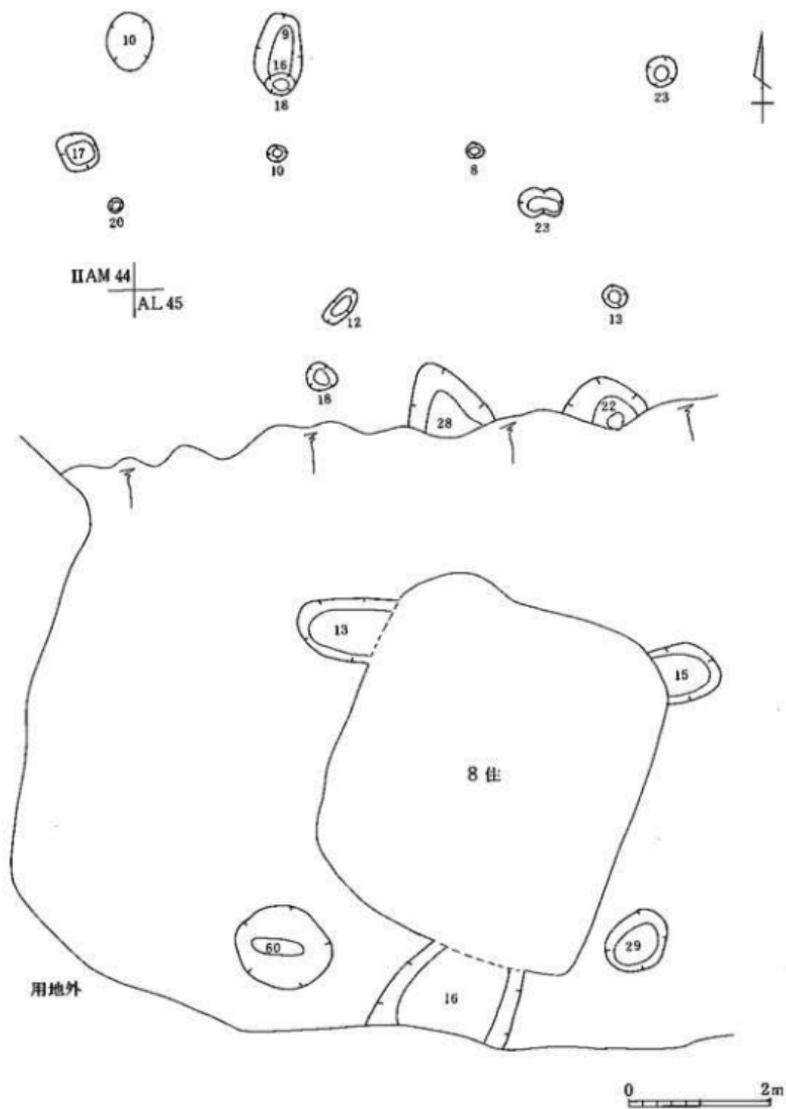


插图182 周边柱穴平面图

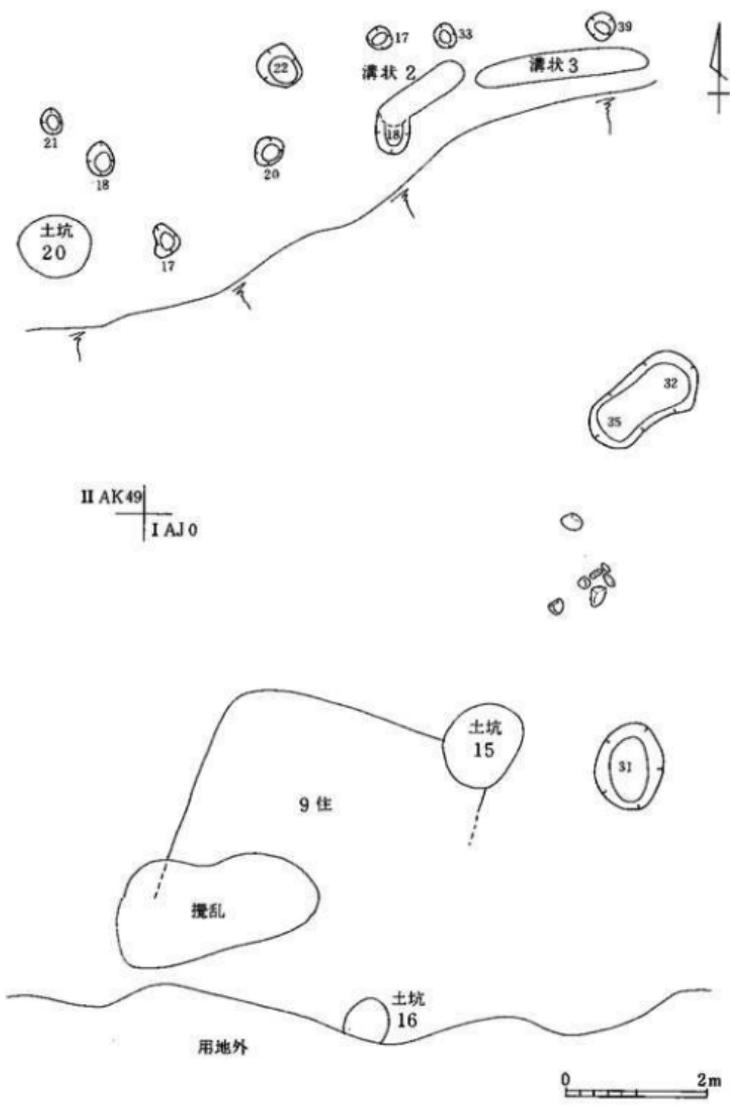


插图183 周边柱穴平面图四

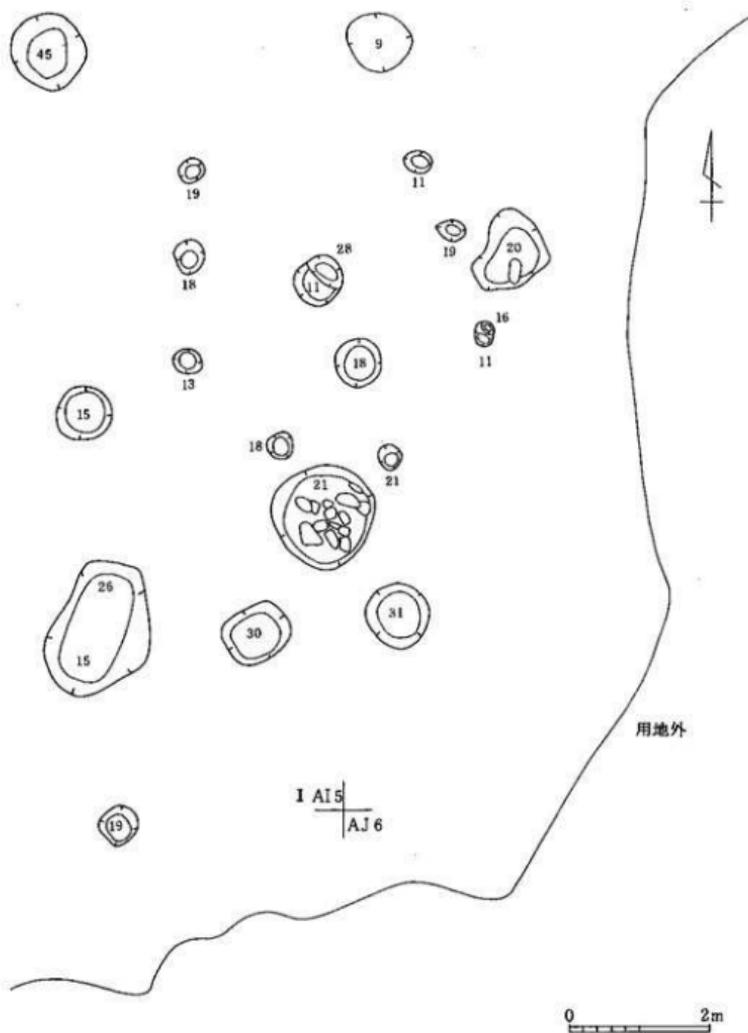


插图184 周边柱穴平面图②4

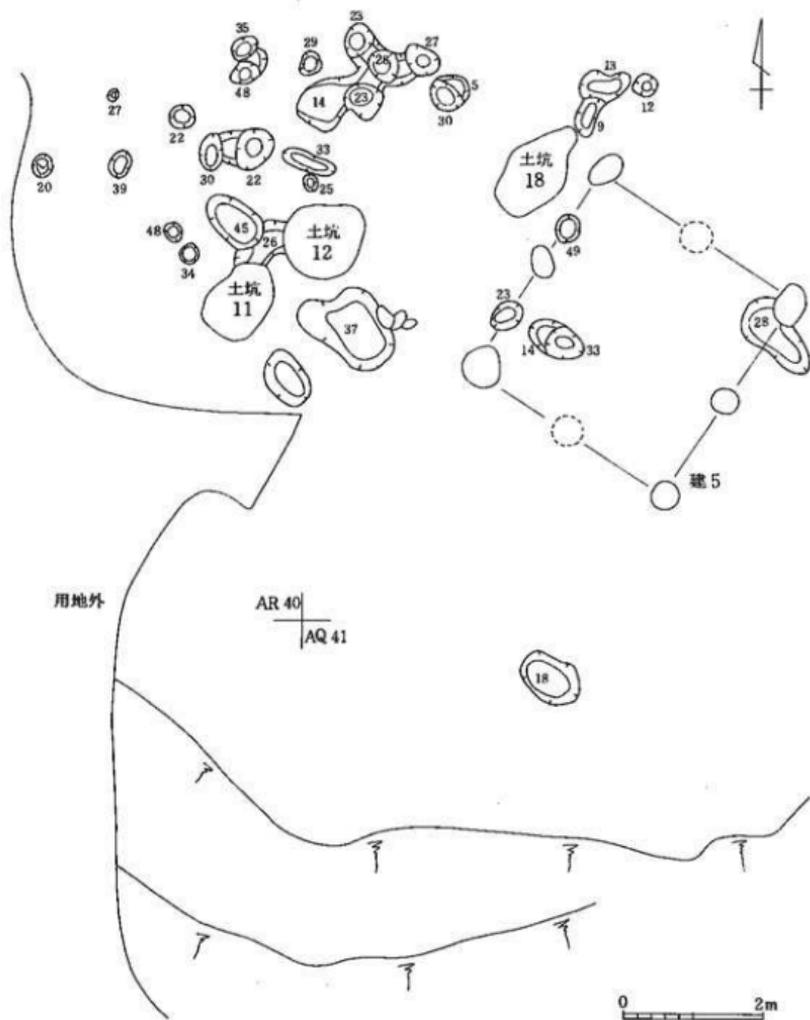


插图185 周边柱穴平面图(中)

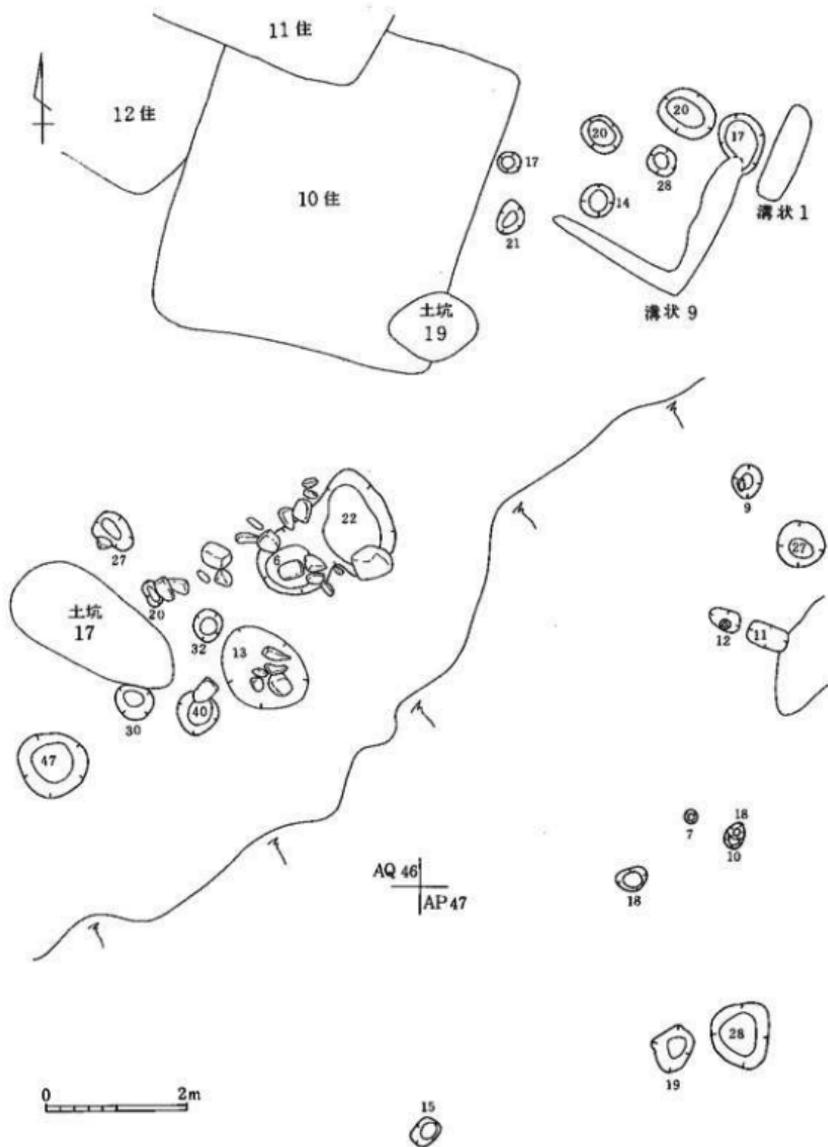


插图186 周边柱穴平面图

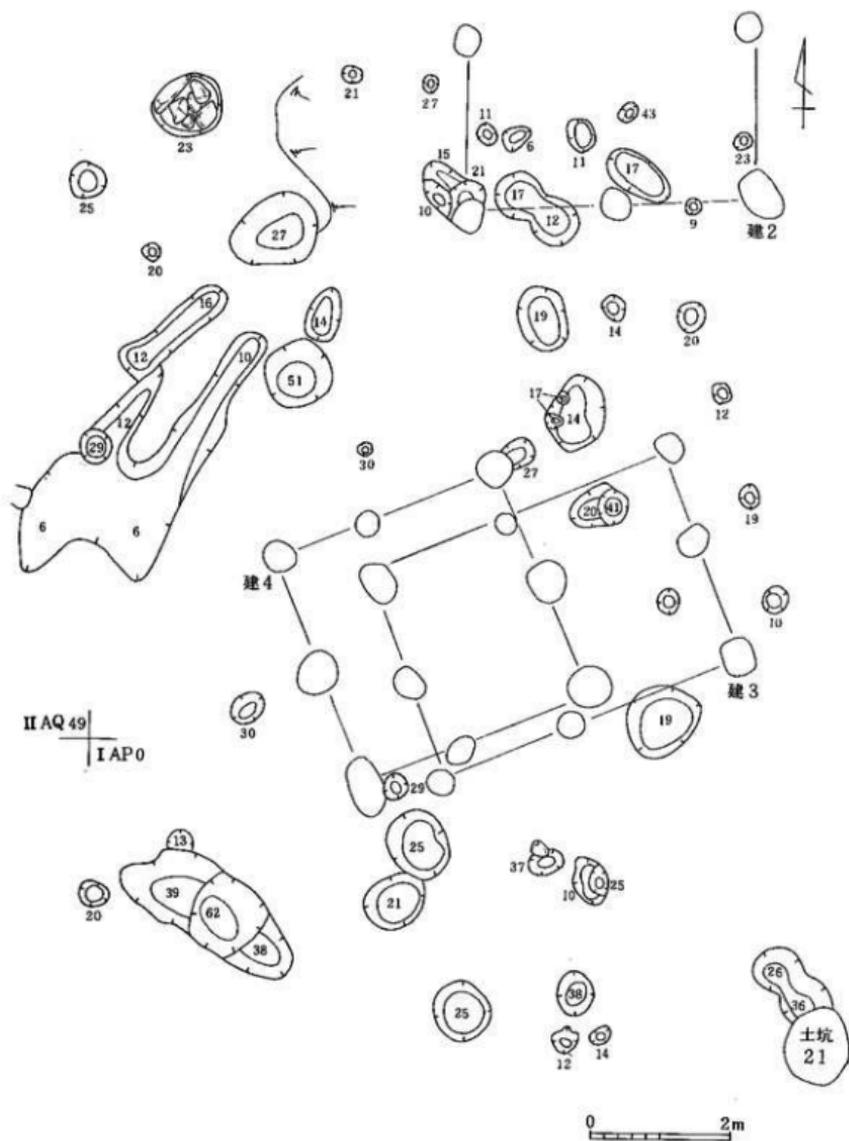


插图187 周边柱穴平面图(部分)

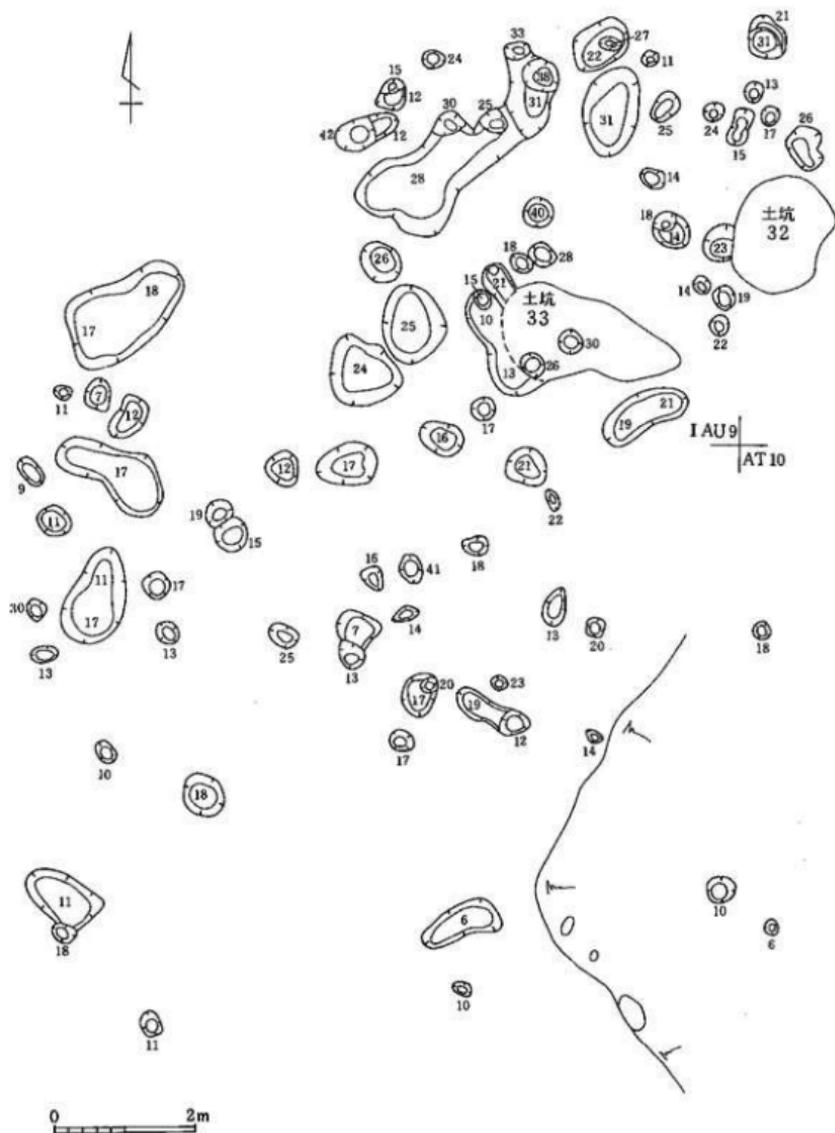


插图188. 周边柱穴平面图

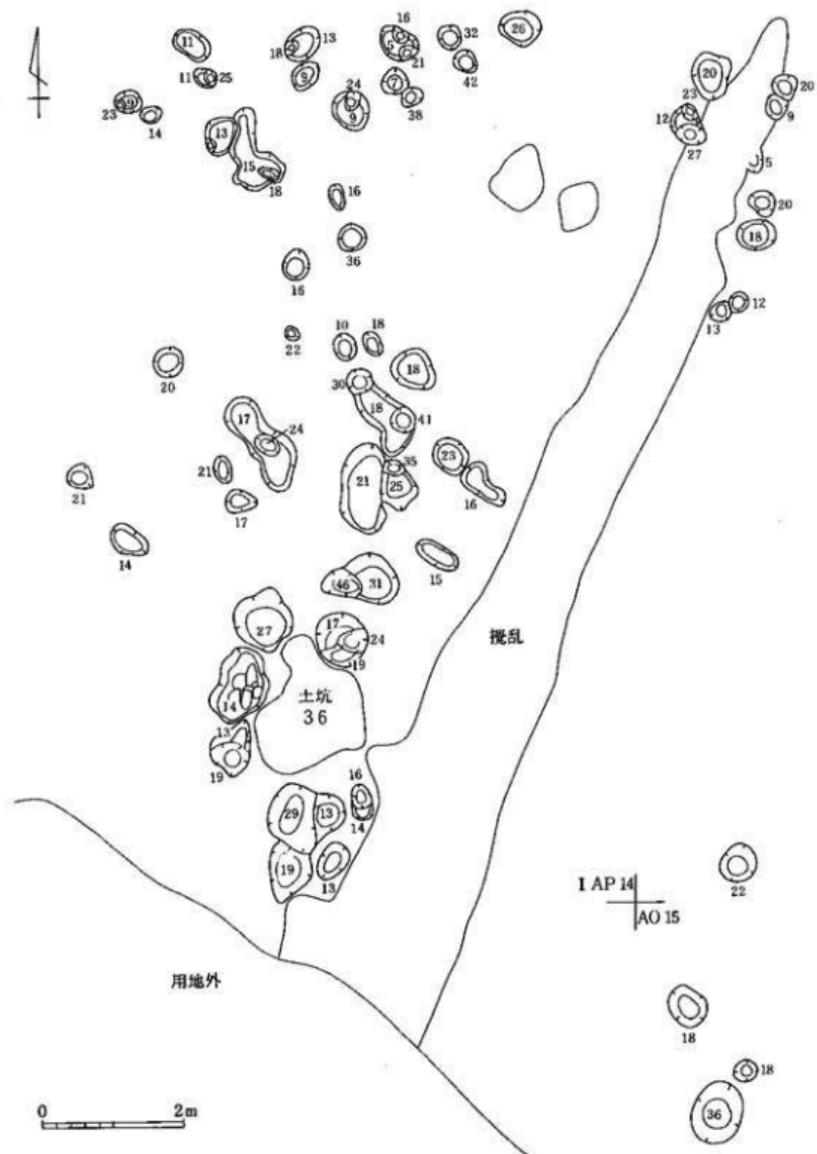


插图189 周边柱穴平面图

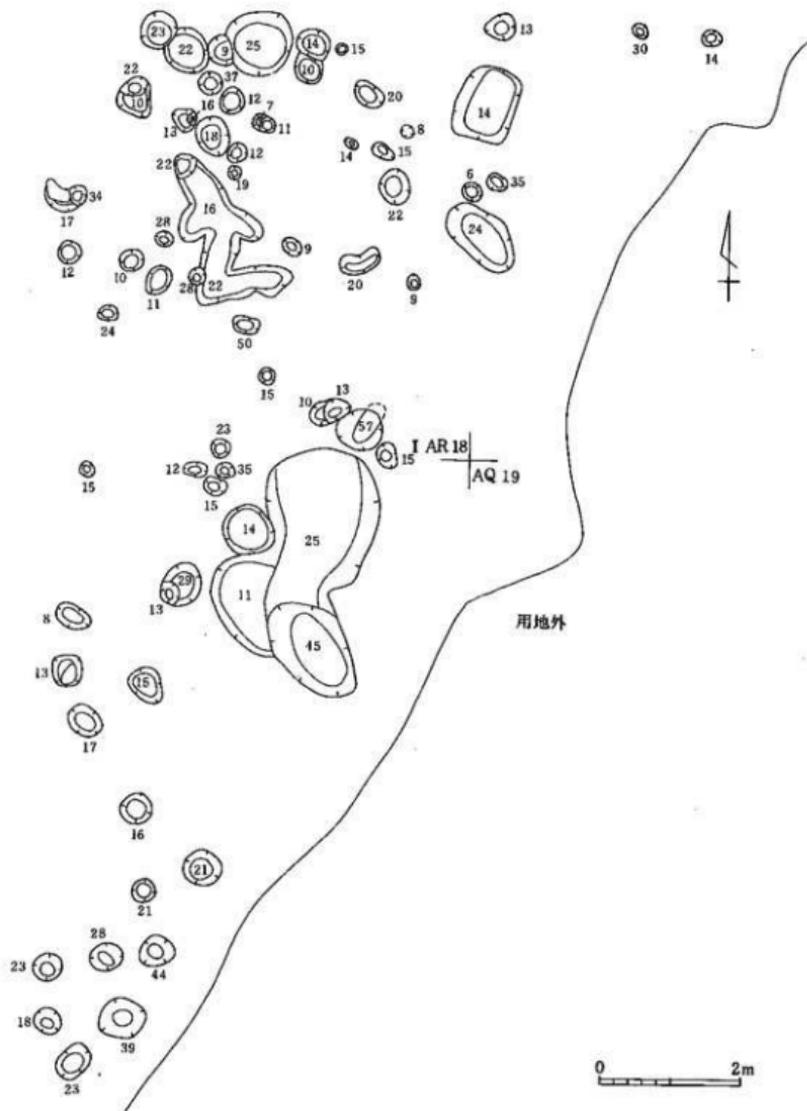


插图190 周原柱穴平面图④

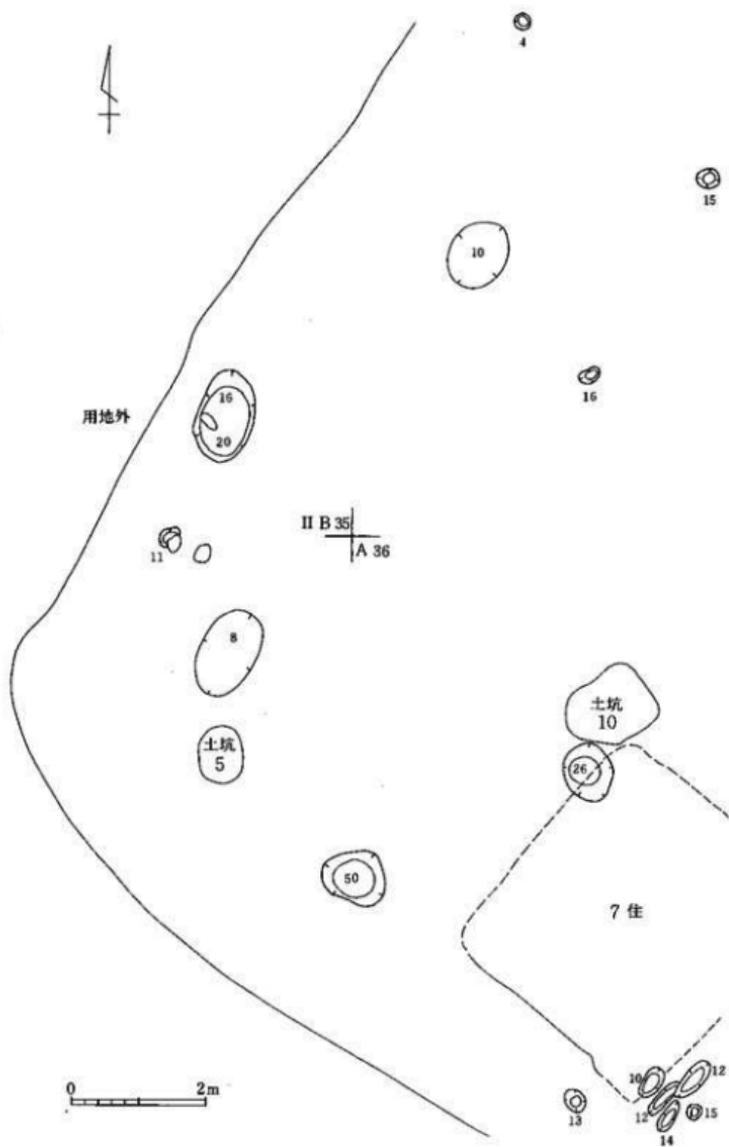
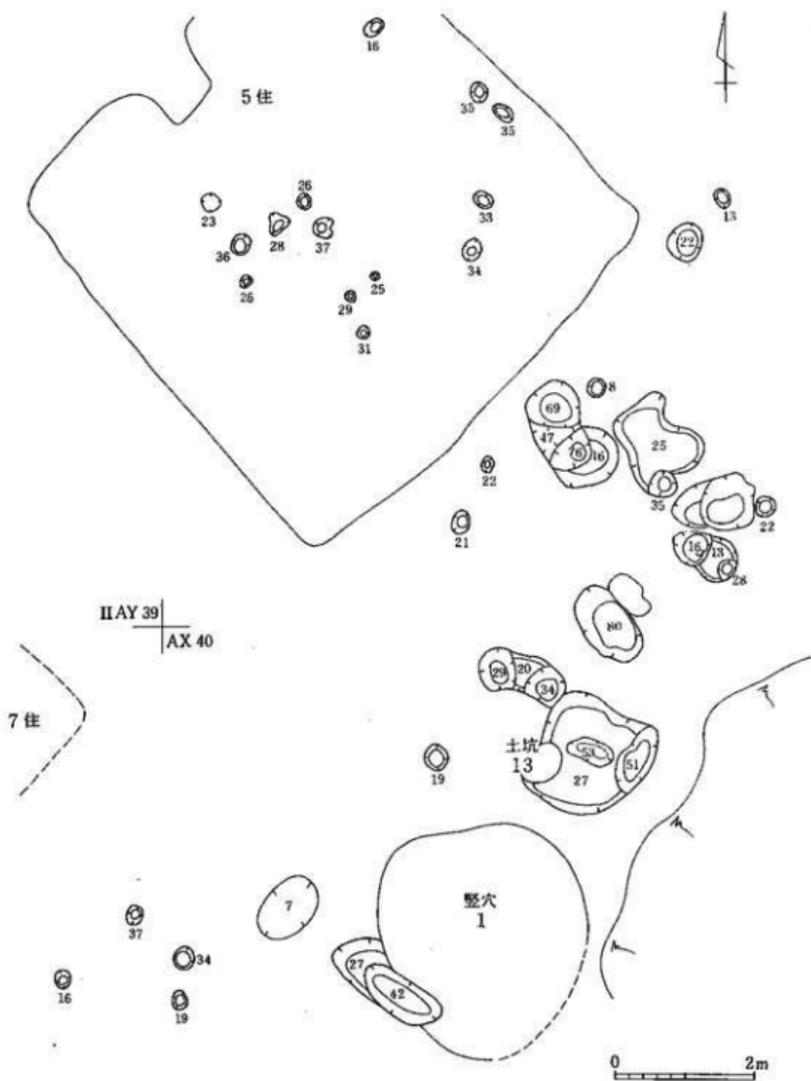
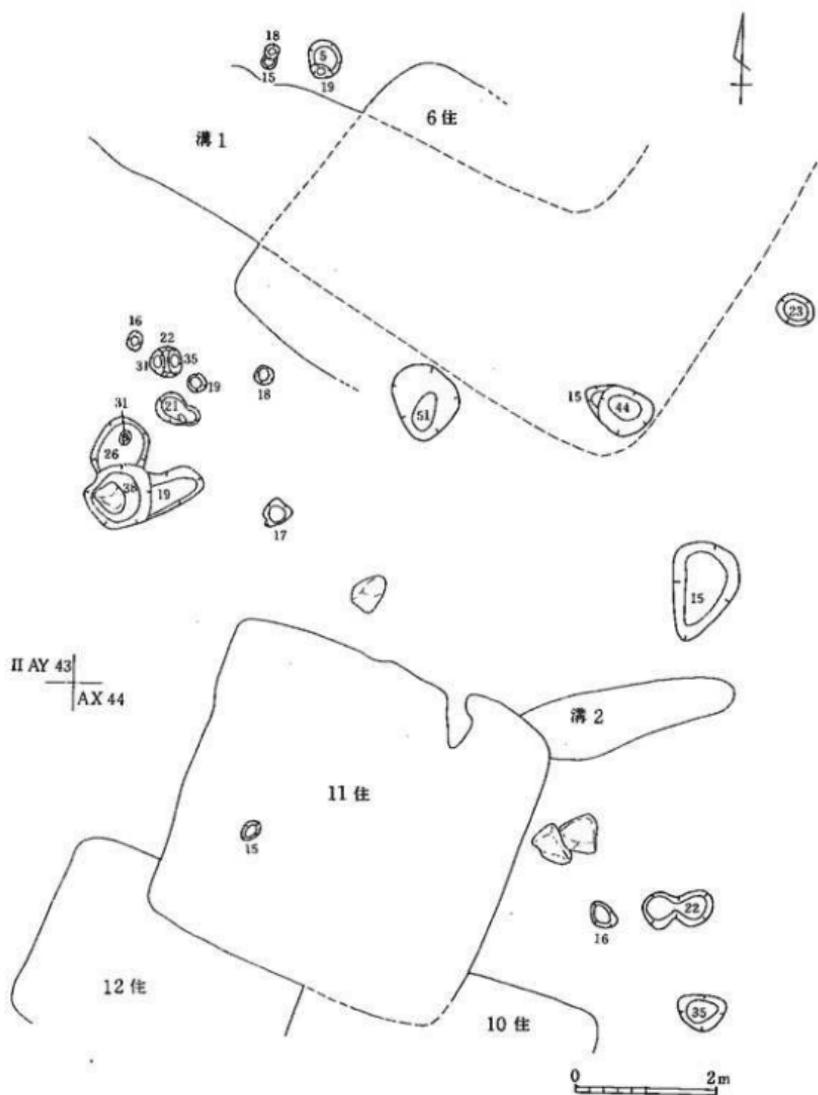


插图191 周边柱穴平面图①



挿図192 周辺柱穴平面図



挿圖193 周辺柱穴平面図(34)

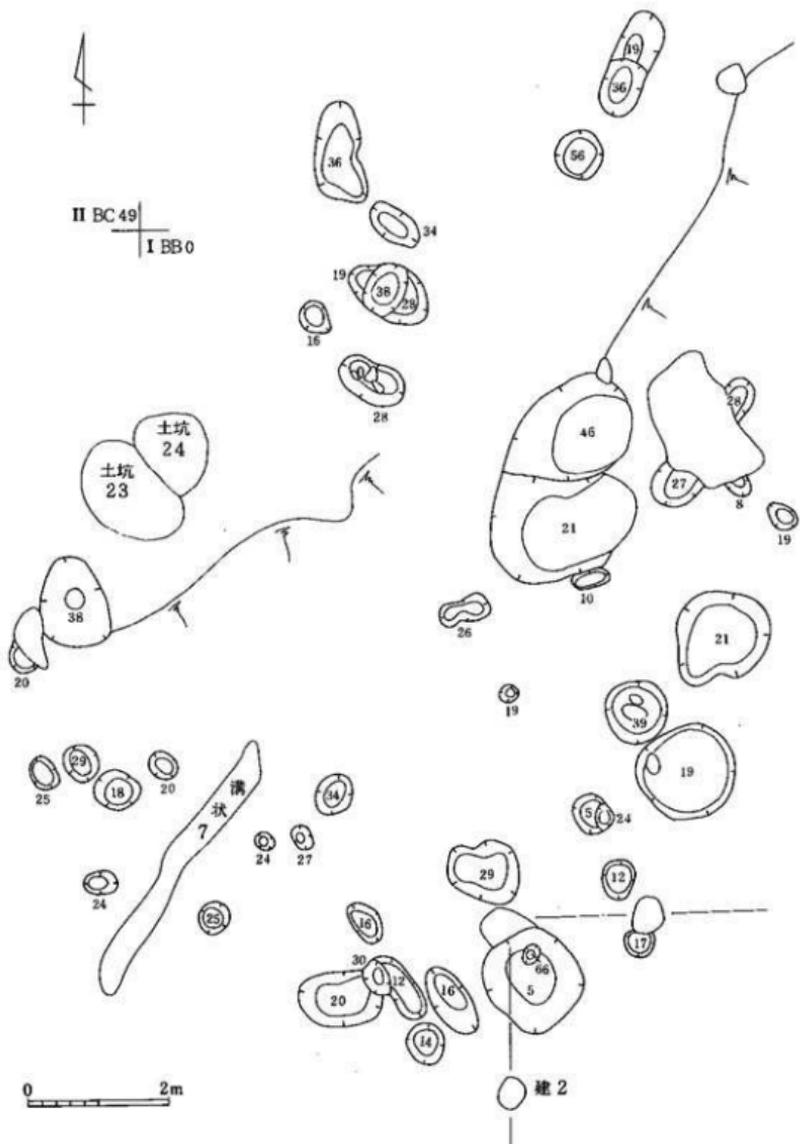


插图104 周边柱穴平面图64

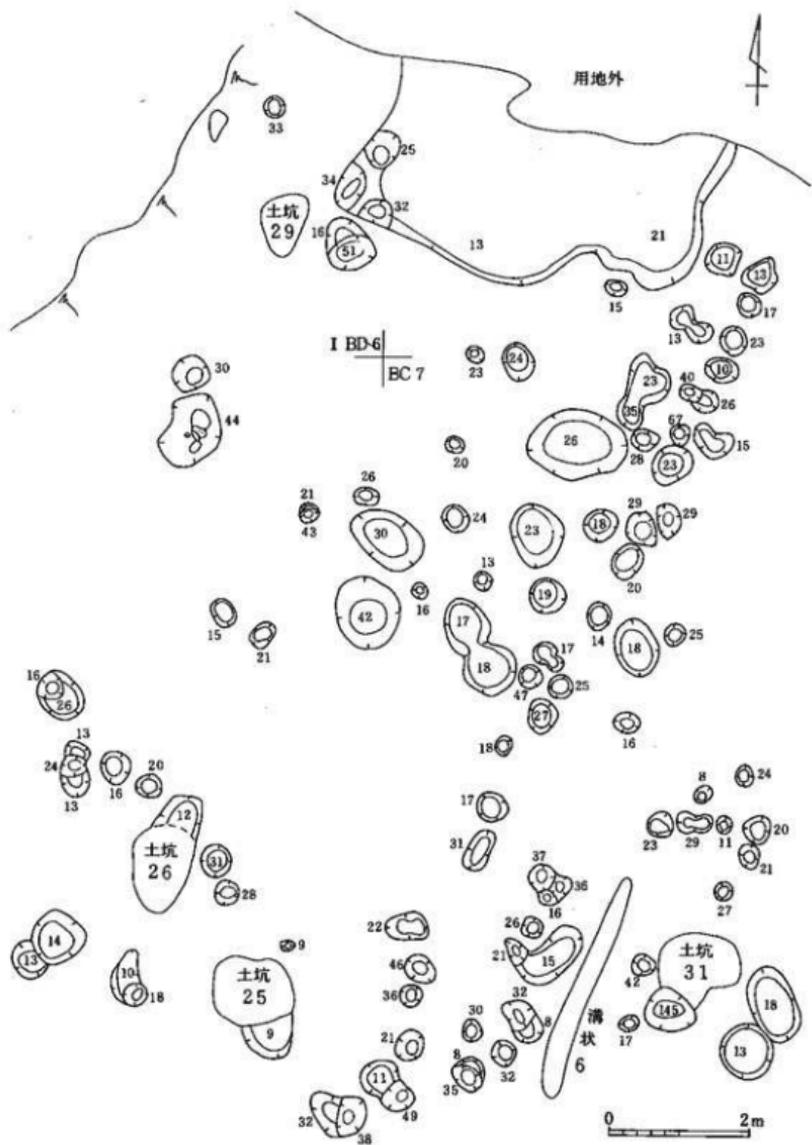
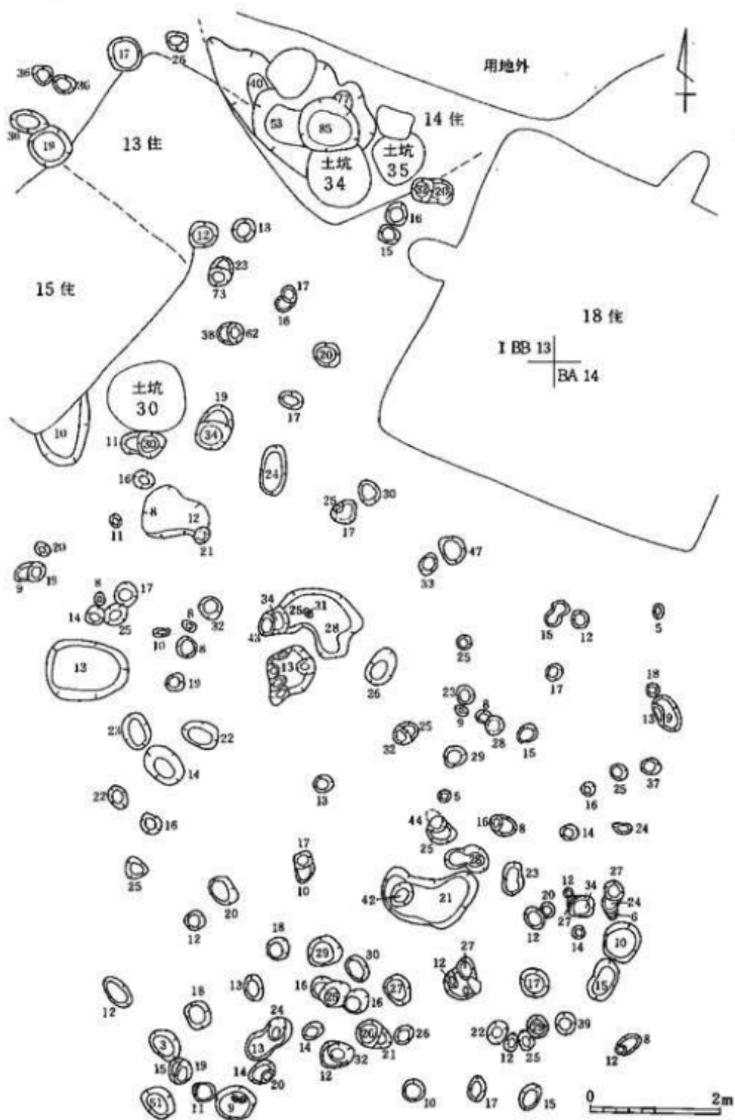
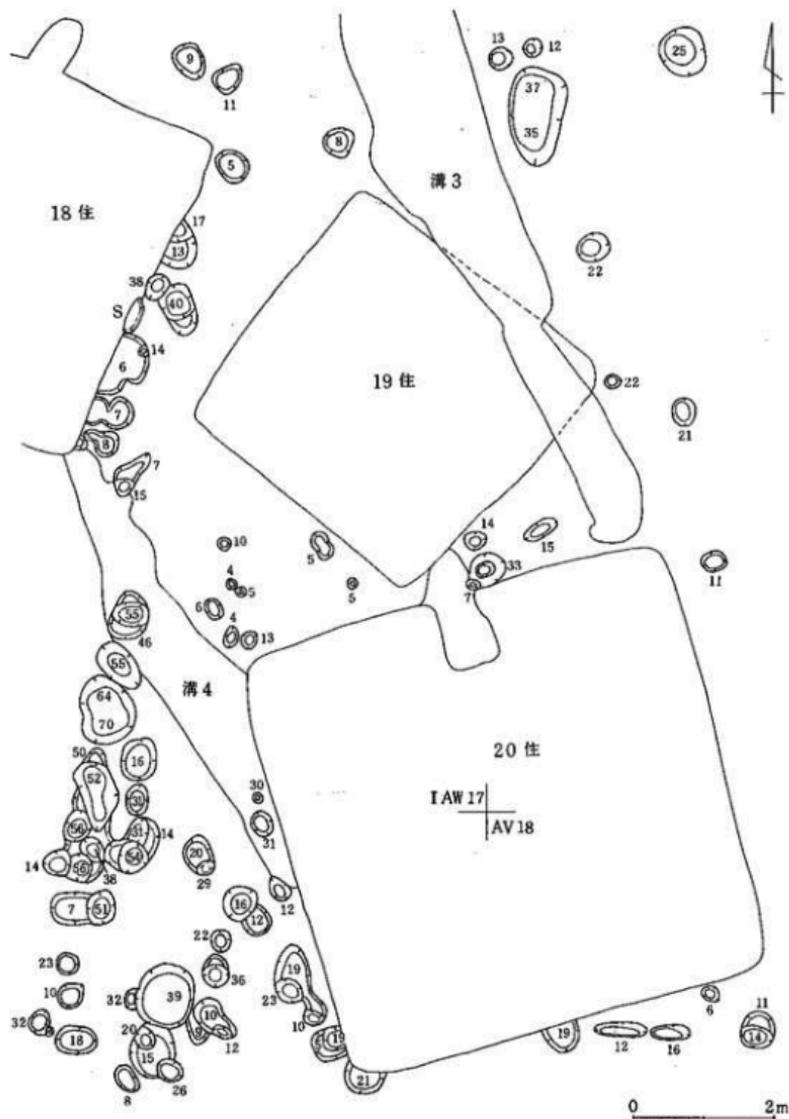


插图195 周园柱穴平面图(叫)



挿圖196 周辺柱穴平面図例



挿図197 周辺柱穴平面図(効)

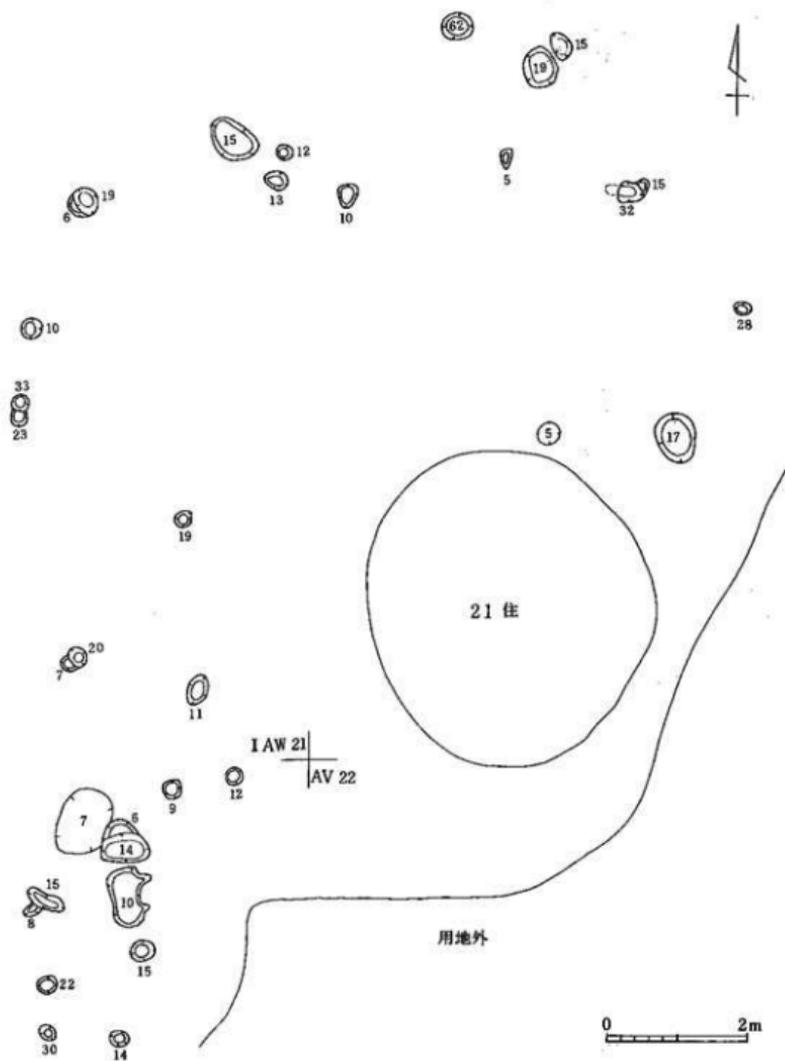


插图166 周边柱穴平面图④

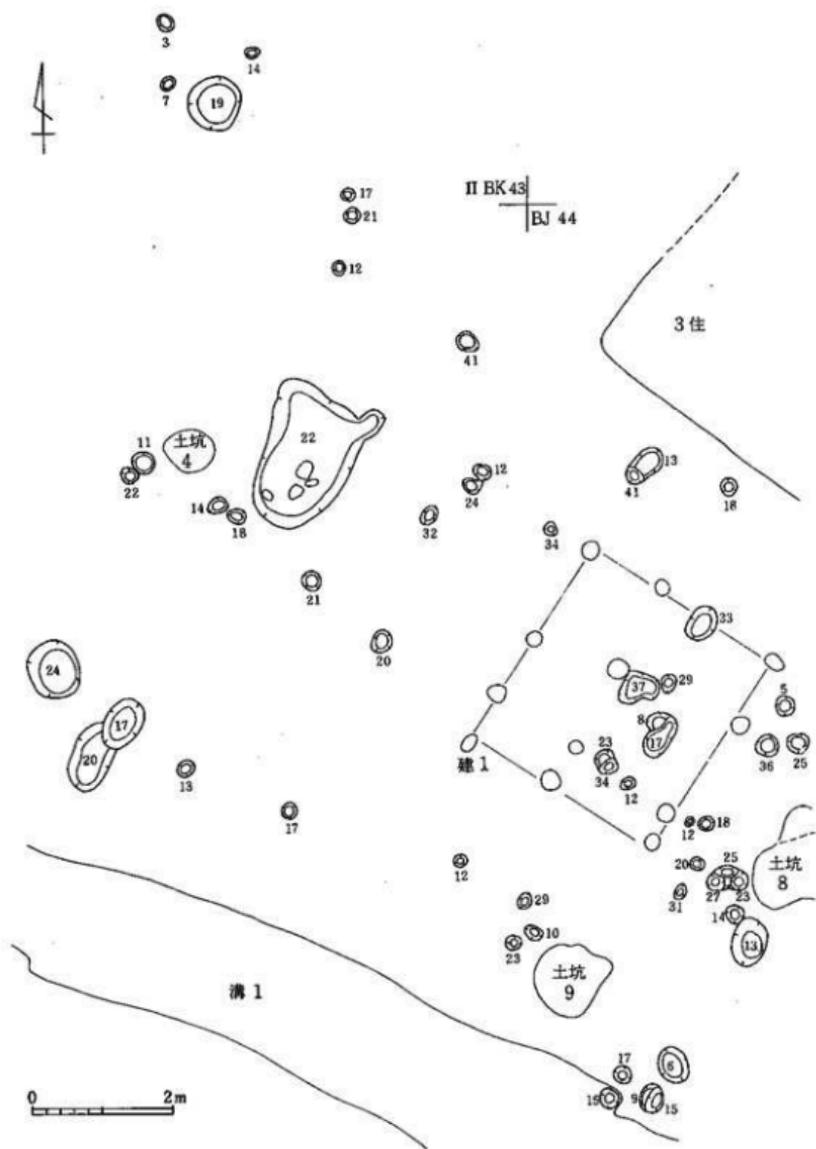


插图199 周边柱穴平面图④

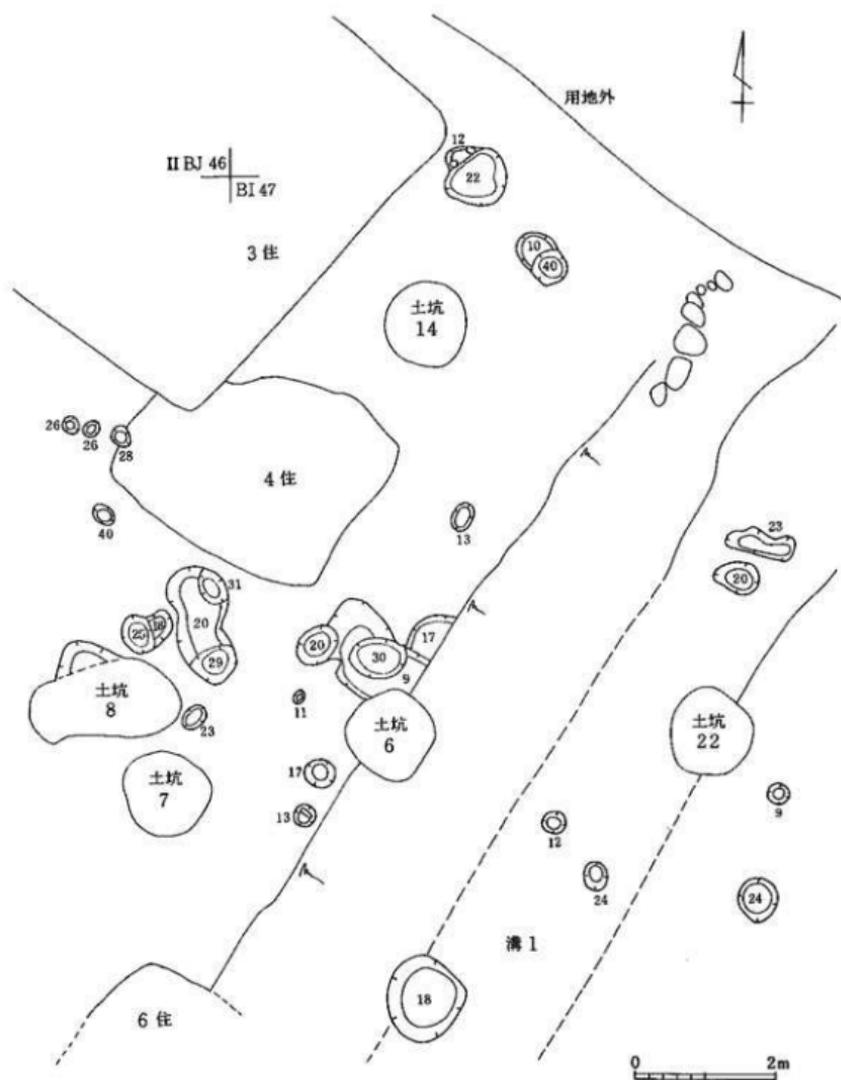


插图200 周边柱穴平面图④

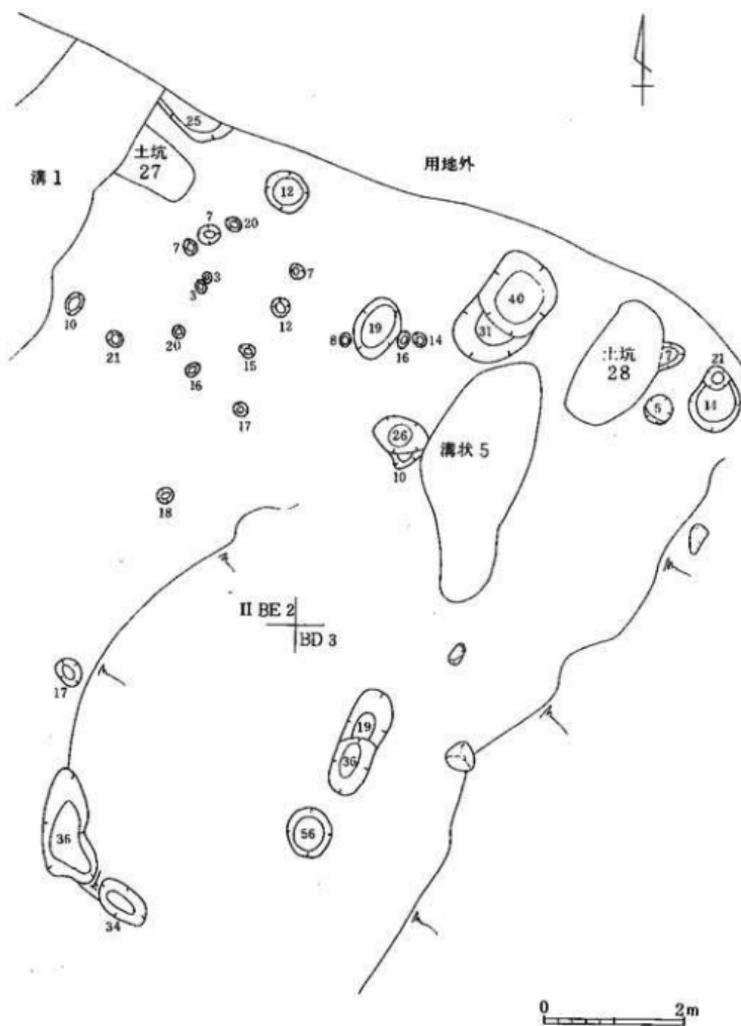


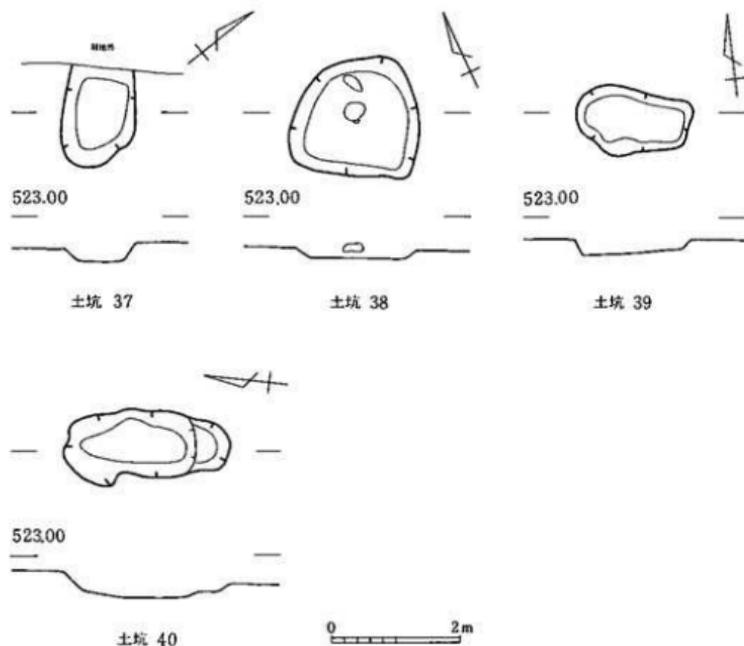
插图201 周边柱穴平面图(4)

6. 第5地点（調査面積約460㎡、付図4）

(1) その他

①柱穴（挿図203～206）

調査区中央部分を中心に多数の柱穴が分布する。耕土直下の礫混黄褐色砂質土で検出された。大半が埋土黒色ないし黒褐色土であり、大きさはまちまちである。径20～30cm程度の円形を呈するもの、50cm以上の不整形を呈するもの等々がある。形状の規格性や配列の規則性は見出せない。周辺での遺物出土は多くないが、中・近世の陶磁器類が若干得られていることから、建物等に関連するものもあると考えられる。



挿図202 土坑37～40

②タタキ状部分（挿図 206）

調査区北東隅調査区際で確認された。礫混黄褐色砂質土上部に、暗黄色土のタタキ状部分が広がる。時期等詳細は不明である。付近に柱穴が幾つかあり、建物に関連するものとも考えられる。

（馬場保之）

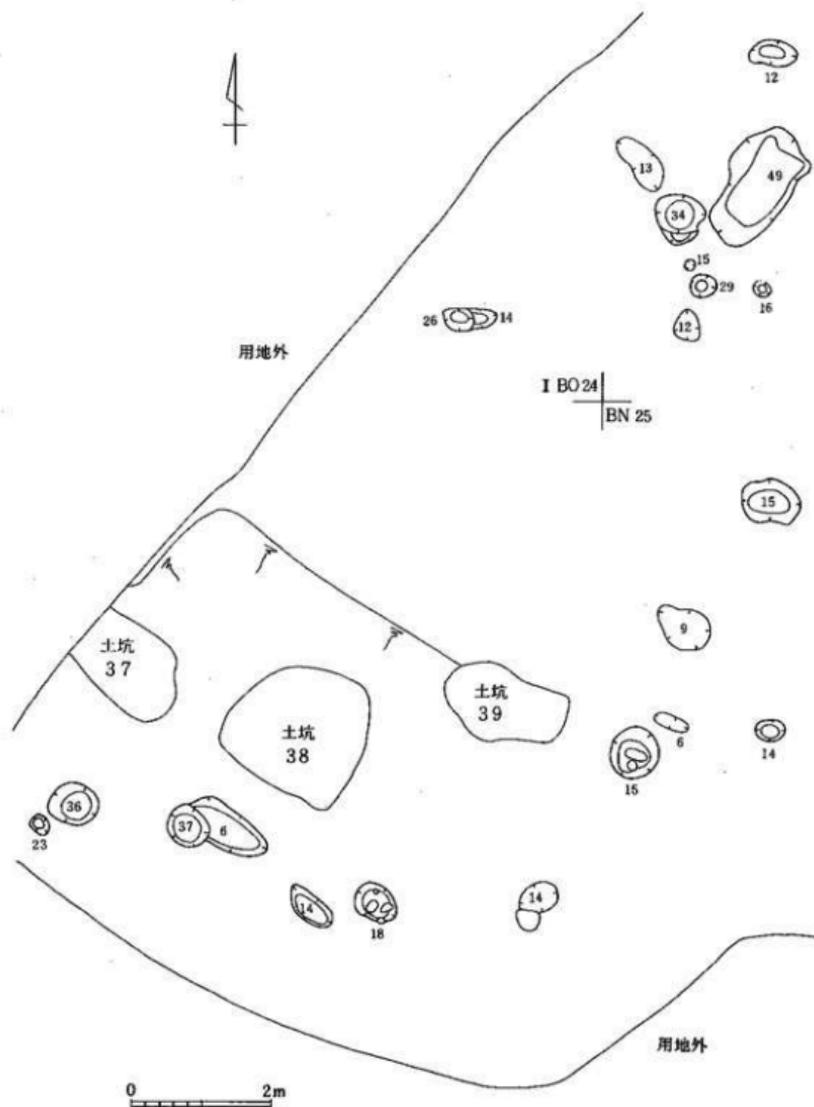


插图203 周边柱穴平面图(4)

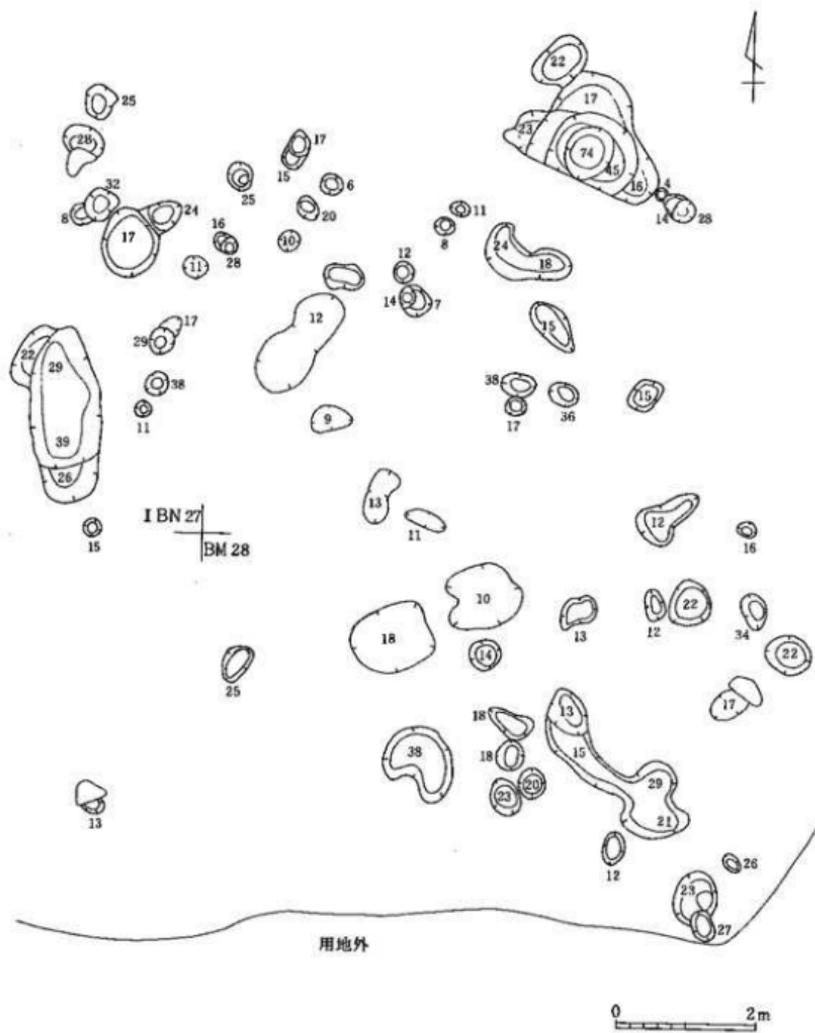


插图204 周园柱穴平面图(4)

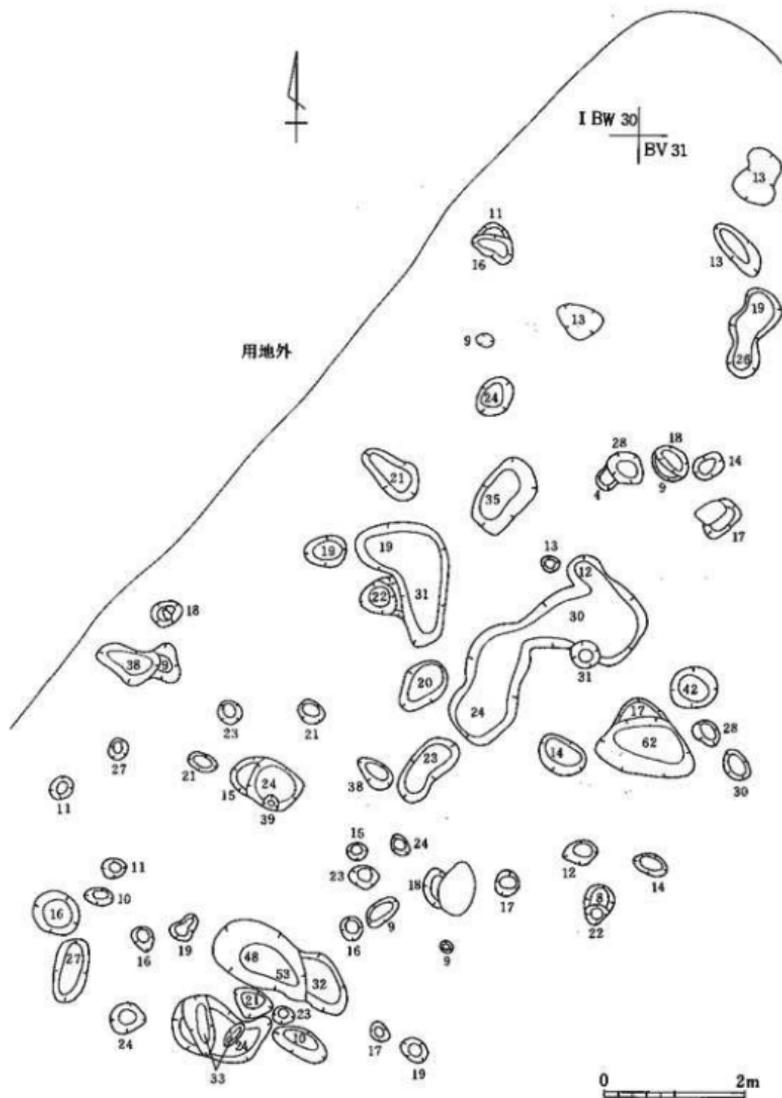


插图205 周边柱穴平面图44

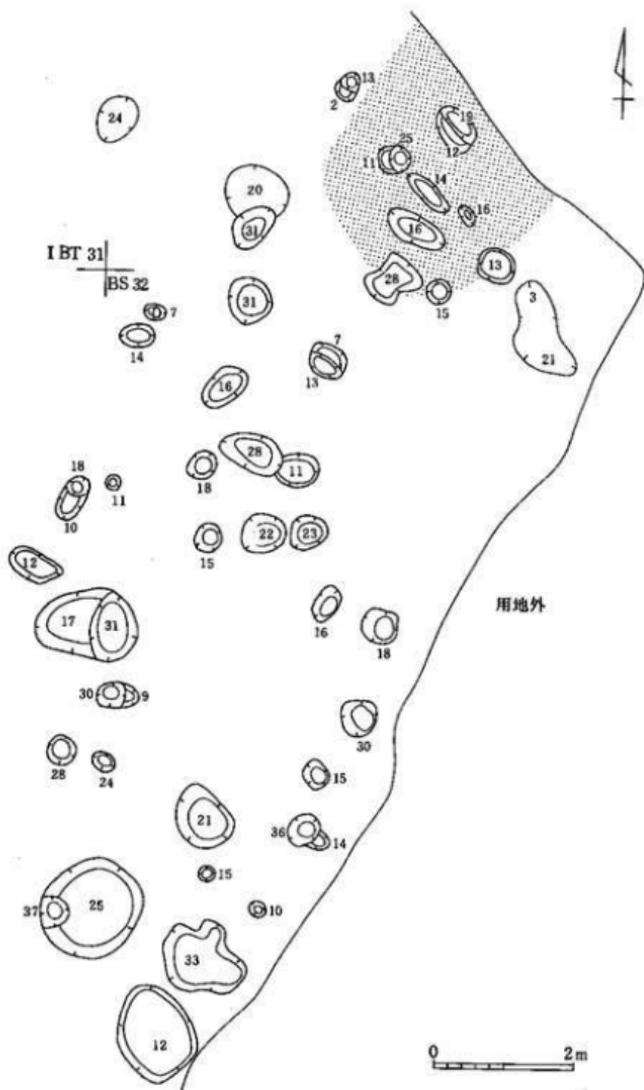


插图206 周边柱穴平面图(45)

表1 第2地点 土坑観察表(1)

土坑No	規模 (cm)	深さ (cm)	平面形	壁の立ち上がり	埋土	時代・時期	重複遺構	押図 番号	備 考
4 1	124×100	42	楕円形	やや急角度	漆黒土	後期もしくは晩期		50	
4 2	104× 80	26	楕円形	比較的緩やか	褐色土	不明		62	
4 3	136×104	29	不整楕円形	急角度	黄土混黒色土	後期もしくは晩期	南東でPitを切る	63	底部は圓錐形をしており南壁は2段に立ち上がる
4 4	168×104	48・21	不整楕円形	急角度	褐色土	後期もしくは晩期	北でPitに切られる	63	南北に2段になっている
4 5	144× 88	50・27	楕円形	急角度	褐色土	後期もしくは晩期		63	東西に2段になっている
4 6	120×104	24	不整円形	比較的緩やか	黄土混褐色土	後期もしくは晩期		63	底部は圓錐形をしており北から南へ傾斜している
4 7	128×120	39	不整円形	急角度	褐色土	後期もしくは晩期		63	
4 8	144×128	46	不整円形	急角度	褐色土	後期もしくは晩期		62	北壁に深さ53cmの小さなPitがある
4 9	176× 72	76・56	不整楕円形	急角度	褐色土	後期もしくは晩期		63	底部は南北に2段になっている 北西壁に89cmの小さなPitがある
5 0	80× 64	66	楕円形	急角度	褐色土	不明	溝5を切っている	63	
5 1	80× 72	42	不整円形	やや急角度	黒褐色土	不明		61	覆土中に礫があった
5 2	208× 96	39	楕円形	緩やか	黄褐色土	後期もしくは晩期	北でPitを切る	63	
5 3	160×120	49	楕円形	急角度	暗褐色土	不明	北壁でPitに切られる	58	覆土中に礫があった
5 4	160×152	51	円形	急角度	暗褐色土	後期もしくは晩期	土坑58を切る	58	
5 5	144×120	52	楕円形	急角度	暗褐色土	後期もしくは晩期	方形柱穴列1の柱穴を切り合う	58	南壁直下に落ち込みがある
5 6	144× 96	50	不整楕円形	急角度	暗褐色土	不明		59	
5 7	240×104	62・47	不整楕円形	急角度	明褐色土	後期もしくは晩期		59	底部は南北に2段になっている 北側の壁は途中に段がある
5 8	160× 96	54・39	不整楕円形	やや急角度	褐色土	後期もしくは晩期	土坑54に切られ方形柱穴列の柱穴と切り合う	58	南北に2段になっている
5 9	192×120	30・24	不整楕円形	急角度	暗褐色土	後期もしくは晩期	土坑62を切り方形柱穴列の柱穴と切り合う	58	南北に2段になっている さらに底部に17cmのPitをもつ
6 0	112×104	62・37	不整円形	急角度	黒褐色土	後期もしくは晩期	西でPitを切る	58	東西に2段になっている 覆土中の礫は西側に多い

表2 第2地点 土坑観察表(2)

土坑No	規模 (cm)	深さ (cm)	平面形	壁の立ち上がり	埋土	時代・時期	重複遺構	押図番号	備考
6 1	80×80	44	円形	急角度	暗褐色	不明(後期か)	東側でPitをきる	58	
6 2	104×(104)	55	不整円形	急角度	褐色	後期もしくは晩期	土坑50と方形柱穴1を切る	58	
6 4	144×88	46	不整楕円形	急角度	褐色	後期もしくは晩期	南側でPitに切られる	64	東西に2段になり最深部は52cm 西側はオーバーハングしている
6 5	184×80	57	不整楕円形	急角度	黒褐色	不明	北東および南西でPitを切る	51	北側の壁は中程に殺をもち2段に立ち上がる 骨出土
1 0 9	190×150	70	不整楕円形	急角度	黒色土	晩期前半	25住に切られる	49	東西に2段になっている
1 1 0	104×(104)	20	(円形)	緩やか	焼土混褐色土	不明		50	1/2は深掘りで不明
1 1 1	152×80	51・21	楕円形	比較的緩やか	黒褐色土	不明		52	
1 1 2	88×88	44・22	隅丸方形	緩やか	黒褐色土	不明	Pitと切り合う	52	
1 1 3	136×64	51	楕円形	ほぼ垂直	黒褐色土	縄文 後・晩期		52	網代痕底部あり
1 1 4	120×96	56・32	不整楕円形	比較的緩やか	黒褐色	不明		52	2つのPitの切り合い
1 1 5	112×(104)	52・45	不整円形	ほぼ垂直	黒褐色	不明	土坑123と切り合う	52	
1 1 6	192×112	16	不整形	比較的緩やか	黒褐色	縄文 後・晩期	Pitと切り合う	52	
1 1 7	120×(88)	67	不整楕円形	比較的緩やか	黒褐色	縄文 後・晩期	Pitと切り合う	52	土器多いが無文の胴部
1 1 8	112×112	45	不整円形	ほぼ垂直	黒褐色	縄文・晩期	土坑123と切り合う	52	土器多い 注口部片あり
1 1 9	80×80	37	円形	緩やか	炭混褐色土	縄文 後・晩期		52	南東に焼土面あり 土器多いが無文の胴部
1 2 0	80×72	30	不整円形	緩やか	暗褐色	不明	Pitと切り合う	52	
1 2 1	120×104	59・32	不整楕円形	比較的緩やか	明褐色	不明	土坑115と切り合う	52	覆土中に焼けた石含む
1 2 2	80×(80)	43	不整円形	緩やか	褐色	不明		52	
1 2 3	(176)×120	45・40・35	隅丸長方形	ほぼ垂直	暗褐色	不明	土坑118と切り合う	52	複数のPitの切り合い
1 2 4	104×88	30・16	不整楕円形	緩やか	黒褐色	縄文 後・晩期	凹み部、土坑124と切り合う	53	土器比較的多く出土するが無文

表3 第2地点 土坑観察表(3)

土坑No.	規模 (cm)	深さ (cm)	平面形	壁の立ち上がり	埋土	時代・時期	重複遺構	押図番号	備考
125	104×104	25・20	円形	ほぼ垂直	炭泥褐色土	縄文後・晩期	Pitと切り合う	52	網代成底部あり
126	104×104	58・42	不整形円形	ほぼ垂直	黒褐色土	不明		52	2つのPitの切り合い
127	88×72	26	(不整形円形)	(緩やか)	炭泥黒褐色土	縄文後・晩期	凹み部と切り合う	52	別遺構切り合いの為一部壁のみ確認
128	(64)×56	28	不整形円形	ほぼ垂直	炭泥黒褐色土	不明	土坑124と切り合う	53	
129	80×(64)	61	不整形円形	緩やか	黒褐色土	縄文後・晩期		51	1/2が未調査区となる
130	128×88	38・29	不整形円形	ほぼ垂直	炭泥暗褐色土	縄文後期?		52	南東側のPitを北西側のPitが切った格好であるが一括して土坑とした
131	176×152	46	不整形円形	北側を除いて垂直	黒褐色土	縄文晩期前半	西側でPitを切る	52	底部は中央に56×32深さ36cmのPitがあり東西に分かれている
132	(184)×120	35	長方形	急角度	褐色土	不明		54	南壁上に1m前後の石があり、人為的に置かれた可能性もある
133	176×(152)	27	不整形円形	比較的緩やか	褐色土	縄文後期?	北で配石墓7に、南で配石墓2に切られる	54	底部は南北に2段になっている 北西壁に89cmの小さなPitがある
134	(170)×100	29	不整形円形	緩やか	黒色土	縄文後期	土坑142に切られる	56	
135	65×40	11	不定形	緩やか	黒色土	縄文後期から晩期		56	
136	130×80	35	不整形円形	ほぼ垂直	黒色土	縄文後期	土坑137を切る	56	
137	80×60	35	不定形	ほぼ垂直	黒色土	縄文後期		56	
139	70×50	45	楕円形	ほぼ直角	黒色土	縄文後期		55	
140	165×70	50	楕円形	ほぼ直角	黒色土	縄文後期		55	
142	70×60	22	不整形円形	緩やか	黒色土	縄文後期	土坑134に切られる	56	
143	60×30	48	楕円形	ほぼ直角	黒色土	縄文後期		56	
144	80×80	20	不整形円形	緩やか	黒色土	縄文後期		56	
145	120×80	45	不整形円形	緩やか	黒色土	縄文後期		56	埋土中に骨片
147	150×100	35	不整形円形	緩やか	暗褐色土	縄文後期		56	

表4 第2地点 土坑観察表(4)

土坑No.	規模 (cm)	深さ (cm)	平面形	壁の立ち上がり	埋土	時代・時期	重複遺構	押図番号	備考
148	60×50	20	不整楕円形	緩やか	黒色土	縄文後期		56	埋土中に骨片
149	45×30	14	楕円形	ほぼ垂直	黒色土	縄文後期		56	埋土中に炭化物
150	100×70	21	不整楕円形	ほぼ垂直	黒色土	縄文後期		56	
151	60×50	61	不整楕円形	ほぼ垂直	黒色土	縄文後期		56	
153	100×85	58	楕円形	ほぼ垂直	黒色土	縄文後期		57	
154	75×40	64	楕円形	ほぼ垂直	黒色土	縄文後期		20	埋土中に炭化物
155	100×80	41	不整形	緩やか	黒色土	縄文後期		56	埋土中に炭化物
156	200×130	32	不整楕円形	ほぼ垂直	褐色砂土	縄文後期	土坑169と重複	54	埋土中に炭化物
157	80×70	20	不整楕円形	緩やか	黒色土	縄文後期	土坑158に切られる	55	
158	90×70	30	不整楕円形	緩やか	黒色土	縄文後期	土坑157を切る	55	
161	50×35	35	楕円形	ほぼ垂直	黒色土	縄文後期		55	
162	130×100	41	不整形	緩やか	黒色土	縄文後期		55	
163	70×50	61	楕円形	緩やか	黒色土	縄文後期		56	
164	95×70	38	楕円形	ほぼ垂直	褐色土	縄文後期	Pitと切り合う	56	
165	70×50	53	楕円形	ほぼ垂直	褐色土	縄文後期		54	
166	70×40	33	楕円形	緩やか	褐色土	縄文後期	土坑177と重複 切り合い不明	56	
167	175×70	17	不整形	ほぼ垂直	黒色土	縄文後期		55	
169	280×110	32	不整楕円形	ほぼ垂直	黒褐色砂土	縄文後期	土坑159と切り合う 切り合い不明	54	
170	70×40	23	楕円形	ほぼ垂直	褐色土	縄文後期		55	埋土中に炭化物
171	30×30	33	円形	ほぼ垂直	褐色土	縄文後期		55	

表5 第2地点 土坑観察表(5)

土坑No.	規模 (cm)	深さ (cm)	平面形	壁の立ち上がり	埋土	時代・時期	重複遺構	挿図 番号	備考
172	50×40	21	楕円形	ほぼ垂直	褐色土	縄文後期		54	
173	60×50	42	楕円形	ほぼ垂直	褐色土	縄文後期		55	
174	180×140	23	楕円形	緩やか	黒色土	縄文後期		54	
175	60×60	82	円形	ほぼ垂直	黒褐色土	縄文後期	土坑180を切る	56	
176	160×70	46	不整形	ほぼ垂直	黒褐色土	縄文後期		56	
177	70×(70)	44	円形	緩やか	黒褐色土	縄文後期	土坑166と切り合う	56	
178	80×70	35	円形	ほぼ垂直	黒褐色土	縄文後期		56	焼土ブロック少量入る
179	50×50	67	円形	緩やか	黒褐色土	縄文後期	Pitと切り合う	56	
180	60×50	82	楕円形	ほぼ垂直	褐色土	縄文後期	土坑175に切られる	56	骨片入る
181	120×60	49	不整形円形	ほぼ垂直	褐色土	縄文後期		56	焼土ブロック炭化物少量

表6 第5地点 土坑観察表

土坑No.	規模 (cm)	深さ (cm)	平面形	壁の立ち上がり	埋土	時代・時期	重複遺構	挿図 番号	備考
37	(208)×112	21・29	不整形楕円形	北側は急角度	黒色土	不明		202	一部調査区外にかかっており平面形は不定である 出土遺物はなく時期性格等は不明である
38	200×184	20・31	不整形円形	南側は緩やか	黒色土	中世		202	出土遺物は中世の土師器片4点である
39	176×104	24・35	不整形楕円形	南側の一部では 緩やか	黒褐色土	不明		202	出土遺物はなく時期性格等は不明である
40	256×108	29・41	不整形楕円形	比較的緩やか	暗褐色土	中世		202	出土遺物は中世の青磁片1点ある 南壁面に段がある

表7 第3地点 土坑観察表

土坑No	規模 (cm)	深さ (cm)	平面形	壁の立ち上がり	埋土	時代・時期	重複遺構	坪区番号	備考
6 6	192×140	42	不定形	急角度	黒色土	縄文中期後葉	38住を切る	122	底部には地山の礫が露出している
6 7	172×120	24	楕円形	北はほぼ垂直 南は緩やか	暗褐色土	縄文後期初頭		122	覆土中に拳大の礫多量に含む
6 8	188× 92	22	不整楕円形	東は緩やか 西は急角度	黒色土	古墳		122	南側に中段をもつ
6 9	192×184	24	不整円形	東は比較的急角度 西緩やか	黒色土	不明		122	覆土中に拳大の礫を多量に含む
7 0	192×160	36	不定形	急角度	灰褐色土	縄文中期後葉		122	北西と北東にそれぞれ中段をもつ
7 1	(108)× 96	28	楕円形	比較的急角度	明褐色土	縄文中期	土坑72に切られる	122	
7 2	100× 92	76	円形	ほぼ垂直	褐色砂質土混黒褐色土	縄文中期後葉	土坑71を切る	122	
7 3	192×120	40・28	不定形	東比較的急角度 西ほぼ垂直	黄褐色砂土混黒褐色土	中世		122	底部は北西が南へ傾斜 北東側に中段がある
7 4	100× 80	24	不整楕円形	比較的急角度	黒色土	不明	西側でP11を切る	122	南壁には人頭大の礫が数個ある
7 5	240×200	50	隅丸方形	ほぼ垂直	漆黒土	縄文後期	53住を切る	122	50から20cmの礫が多量に入っていた
7 6	(100)×120	42	円形	比較的緩やか	黒褐色土	縄文中期後葉	土坑77に切られる	123	壁に稜をもち2段に立ち上がる
7 7	(180)×108	64	不整楕円形	急角度	暗褐色土	縄文中期後葉(初)	土坑76を切る 方形柱穴列2(P2)に切られる	123	
7 8	104×104	60	不整円形	ほぼ垂直	暗褐色土	縄文後期初頭	方形柱穴列2(P6)と切り合うが新旧不明	123	覆土上部に拳大の礫が数個あった しっかり溜られている

表8 第4地点 土坑観察表(1)

土坑No	規模 (cm)	深さ (cm)	平面形	壁の立ち上がり	埋土	時代・時期	重複遺構	採回番号	備考
1	96×72	16	楕円形	比較的急角度	黒色土	古墳後期?	南側壁上部をPitで切られる 3柱を切る	174	覆土中に焼土・炭が混じる
2	112×96	24	円形	ほぼ垂直	黒色土	古墳後期?	3柱を切る	174	覆土中に焼土・炭および人頭大の礎が入っている
3	88×72	20	不整形円形	ほぼ垂直	黄色土混黒褐色土	古墳後期?	南東側でPitに切られる 3柱を切る	174	覆土に炭土が混じる
4	72×60	12	円形	比較的急角度	暗黄褐色土	古墳後期?		174	
5	88×72	32・24	楕円形	急角度	黒褐色土	縄文詳細不明		174	南北に2段になっており、北が深い
6	128×120	60	不整形円形	急角度	黒色土	古墳後期?		174	
7	128×120	40	不整形円形	急角度	黒褐色土	古墳後期?		174	
8	216×96	20	不整形円形	緩やか	黄色土混黒褐色土	縄文?	北側でPitに切られる	174	
9	112×104	48・32	不整形円形	ほぼ垂直	漆黒土	古墳後期?		174	東壁の小さなPitで2段になっている
10	136×120	40・32	不定形	比較的急角度	黒色土	不明		175	底で3つに分かれる 西側の底が最深部である
11	90×40	16	不整形円形	ほぼ垂直	黄色土混黒色土	不明	北側壁上部をPitで切られる	175	形態的には土坑の壁に小さなPitがあいているようなもの
12	128×112	28	不整形円形	ほぼ垂直	黄色土混黒色土	古墳後期	西側壁上部をPitで切られる	175	北壁際に石が1つある
13	72×48	44	楕円形	急角度	黒色土	不明	西側以外の壁上部をPitで切られる	175	
14	120×112	20	円形	急角度	黒褐色土混黒色土	縄文中期?		175	
15	128×64	8	楕円形	急角度	黒色土	古墳後期	9柱を切る	175	
16	112×96	48・28	不定形(壘形)	ほぼ垂直	黒褐色土	不明	9柱と重複する	175	底は北西と南東で2段になる 南東が深い
17	256×104	16	楕円形	緩やか	黒褐色土	不明		175	底は北西が南東へ傾斜する 南東の底に96×64の楕円のPitがある 深さは底から40cm
18	152×88	24	不定形	比較的急角度	黒色土	古墳後期		175	底は南北に2段になる
19	120×96	16	不整形楕円形	比較的緩やか	黒褐色土	古墳後期	10柱を切る	176	
20	103×84	44	不整形円形	ほぼ垂直	漆黒土	古墳後期		176	

表9 第4地点 土坑観察表(2)

土坑No	規模 (cm)	深さ (cm)	平面形	壁の立ち上がり	埋土	時代・時期	重複遺構	挿図番号	備考
2 1	96×96	40	円形	急角度	黒褐色土	不明		176	
2 2	120×120	24	円形	比較的急角度	黒色土	中世	溝址1と重複	176	
2 3	160×104	48・20	不整楕円形	比較的急角度	暗灰色土混黒色土	古墳後期	土坑24と切り合うが新旧関係不明	176	底部は北西と南東で2段になる 南東側が深い
2 4	120×96	40	不定形	急角度	暗灰色土混黒色土	古墳後期	土坑23と切り合うが新旧関係不明	176	
2 5	120×88	52・20	楕円形	急角度	黒色土	不明		176	底部は東西で2段になる 西側の方が深い
2 6	120×84	16	不整楕円形	比較的緩やか	黒色土	古墳後期	北側をPitに切られる	176	
2 7	(96)×72	16	楕円形	比較的急角度	黒色土	不明	溝址1と重複	176	用地外へ延びるものとみられる
2 8	184×96	24	不整楕円形	ほぼ垂直	漆黒土	古墳後期		177	北壁にPitがある
2 9	96×64	16	不定形	比較的急角度	黄色土混黒色土	古墳後期		177	南東壁は石で隠れる
3 0	120×104	22	円形	比較的急角度	黒色土	古墳後期		177	
3 1	116×64	24	不定形	東ほぼ垂直 西比較的急角度	黒褐色土	中世	南側でPitに切られる	177	底部やや西から東へ傾斜する
3 2	164×120	28	楕円形	急角度	黄色土混黒色土	古墳後期		177	
3 3	265×120	24	不整楕円形	緩やか	黄色土混黒色土	古墳後期	西壁はPitに切られる	177	底部ほぼ中央を径40cmのPitで切られる
3 4	96×(80)	28	円形	急角度	黒褐色土	不明	北側をPitに切られる	177	14住の貼床の下で検出
3 5	80×72	32	不整円形	ほぼ垂直	黒褐色土	不明		177	14住の貼床の下で検出
3 6	176×168	24	不定形	西はほぼ垂直 東は緩やか	漆黒土	古墳後期		177	南壁および東壁にPitがある

IV. ま と め

中村中平遺跡の調査結果は、以上のとおりであるが、多数の遺構と膨大な量の遺物が調査されており、明らかにされた点も多々あるが、数々の問題が提起されたこともまた事実である。総括として、特に、縄文時代後・晩期の第2地点に関する調査成果の到達点と課題、そして本遺跡の時代毎の概要を記して今次調査のまとめとしたい。

1. 第2地点の調査成果

①配石址について

まず、本遺跡第2地点を特徴づける遺構として、配石址1がある。多数の礫が方形ないし環状に巡っており、一見して特殊な配石遺構の感を受ける。しかし、規模が中程度で、内部は皿状に凹み、中央に焼土がある。また、礫下に多数の土坑が検出されたことから、これらを柱穴と捉えると住居状の構造物があった可能性が指摘できる。とすれば、周堤の土のかわりに礫を用いた、いわば礫堤を備えた平地の住居状の遺構と考えることができる。周堤を持つ住居址としては、愛知県守山市牛牧遺跡第1号住居址(1961)等があげられる。

配石址1内外の遺物の出土状況についてみると、内部南側に磨石類・土偶、北側に石棒・石剣類といった遺物分布の偏りがあるのに対して、配石址1の外側には遺物出土の偏りは見いだせない。内外で遺物分布に差があり、しかも特殊な遺物分布を示すことから、ここに上部施設を伴った構造物があったと考えることは、一理あろう。特に、磨石類が女性的な遺物、石棒・石剣類が男性的な遺物と捉えれば、配石址1の内部に女性的な空間と男性的な空間が分かたれて存在したといえ、同時に外部空間とも分離されていた筈であろう。

配石址1と関連を有すると思われるものとして注目されるのが、下部から検出された炭化した堅果類を多量に含む土坑群である。第2地点の他の土坑からは堅果類は検出されていない。配石址1内部からの出土遺物が後期終末～晩期前葉のやや長い時間幅をもつものに対して、下部の土坑はやはり時間幅が長いが、後期後半～晩期前葉と少しズレがある。遺物の接合関係等の把握が不十分で、配石址1に伴うとも伴わぬとも判断がつかないが、配石址1の礫と重なる土坑がある。両者の間に時間差があるとすれば、配石址に先行して全く同じ位置になんらかの施設があったと推定され、後期後半から連続して、遺跡の中で中心的な役割を果たした場と考えることができよう。下部の土坑が配石址1の付属施設とすれば、堅果類を多量に保有することになる。磨石類はあるにしても、石皿を欠いており、簡単に食物加工場とはいえず、慎重な検討を要する。いずれにしても、配石址1以前に遡る配石址2・3や焼土群が配石址1の周辺にあるわけで、遺跡の中で中心的な役割を継続して果たした部分であるといえる。本址の性格やこの場が果たした機能の変遷を明らかにすることが、本遺跡の本質を理解する上で不可欠であることは疑いない。

②配石墓群について

配石址1とともに注目されるのが配石墓群である。配石墓9を除く他の配石墓は、焼骨および遺物出土が皆無に近く、詳細時期が不明な状況にある。焼骨が検出できないことから土葬の施設とも考えられる。その場合、配石墓3・4上部に敷石の被覆礫と考えられる礫を検出したことから、傾斜の上方側に土止めと思われる立った礫が配されることはあっても、どうやら側壁・蓋石といった上部構造はもたない敷石と配石墓1・6のように周囲を圍繞する礫で構成される埋葬施設と考えられる。

けれども、配石墓3と配石墓4、配石墓10と配石墓12が重複し、特に後者は完全に上部に構築されている。また、周囲を圍繞する礫が配されるものがあることから、墓標的な施設が存在する可能性は高いと考えられる。とすれば、墓墳が重複するのは不自然である。また、遺物を伴わない点、不自然といえる。さらに、晩期前葉に位置づく配石墓9と、配石墓群の北側に展開する、後期後半の土壌墓群にはいずれも焼骨が伴うという状況がある。骨を焼くという行為が連続すると考えれば、土葬は後期後半～晩期前葉の前後の時期に求めざるを得ないが、遺跡の継続時期からするとその可能性は低い。もし、異なる二つの葬法が同時並存するとすれば、出自集団の違いなり階層差なりに関連していく重要な事例であろう。とりあえず、今次調査では、これらの配石墓群に近接して再葬墓である配石墓9があるという点を重視して、以上の状況を繋ぎ合わせて一つの仮説を提示したいと考える。

まず、配石墓1～7・10～12は、仮に一時的には埋葬されることがあったにせよ、永久的な施設ではなく、遺骸を再葬する過程の一次葬施設と考えられる。つまり、一旦埋葬されて、ある期間晒して組織が脱落するまでの施設である。配石墓9から出土した焼骨は、いずれも焼け歪みはなく、腕等の軟部が脱落している。相当期間晒されていたと考えて良からう。配石墓上部は配石墓9に末端の指骨が含まれる状況から、土で覆うものがある可能性がある。一方で、配石墓3・4上部に被覆礫と考えられる礫が検出され、なおかつ礫が傾斜の下方に崩れていることから、土を伴うかどうかは不明であるが、少なくとも礫が遺骸を覆っていた可能性がある。傾斜の下方に崩れていることは遺骸を掘り返した際に、掘り起こした土や礫が下側に捨てられた結果と考えられる。埴科郡坂城町保地遺跡で齧齒類にかじられた跡がある下顎骨があることから、礫だけで覆われていた遺骸があった可能性も否定できない。他に、礫が上部を覆う例としては、同じく縄文時代晩期前葉の、木曾郡大桑村大明神遺跡1号集石址がある。

配石墓9には副葬品の中に、二次焼成を受けているものとそうでないものがある。前者は一次葬の際の副葬品と考えられ、土器・石剣・土製耳飾り・定角式磨製石斧等であり、焼骨の量に比較して副葬品の数が少ないことから必ずしも全員に副葬されたとはいえないだろう。

続いて、晒し、掘り返した骨を、副葬品とともに焼く過程がある。配石墓群に南北方向の頭位をとる一群と、東西方向の頭位の一群があり、両者の間には時間差がある。しかも、配石墓9で1層・2層の別が捉えられていることから、一定数の遺骸がまとまるまで晒されていて、しかる

のち、まとめて焼かれた可能性がある。具体的に焼かれた場は特定していないが、焼けた跡があった堅穴5が候補にあげられよう。もっとも、堅穴5は焼土・炭は検出されておらず、底面も焼けてはいない。

配石墓9から出土した焼骨は、ほとんど全部が細かく砕け、種別・部位も分からぬ位であった。しかし、あまり灰化はしていないようで、歯冠が失われていること、焼骨が灰白色を呈することからも、800℃程で焼かれたと考えられる。この場合、骨は数%～20%程度収縮し硬くなるということであるから(馬場他 1986)、これほど細片化していることは疑問が残る。縄文～弥生時代の焼骨の破碎について、設楽博己氏が述べている(設楽 1993 a, b)が、焼骨を砕くという行為が行われたと考えられよう。こうした破碎を具体的に示す山形県生石2遺跡のような状況はないが、本遺跡の場合、土壌墓群の上部付近に焼骨が広く散乱し、散乱骨の量は780gに達している。あるいは設楽氏が指摘するような焼骨を散布する葬法の結果とも考えるが(設楽 1993 b)、焼骨破碎の場の可能性が指摘できよう。

破碎された後、焼骨は配石墓9に再葬される。再葬に際して、集められた焼骨の一部が小型壺の中に入れられ、残りの部分は墳内に入れられる。小型壺の個体数が4個体と少なく、深鉢を含めても、焼骨の出土量に比して少ない。位置を確認できた小型壺3個体のいずれもが、埋土の1層から出土している。少なくとも二度にわたって再葬がなされていることから、最初の段階では焼骨の一部を小型壺に入れるという行為はなかった可能性がある。また、先述した二次焼成を受けていない副葬品は、この段階で副葬されたと考えられるが、一括して再葬されるためか、副葬品の量はやはり少ない。土器・玉類・土製耳飾り・定角式磨製石斧・その他の磨製石斧等があり、一次葬の場合とやや構成を異にする。小型壺同様、副葬品も位置の確認されているものは、ほとんど埋土1層の出土であるから、あるいは副葬品を入れるという葬送儀礼も後出的な様相を示すのかもしれない。配石墓9の類例として、やはり晩期前葉の伊那市野口遺跡石塚状施設がある。長方形の墓壇の側壁に礫が積まれ、上部にも壺石される。少なくとも3体が、幾つかの群に別れて埋葬されている。

配石墓9出土焼骨からみると、少なくとも17体分以上で、他の配石墓の数とは一致しない。また、2mm以下の小破片は計測していないし、再葬の過程や現在までの包含状況によって脱落した部分は考慮されていない。比較の対象として必ずしも妥当とはいえないかも知れないが、福島県霊山町根古屋遺跡では約42kg出土した焼人骨に対して、焼かれた遺骸数は100～200個体程度と考えられている(馬場他 前掲書)。もし、全部が焼人骨とすれば、出土焼骨が根古屋遺跡の約半分であるので、一応、75～150個体程度と考えることができよう。一次葬施設の数10基と、二次葬施設である配石墓9から出土した焼骨の量との間には大きな隔りがあるといわざるを得ない。現在のところ、出土焼骨はほとんどが人骨と考えているが、あるいは動物骨も含まれるかもしれない。出土焼骨の種の同定と、個体数の算定が課題である。

これまで、縄文時代の墓制研究は、それが社会構造や集団関係の把握にきわめて有効であると

いう意味で進められてきている。また、弥生時代東日本一円に広がる壺棺再葬は、初期農耕社会成立に関わる重要な問題として捉えられてきており、その起源等についても次第に明らかにされてきている（設楽 前掲書等）。その中で、中部高地に起源をもつ焼人骨を伴う葬法が目ざされている。すでに晩期前葉より以前に、焼人骨の習俗が長野県ではみられることは指摘されているとおりであり、また、再葬についても縄文時代早期に遡ることが知られている（設楽、同前）。本遺跡で調査された配石墓9が示す再葬の状況は、かなり確立された再葬儀礼と考えることができるであろう。そして、断片的ではあるが、同時期の野口遺跡・大明神遺跡に類例がみられることから、長野県南部という一定の空間的な広がりをもつことが明らかにされたといえる。壺棺再葬の起源の一つに、いち早く農耕社会への変容をとげ、しかも古い壺棺再葬墓が調査されている三河地方があげられている（設楽 前掲書等）。この地域と近接し、交渉が盛んであった長野県南部に、小型ではあるが壺を再葬容器として使用し、しかも一部分の骨が入れられ、他は一括されるという葬法が見い出せることは、それなりに評価して良いと思われる。おそらく、こうした葬法以外にも多様な葬法があり、それらの影響を受けながら三河方面で大型壺を用いる定式化された姿ができあがったのではなかろうか。

③出土遺物について

包層層からの出土遺物として、第2地点では他地域からの搬入品や、他地域の影響を受けた遺物が多数出土している。それによると、時期毎に周辺地域との交流の度合いが強まったり、あるいは弱まったりするようである。全般を通じて、北陸地方からの影響を強く受けており、こうした状況は大明神遺跡等にもみられ、長野県南部に共通する特徴と考えられる。東北系の遺物も北陸を通じての流入が考えられるが、例えば山梨県北巨摩郡大泉村金生遺跡（1989）や三重県度会郡度会町森添遺跡（1988）等から新地系の土器が出土するなど、北陸ばかりでなく東海方面からも入っている可能性もあろう。また、近畿系の遺物についても一乗寺K～宮滝I式、滋賀里Ⅲb式に遺物量が多くなっており、交流の動態が大雑把ではあるが捉えられたといえる。北陸系にしても、近畿系にしても、飛騨方面が目ざされる。今のところ、この方面の状況は断片的に把握できたにとどまり分明的でないが、例えば本遺跡では小型の石器類に占める下呂石の割合が比較的高いこと等から、密接な関連を有した地域であったと考えられる。また、下呂石以上に黒曜石の小型石器群に占める割合は高く、原石も入っている状況がある。さらに、石棒・石剣・石刀、翡翠・蛇紋岩製丸小玉、定角式磨製石斧といった製品が多く入り込んでいる。

本遺跡の場合、破片資料を含めて、遺構出土93点、遺構外出土611点と合わせて多量の土製耳飾りがある。その大半がいわゆる臼形のもので環状を呈するものである。しかし、漏斗状耳飾りや、環状耳飾りのブリッジやテラスをもつ優品も多数出土している。同時代の他遺跡についてみると、小県郡丸子町深町遺跡で295点、松本市エリ穴遺跡約200点、長野市宮崎遺跡138点、諏訪郡富士見町約70点、木曾郡大桑村大明神遺跡24点以上が多いくらいで、その他上水内郡中条村宮

遺跡・埴科郡坂城町保地遺跡・飯山市山ノ神遺跡・下高井郡山ノ内町佐野遺跡・北佐久郡立科町下屋敷遺跡等は保有量は少ない。また、県外では北関東で出土が多く、群馬県桐生市千綱谷戸遺跡670点、同棟東村茅野遺跡577点、同月夜野町矢瀬遺跡約280点等と比較しても遜色無い。茅野遺跡のように一対になるものがなく、土製耳飾りの見本市ではないかとさえいわれ、生産が同時期の周辺遺跡を圧倒する遺跡があることから、今のところ、製作過程を物語るような遺物としては、粘土塊が1点あるぐらいであるが、あるいは本遺跡の場合にも数量からみる限り土製耳飾り生産地といえるかもしれない。

第2地点を概観すると、配石址1についてはその機能等不明であるが、祭祀の場や墓域は後期後半から晩期前葉まで継続しており、しかも、墓域とそれを巡る施設が、祭祀の場と独立している。これに対して墓域・祭祀の場の形成時期と、居住域の形成時期とがズレる。しかも、住居址が、遺跡の規模の割に少ない。後期終末～晩期前葉の集落が小規模なのに対して、墓域が一定規模を占め続けている事実は、周辺に同様の小規模集落が点在し、その求心的な役割を果たす祭祀・墓域として今調査地点が位置づけられる可能性を示すと見える。後期後半の居住域は把握していないが、こうした部分の把握と、今調査地点検出遺構の詳細な検討により、集落景観の変遷にみられる縄文社会変容の動態が明らかにされていくものとする。

2. 時代毎の概要

縄文時代中期の遺構・遺物は、第1・3・4地点で調査されているが、第1・4地点は断片的である。第3地点は中期後葉の19軒の竪穴住居址が確認されており、少なくとも2時期以上の細分が可能である。方形柱列址が2棟以上あり、集落景観もある程度把握できたと考えられる。遺構の分布状況や所属時期から、中期にあつては中・小規模の集落が時期毎地点を移して営まれたと考えられる。後期から晩期にかけては上述のとおりである。

晩期後半から弥生時代中期の状況は明らかではない。おそらく、生産基盤に規制されて、集落を他に移した可能性もある。後期の前半になると単独で1軒が登場する。安定した集落の姿を見い出せるのは、後期後半になってからで、方形周溝墓を取り巻いて集落が環状に展開する。保持する石器群はそれ程多くはないが、やや稲作に重きを置いた生産活動が営まれたと考えられる。生産基盤としては、茂都計川の氾濫原と調査地点北側に谷地状に展開する湿地帯が考えられよう。

古墳時代前期の状況は不明であるが、後期にはかなり規模の大きな集落が営まれている。それらを背景として遺跡北側の円墳群が築造されており、伊賀良地区でも相当生産力の高い地域であったことは疑いない。半面、遺物にみるかぎり、集落の継続期間はそれほど長くはないと考えられる。

奈良時代と考えられるのは、掘立柱建物址9の1棟である。柱廻り方の大きさに比較して柱痕はあまりにも貧弱で、それにしては周囲を丁寧に突き固めている。遺構の性格は不明であるが、単独で検出されたこととどうやら関係がありそうである。

平安時代も末まで、遺構らしい遺構はない。中世には調査地点の広い範囲に遺構・遺物が分布しており、氾濫を被らない安定した集落の姿を看取することができる。

本遺跡は、縄文時代晩期までたびたび土石流・洪水を被り、その間を縫うように中・小規模の集落が点々と営まれている。弥生時代以降安定した集落の姿があったと考えられるが、集落の継続期間は比較的短期間で、調査地点周辺に欠落する時期の集落の存在が予想される。

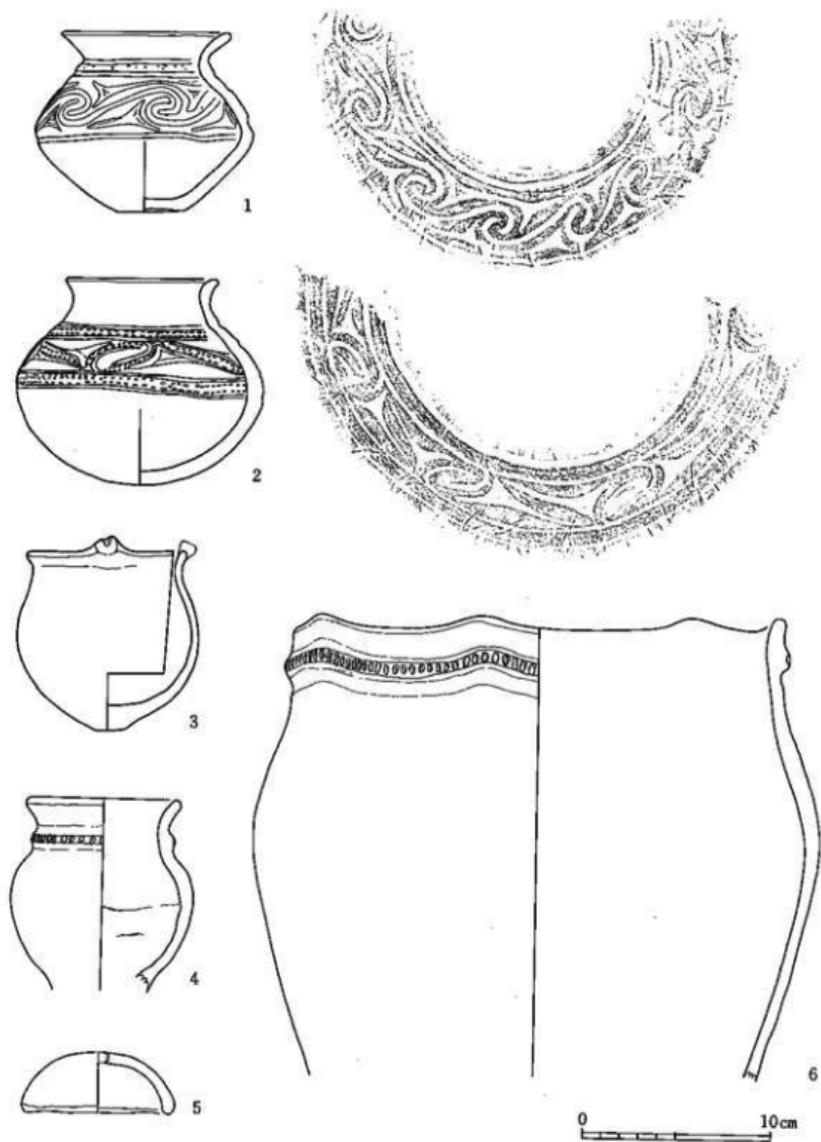
いずれにしても、縄文時代早期以来連続と人々が生活の痕跡をとどめた学問的価値の高い遺跡であり、なお、本遺跡の姿を正確に把握する不断の努力と事業地周辺の保全を図ることが、今後に残された大きな課題といえる。

最後に、月夜野町教育委員会・会田 進・赤塩 仁・赤羽義洋・今福利恵・奥 義次・榊原功一・小林青樹・小林正史・新谷和孝・土屋 積・寺内隆夫・友野良一・中沢道彦・新津 健・贊田 明・林 克彦・平林 彰・三上徹也・水沢教子・溝口優司・三宅敦教・吉田秀享の各氏・各機関に、資料の実見・指導・参考文献の収集に便宜を図っていただいた。記して謝意を表する次第である。 (馬場保之)

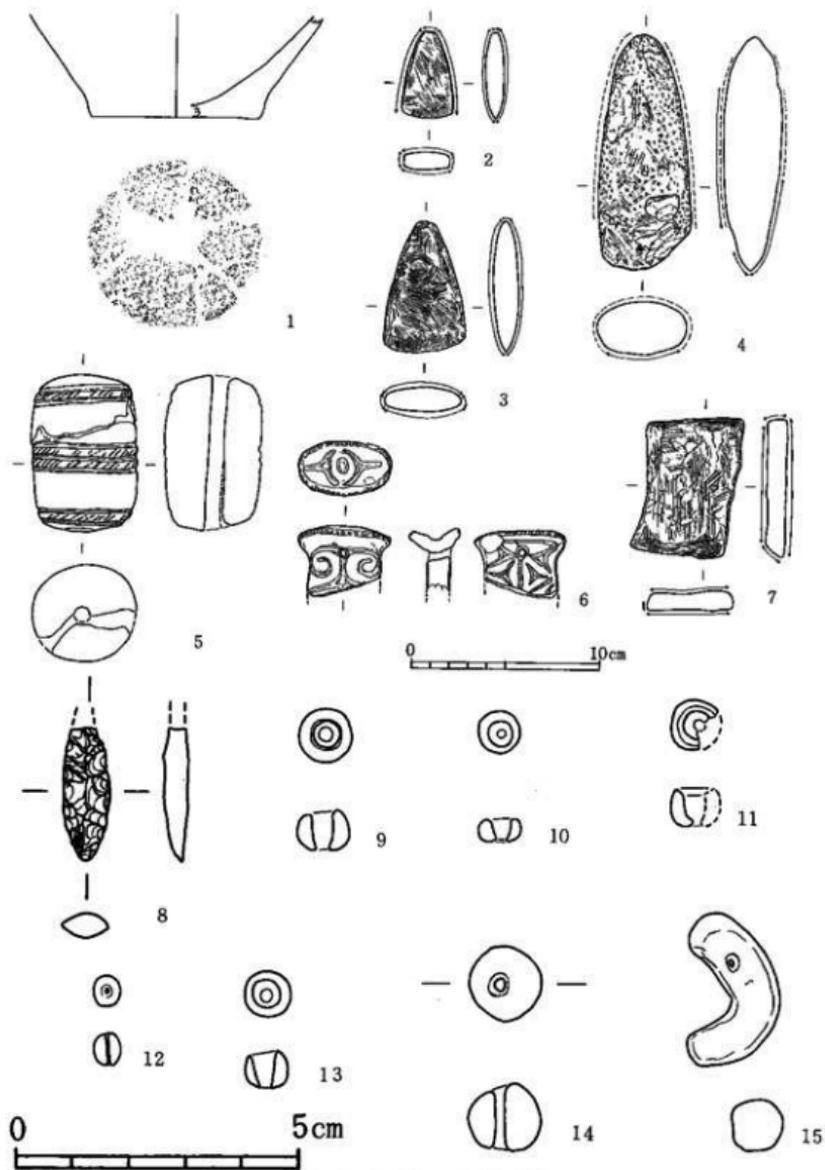
〔引用・参考文献〕

- | | | |
|----------|------|---------------------|
| 飯田市教育委員会 | 1977 | 『伊賀良中島平』 |
| 飯田市教育委員会 | 1978 | 『伊賀良宮ノ先』 |
| 飯田市教育委員会 | 1980 | 『猿小場遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1983 | 『酒屋前遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1983 | 『鳥屋平』 |
| 飯田市教育委員会 | 1987 | 『飯田垣外・火振原・梅ヶ久保遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1987 | 『殿原遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1988 | 『田井座遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1988 | 『小垣外・八幡面遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1989 | 『下原遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1989 | 『高野遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1990 | 『細田北遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1991 | 『田井座遺跡・一色遺跡・名古熊下遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1991 | 『田井座遺跡』 |

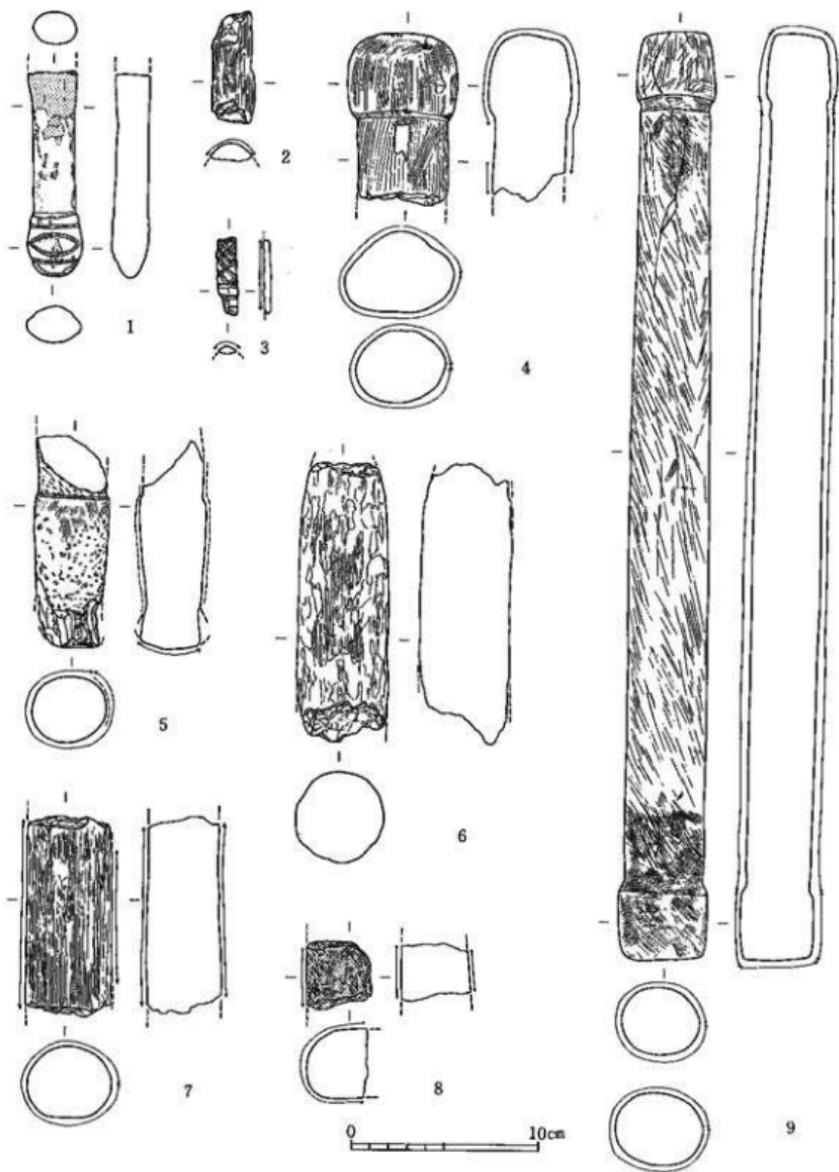
- 飯田市教育委員会 1991 『大原遺跡』
 飯田市教育委員会 1991 『公文所前遺跡』
 飯田市教育委員会 1991 『直刀原遺跡』
 飯田市教育委員会 1991 『權明古墳』
 飯田市教育委員会 1992 『殿原遺跡』
 下伊那史編纂委員会 1955 『下伊那史 第2巻』
 下伊那史編纂委員会 1955 『下伊那史 第3巻』
 下伊那史編纂委員会 1967 『下伊那史 第5巻』
 下伊那史編纂委員会 1991 『下伊那史 第1巻』
 下伊那教育会編 1985 『親と子の下伊那史』
 中央道遺跡調査会 1972 『中央道調査報告 -飯田地区その2-』
 中央道遺跡調査会 1973 『中央道調査報告 -飯田地区- 昭和45年度』
 長野県史刊行会 1983 『長野県史 考古資料編 主要遺跡(中・南信)』
 長野県史刊行会 1986 『長野県史 通史編 第2巻 中世1』
 長野県史刊行会 1987 『長野県史 通史編 第3巻 中世2』
 長野県史刊行会 1988 『長野県史 考古資料編 遺構・遺物』
 長野県史刊行会 1989 『長野県史 通史編 第1巻 原始・古代』
 守山市教育委員会 1961 『牛牧遺跡』
 山梨県教育委員会 1969 『金生遺跡Ⅱ(縄文時代編)』
 度会町遺跡調査会 1988 『森添遺跡発掘調査概報Ⅱ』
 安孫子昭二 1993 「『高井東様式大波状口縁深鉢』の編年と分布」『東京考古』11
 神村 透 1968・69 「立野式土器の編年的位置について(1)~(7)」『信濃』20巻
 10号~21巻7号
 神村 透 1982 「立野式土器の編年的位置について(完)」『信濃』34巻2号
 設楽博己 1993a 「壺棺再葬墓の基礎的研究」国立歴史民俗博物館研究報告第50集
 設楽博己 1993b 「縄文時代の再葬」国立歴史民俗博物館研究報告第49集
 筒井泰蔵 1973 『伊賀良村史』
 馬場悠男・茂原信生・阿部修二・江藤盛治 1986 「根古屋遺跡出土の人骨・動物骨」『霊山根
 古屋遺跡の研究』
 伴 信夫・宮沢恒之 1967 「長野県飯田市伊賀良西ノ原遺跡調査報告」『信濃』19巻12号
 松島 透 1957 「長野県立野遺跡の掠型土器」『石器時代』4
 講談社 刊 1981 『縄文土器大成』第3巻 後期
 講談社 刊 1981 『縄文土器大成』第4巻 晩期
 雄山閣 刊 1983 『縄文文化の研究』9 縄文人の精神文化
 小学館 刊 1989 『縄文土器大観』第4巻 後期 晩期 続縄文



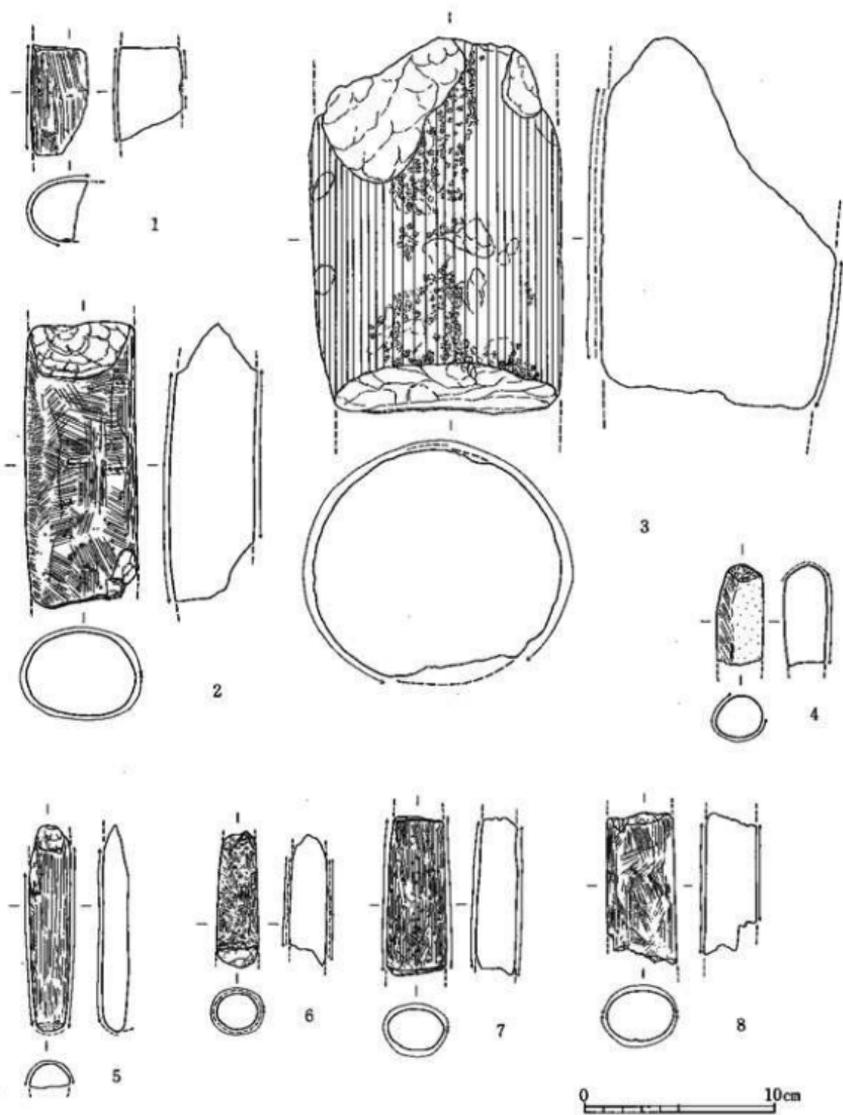
第1圖 配石墓9出土遺物



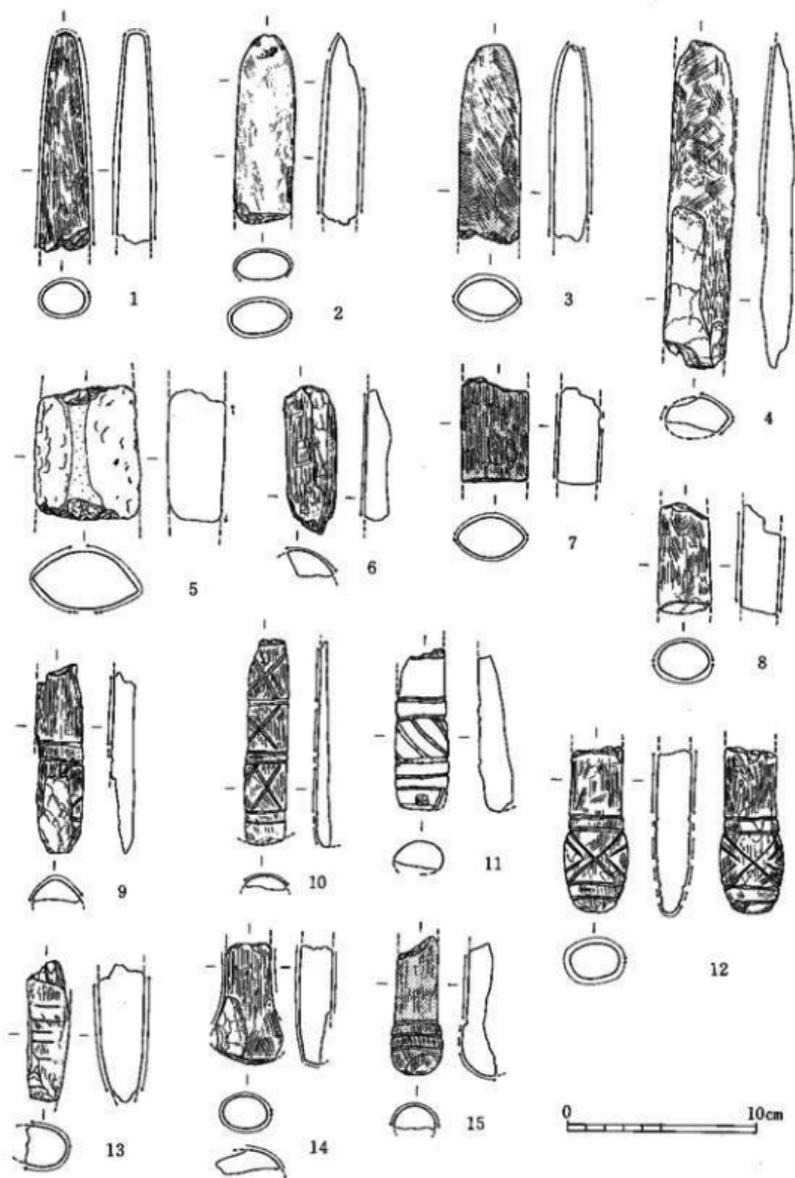
第2図 配石墓9ほか出土遺物



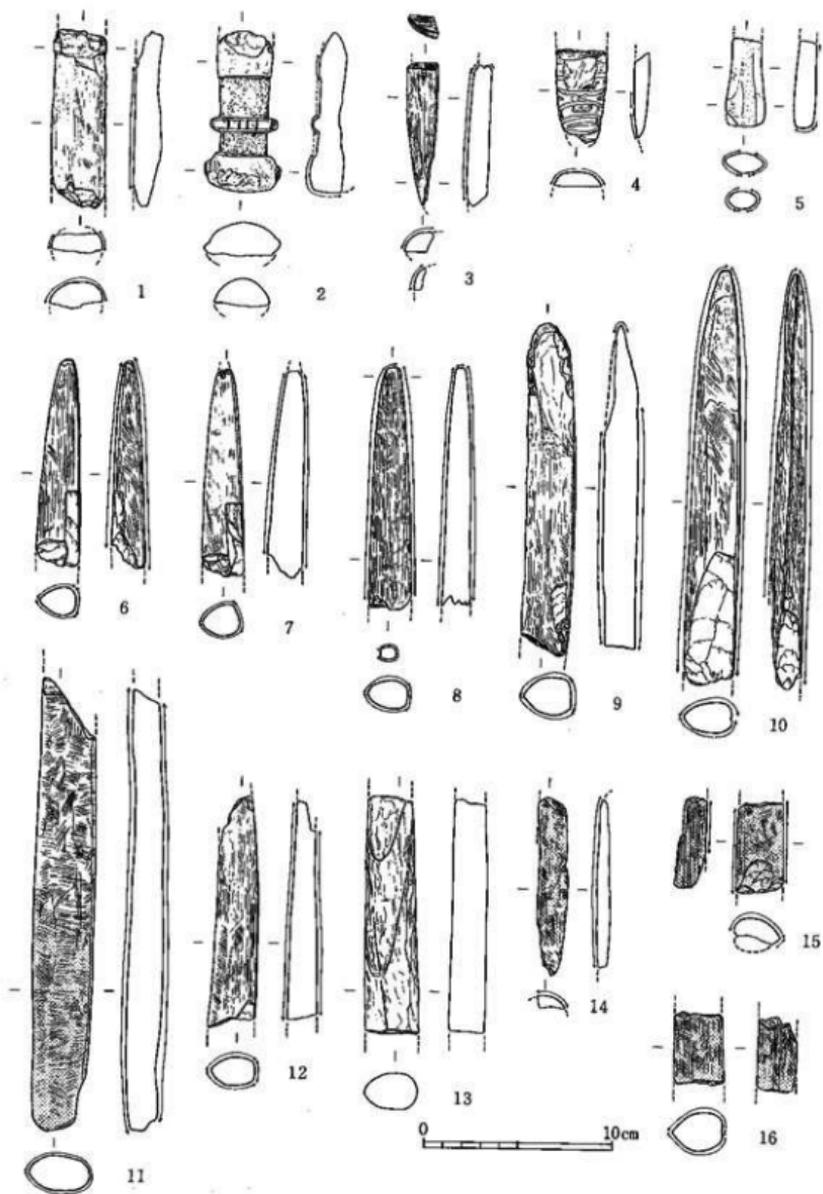
第3圖 石棒・石刺・石刀(1)



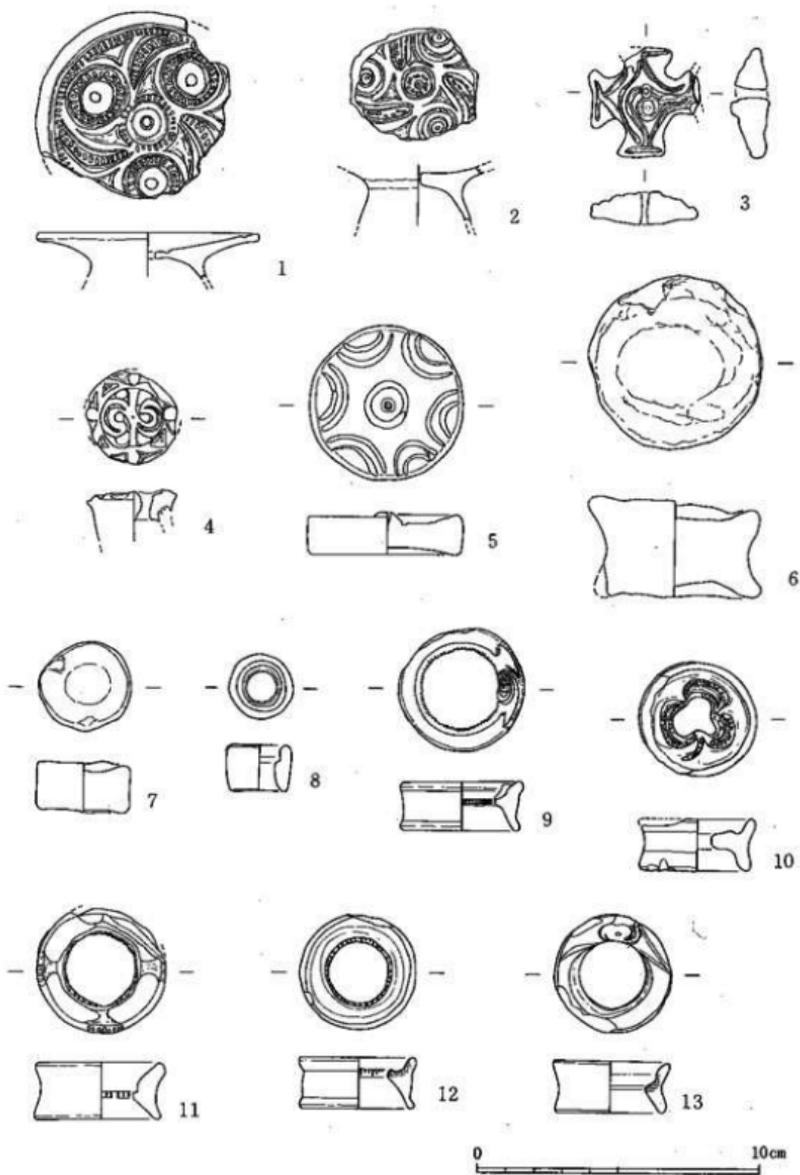
第4圖 石棒・石剣・石刀(2)



第5圖 石棒・石剣・石刀(3)

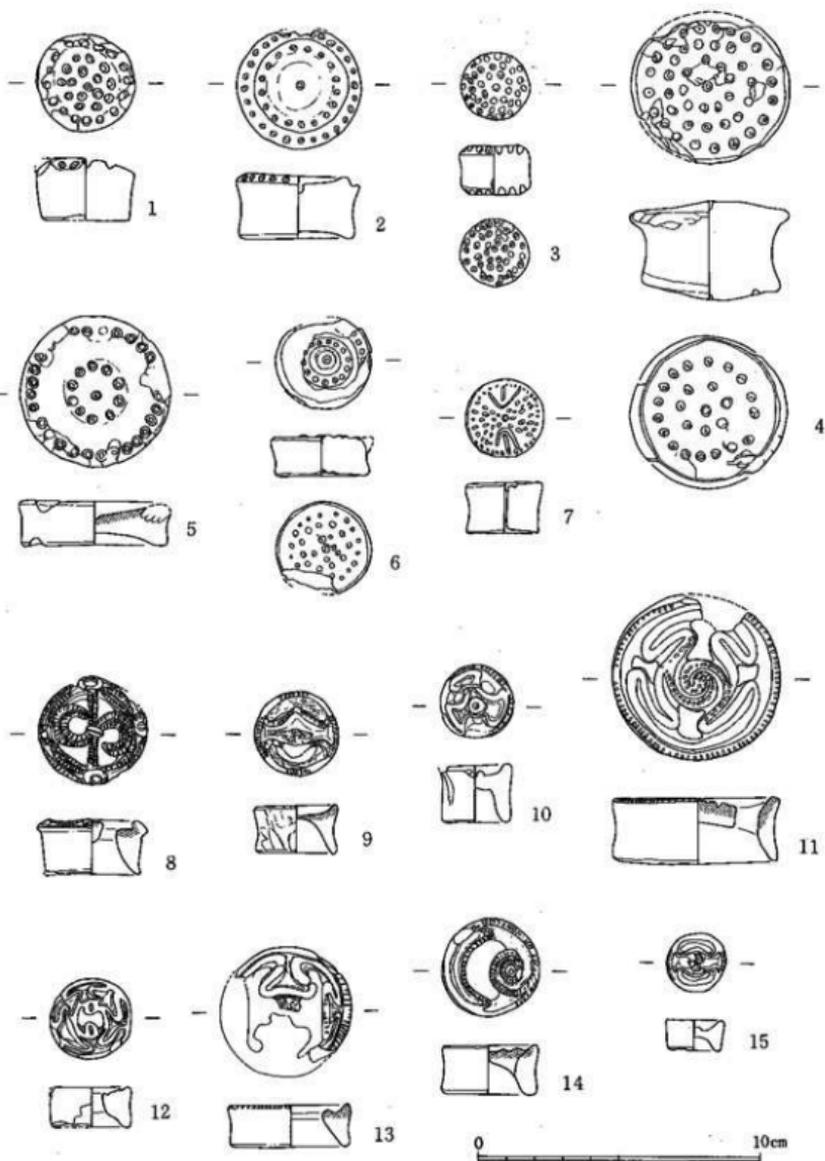


第6圖 石棒・石劍・石刀(4)

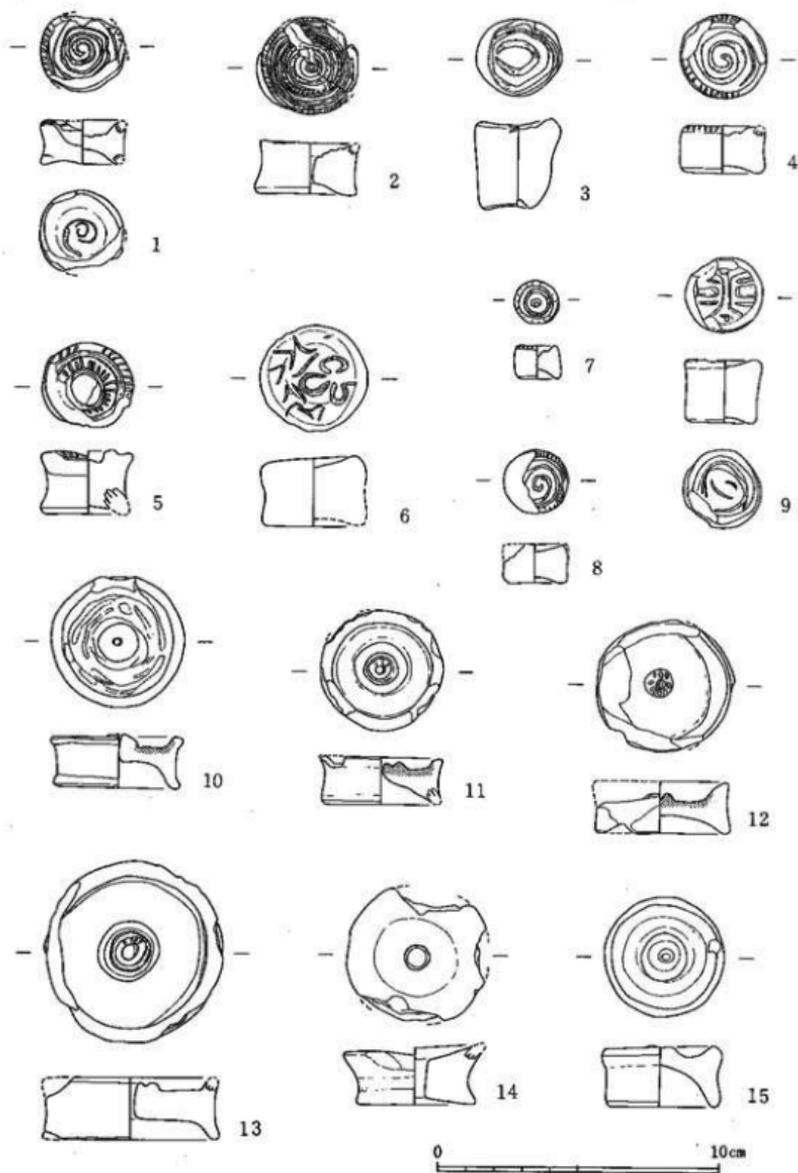


0 10cm

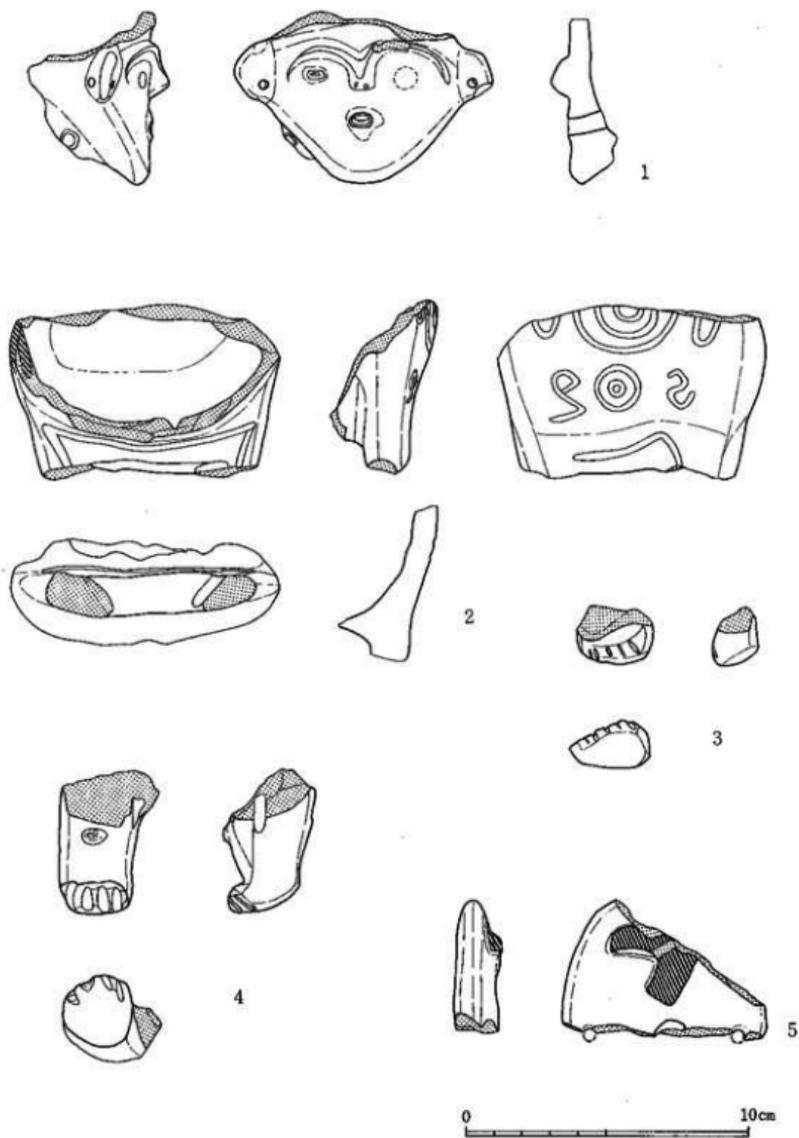
第7圖 土耳飾(1)



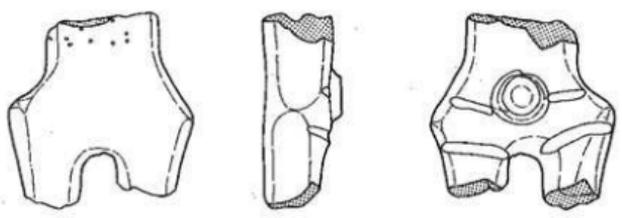
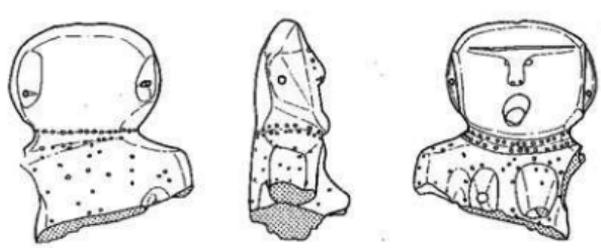
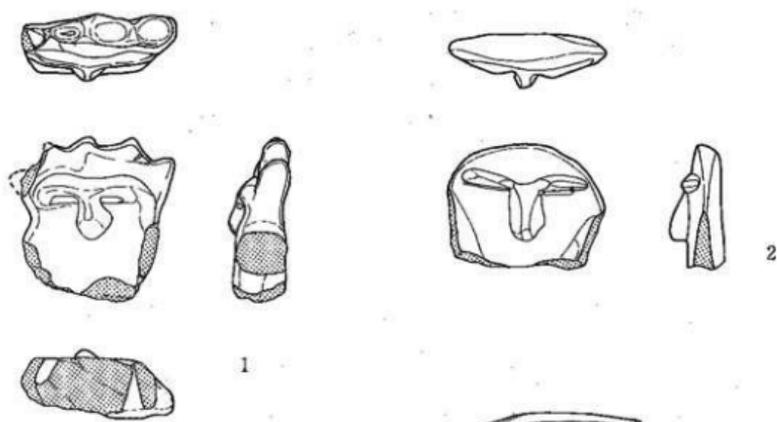
第8図 土製耳飾り(2)



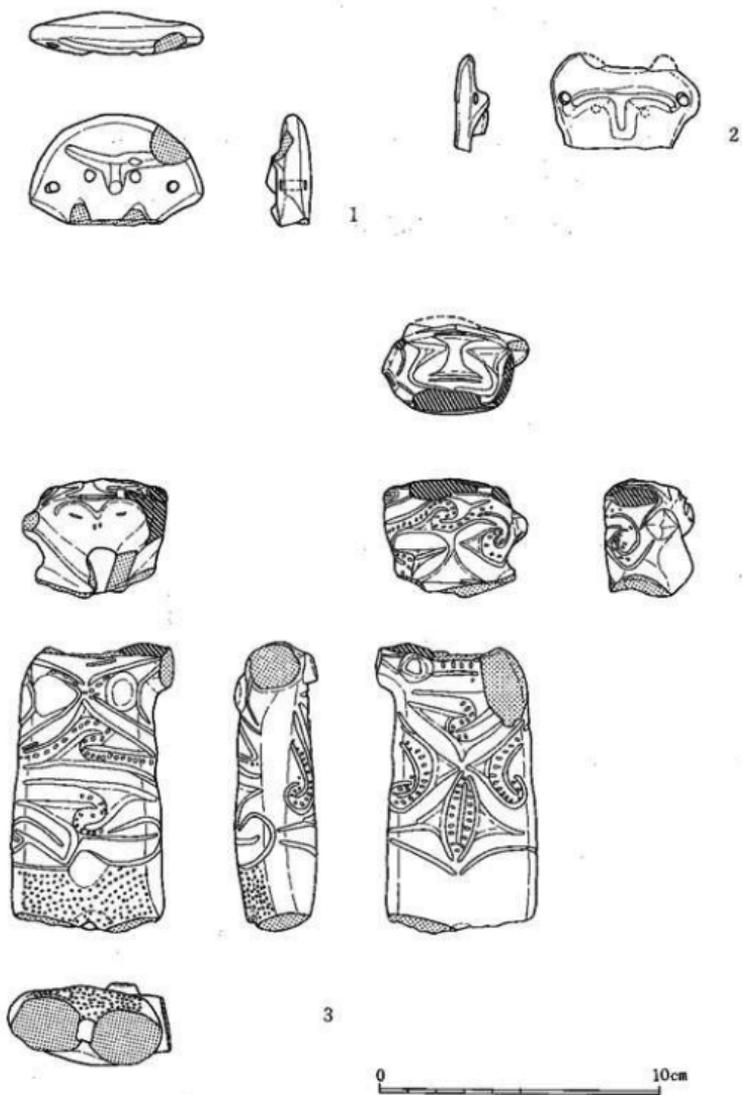
第9圖 土製耳飾(3)



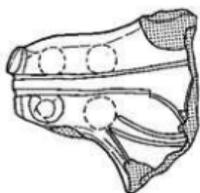
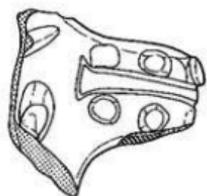
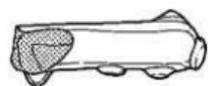
第10圖 土偶(1)



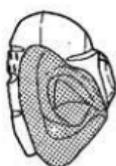
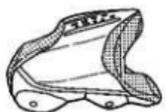
第11圖 土偶(2)



第12圖 土偶(3)



1



2



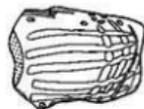
3



4



第13圖 土偶(4)



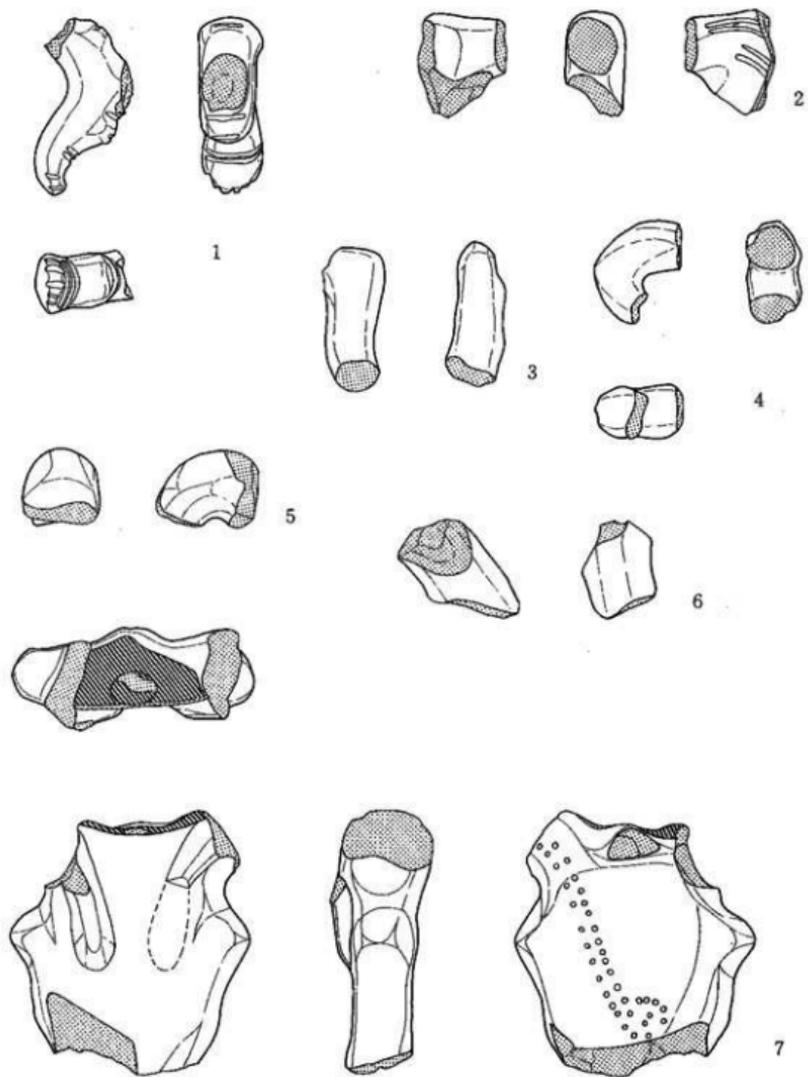
3



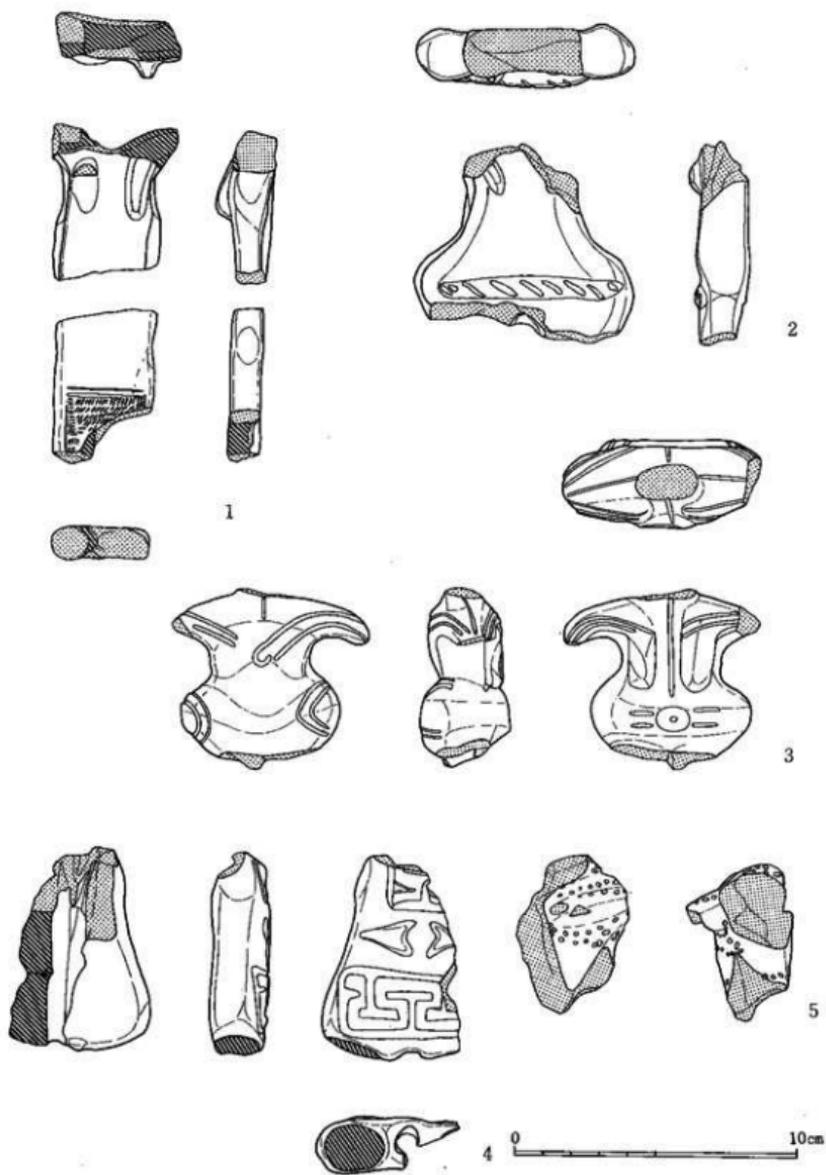
4



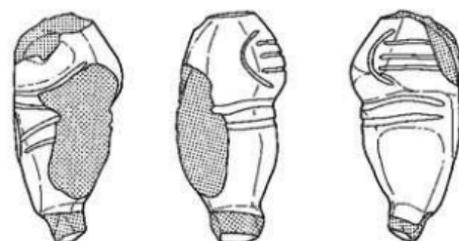
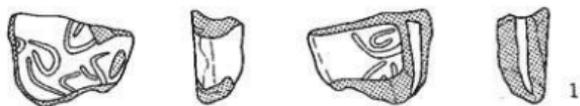
第14圖 土偶(5)



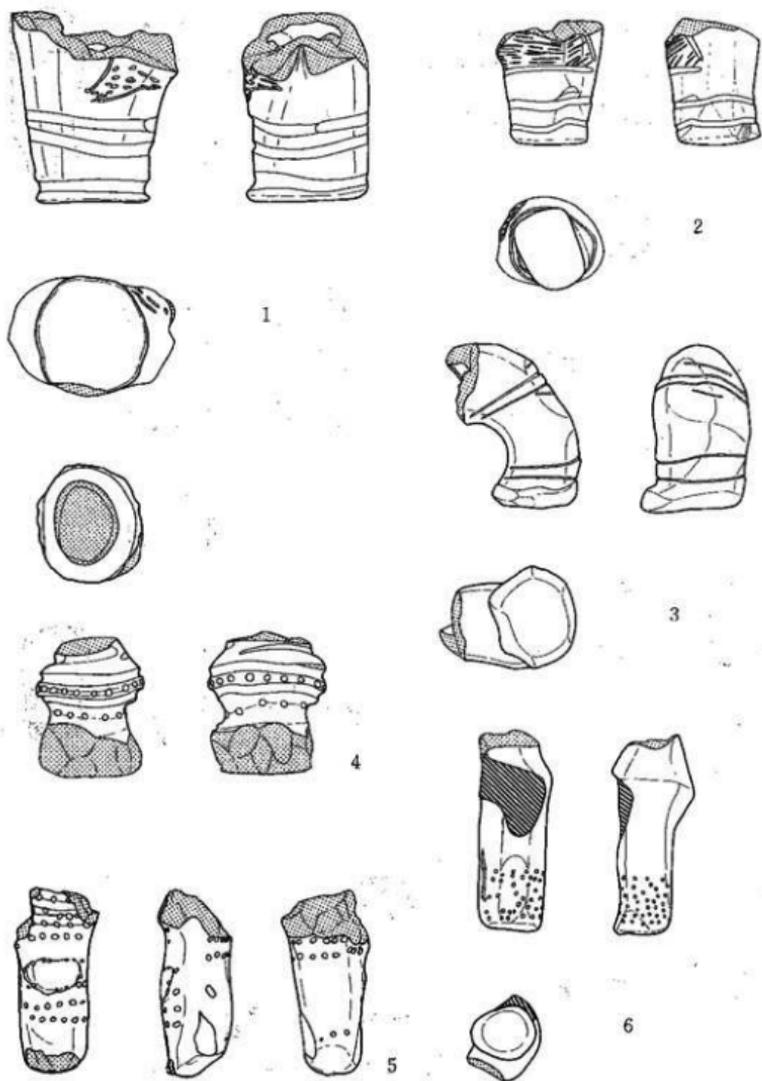
第15圖 土偶(6)



第16圖 土偶(7)



第17図 土偶(8)



第18圖 土偶(9)



第10圖 土偶(10)

写 真 图 版

图版 4



遺跡全景



第一地点全景



第一地点全景



1号住居址



同炉址

第 2 地点全景



第 2 地点全景



第 2 地点全景





土石流巨大礫核出状況



28号住居址



27号住居址



同 炉 址



25号住居址



配石址 1



配石址 1



配石址 1



配石址 1 下炭化物包含土坑



配石址 2



掘立柱建物址 6



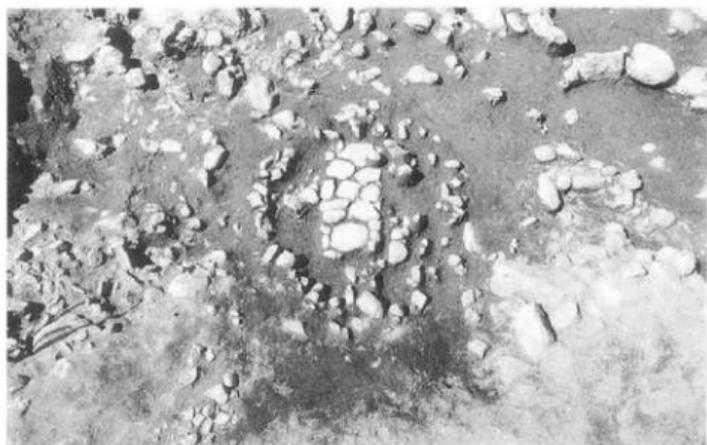
掘立柱建物址 14



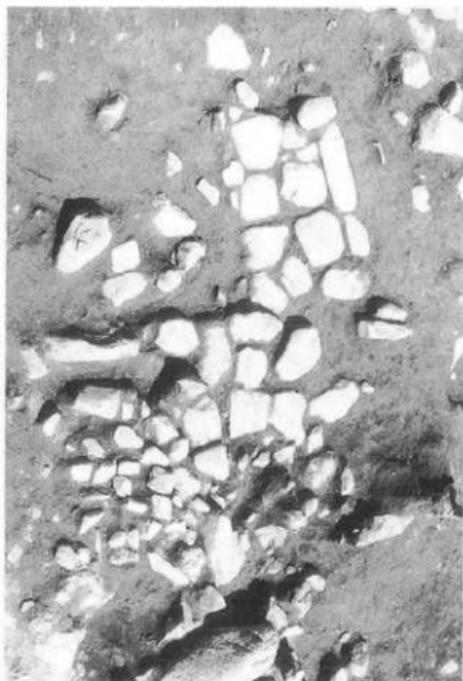
配石墓全景



配石墓全景



配石基 1



配石基 3



配石墓 6





配石基 9



同掘り方



陪石墓 9 遺物出土狀況



陪石墓 9 遺物出土狀況



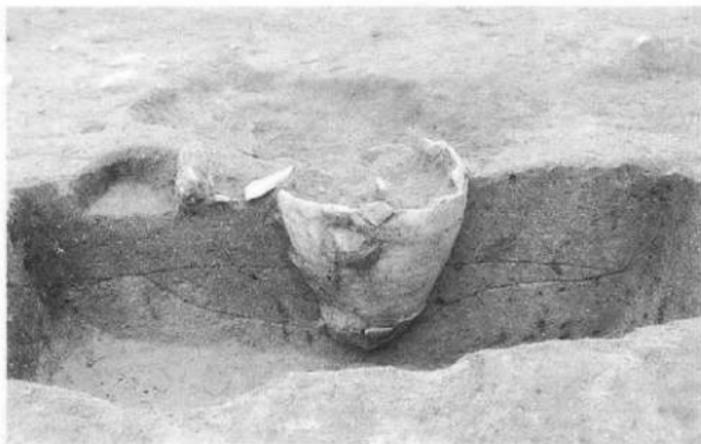
配石墓10



配石墓12



溝址 5



埋設土器 2



両頭石棒



土石流下の遺物
出土状況



土石流下の遺物
出土状況



第3地点全景



同上



同上



47号住居址



33号住居址



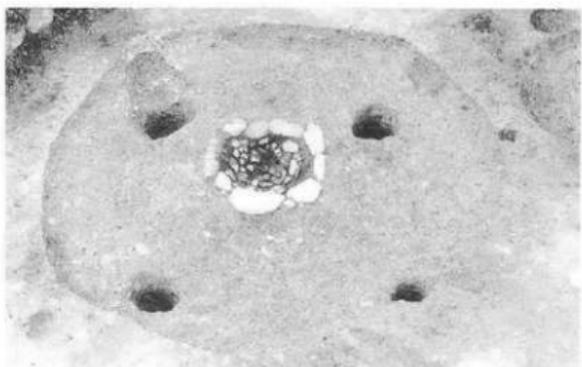
33号住居址遺物出土状況



同 上



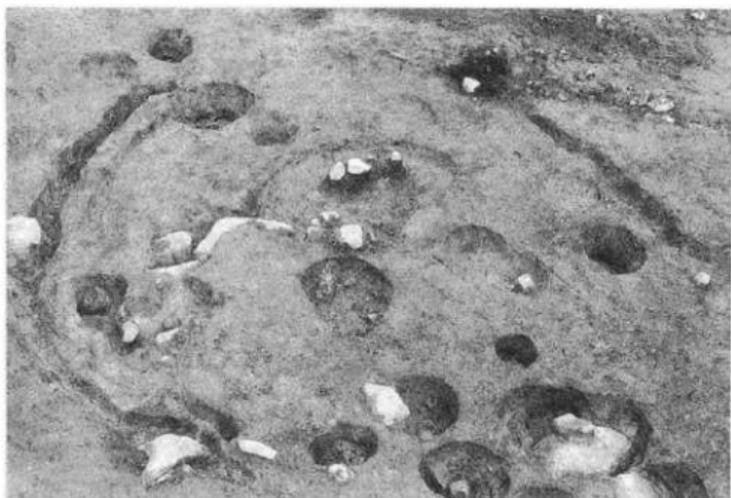
35号住居址



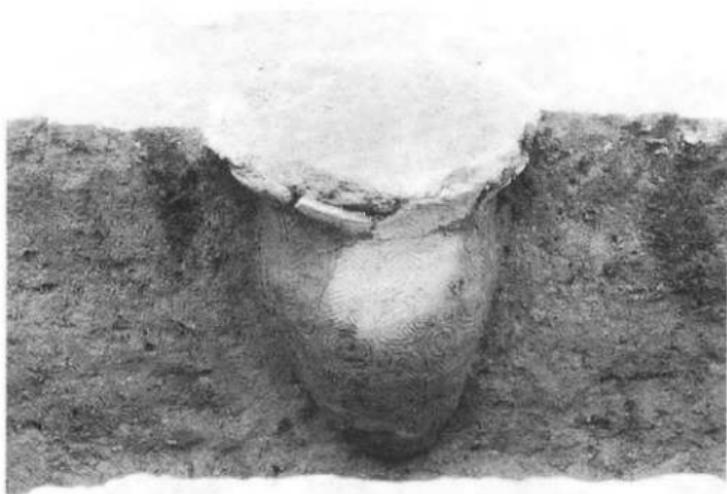
37号住居址



同炉址

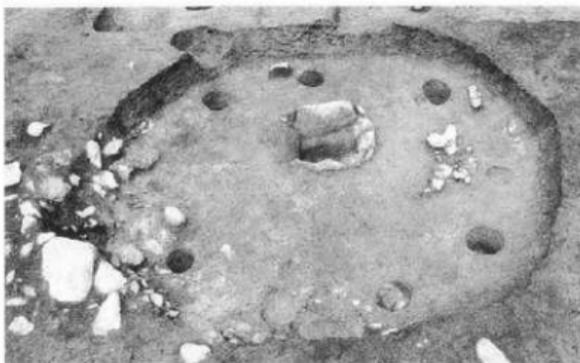


38号住居址



41号住居址埋甕

42号住居址



43号住居址



同埋葬





44号住居址



45号住居址



46号住居址



48号住居址



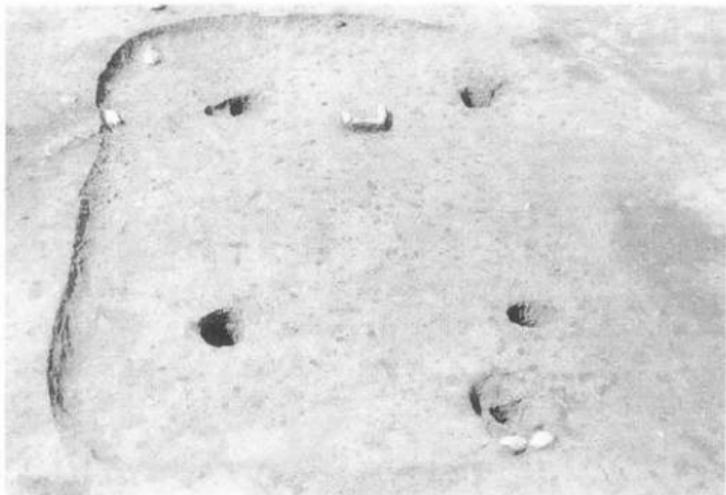
49号住居址



50・51号住居址



53号住居址



34号住居址



40号住居址



29号住居址



同カマド



31号住居址



方形柱穴列2



方形柱穴列 3

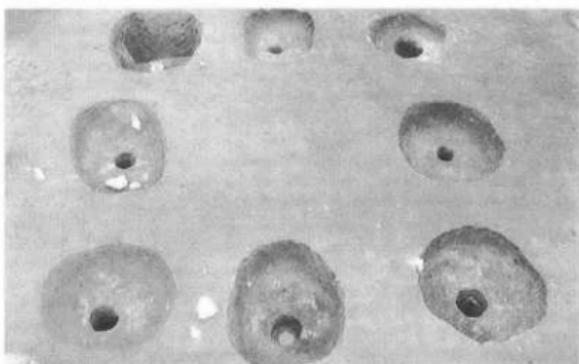


掘立柱建物址 7



掘立柱建物址 8

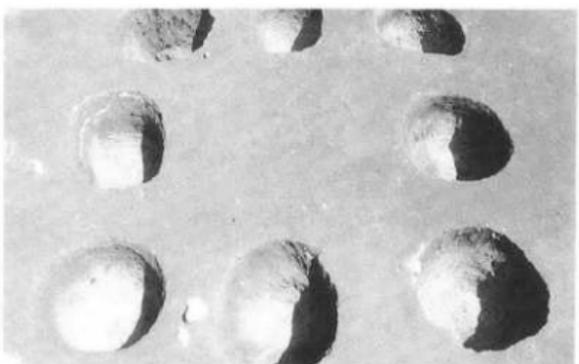
掘立柱建物址 9



同掘り方断面



同掘り方

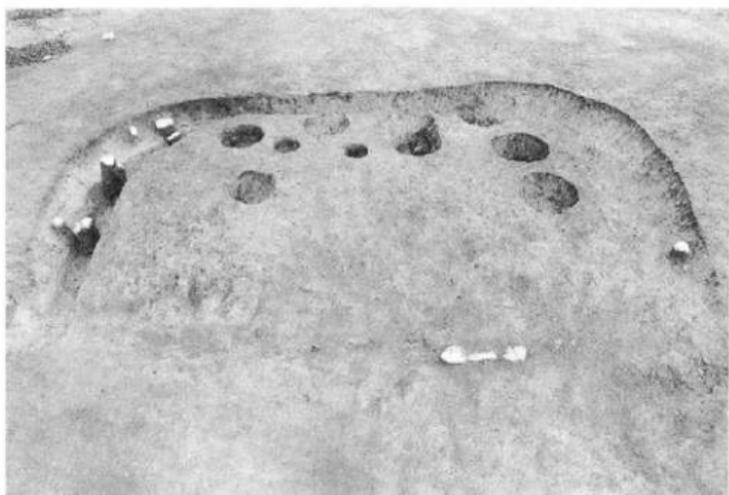




掘立柱建物址11~13



方形周溝墓2



方形周溝墓 3



埋設土器 3



第4地点全景



同上



21号住居址



8号住居址



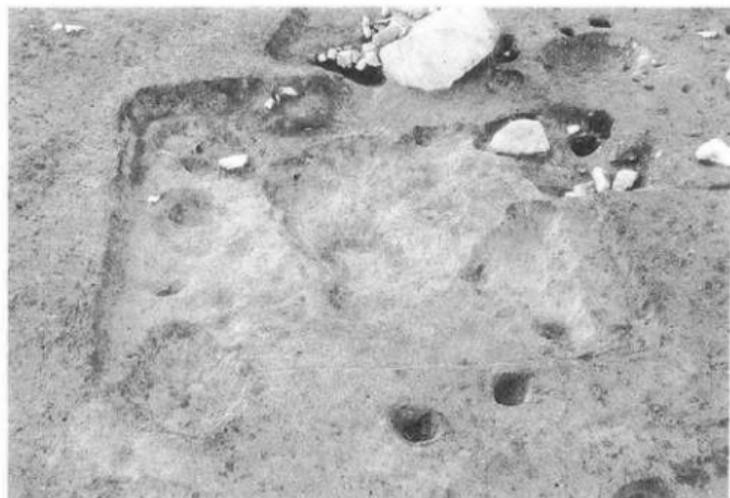
9号住居址



3号住居址



5号住居址



10号住居址



11号住居址



14号住居址